臆病者達のボクシング奮闘記

トム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
臆病者達のボクシング奮闘記

【Ｎコード】
Ｎ２４４６Ｕ

【作者名】
トム

【あらすじ】
未熟な高校生達が、四角いリングの戦いで、悩み、泣き、喜び、そして強くなっていく物語です！

入部まで（前書き）

登場人物

高田康平（一年）
片桐健太（一年）
梅田先生

入部まで

４月、県立永山高校では、入学式が終わった一週間後、妙なイベントが催されている。

新一年生が全員体育館に集められ、その前で、それぞれの部活動が紹介をしていた。

サッカー部は、金髪のカツラをかぶった人が、リフティングのパフォーマンスをし、野球部は古臭い青春ドラマを演じて一年生に笑いをとっていた。

それぞれの部活も、部員を増やそうと、面白可笑しくパフォーマンスを演じていた。

最後にボクシング部の順番に回ったが、１２人の部員が全員並び、その左端でキャプテンが簡単に説明するだけだった。

だが、それは変な人員構成だった。

男６人に女６人、男は全員もイケメンとは言い難いものの、女の子は全員メチャクチャ可愛い。

＞このバランスは、おかしいだろ＜

高田康平（１年）は不思議に思った。

キャプテンの説明を聞いても、そんなにキツクはないようだ。

全部活の紹介が終わり、康平は、親友の片桐健太（1年）と一緒に帰った。

康平と健太は、幼稚園以来からの縁で、趣味も好みも同じような奴だ。

不幸な事に、女の子の好みも同じで、中学の時は同時に同じ女の子、鳴海那奈を好きになってしまった。
その時二人共、お互いに気を遣って、何もしないでいたが、そのうち鳴海は、坂田裕也というクラスメートの彼女になってしまったという苦い経験がある。

健太
『康平、お前部活どうする？』

康平
『まだ決めていないし、部活しないかもしんねーし……。
お前こそどうなんだよ、健太』

健太
『俺もワカンネ。ただボクシング部の紹介はツマンナかったな』

康平
『あぁ』

二人は古本屋で、立ち読みをしたあと、それぞれ家に帰っていった。

布団の中で、康平はボクシング部の部紹介を思い出していた。

あの女の子達は、マネージャーのようだけど、選手一人に可愛い付

き人一人っていいなぁ。

よし、明日入部しよう。

次の日の夕方、康平は学校のボクシング場に行った。入り口の扉で、健太ばったり会った。

しばらく二人共黙っていたが、先に健太が口を開いた。

『なんだ、お前もやるの』

康平

『あぁ、あまり厳しくなさそうだし、体も少し鍛えたいからな。』

二人共、中学まで卓球をやっていたが、実績もなく、一日サボッても、バレない位の存在だった。

健太

『怖そうな先輩もいなかったしな。』

康平

『あぁ。』

康平は、返事をしながら健太も自分と同じ考えで入部するのだと思った。

どちらともなく、頷きあって扉を開いた。

『入ったら、挨拶せんか〜?』

いきなり怒鳴り声が飛んできた!

二人は驚いて下を向いた。そ～っと上を向いたら、顧問の梅田という先生が仁王立ちしていた。

体はゴツくないが、オールバックにサングラス、金のネックレスまで付けていて、とても教師とは思えないような風貌だ。

二人は顔を見合ったが、声を合わせて

『お願いします』

と震える声で張り上げた。

梅田先生は、声を和らげ

『挨拶だけは、大きい声でせんとな。入部申し込みに来たんだろ。今日は何もしなくていいから、そこの椅子に座って見学してろ。』

椅子には、先客が二人座っていて、一人は悪そうな奴で、有馬猛（たける）と言った。もう一人は、白鳥翔という名前で見るからに暗い感じがする奴だ。

しばらくすると、部紹介にいたメンバーがポツポツ入って来た。

『練習、お願いします』

それぞれ練習場に響く大声で、挨拶しながら入ってくる。

部紹介に出ていた男の方は、次々入って来たが、女の方はまだ誰も入って来ない。

男の６人目が入ったところで、梅田が言った。

『全員揃ったな。
今年は１年生が４人入った。まずまずだな。
２、３年は分かっていると思うが、うちは学校の中で一番厳しい部活だ。
練習を始めるぞ。』

康平と健太は顔を見合わせた。

＞あの部紹介の女の子達は一体？＜

健太が恐る恐る梅田先生に質問した。

『先生、部紹介の時は１２人いましたけど…』

梅田先生は、何事もなかったように、
『あれは、ボクシング部は人数が少なくて寂しいから、他から借りてきただけだ。何か問題でもあるのか？』

健太
『いいえ、ないです。』

梅田先生
『せっかく入部したんだから、しばらく続けてみるんだな。』

入部初日（前書き）

登場人物

梅田先生
高田　康平（１年）
片桐　健太（１年）
有馬　猛（１年）
白鳥　翔（１年）

入部初日

翌日の夕方、康平と健太は一緒にボクシング部の練習場へ向かった。
クラスが違う2人だが、どちらも1人で練習に行くのが嫌で、お互いの教室に行く途中でばったり会ったのだ。

健太
『クラスの奴から聞いたけど、ボクシング部の部紹介は、毎年あのやり方で勧誘するらしいぞ。』

康平
『とすると、あの勧誘で釣れたのは、俺達含めて4人か!?』

健太
『他はともかく、最低俺達2人は釣れた訳だ。』

康平
『ところでお前、ずっとボクシング続ける気か?』

健太
『俺もお前もそんなに根性あるわけねぇから、勝手にリタイアするかもよ。』

そのうちボクシング場に着いてしまった。
2人は大きく息を吸って扉を開き、
『練習、お願いします!』

と、叫びながら深々と頭を下げた。

奥には、竹刀を持った梅田先生が立っていた。

『よ～し、お前らも早く着替えて準備運動しろ。』

有馬と白鳥は、すでに準備運動を始めている。

ここの部は、他の部活と違って、全員で声を出しながらの体操は全くしない。

2、3年生も各々で準備運動をしている。

康平と健太も、準備できた事を先生に伝えると、

梅田先生

『よ～し、1年全員鏡の前に並べ。』

そして先生に利き腕を聞かれて、それぞれ構えのポーズが出来ていった。

康平は右利きと先生にいったら、右半身が後ろの構えになった。有馬と白鳥も右利きだったので同じ構えになった。

反対向きの構えになった健太は、左利きだった。

細かい所は、先生が直接修正した。

全員の修正が終わった後、先生が、

『次のブザーが鳴ったら2分間ずっと構えてろ。
そしてブザーが鳴ったら休む。
またブザーが鳴ったら2分間構える。
それを10回繰り返す。
わかったか?』

『……』

先生が怒鳴る!
『返事はどうした?』

『はい!!』

ブザーが鳴り、4人にとって退屈な練習が始まった。
ところが、いざ始めてみると退屈どころではない。

前の足は少し曲げなければならないし、後ろ足の踵は上げないといけない。

ラウンドが進むにつれて、4人から汗が滴り落ちてくる。

近々2、3年生の試合があるため、先生は、ほとんど上級生達を見ているが、時折1年生にもチェックが入る。

首の角度や手の位置も、崩れてくると、竹刀で軽く修正する。

最後のラウンドが終わった時、1年生全員の膝が笑っているような状態だった。

梅田先生
『1年生は、柔軟体操をしたら帰っていいぞ。』

4人は、最後の力を振り絞って返事をした。

『はい！』

帰り道（前書き）

登場人物
高田　康平（１年）
片桐　健太（１年）
有馬　猛（１年）
白鳥　翔（１年）

帰り道

初日の練習が終わり、先に帰る事を許された４人の１年生は、それぞれ帰路についた。

といっても、全員電車通学なので、駅まで一緒に歩くことになった。

はじめは、皆、黙って歩いていたが、耐えきれなくなったように有馬が口を開いた。

『片桐と高田は友達のようだけど、どこの中学だよ?』

今日の練習で、全員、先生から名前を呼ばれていたので、皆、お互いの名前だけは知っていた。

健太
『俺達、北山中から来たよ。』

有馬
『北山だったら、ここから3駅位か!?
近くで羨ましいな。』

康平
『有馬君は、何中?』

有馬
『おいおい、同じ1年なんだから、君なんてつけんなよ。
俺は西添中だから、駅７つだよ。』

健太
『遠いね。』

有馬
『通学だけで一時間位かかるな。』

有馬は、ツンツン頭で目付きが少し悪い為、ヤンチャなイメージだが、結構気さくな性格らしい。

白鳥は、顔が少し赤く、ボサボサ頭で体がズングリしている。どことなく、暗いイメージだ。
3人の会話も、どこか聞いていない感じで、少し後ろの方で歩いている。

たまらず健太が声をかけた。
健太は意外にも博愛的な性格で、そこだけは、親友の康平が健太を尊敬している。

『白鳥は、どこの中学からきたの?』

白鳥
『……岩下中……。』

康平
『聞いたことないけど。』

白鳥
『隣の県から来た。今は親戚ンチに住んでる。』

健太

『へぇ…』

何かありそうだが、訊ける空気でもないので健太は話題を変えた。

健太

『俺と康平は、部紹介の女達に騙された感じで入部したけど、有馬と白鳥もそうなの？』

有馬

『ハハハ。うちの部のペテン部紹介は、有名なんだけどな。俺は、高校入ったらボクシングやろうと思っていたから、部紹介の時はいなかったよ。』

白鳥

『俺もボクシングやりたくて、ここに来た…。』

康平

『…凄いね。』

そのうち、駅に着いた。ちょうど下りの電車が来たので、康平と健太は乗る事にした。

有馬と白鳥は上りの電車なので、ここで別れる事になった。

『じゃあな。』

康平と健太は、急いで電車に駆け込んだ。

有馬と白鳥は、下りの電車を待つのだが、ウマが合わないらしく、お互い離れた所に立っていた。

二人の先生（前書き）

今回は、顧問の梅田先生と副顧問の飯島先生のお話です。

二人の先生

練習４日目、今まで部活に来るのは、顧問の梅田先生だけだったが、今日から副顧問の飯島先生も部活に来はじめた。
飯島先生は、最近身内に不幸があったらしく、昨日まで学校を休んでいたらしい。

『片桐と高田、チョット来い。』

飯島先生に呼ばれた康平達は、不思議な面持ちで先生の所へ行った。

飯島先生
『お前ら部紹介に騙されたらしいな!?』

健太
『……はい…。』

先生はニヤリと笑い、
『男は下心で頑張れる時も多いんだから、気にすんな。』

飯島先生は体育の教師で、梅田先生と違い、とても明るい性格だ。
そして、見るからに爽やかスポーツマンといった感じだ。

2、3年生の練習しかみていないが、冗談まじりにミットを持ったりアドバイスをしたりしている。

梅田先生は、柄の悪い風貌から、体育教師のように見えるが、なんと数学教師だった。

部活以外での先生は、オールバックの髪を下ろし、眼鏡はクロブチで、金のネックレスも外している。
昨日、康平と梅田先生が廊下で擦れ違った時、康平は全く気付いていなかった。

『挨拶せんか？』

怒鳴り声で、康平は、すぐに誰だか気付いて、慌てて挨拶した。

この種のエピソードは、毎年あるようだ。

健太が、先輩にその事を話したら、

『あれは、梅田先生の部活用の正装なんだよ。』

と、笑って答えてくれた。
オールバック、薄茶色のサングラス、金のネックレス、とても良く似合う竹刀は、ボクシングに集中する為の必須アイテムなようで、練習の時には必ず変身するそうだ。

梅田先生と飯島先生は、現役時代に対戦したことがあったらしいが、1勝1敗のイーブンかどうかは定かではない。
ただ、共に選手としての栄光は掴めなかったようだ。

全くタイプが違う2人の先生は、何故かウマが合うらしく、家族ぐるみの付き合いらしい。

康平と健太は、先輩達から、先生の事を教えてもらったが、肝心の

ボクシングの方は、構えしか教わっていない為、今日も退屈だがシンドイ１０ラウンドを迎える運命だった。

地味な練習（前書き）

県立永山高校ボクシング部に入部した４人の１年生は、１週間構えだけの練習しかやらせてもらっていない。
今回からは、更にジミ～な練習が待ち受けていた。

地味な練習

入部後1週間経っているが、1年生はまだパンチを教えて貰っていない。

相変わらず構えだけだが、今日から前後左右に動く練習も加わった。

飯島先生は、先輩達しか見てない感じで、1年生には何も言ってこない。

梅田先生も、ほとんど先輩達を見ているが、時折1年生にも目がいく。

『有馬、右脇を絞れ！』

『高田、右の踵を上げろ！』

『白鳥、左膝をもっと曲げろ！』

『片桐、右の腰骨はもう少し前だ！』

誰にでも、平等に細かいチェックが入る。

このボクシング部には独自のルールがあり、ラウンド中は特別な事がない限り、返事をしなくて良い事になっていた。

先生に言われた本人達は、無言のままフォームを修正する。

本人が直したつもりでも直っていない場合には、先生が竹刀で優しく（？）形を直す。

拳の位置や、膝の向きなど色々細かい。
その中でも強調しているのが、顔の向きと重心だ。

『顔は正面を向け。顎を横から殴られるとキクぞ！』

『重心は、前6後ろ4だ。これで右も左も強く打てるようになるんだ！』

自分達の後ろで、いい音を立ててサンドバッグを打っている先輩達を鏡ごしに見て、お調子者の健太などはパンチを打ちたい衝動にかられた。
しかし、去年この時期に2年の相沢さんが、勝手にパンチを打ったら、悲惨な程怒られた話を聞いていたので、さすがの健太も、パンチを打つことを簡単に断念した。

先生に言われたラウンドが終わり、柔軟体操をしようとしていた矢先、

梅田先生
『お前ら、これから補強を始める。言わば筋トレだ。今から教えるから用意しろ！』

『はい！』

先生が教えるメニューは、腹筋背筋、腕立て、懸垂などオーソドックスなものがほとんどだったが、特殊なものとして、ランジがあっ

た。

それは、下半身の補強で片方の足を大きく前に出してから体を沈ませる。出した足を元に戻しながら、沈んだ体も元に戻す。それを左右交互に繰り返す。

このトレーニングは、回数ではなく、2ラウンド続けてする事になっていた。

最後は、4人全員膝が笑っていた。

補強の全部が終わって、梅田先生が一言。

『お前ら、今日教えたメニューを毎日やるんだ。いいな!』

『……』

梅田先生

『返事はどうした?』

4人の1年生は、つりそうな腹筋に力を入れて

『はい!』

ボクシング場に響きわたる大きな声で、返事をした。

再会（前書き）

部活が休みの日、気分転換の為遊びに出かけた康平と健太は、思わぬ2人て再会する。

再会

永山高校ボクシング部は、日曜日が完全に練習が休みだ。

その休日、康平と健太は気分転換するため、遊びに出かける事にした。

まずゲーセンに行ったが、所詮高校生の財力ではあまり遊べず、他の奴らのプレーを見る時間が多くなった。

さすがに、２人は飽きて馴染みの古本屋へ行く事にした。

もうすぐ目的地という所で、男女２人が走ってきた。

『やっぱり健太と康平だ。向こうのコンビニから、お前らみたいのが見えたんで、走ってきたんだよ。』

声を掛けてきたのは、坂田裕也だ。

『あんたら、兄弟みたいにいつも一緒だね（笑）』

人懐っこい感じで話すのは鳴海那奈である。

２人は、青葉台高校に通っている。永山高校とは電車で反対の方向なので、あまり会うときはなかった。

裕也は、
『お前らと、同じ学校だったらもっと楽しかったけどな。』
と、心から残念そうだ。

健太
『会うのは、卒業式以来かもな。』

康平
『裕也は、高校でも野球やってるの？』

裕也
『いや、高校からはボクシングやるって、前から決めていたんだ。』

健太
『…へぇ…凄いネ。』

那奈
『あたしは、気が進まないけど……』

裕也
『けど、那奈もボクシング部のマネージャーになってくれたんだぜ。
ところで、お前らは卓球部で、サボりに磨きをかけるつもり？』

康平
『ひでぇな（笑）……俺達はまだどこの部にも入ってないよ。』

裕也
『そっか。こっちも部活で忙しいから、中々会えないかも知れないけど、今度一緒に遊びたいな。』

『じゃあな！』

迷い（前書き）

突然、裕也と那奈に会った康平と健太。
地味な練習だけが続く、ボクシング部の練習。
２人の心に迷いが生じる。

迷い

裕也と那奈と別れた康平と健太は、複雑な気持ちになっていた。

康平と健太が同時に好きだった鳴海那奈、彼女と付き合っている坂田裕也。

しかも、裕也と康平達とは結構仲がいい。

裕也は、男から見てもカッコ良く見える容姿だが、性格はもっといい。なぜか康平達とウマが合う。

那奈も凄く可愛いが、可愛いだけじゃなく、からかってくる割にどこか控え目で、話しても疲れないタイプだ。

あの2人は、康平達が那奈を好きだった事を知らない。

あの2人が憎い訳ではないが、なぜか切ない気持ちになった。

健太が突然口を開いた。

『なんでお前、自分もボクシングやってるって言わなかったんだ。』

健太の口調が八つ当たりっぽく感じたので、康平もすかさず言い返した。

『お前だってはぐらかしてたじゃないか?』

健太

『空気読めよ。あそこで俺達もボクシングやってるって言える訳ねぇだろ?』

不毛な口ゲンカが少し続いた後、健太が一言

『まだ、構えと筋トレしかやってねぇし、部活辞めようかな……』

康平も、何て答えていいかわからず、黙っていた。

さっきまでの口ゲンカは一時休戦し、健太が別れ際に

『そういえば、うちの部の二年に森谷さんていう同じ中学の人がいるから、相談してみようぜ。』

『昼休みでも行こうか。』

と、康平がこたえて健太と別れた。２人は、古本屋へ行く予定を忘れたまま、真っ直ぐ家に帰って行った。

相談（前書き）

好きでもないのに始めたボクシング。
辛い地味な練習。
悶々とする康平と健太。
2人は、先輩へ相談しに行く。

相談

月曜日の学校の昼休み、康平と健太は、ボクシング部2年の森谷先輩へ相談しに行った。

森谷先輩は、康平達の中学の1つ上で、たまにゲーセンで話すような間柄だった。

何をされる訳でもないのに、ちょっと緊張しながら先輩がいる教室へ向かうと、丁度森谷先輩が相沢先輩と歩いてきた。

森谷先輩

『なんだお前ら、こんな所でどうしたんだ?』

相沢先輩がいることは予想外だったが、彼は、自身が先生から怒られた事を康平達に教えてくれた人で、好感の持てる先輩だった。

康平と健太は、二人に相談する事にした。

地味な練習ばかり続いている事、他人と争うのは好きではない事、そんなに運動神経がいい方では無いので、続けていく自信がない事を話した。

森谷先輩と相沢先輩は顔を見合わせたが、2人共、意外に明るい感じで答えた。

森谷先輩

『大丈夫だよ!俺達も最初は同じ気持ちだったから心配すんな!』

相沢先輩
『そうそう、今週の土曜日になれば、辞める気持ちなんてなくなるから！』

森谷先輩
『そうだよ。騙されたと思って、土曜日まで続けてみるんだな！』

康平達は、意味不明のままだったが、先輩達の明るい雰囲気に妙に納得させられ、もう少し続けてみる事にした。

金曜日まで、拷問に感じられたジミ～な練習が続いたが、最後の柔軟体操に差し掛かった時、梅田先生から一言。

『1年にはまだ言ってなかったが、明日、練習試合があるから9時学校集合だ。いいな。』

練習試合（合同練習）（前書き）

練習試合があると前日にいわれ、期待と緊張で少し眠れなかった1年生達だが、何とか全員集合時間前に、学校に到着した。

練習試合（合同練習）

土曜日の朝、永山高校ボクシング部全員は、練習試合の為、学校に集合した。

目的地は隣の県の早瀬工業高校。

部員はそれぞれ、梅田、飯島先生の車に乗って目的地へ向かった。

毎年、この時期になると、永山、早瀬の2校は、合同練習という形で試合をやっている。

お互い、インターハイの県予選で当たる事はないので、対外試合をするにはうってつけの相手なのだ。

２時間程で早瀬工業に着いた。

そこには古い建物だが、かなり広い練習場があった。そして、そこには３０人以上の部員がいた。

すぐに全員で挨拶をし、すぐにウォーミングアップの準備に入った。

毎年２～３回合同練習をする間柄なので、顧問の先生同士は勿論、３年生同士でも最近の事など親しく話している。

合同練習の内容は、シャドウボクシング５ラウンド、そのあと、試合形式のスパーリングをし、最後にシャドウボクシングを３ラウンドする。

ウォーミングアップが終わって、合同練習が始まった。

まずは5ラウンドのシャドウボクシング。

シャドウボクシングといっても、永山高校の4人の1年生は、構えしか習っていないので、恥ずかしい気持ちで構えのポーズを始めた。それとなく、早瀬工業の1年生達を見ると、スタイルはチョット違うが、構えしか習っていないようだ。

知らない者同士なので、微かな敵愾心を感じたりしながらも、2校の1年生達は、ほっとしながら、構えだけのシャドウに集中した。

5ラウンドのシャドウが終わり、試合形式のスパーリングが始まった。

先輩達（前書き）

隣の県の早瀬工業高校での練習試合（合同練習）に参加した、康平達1年生は、これから先輩達の戦いぶりを初めて目にする事になる。

先輩達

スパーリングは、軽いクラスから始まった。

まずライトフライ級では、2年の大崎先輩が出た。
相手も2年生らしい。
軽量級なので、あまり迫力は感じられないが、とにかく速い。そして、パンチの数が非常に多い。
かなり打ち合いがあったが、その直後に大崎先輩がパンチを当てるシーンが目立ち、1年生の目にも、先輩が優勢なのが判った。

こうして、フライ級、バンタム級と階級が上がっていったのだが、全体的には永山高校が優勢な試合が多かった。

中でも目立ったのは、主将の石山先輩（フライ級）と、ライトウェルター級の兵藤先輩（3年）だ。

石山先輩は、小柄でオーソドックス（右構え）だが、左のパンチが恐ろしく強い。特に左フック、左ボディブローは、ブロックの上から当たっても、フライ級とは思えない凄い音がする。
2ラウンドに左アッパーが顔面にヒットし、相手が千鳥足のようになった所で、ストップになった。

ライトウェルター級の兵藤先輩は、右利きなのに、構えはサウスポーだ。中学までずっと剣道をしていたそうで、本人の希望でサウス

ポーになったらしい。
長身で細身だが、利き腕の右フックが強く、そして当てるのがうまい。
相手が強引に前へ出た所に右フックが綺麗に当たり、相手は前のめりに倒れてしまった。

相沢先輩と森谷先輩も、相手が3年生だと苦戦していたが、2年生相手だと有利に試合を進めていた。

こうして、全員のスパーリングが終わって、3ラウンドのシャドウボクシングを始めたが、永山高校の4人の1年生は、どこか誇らしげに構えのポーズに集中していた。

先輩達（後書き）

今回のスパーリングの様子を、もっと詳しく表現しようか迷いましたが、康平達1年生が、技を身に付けた時の感動が弱くなってしまいそうだったので、あえて簡単な表現にさせて頂きました。

次へのステップ（前書き）

合同練習でのスパーリングで、先輩達の強さを見た康平と健太は、彼らなりに興奮していた。

次へのステップ

合同練習から帰った康平と健太は、日曜日に行き忘れた古本屋にいた。

健太
『今日は、楽しかったな。』

康平
『あぁ、そうだな。』

健太
『飯島先生が言ってたけど、うちの高校って、かなり強いらしいぜ。』

康平
『俺も思ったよ。2年もみんな強いもんな。』

健太
『俺、兵藤先輩カッコ良かったな。相手前のめりたぜ!』

持っている本そっちのけで、話のテンションが上がり始めた途端、古本屋の店主に怒られた。
いつも立ち読みを許してくれるのだが、今日は煩くて迷惑だったらしい。

さんざん謝った後、2人は外に出た。

健太

『俺、部活続けてみるけど、お前はどうする？』

康平

『構えだけやらされてるのは、うちの高校だけじゃないみたいだし、俺も続けるつもりだよ。』

そして2人は、帰っていった。

月曜日部活に行くと、梅田先生から一言、

『お前ら1年は、今日から構えの練習は、5ラウンドでいいぞ。その後、パンチを教えてやる。今日は左ジャブだ。いいな！？』

1年生全員は、一際大きな声で返事をした。

ジャブ！

梅田先生の突然の一言に、康平と健太のやる気が一段と湧いた。
有馬は、顔に出やすく本当に嬉しそうだ。
白鳥は判りにくいが、急いで着替えているので、やる気になっているらしい。

長く感じられた構えのラウンドが終わり、ジャブの練習に移った。

梅田先生
『いいか？
構えた所から真っ直ぐ前の拳を突きだす。
やってみろ。』

思い思いに４人が、ジャブを打つ。

健太だけはサウスポーなので右ジャブだが、他の３人は左手が前なので、左でジャブを打つ。

構え同様に、梅田先生の細かいチェックが入る。

『ちゃんと構えた所から打て！』

『反対の手を、顔から離すな。』

『打つ時、目をつぶらない！』

梅田先生は、一ヶ月後のインターハイ予選の為、先輩達を見なければならないので、特に意識させたい部分を言った。

『ジャブは、前6後ろ4のバランスのままで打つ。
打つ時は、顎を引いたまま、肩の回転を使って打つ。いいか、無理しても肩を回して打て！
6ラウンドしたら、筋トレだ。いいな！！』

『はい！』

筋トレが終わって、柔軟体操をしていた1年生達に、梅田先生は言った。

『ジャブは、体のひねりを大きく使えないから、難しいパンチだ。実戦に使えるまでに、1年位かかるつもりで、根気強く身に付けろ！』

更に、
『明日は、後ろの方の拳で打つストレートを教えるから、そのつもりでいろ。』

『はい！』

構えと同様に、しばらくジャブだけの練習をすると思っていた4人は、意外な一言に戸惑いながらも、大きく返事をした。

更衣室で

練習が終わり、1年生達はゆっくりと着替えている。

有馬
『なぁ、おととい先輩達強かったな！』

康平
『あぁ、カッコいいよな。』

有馬
『俺は、石山先輩みたいになりたいんだけどな。』

健太
『有馬は細身だから、タイプが違うかもよ。』

有馬
『まぁ、そうかもしんねぇけど、憧れるのは自由だろ。』

そのうち、最近ハマッているゲームや学年の女の子達の事に話が脱線すると、完全に着替えの手が止まってしまった。

しばらくすると、練習を終えた石山先輩が更衣室に入って来た。

石山先輩
『お前ら、まだいたの？』

『ス、スイマセン。すぐに帰ります。』

石山先輩
『ハハ、そんなに慌てなくていいよ（笑）』

石山先輩は、獰猛な戦い方をする割には、温厚な性格のようだ。

更衣室を出る時、健太は疑問に思った事を言った。

『先輩！
うちの部は、じっくり教える方針のようなんですけど、ジャブだけは違うんですか？』

石山先輩
『それは、ジャブをマスターするまで、ジャブだけずっと打ってたら、ジャブだけ打つバランスになってしまうからな！』

有馬
『そういうモンなんですか？』

石山先輩
『バランスって、意外とデリケートだからな。
あ、お前らサッサと帰んねーと怒られるぞ。』

健太、有馬
『はい、失礼します！』

永山高校ボクシング部は、幸運な事に、タチの悪い先輩はいないようだ。

１年生達は、一瞬梅田先生に睨まれながら、そそくさと帰っていっ

た。

ストレート

翌日1年生達は、後ろの手で打つストレートを習う事になった。

梅田先生
『いいか、これからストレートを教えるぞ。
最初に後ろ足を回す。次に肩を回す。最後に腕が伸びる感じだ。
それを流れるようにやってみろ。』

康平達4人は、それぞれストレートを打つ。

昨日のように、先生は上級生の指導が忙しいらしく、ポイントをだけを付け加えた。

『前足は、少し内側に曲げたまま、動かさないで打て。パンチは打ったらすぐに戻す。重心は6、4から7、3へ移る。
ストレートだけを4ラウンドやる。いいな！』

言われた4ラウンドが終わり、1年生達は、筋トレに移った。
それも終わりに近づいた頃、梅田先生が1年に言った。

『お前ら筋トレが終わったら、すぐにシャドウをゆっくりやれ。』

『はい！』

1年生達は、理解出来ないまま、習った左右のストレートをゆっくりと打っていた。

梅田先生
『いいか。パンチを打つ時の使う筋肉を意識しろ。
筋トレで鍛えた筋肉を、パンチ用に切り替える為のトレーニングだ。
わかったな。』

康平達は、少し納得できた表情で、パンチをゆっくり打ち始めた。

新たな練習メニュー

左右のパンチを習った1年生達に、しばらく続けていくメニューが組まれた。

柔軟体操

縄跳び　２Ｒ

シャドウボクシング

構え　２Ｒ

ジャブ　２Ｒ

ストレート　２Ｒ

左右パンチ　３Ｒ

サンドバッグ　３Ｒ

シャドウ（左右）　１Ｒ

筋トレ

ゆっくりシャドウ　２Ｒ

柔軟体操

という内容だ。
新たにサンドバッグ打ちがあるが、その時は不思議と梅田先生のフォームのチェックは無い。よほどサンドバッグに体を預けて打ったり、顎が極端に上がっている場合でなければ何も言われない。

フォームが悪くても、サンドバッグをガンガン打たせて筋肉を付けさせる方針のようだ。

筋肉が付かなければ、正しいフォームで打つことも出来ない、というのが、梅田先生の持論らしい。

新たなメニューでの、練習が終わった後、

梅田先生
『これから、パンチを打つ軸が固まるまで、この練習メニューが続くからな！
いいな！』

トーナメント表

新しいメニューでの練習をする1年生達。徐々に体力がついて、こなせるようになってきた。

ただ、フォームはまだぎこちない。

『有馬、左ジャブが裏拳になってるぞ。構えた時は、もっと左拳は外側だぞ！』

『高田、右ストレートを打っても左足の親指を浮かすんじゃねぇ！』

梅田先生のチェックは、相変わらず、まんべんなく全員に施されていた。

だが、パンチというアイテムを貰った1年生達は、精神的に充実して練習していた。

この日の練習が終わり帰ろうとしていた康平と健太を、梅田先生と飯島先生が呼び止めた。

梅田先生が、

『お前ら、こいつを知ってるか？』

と言い、インターハイ県予選のトーナメント表を見せた。

『！！！！！！！！』

ライトウェルター級の青葉台高校の所に、坂田裕也の名前が出ている。

健太
『はい、知っている奴です。』

飯島先生
『中学の時から、ボクシングをやってたのか?』

康平
『中学の時は、野球をしていたんですが、ボクシングをしていたかは知らないです。』

梅田先生
『…わかった。もう帰っていいぞ。』

飯島先生
『あ、それと言い忘れた事があった。
もうすぐ中間テストだが、ボクシング部だけは、テスト休みがないから、今から勉強しておけよ。』

康平と健太は、最後に強烈なダメージを食らって帰っていった。

テスト休みがない！（前書き）

ボクシングを少しでも多く出来る歓びとして受け取るか、部活から解放される楽しみを奪われたと悲しむか？

私（トム）なら、間違いなく後者をとりますね！

テスト休みがない！

裕也が試合に出る事にも驚いた康平と健太だったが、テスト休みがない事は、1年全員にとって、我が身に降りかかる大事件だった。

本来なら、全部の部活にもテスト休みがあり、その期間、部活動をしてはいけない規則だったが、梅田先生の、選手達に対する思いやり（？）から、熱心に校長を説得して、特別に許されたという話だ。

学校側でも、毎年インターハイに出ているボクシング部は、特に優遇しているようだ。

『梅田先生、なんて事をしてくれたんだ？』

『学校は学業が本分だよな。』

『ボクシング部を優遇するんだったら、俺達の問題だけ簡単にすればいいんじゃねぇか！』

白鳥を除く1年生達は、梅田先生がいないのを確認してから、口々に言いたい事を言った。

しかし、ボクシング部員にとって、国家権力よりも恐い梅田先生には、いかんとも逆らい難く、今から勉強を始めることになる。

康平と健太も、勉強かどうかは本人達しか知らないが、テスト休み

に予定していた計画が全部潰れてしまった。

仕方なく、今週の土日からテスト勉強を始めることにした。

初めてのミット打ち

土曜日。
学校は休みだが、部活はいつも午前9時から始まる事になっていた。

1年生達は、8時50頃には全員ボクシング場にいたが、先輩達は誰も来ない。

9時になった時、飯島先生が来た。

『梅田先生と上級生は、練習試合に行ってるから、今日はこれで全員だ。
さあ、始めるぞ！』

いつもメニュー通りに練習を始めたが、7ラウンド目を過ぎてから、飯島先生が、

『有馬、ちょっとリングに来い！』

そして、ミットを持って

『習ったパンチを打ってみろ。』

左ジャブから始まり、右ストレート。ワンツーストレートと習ったパンチを順々に打っていった。

有馬は、ミットとはいえ、対人相手に打つので最初は戸惑っていた

が、ミット特有の乾いた音が大きく鳴ると、どんどん調子が上がっていくようだった。

だがパンチを打つ時、反対側のガードが顔から離れたり、パンチの戻りが悪いと、先生がミットで軽く顔を触ってくる。

そして、踏み込みを良くさせる為に、少し遠目から打たせているようだ。

有馬から始まり、全員3ラウンドずつのミットを終えたが、重いサンドバッグと違い、1年生達は、パンチを戻さなければならない感覚を味わった。

この日は、ミットを打った分、サンドバッグのラウンドを省略して練習を進めていった。

最後の柔軟体操の時、健太は、飯島先生に質問した。

『先生、ボクシング部は女子マネジャーを募集しないんですか?』

飯島先生

『うちの部は、自分の事は自分でやらせる方針だから、女子選手はともかく、マネジャーはとらないな。』

健太は、心の底から残念そうな顔をした。

飯島先生

『お前らに、強くなる秘訣を教えてやろう。』

康平
『それは何ですか？』

飯島先生
『それは、モテない事さ。モテないから、やることが無くてボクシングに没頭でき……』

さすがの飯島先生も、ハズシタ空気を感じとり、

『お前ら、今日は学校休みなんだから、終わったらさっさと帰れよ！』

と言い、無理矢理場の空気を変えた。

テスト勉強（前書き）

今回の康平と健太の話は、私（トム）だけでなく、沢山の方々も体験し、共感できるもんだと勝手に信じておりますｍ（＿＿）ｍ

テスト勉強

練習が終わり、康平と健太は、２週間後にある中間テストに向けて、康平の家で勉強する事にした。

まずは、数学から勉強を始める事にした。
どちらも、梅田先生から教わっている訳ではないのだが、２人は、体が勝手に数学の教科書を出してしまったのだ。

３０分過ぎ、健太が口を開く。

『家で勉強するのは、受験の時以来だな。』

康平
『そうだな。なかなか頭が働かね～よ。』

健太
『部活終わった後だしな。』

康平
『ちょっと息抜きしようか？』

健太
『そうそう、あれやろうぜ。』

健太は、クラスの奴から借りてきた、流行りのゲームをバッグから取り出した。最初からやるつもりだったようだ。

康平も、そのゲームはやりたくてしょうがなかったらしく、

『運動直後の勉強は、体に悪いかも知れないからな。』

と、勝手に理由を付けて、数学の教科書をしまい始めた。

ゲームを始めて3時間位たった頃、康平が言った。

『息抜きしようぜ。』

と、最近古本屋で買った単行本20冊を押し入れから出してきた。

こうして、勉強の息抜きの為だったゲームの息抜きの為に、マンガ本を読み始めた。

そして、指と頭がリフレッシュした頃、すぐそばにある勉強道具達に後ろめたさを感じながらも、またゲームを再開した。

人並み以上の勉強嫌いと、意思の弱さという資質を併せ持つ2人は、夜9時過ぎまで、息抜きをしていった。

そして、健太が帰り際に、

『明日、図書館で勉強しようぜ。』

と、勉強道具が沢山入っているバッグを重そうに持ち上げて言った。

図書館にて

翌日、昨日３０分しか勉強できなかった分を取り戻そうと、朝から近くの図書館へ行った。

図書館には、ゲームやマンガ本などの誘惑がないので、２人は意外と集中して勉強していた。

昼過ぎから、坂田裕也と鳴海那奈が図書館に来た。

康平と健太も驚いたが、裕也と那奈の方は、一瞬固まる程驚いていた。

裕也
『お前ら、ここに何しに来たんだ？』

康平
『勉強に決まってんだろ！』

那奈
『信じらんない！絶対似合わないよ！』

健太
『ウッセーな。家で勉強やってもはかどんねぇんだよ。』

那奈
『あんた達は、家で勉強しても、マンガとゲームに逃避しちゃうタイプだもんね（笑）』

康平と健太は、少し無言になった。

裕也が、話題を変える。
『今から勉強するって事は、永山の中間テストが近いの？
もしそうだとしたら、早すぎないか？』

康平
『まだ2週間以上あるよ。』

那奈は、
『信じらんない！何かあったの？』
と、心から心配そうな顔をして聴いてくる。

康平と健太は、＞勉強している事を心配されている＜不自然さに気づかずに、自分達がボクシング部へ入部した事。そして、ボクシング部にはテスト休みが無い事を話した。

裕也と那奈は、とても驚いていたが、裕也は複雑な表情をした。

裕也
『お前らもボクシングやってるって事は、嬉しいんだけど、3人とも体重が近そうだから、どっちかと試合する羽目になるのは、嫌だな。』

4人とも沈黙。

康平

『そういえば、裕也は試合出るんだって？』

裕也

『ああ、俺、中３の春からアマチュアのボクシングジムに通って選手登録してたから、試合に出られるんだけどね。』

康平達のように、高校からボクシングを始めた場合は、１年間試合が出来ないルールになっている。

健太

『スゲーな。じゃあ夏の初めまで部活（野球）やりながらジムに行ってたんかよ。』

裕也

『高校入って１年間試合に出られないのは、考えたくなかったからね。野球部のみんなには、最後の大会前に掛け持ちしてたから今でも悪いと思ってるよ……。』

康平

『試合は、ライトウェルター級で出るんだよね。』

裕也

『今、体重が６１キロちょっとだから、ライト級（６０キロ以下）でもいいんだけど、ライト級には、先輩がいるしね。』

健太

『ライトウェルター級っていったら、うちの兵藤先輩か。』

裕也

『兵藤さんの事は、話さなくていいよ。お前らにスパイみたいな事

はさせたくないしな。』

裕也は、あくまでイイ奴だ。

那奈

『はい、ここで雑談終了。あたし達もテスト休みが無いんだから、勉強しないとね！』

青葉台高校ボクシング部も、テスト休みは無いらしい。

４人は、雑談という誘惑を断ち切る為に、それぞれ離れて勉強を始めた。

重心（前書き）

今日も永山高校ボクシング部は、少ない部員ながらも熱気で溢れている。
1年生達もそれに呑み込まれるように、練習に励んでいる。

重心

月曜日、ボクシング場ではいつものように、パンチが当たる音、梅田先生の怒鳴り声、半分以上ハズす飯島先生の冗談が心地良く（？）なり響いている。

サンドバッグを打ち始めた1年生達。パンチを打った時、いい音をたてたい、サンドバッグを揺らしたいというのは、初心者がハマり易い欲望の1つだ。

ストレート系しか習っていない4人は、無意識に後ろ足に重心を置いて構え、体重の乗ったストレートを打とうとしてしまう。

特にその傾向が強いのは、康平だった。

梅田先生

『お前ら、前6、後ろ4の重心を忘れるな。』

康平以外の3人は、先生から言われた通りの重心に戻ったが、康平だけは直らない。

本人は直そうしているのだが、2、3発パンチを打つと、重心が後ろ足になってしまう。

康平には、強いパンチを打ちたいという気持ちが無意識にあるようだ。

その様子を見ていた梅田先生が、康平に言った。

『高田、お前しばらくサンドバッグを打つな。』

不思議にも、怒った様子ではない。かといって見捨てた感じでもなかった。
そして、

『お前は今日から、サンドバッグ打ちの代わりに、グローブを付けてシャドウ2ラウンドやれ。
だが、関節を痛めるかも知れないから、思い切りは打つな！』

こうして、重心が直らない康平には別メニューが与えられた。

梅田先生は、よく怒鳴るのだが、それは挨拶と返事、そして技術的な事だけのようだ。
それ以外の事はあまり怒鳴らないらしい。

練習が終わって、1年生全員に梅田先生が言った。

『最初の頃に言ったと思うが、6、4の重心は、今後習っていくパンチの為の重心だ。
今は、判らないかも知れんが、何が何でも意識しろ。』

『はい！』

1年生達は、梅田先生なりの優しさを感じたようだった。

食堂にて

永山高校には、食堂があり、そこは結構広い。
そこには売店があり、パン等や文房具等を売っている。

昼休み、売店は大忙しだ。昼前に弁当をとっくに消化している育ち盛りの高校生達が多く、足りない分は、パンを買って飢えを充たしている。

また、食堂は、運動部の部室に近く、パンを買って各々の部室で食べている人も多い。

健太は、学校へ遅刻しそうになり、朝メシを抜いた日があった。
弁当は、2時間目を過ぎたあたりで食べてしまい、放課後の部活に備える為、昼にパンを買った時、柄の悪そうな先輩達とすれ違った。

そそくさと、下を向いて脇を横切ろうとした時、いきなり腕を掴まれた。

『アホ！挨拶なしに通り過ぎる事はネェだろ。』

ボクシング部3年の清水先輩だった。

健太は慌てて

『あ、失礼しました。
オス！』

『清水！
オメェがオッカねぇから、避けられたんじゃねぇの？』

と、他のもっと怖そうな先輩達からカラカワれていた清水先輩だが、結構ユニークな先輩だ。

部活以外の先輩は、いつもしかめっ面で、肩で風を切るような歩き方をしている。オマケにガニ股だ。

ところが、部活になると普通の歩き方になる。

梅田先生が怖いからではなく、先輩が1年のインターハイ予選の時、同じように歩いている他の学校の奴が、1ラウンドで秒殺されたのを見て、それがトラウマになったと本人が言っていた。

そして、何故かボクシング教本に出てきそうな、スタイルで戦う。

色々な意味で、アンバランスなものを持っている先輩だ。
その清水先輩が言った。

『片桐！
今日から昼休みは部室に行くなよ。』

健太は、不思議そうな顔をした。

食堂にて（後書き）

県立永山高校ボクシング部は、今回の話でやっと全員の名前が出ました。

私自身も整理する意味で、このアトガキで、登場人物全員の名前を表示します。

永山高校ボクシング部
梅田先生（顧問）
飯島先生（副顧問）

高田　康平（1年）
片桐　健太（1年）
有馬　猛＞タケル＜（1年）
白鳥　翔（1年）

相沢先輩（2年）
大崎先輩（2年）
森谷先輩（2年）

石山先輩（3年）主将
清水先輩（3年）
兵藤先輩（3年）

青葉台高校ボクシング部

坂田　裕也（1年）

鳴海　那奈（1年）マネージャー

ボクシングが好きなだけで、何の文学的知識もないまま執筆しているこの小説ですが、表現力や構成の稚拙さには、多少目をつむって頂けたらと思います。

m（＿＿）m

『えっ、どうしてですか?』

健太は、すぐに清水先輩に質問した。

清水先輩

『今は説明している時間はネェから、他の1年にも言っておけ。』

意味不明のままだったが、怖そうな他の先輩達と離れることもできるので、

『はい!わかりました。』

と、納得したフリをして、1年の教室へ向かって行った。

健太は、康平と白鳥に伝え終わり、有馬に伝えた時に、逆に有馬が理由を話し始めた。

有馬

『昼休みの部室は、大崎先輩と相沢先輩の専用部屋になってるよ。』

健太

『えっ、なんで?』

有馬

『今、試合が近いから、2人は減量に入ってるんだ。だから、2人はメシを旨そうに食ってる奴等を見なくていいようにっていう配慮だな。』

健太
『へぇ、梅ッチが言い出したの？』

有馬
『梅ッチは、知らないみたいだ。』

生徒間で梅田先生の事は、梅ッチと言っている。

有馬が続けて
『森谷先輩から聞いたんだけど、言い出したのは、石山先輩と清水先輩だよ。』

健太も、妙に納得した。

石山先輩と大崎先輩（フライ級）、清水先輩と相沢先輩（ライト級）は、階級がカブッていた。

うちの高校は、特別な事情でもない限り、後輩の方が階級を変える。

少ない部員なのに、同じ階級で戦うのは、馬鹿げているし、第一選手達がそれを望んではいない。

健太は、康平と白鳥へ理由を話す為、もう一度2人の所へ向かった。

放課後の部活、相沢・大崎の両先輩は、苦しそうな表情をする瞬間もあるが、3年生達の心配りを思ってか、すぐに表情を元に戻して練習に励んでいた。

飯島先生

土曜日、先輩達と梅ッチ（梅田先生）は、また他県の高校へ練習試合に行っている。

１年生達は、この日も飯島先生と練習する事になった。

飯島先生と梅田先生は、６、４の重心をはじめとして、膝や角度や腕の位置など、指摘する事はほとんど同じだ。

異なるのは、正反対と言ってもいい程違うキャラクターだ。

梅田先生は、いつも余計は事は言わず恐い雰囲気だが、飯島先生はとても明るく、いつも冗談が多い。

有馬は、先生をナメていた訳ではなかったが、普段怒らない飯島先生しかいないので、少し気楽な気分で練習していた。

シャドウボクシングの最中に、頭を動かし、パンチを避ける動作を勝手に加え出した。

数日前のプロの世界戦を見て、チャンピオンの真似をしているらしかった。

飯島先生は、急に表情をかえた。

そして、ゆっくりと有馬に歩みより、小さな声で話しかける。

『…誰がそんな事をしているいいと言った…』

有馬

『！』

飯島先生は、もう一度話す。

『誰がそんな事をしていいと言ったんだ！』

静かな口調だが、腹の底から出すような言葉は、有馬だけではなく、他の１年生にもビシビシ伝わってくる。

『……いいえ。誰も言ってません。』

有馬は、少し震えるような声で、答えた。

飯島先生

『じゃあ、何でそんな動きをしたんだ？』

有馬

『３日前の世界戦をテレビで見て、つい……』

飯島先生

『では聞くが、梅田先生の前でも同じ事が出来たか？』

有馬

『いいえ、出来ないと思います……』

飯島先生
『俺の前なら出来ると思ったのか？』

『……すいませんでした！』

言葉に窮した有馬は、飯島先生の顔をまともに見れず、深々と頭を下げて謝った。

飯島先生
『分かったなら、二度とこんな事をするな！』

『お前らも、練習を続けていろ！』

飯島先生は、全員に練習を再開させたが、少し険しい表情になっていた。

話し合い

1年生達は、いつもより増して、緊張した空気で練習を続けていた。

飯島先生は、少し考えていたようだが、1年全員に呼び掛けた。

『お前ら、一旦整理運動して着替えろ！』

1年生達は、飯島先生の機嫌が悪くなって帰されると思っていたので、着替えた後帰ろうとしていた。

『待て、まだ練習が終わりだとは言ってねぇぞ！』

飯島先生は、慌てて全員を呼び止めた。

『全員、そこの長椅子に座れ！』

1年生達は、言われた長椅子に並んで座った。

飯島先生も、自身が座る椅子を4人の正面に持ってきて腰掛けた。

その直後、また怒られると思った有馬が急に椅子から立ち上がり、

『先生、さっきは申し訳ありませんでした！』
と、再度頭を下げた。

有馬先生はキョトンとしながら、言った。
『アホ！これから話すのはその事じゃねぇよ。
有馬はさっき、充分反省しただろ？』

有馬は安心した表情になって、大きく返事をした。

飯島先生
『だったらいい。さっきの事は、これで終わりだ。』

更に付け加える。

『お前達の思っている事を聞いておきたいし、俺もお前達に伝えておきたい事があるから、雑談に近いような話し合いを今からするつもりだ。お前ら、思う事があったら何か言ってみろ。』

『……』

1年生達は、お互いに遠慮してか、一向に話そうとしない。

先生が堪らす話し掛ける。
『＞俺の冗談がツマンねぇ＜という話以外だったら、何でも許すから言ってみろ。じゃあ白鳥、お前から話せ。』

白鳥
『……防御も習いたいと思うのですが…』

康平
『他のパンチも打ちたいです。』

健太
『体重とかは、気にしなくていいんですか?』

有馬
『他校のボクシング部の1年は、もうスパーリング（実戦練習）を始めているようですが、うちの高校はまだやらないんですか?』

飯島先生
『他にないか?』

1年生達は、乏しい経験で質問するのが難しいらしく、他にないようだった。

飯島先生
『今の段階で、他のパンチやディフェンス、スパーリングをする事はない。
梅田先生も話したと思うが、前6・後ろ4の重心と、パンチを打つ軸が安定するまでは、他の技術は一切教えなつもりだ。
例えば、重心と軸を崩して防御しても反撃しにくいからな?』

白鳥、康平、そして有馬に対する答えのようだ。

『お前ら、今は体重の事なんて気にするな!
特に練習後の食事はちゃんと食べろよ。

今の時期は、ボクシングに必要な筋肉をドンドン付ける時だ。分かったな！』

と、健太にも答えた飯島先生は、最後に一言付け加えた。

『お前ら、これからの練習で、疑問があったら俺か梅田先生に質問しろ。
但し、間が悪い時に質問するなよ（笑）』

早速健太が質問した。

『梅田先生に質問しても、怒られないんですか？』

飯島先生は、苦笑いしながら、

『その点は、大丈夫だ。
俺も梅田先生も、頭で理解しないで練習するより、理解したうえで練習した方が、数段早く上達する事を知っているから、喜んで教えてくれるはずだ。』

４人は意外そうな顔をしていたが、飯島先生は時計を見て、

『もう昼になったし、今日はもう帰るぞ。』

時間を言われて、急に空腹を感じた１年生達も、急いで帰っていった。

中間テスト（前書き）

どこの学校にも必ずあるテスト。
県立永山高校の学生達にも、様々な教科が、群れをなして襲いかかってきた。

中間テスト

中間テストが始まった。

康平と健太も、土日の詰め込み勉強のおかげか、それなりの感触だったようだ。

有馬は、高校へ入ったらボクシングに集中するらしく、はなから諦めて望んでいた。

白鳥は、未だによく判らない男だ。相変わらず暗い感じで、口数も少ない。

2ヶ月近くたって、ようやく判ったことは、白鳥が笑いたい時は、口許が微かに弛む位なものだ。

白鳥に興味を持つ奴は、ほとんどいないので、同じクラスの奴らも、それすら判らない者も多い。

しばらくして、中間テストの結果が出たが、永山高校では順位の公表はない。

だが康平のクラスでは、ちょっとしたウワサがたっていた。

1時間目の授業が終わった直後、康平の前の席に座っている女の子が振り向いて話し掛けて来た。

山口亜樹という名前で、康平と同じ位背が高い。
肩まで伸ばしたセミロングで色は浅黒く、鼻筋がスーッと通っている美人だが、可愛いというより、カッコイイ感じだ。

勝ち気な性格で、入学早々言い寄ってくるしつこい男にビンタを喰らわしたエピソードは、一時伝説になった程だ。

彼女にとって、比較的話が受け身勝ちの康平は、結構話し易いらしく、最近はよく話し掛けてくる。

亜樹
『ねぇ、あんたの部にいる白鳥って奴、今回のテストは満点に近かったらしいよ。』

康平
『え！マジで？』

亜樹
『なんだ、知らないの？
結構なウワサだよ。さっきそいつの教室行って見たんだけど、暗そうだよね。実際はどうなの？』

康平
『あいつは部活でも無口だからな。俺もよく判ってねぇんだ。』

亜樹
『コミュニケーションとれてないなぁ。ところで君は何番だったのかな？』

亜樹は、机の上に無用心に置いてあった成績表を素早くとって、康平の届かない所で見ていた。

亜樹
『君は、もう少し頑張った方がいいんじゃない。』

康平
『ひでぇな!うちの部はテスト休みが無いんだぜ。』

亜樹
『学生は、学業が本分でしょ!?言い訳しない。』

康平
『自分の方こそ何番だったんだよ?』

亜樹
『さぁ!でも、君にもっと頑張れって言える位の成績だよ（笑）』

そのうち先生が来たので、2人は話をやめて、次の授業の準備に入った。

試合前の練習にて（前書き）

インターハイ県予選を間近に控えた先輩達。
一方1年生達には、試合と関係なく、いつものように梅田先生の怒号が飛ぶ。

試合前の練習にて

放課後の練習。
インターハイ県予選を間近に控え、先輩達は最後の段階である。
試合に出す技を確認する者。
試合の前に、もう少し食べられるようにと、カッパを着て縄跳びのラウンドを増やしている者。
各々試合に向けて、最後の調整に入っている。

１年生達は、誰も試合に出ないので、いつもと同じ練習をしていた。
４人はそれぞれ修正する所を指摘されるが、最近は、指摘される内容が安定してきた。
康平は、もっと前足に重心をかけて６・４のバランスにする事。
健太は、もっと左肘を絞り、左ストレートを打った時に、右足が開かない事。
有馬は、もっと肩の回転を使って左ジャブを打つ事。
白鳥にも梅田先生からの罵声に近い指摘がある。
『白鳥、何度言ったら判るんだ。お前は左足をもっと曲げろ。』

白鳥は、少し伸び気味な左足をもっと曲げる事だ。
運動神経が良いとは言えない白鳥だったので、口で指示されてもなかなか直らない。

『お前、俺の声が聞こえてんのか？』

梅田先生は、白鳥の所へ行って体全体を上から押し付ける。
左足が充分に曲がったのを確認すると、

『もう、2度と同じ事をさせんなよ？』

と言いながら、鋭い視線で練習を見ていた。

梅田先生の凄いところは、勉強で学年トップ（噂ではあるが）の白鳥にも、ひどい仕打ち……ではなく、厳しい指導をする事だ。
練習が終わってから、康平と健太は少し残って先生達に疑問をぶつけていた。

先々週の土曜日、飯島先生に言われて始めた質問だ。
最初の頃は、1年全員話し易い飯島先生にばかり質問していた。
だが、梅田先生の淋しそうな表情を察した健太が、恐る恐る質問したところ、先生は口許を歪めながら、熱心に説明してくれた。
それからは、どちらの先生にも質問が飛ぶようになった。

今回、梅田先生に疑問をぶつける。

健太
『ジャブを打つ時、なぜ肩の回転を強調するんですか?』

梅田先生
『ジャブをグローブ付けて腕だけで打ったらどうなる?』

健太
『腕が疲れます…あっ!』

梅田先生
『判ったか。腕以外の部分の大きな筋肉を使えば、疲れ難い。
それに、肩を回して打つと、他に利点が2つある。』

康平
『それは、どんな事ですか?』

梅田先生
『まず、肩が回った分射程が伸びる事だ。
もう1つは、回した肩で自分の顎をガード出来る事だ。』

康平と健太は、実際にジャブを打って確認したところ、納得したようだ。

健太は、思い切ってもう1つの質問をした。

『先生、クラスで噂になっているんですが、中間テストで白鳥が満点に近い点数を取ったって本当ですか？』

康平

『うちのクラスでも噂になってます。』

梅田先生は、少し考えていたが、

『その噂は本当だ。学生は、勉強が本分だからな。少しは奴を見倣え。

但し、勉強出来ても、練習で手抜きはさせんぞ。』

今日の練習で、先生の言葉に嘘がない事を知っている康平と健太は、そそくさと帰って行った。

山口亜樹

木曜日、今日からインターハイ県予選が始まる。

ボクシングについて、

『観るのはいいけど、やるのはチョット……』

とは、よく聞く話だ。

高校ボクシングも例外ではなく、選手層は少ない。

多くて４回程勝てば優勝で、インターハイ全国大会の切符を手にする事が出来る。

今年の開催地は、裕也がいる青葉台高校だ。

そして、木曜日から日曜日の４日間かけてトーナメントを行い、優勝者を決める。

比較的近い場所なので、先生や先輩達は宿泊をしない予定だ。

ボクシング部の１年生達は、木・金曜日は試合に行かず、学校で授業を受けていた。

『ねぇ、康平は試合に行かなくていいの？』

康平に話し掛けてきたのは、前の席の山口亜樹だ。

康平

『あぁ、俺達1年は試合しないから、応援に行くのは土曜日からだ。』

亜樹
『そうなんだ。』

康平
『山口の方こそ、応援には行かないのか?』

亜樹
『あたしは、キ・タ・ク・部。
中学の時は部活やってたけど、先輩後輩の関係で疲れちゃってさぁ。
今は気ままにって感じだよ。
あっ!それと山口って、名字でいうのはやめてくんない。照れるからさ。』

亜樹は、ハッキリものを言う性格だ。

〈名前で呼ぶのも、結構恥ずかしいゾ〉
と、口には出さず、康平が言った。

『亜、亜樹…は、前は何やってたんだよ?』

亜樹
『アハハ、ドモッてる。
あたしは、バスケやってた。
ほら、あたしって、背が高いでしょ。
それで期待されていたんだけど、先輩とのレギュラー争いで色々あってね。

2年で辞めたんだ。』

確かに亜樹は、172センチの康平と同じ位背が高い。
亜樹が心なしか寂しそうに話すので、

『…それは大変そうだな…。』
と、康平は同情した。

亜樹
『ぷっ、嘘だよ（笑）。
2年で辞めたのはホントだけど、意地悪してくる先輩に、正面から文句言って、正々堂々と辞めてやったんだ。
意外に思われるかも知れないけど、あたしって、気が強いし！』

康平
『ひっでぇなぁ。同情して損したよ。
それに、誰も意外に思ってねぇよ！』

亜樹
『ひっどいわねぇ～（笑）
でも君って、将来詐欺に騙されるタイプかもね（笑）』

康平が何か言い返そうとした時に、先生が来たので、話は中断した。

放課後、今日は部活が休みなので、帰り支度をしていると、再び亜樹が話し掛けてきた。

『今日は部活が休みなんだ!?』

康平は、
『そう。日曜日以外で休めるのは久しぶりだよ。』
と、嬉しそうに答える。

亜樹
『前から不思議に思ってたんだけど、康平は、何でボクシング部に入ったの?
昔はヤンチャだったとか……』

康平
『そんなんじゃねぇよ!』

亜樹
『だよね!
いくら君がイカツイ格好しても、全然怖くないしね。』

康平
『余計なお世話だよ!』

亜樹
『例えば、一番あり得ない仮説だけど、康平に彼女がいて、そのコに勧められたとか?
まぁ、これは無いわね。』

康平
『ひでぇなぁ。何でそんなに入部した理由を聞きたいんだ?』

亜樹

『ほら、君はボクサーってタイプじゃないからさ。精悍でもないし、根性無さそうだし、あとそれから……』

康平は、これ以上悪口を言われるのはゴメンとばかりに、本当の事（部紹介で騙された事）を言った。

亜樹
『アハハ！やっぱりそうなんだ。君は期待を裏切らないネ。将来詐欺に気を付けた方がいいよ（笑）』

康平
『もうボロクソだな。』

亜樹は、少し黙っていたが

『ところで康平は、もう帰るの？』

と言った瞬間、健太と有馬が教室に入ってきた。

健太
『康平、今日試合した先輩達、みんな勝ったそうだぜ。』

有馬
『清水先輩と相沢先輩は、相手を倒して勝ったみたいだ。見たかったよな！』

健太

『石山先輩と兵藤先輩はシードだし、土曜日まで全員残ってるといいなぁ。』

その後、亜樹が何か言いかけたのに気付いた康平だったが、亜樹は何もなかったように1人で帰って行った。

亜樹を見ている康平に気付いた健太が訊く。
『ん、どうした康平、何かあったのか?』

有馬
『あいつ山口亜樹だろ。』

健太
『え、あの入学早々男をビンタしたっていう。お前もビンタされそうになったのか?』

康平
『そんなんじゃねぇよ。』

有馬
『あいつ、どこかツンケンしてるし、女同士でもあんま評判は良くないらしいぜ。』

康平
『……』

健太
『折角部活が休みなんだし、こんな所で油を売っていないで帰ろう

ぜ。』

2人とも、この健太の意見には大いに賛同し、急いで帰り支度を始めた。

県予選準決勝！（前書き）

土曜日、学校が休みなので、応援に行く事を許された1年生達は、初めて公式戦を目にする事となる。

県予選準決勝！

土曜日、インターハイ県予選は、準決勝まで進んでいる。

前日の試合でも、永山高校の先輩達は、ほとんど勝ち残っていたが、ライトフライ級（４８ｋｇ以下）の大崎先輩は負けていた。

先輩は、普段の体重が５４ｋｇ位あるのを減量していたので、疲れがあったかも知れないが、相手は１年生だったらしい。

どんな奴だろうと、健太と有馬は探そうとしたが、

『お前らそんな暇ないぞ。』

と、大崎先輩に止められた。

高校生の試合は、２分３ラウンドの短い試合だ。

そして、安全を考慮してか、試合を止めるのが比較的早い。

次から次へと入れ替わっていくような感じだ。

そして、次の試合は、フライ級（５２ｋｇ以下）の石山先輩だった。

昨日、負けてしまった大崎先輩は、応援に専念するらしい。

その大崎先輩が１年生に応援のアドバイスをした。

『野次は絶対禁止だ。

とにかく自分の選手のパンチが当たったら、大きい声で歓声をあげ

ろ。
そしたら選手がノってくるからな。』

そのうち、石山先輩の番になった。

試合前のお辞儀は順番があり、チョット面倒そうだ。

『ボックス！』

レフリーの一言で試合が始まった。

やや長身の相手は、派手な動きで大きく動く。
小柄な石山先輩は、リラックスした感じで頭をゆっくり振りながら前へ出ていく。

軽いパンチの応酬があった後、ロープを背にした相手がパンチを出した瞬間、先輩が左フックで飛び込んでいった。

凄い音を立てて、相手のブロックに当たったが、先輩はお構い無しに連打を浴びせた。

最後は何が当たったか判らなかったが、相手は体をくの字に曲げてゆっくりマットに沈んでいった。

左のボディーブローが当たったようだ。

１ラウンド１分過ぎ、石山先輩はＲＳＣ（レフリー・ストップ・コンテスト）で勝利した。

あまりの速攻に、大崎先輩でさえも、応援するタイミングを失った

が、先輩は、

『3試合後は、相沢だ！
気合い入れっぞ。』

と、自分に言い聞かせるように後輩達へ言った。

バンタム級（５６ｋｇ以下）で出場している相沢先輩の相手は、青葉台高校の奴で、今年、春の選抜で全国2位になっている強敵だ。

試合が終わった石山先輩も加わって、懸命に応援したが、奮闘虚しく、3ラウンド目に打ち込まれ、ＲＳＣで負けてしまった。

その後、清水・兵藤の2人の先輩は勝ち残って、決勝戦に駒を進めていた。

康平と健太は、坂田裕也の事が気になっていて、ライトウェルター級（６４ｋｇ以下）のトーナメント表を見た時、準決勝に残っていた。

2人は、こっそり裕也の試合を見たが、裕也の人柄を知ってる2人にとっては、信じられない程荒々しい戦い振りだった。

ガンガン前に出ながら、とにかく打ち合う。

そして、思い切った右パンチ打っていた。

2ラウンド目、今までずっと空振りしていた右の強振が、相手の顔面を捉えた。
すると、今まで元気だった相手の足許がふらつき、そこで裕也のストップ勝ちとなった。

康平と健太は、あっけにとられていたが、森谷先輩の試合が次にあるので急いで戻っていった。

その森谷先輩も、苦戦はしていたが、かろうじて判定で勝ち、明日の決勝を迎える事になった。

この日の試合が全て終わった後、康平達は、裕也と那奈を見付けたが、お互いに話している時間はないようだったので、先輩達と一緒に帰っていった。

決勝戦（前書き）

インターハイ県予選も、とうとう決勝戦！
謎のライトフライ級の1年生。
裕也と兵藤先輩の戦い。
他3人の先輩達！
永山高校の1年生達は、複雑な気持ちで試合を見ていた。

決勝戦

決勝戦の当日！
会場は緊張した空気になっていた。

今日戦う４人の先輩達も、目を閉じて音楽を聞いていたり、やけに後輩に冗談を言ってたり、各々違った行動をしているが、それなりに緊張しているようだ。

そして先輩達は、試合１時間前になると、アップ（ウォーミングアップ）を始めだした。

緊張を振り払うかのように、派手に肩を動かしながらシャドウをしたり、相手にパンチを打たせて目慣らしをしたりして戦闘モードに入っていった。

今日も、軽量級から試合をする予定なので、石山先輩は３試合目だ。

１年生達は、２試合目のライトフライ級にも興味があった。

大崎先輩に勝った同じ１年の奴が、　決勝に残っていたからだ。

黒木琢磨という協和高校の１年だ。
奴は、親父さんの影響で、小さい頃からボクシングをやっていたらしい。

そいつの試合が始まった。
構えはオーソドックスだが、極端に低いガードから速いパンチを打っていく。
かなりリラックスしているようで、パンチは鞭のようにしなやかだ。
そして、相手のパンチは上体の動きと、最小限の足裁きでかわす。
2ラウンド早々、一方的に黒木が打っているところで試合が終わった。

皆、感心するように見ていたが、同じ体重になりそうな有馬と白鳥は、しばらく呆然としていた。

次の試合は、石山先輩なので、ボォーっとしている訳にはいかず、全員応援の準備に移った。

石山先輩の相手も、研究していたようで、見ている方が疲れる位、足を使って戦ってきた。

先輩も少々戸惑ったが、前半はボディー中心にパンチを集めた。
2ラウンド後半に左アッパーが顔面にヒットし、相手の足が大きくよろめいた瞬間にレフリーが割って入り、先輩の優勝が確定した。

清水先輩の相手は、青葉台高校の同じ3年生で、去年の新人戦でも、

決勝で戦った宿敵らしい。

去年の雪辱を果たそうと、早いテンポで先手先手と仕掛けていった。

このままいけば勝てると思ったが、なぜか2ラウンド終盤からペースが落ちてしまった。

息はキレていないが、右のパンチが一向に出ない。

3ラウンド目は、相手が打ちまくる展開になり、判定で負けてしまった。

試合後、清水先輩はドクターに右拳を見てもらったが、なんと骨折していた。

すぐに病院へ向かうが、会場を出る前に、赤い目をしたまま、

『兵藤、森谷、絶対勝てよ!』

と、言って車へ向かっていった。

次の試合は、兵藤先輩と裕也だ。

裕也は昨日のように、ドンドン前にでる。

先輩はそれを迎えうつ展開になった。

裕也の打つパンチは空を切るが、先輩のサウスポーからの右フック・左ストレートがよく当たる。

裕也は打たれながらも懸命にパンチを打っていたが、３ラウンド開始早々からパンチは出なくなった。

試合を終わらせようと、仕留めにかかった先輩だったが、その時裕也の渾身の右ストレートが兵藤先輩の顔に直撃した。

たたらを踏んだ先輩だったが、すぐに打ち返して反撃に移った。

裕也は、もう打ち合う力は残っていないようで、そこでＲＳＣ負けとなった。

森谷先輩も、兵藤先輩に続こうと奮戦したが、力及ばず僅差の判定で敗れた。

そのうち、全階級の決勝が終わった。

閉会式も終わり、裕也が康平達の方へ歩いて来た。

まず、兵藤先輩の所へ行き、

『試合、勉強になりました。
インターハイ頑張って下さい。
』

深々と頭を下げた。

兵藤先輩

『お前、ハート強いよ。

それに、最後のパンチは効いたぜ！
また頑張れよ。』

その後、康平と健太に来て、
『やっぱ、兵藤さんは強いね。手も足も出なかった感じだよ。』
と、感想を漏らしていた。

康平と健太は、何て答えていいか分からなかった。

かろうじて健太が、
『いや、お前も凄いと思うけどね。』
と、答えるだけだった。

2人は、裕也を、別世界の人間のように感じていた。

大会の翌日

大会が終わった翌日、学校は代休で部活も休みだ。

康平は、不安な気持ちになっていた。

裕也のように、勇気をもって戦える自信はない。

そして、黒木琢磨のように上手くなる自信はもっとない。

気分転換でもしようとしたが、暗い気持ちだったせいか、何も思い付かず、仕方なく、期末テストに向けて勉強する事にした。

家の近所の図書館が休みだったので、永山高校の近くの図書館へ行った。

まず、前回のテストで悪かった数学に取り掛かった。

気分が乗らない時に、苦手教科に取り組むのは、自殺行為である。

勉強を始めて２０分、頭の回路が停止してきた。

図書館の中を散歩する。

歴史のマンガ本が置いてある棚を見つけた。

自然に手が延び、そこで立ち読みする。

大して面白くないマンガだが、お堅い本達が多い図書館では、貴重な存在らしく、結構使い込まれている。

一冊読み終えた後、テスト勉強に来た目的を思い出して、机に戻った。

戻って勉強を再開した途端に、再び脳が緊急停止した。

机に戻った義理を果たすかのように、問題を2問解き（正解かどうかは不明）、またマンガを読みに行く。

別の一冊を完全に読み終え、

（何やってるんだ俺！）

と、自分に呆れながら机に戻ろうとした時、康平の席に誰か座っていた。

『な～にやってんのかな君は～！』

一瞬ギクリとしたが、康平は、声を聞いてすぐに誰か気付いた。

山口亜樹だった。

今日は、学校の制服ではなく、ジーンズに紺のTシャツだった。

地味な服装だが、鼻筋がスーっと通った少し派手な顔立ちと、長身でスラッとした体系のせいか、地味な印象はない。

康平
『亜樹こそ何しに来たんだんだよ?』

亜樹
『勉強に決まっているでょう。
それにあたしンチ、この近くなんだ。』

康平
『へぇ、そうなんだ!』

亜樹
『たしか君は電車通学だよね。
わざわざここまで、何しに来たのかな?』

康平
『べ、勉強に決まってんじゃん。』

亜樹
『またまた、ご冗談を。ここへマンガを読みに来たんでしょ?』

康平
『い、一応数学もやってるぜ。』

亜樹
『またドモッてる（笑）
確かに、2問は頑張ったようだけど、解答は残念な結果みたい。』

康平
『……』

亜樹
『……康平は、少しブルーっぽいから、今勉強してもはかどらないよ！』

康平
『…そんな事ないぜ。』

亜樹
『残念ながら、亜樹お姉様は、康平君の事を全てお見通しなの！そのお姉様に相談する機会なんて、めったにないんだから、話してみなよ。』

康平は、
『高く付きそうだな。』
と、苦笑いしながら言った。

亜樹
『大丈夫、いつもイジッて楽しませてもらってるから（笑）』

2人は、会話ができそうなロビーへ向かった。

そこには、ジュースの自販機があり、康平は、相談料でも払うかのように、1本亜樹にオゴった。

大人っぽい亜樹も、月の小遣いをやりくりする高校生である。

素直に喜んだ。

飲みながら、康平は亜樹にブルーになった訳を話す。

将来、同じ階級で戦うかも知れない、勇敢で強い友達がいる事。

同じ学年なのに、桁違いに強い奴がいる事。

来年の今頃は試合に出るのだが、自分は戦えるか不安な事。

彼女が笑いもせず、真面目な態度で聴いてくれるせいか、康平は、ジュースを飲むのを忘れて話していた。

自分の事ばかりを話している康平は、妙な罪悪感を感じ、

『ワリィな。亜樹には関係ない事ばかりなのにな。』

苦笑しながら言った。

亜樹
『気付いてくれた?
ウソだよ（笑）！』

続けて亜樹が話す。
『ゴメンね！
相談にのるって言ったけど、何も出来ないみたい。』

康平
『いや、亜樹に話しているうちに、まだボクシング始めたばかりなのに、悩んでいるのがアホらしくなってきたよ。』

亜樹
『じゃあ、ジュース1本分の貢献はした訳だ（笑）。
でも、友達と試合したら殴れるの?』

康平
『わかんねぇ。なるべく試合はしたくないな。』

亜樹
『君は、ひとが良さそうだから心配だね（笑）』

康平
『俺より亜樹の方が、ボクシングに向いているよ。
言葉の暴力の攻撃的センスは、大したものだぜ（笑）』

亜樹
『ひっどいわね！
でもあたしは、攻撃して欲しそうな人にしか攻撃しないわよ（笑）』

康平
『かなわねーよ（笑）
ところで亜樹は、期末テストまで、1ヶ月近くあるのに勉強してんの？』

亜樹
『あたし、家に近いって理由だけで高校選んだの。
入学したら、急にいい大学に行きたくなっちゃったのよね。』

康平
『大学行って、何すんのさ？』

亜樹
『まだ漠然としてるけどね。話は変わるけど、康平はいつもどこの図書館にいるの？』

康平
『下田駅から近くの図書館だよ！
あそこは家の近所だし、健太っていうダチと勉強してるよ。』

亜樹
『この間、クラスに来たコでしょ。2人いたけど。』

康平
『目ツキが悪くない方の奴だよ（笑）』

亜樹
『テンション高そうね。』

康平

『あれはあれで、いいとこあっからな！』

亜樹

『そろそろ勉強再開しよっか。

くれぐれも、マンガで歴史の勉強しないようにネ（笑）』

2人は、ジュースを飲み干して、戻っていった。

前後左右の動き

大会が終わって2日後から、1年生達は練習を始めた。

試合をした先輩達は、もう3日休む予定だ。

今日は、梅田先生だけが練習に来ている。

いつものメニューをしていたが、サンドバッグ打ちへ移ろうとした時、いつもと違う事が起きた。

突然梅田先生が、竹刀を壁際に置き、サングラスを外したのだ。

そして、

『有馬、リングに上がれ。
他の奴は、サンドバッグを打たないで、シャドウを続けていろ。』

と、ミットをはめながらリングに上がった。

有馬もリングに上がったが、少し緊張しているようだ。

開始のブザーが鳴っても、先生はミットを構えない。

梅田先生
『いいか、まず俺との距離を一定に保て。
俺が動いたら、お前も動くんだ。』

そう言いながら、先生が下がる。

有馬が前に出る。

梅田先生
『ダメだダメだ。
いいかお前ら！
前に行く時は、前足はつま先から着地しろ。そしてベタ足になる。
例外もあるが、今は基本の段階だ。
つま先からの着地を徹底しろ。』

他の奴らも真似をする。

終了ブザーまで繰り返させる。

次のラウンド、今度は先生が前に出る。

有馬が下がったが、ここでまた一言！

『下がる時は、一歩で大きく下がれ。
その後は、すぐにパンチを打てる体勢を作る。
他の奴もやってみろ。』

全員このラウンドは、前に出たり、後ろに下がったりを繰り返す。

3ラウンド目は、先生に合わせて、左右に動く。

これは、最初の頃に習っていたので、右へ動きたい時は右足から、
左へいく時は左足から踏み出していた為、先生は何も言ってこない。

４ラウンド目は、前後左右をミックスして行った。

その後、他の３人も交代でリングに上がり、先生に合わせて動く練習を２ラウンドずつやった。

こうして、ミットをはめた先生が、パンチを一発も打たせない奇妙な状態が、１０ラウンド続いた。

梅田先生
『お前ら、今までのメニューの構えだけのラウンドを、今やった動きをする事に変える。
ただし、６・４のバランスは徹底しろ。
いいな？』

『はい。』

実戦的なパンチ

梅田先生の話は、ここで終わらない。

『お前ら今からミット打ちだ。
もう一度有馬からリングに上がれ。』

問答無用とばかりに、有馬を呼ぶ。

そして先生は、ミットのルールを説明した。

『片手で構えたら、ジャブだ。それは、右手も左手も関係ない。
両手で構えたら、ワンツーだ。
両手を重ねて構えたら、後ろの手のストレートだ。
やってみろ。』

先生が、ゆっくり右手で構える。
有馬は、オーソドックス（右構え）なので、左ジャブを打った。

今度は先生が、両手で構える。

パパーン！

と、ワンツーの当たる音がする。

そして、両手を重ねて構えた先生に、有馬の右ストレートが飛ぶ。

ミットの構えに反応して打つので、先生は言葉は何もない。
無言のミットが1ラウンド続いた。

次のラウンドの開始前、先生が口を開く。

『次も、ルールは同じだが、空振りさせる。だが、たまに当たるかも知れんぞ。』

開始のブザーが鳴り、パンチの音も出ない、更に静かなミット打ちが始まった。

有馬は、構えた所に打つのだが、先生が当たる瞬間にミットの位置をずらすので、パンチは虚しく空を切る。

有馬は、パンチをほとんど外され、軽く打ちはじめた。

先生がパンチをミットで受ける。軽いパンチなので、湿気た音がする。

『気の抜けたパンチを打つんじゃねぇ（怒）』

有馬は、先生にミットで頭を叩かれた。

スパーン！

このラウンド、一番いい音が出た。

ブザーが鳴り、空振りするのに、強く打たなければならないという、拷問のようなラウンドが終わった。

梅田先生
『有馬、もう1ラウンドだ!』

有馬は疲れた様子だが、また頭を叩かれたくないので、空振りする為に強いパンチを打つ。

3ラウンド目、3分の1以上パンチは当たったが、終了のブザーが鳴って時、有馬は肩で息をしていた。

他の3人も、同じように3ラウンドずつミット打ちをやった。

そして、白鳥と康平が一発ずつ、健太は二発、先生からミットで頭を叩かれ、快音を響かせていた。

全員、身体よりも、精神的な疲労で参っているようだった。

合計12ラウンド、休憩なしに全員の相手をしていた梅田先生は、平然として言った。

『相手と戦う時は、空振りも多い。
空振りしてもいいように、強く打つのが、実戦的なパンチだ。
わかったか?』

『ハイ！』

その後の練習は、、筋トレとゆっくりシャドウ、柔軟体操となり、ようやく長い部活が終わった。

ブロッキング

先輩達が練習を再開するまで、次の日も康平達は、梅田先生から集中的にコーチを受けていた。

この日は、初めてディフェンスを習った。

それは、ブロッキングだ。

文字通り、相手のパンチをブロックして防ぐ防御である。

一見地味なディフェンスで簡単なようだが、梅田先生からの注文は多い。

『ただガードを上げるのはブロックじゃない？』

『手首を少し曲げて、拳を額につけろ。そうすれば、顔に衝撃が来ないぞ！』

『ブロックする時は、もっと首を引っ込めろ！打たれる面を小さくするんだ。』

その後、昨日のように空振りミットが始まった。

少し違うのは、先生がミットでパンチを打ってくる事だ。

しかし、パンチと呼べる程のスピードはなく、１年生達が簡単にブロック出来るように、ゆっくり打つ。

ただ先生は、少し押すように打ってくるので、いい加減なガードだ

と、壊されてしまう。

その時は、目にも止まらね早さで、選手の頭をミットで叩く。
痛くはないが、ミット特有のいい音がする。

スパーン！

『腕だけでブロックするんじゃねぇ（怒）
パンチを受ける瞬間、腰を下に押し付けながら、体全体でブロックする意識を持て！』

この日は、康平から始まったミット打ちだったが、5ラウンドで終わった。

その直後、康平は、両手をリングのロープに掛けて、肩で息をしながらグッタリしていた。

『疲れた態度を出すんじゃねぇ（怒）』

梅田先生の罵声が飛ぶ。
続けて、全員に怒鳴る。

『お前らも練習中は、疲れた態度をするんじゃねぇぞ。
ボクシングは、誰も助けてくれる奴はいねぇスポーツだ。
練習中は、全てヤセ我慢しろ！』

康平以外の3人も、急に背筋が伸び、大きく開いた口は、真一文字に綴じた。

その後、３人の１年生は各５ラウンドずつ、梅田先生は、計１５ラウンドのヤセ我慢をする事になる。

全ての練習が終わり、帰る前に、白鳥が先生に質問した。

練習では鬼のような先生も、そうでない時は、普通の怖い先生になるので、少し勇気を出せば、１年全員質問出来るようになっていた。

白鳥

『先生、前進する時は、何故つま先から着地するんですか？』

梅田先生

『それは、踵から着地した場合は、前足の位置が不安定になるからだ。

すると、ストレート系のパンチが打ちにくい。

今のお前らのバランスは安定していないから、解らんかも知れんが、今は俺達を信じて言われた通りにしろ。』

白鳥

『はい、わかりました。』

普段自分からは、ほとんど話さない白鳥が、質問とはいえ、自分から話すのは珍しい。

この前の大会で、黒木を見て、危機感を持ったのであろうか？

梅田先生は、最後に1年全員に話す。

『お前ら、強くなりたければ、朝走ってみろ。
まだ全員下半身が弱い。
ゆっくりでもいいし、短い距離でもいいから、毎朝走り続けたら、
必ず強くなる。
但し、自分が走っている事は誰にも言うな！』

健太
『誰にも……ですか？』

梅田先生
『そうだ！……まぁ、1人位ならいいだろう。
今まで、自分がやった事をベラベラ喋る奴で、強くなったのはいな
かったからな。』

有馬
『俺達、黒木や坂田みたいな奴に勝てますか？』

梅田先生
『それは、解らん！
奴らも、練習してるからな。
頑張っても、必ず勝てるとは限らないのが勝負の世界だ。
但し、今のままでは、勝てん。
走るかどうかは、お前らが決める事だ。』

1年全員は、

『……練習有難うございました。』
と挨拶をし、それぞれ帰っていった。

ジョギング

家に帰った康平は、すぐに部屋に戻り、目覚まし時計のアラームを、朝5時にセットした。

ただ、走るかどうかは自分でも決めかねていた。

そして夕食の時、母親に頼んで目覚まし時計を1個借りて、そのアラームは6時にセットした。

23時頃、康平はなかなか眠れず、明日の朝の事は、どうでもよくなっていた。

（朝、5時に起きていたら走ろう。）

朝5時、康平は、比較的大きな目覚ましのアラームで目が覚めてしまった。

梅田先生が、走るのは、ゆっくりでも短くてもいいような話をしていたので、康平は軽いジョギングを始める事にした。

家から東は、健太の家の方角で、北は裕也の家の方角だった。

康平は、ゆっくり走っているのを、誰にも見られたくないので、南西の方角に向かって走り始めた。

6月上旬の今は、朝5時でも明るい。
新聞配達でバイクに乗っている人。
朝の散歩をするお年寄り。
見るからに、健康の目的で走っていそうなオジサン。
擦れ違う人は少なく、通学時の、せわしい感じはない。
街全体がノドかなオーラを発している。

3キロ程度のジョギングだったが、朝走るなど、初めての事だったので、康平は、意外な程疲労を感じていた。

家に戻った後、急いでシャワーを浴び、朝食・歯磨き・今日使う教科書の入れ替え等、いつもの通学前のノルマをこなしていく。

家から駅に向かう途中、健太と出くわした。

お互い、《走る》という単語は避けながら、話をする。

2人とも、今まで隠し事なしでの付き合いだった為、微妙に何処かぎこちない。

健太
『俺さぁ、……今気になってるコがいてさぁ…』

康平
『えっ！』

健太
『内海綾香ってコなんだけどな。
同じクラスの奴で、那奈に似て、結構可愛いんだ。』

康平
『那奈の事は、もういいんか？』

健太
『那奈には、裕也がお似合いだよ。…2人とも、性格いいしな。』

健太も、那奈の事は諦めているらしい。

康平
『お前は、俺より面白いし明るいムードを作れるから、お前次第で、うまくいくんじゃねぇの？』

と、無責任に言ったが、康平は、健太の欠点を知っていた。

どうでもいいことは、器用に上手くこなせるが、肝心な事は消極的になってしまうのだ。

その事は、誰よりも、健太自身が知っている。

康平も、健太の援護にまわりたいが、女子のネットワークには乏しく、康平自身も女子に勇猛果敢なタイプではないので、見守ってやるしか出来ない分野だ。

健太は、康平の表情を見て、故意に話題を変えた。

『康平の1時間目は、何するんだ?』

康平

『体育だよ。……!』

康平は、今日の朝から走った事を、完璧に後悔した。

この日の体育は、タイムを計る長距離走だったからだ。

恥ずかしい練習

夕方の部活。

先輩達は、右手を骨折した清水先輩を除いて、予定より1日早く練習に戻ってきた。

清水先輩以外は、誰も大したダメージはないらしい。

先輩達は、次のインターハイ地方大会や、国体県予選に向けて練習をしたいらしかった。

どこの部活でもそうだが、試合に出る選手の練習が最優先される。

ボクシング部も例外ではなく、先輩達が休みの間、前後左右の動きを習った1年生達は、リングを使えず、他の1年の足を踏まないように、気を使って練習していた。

康平達は、仕方がないと思いながらも、練習場を狭く感じていた。

この練習場は、梅田先生がこの学校に赴任してから、無理やり増設してもらったもので、既存の建物の間に、プレハブ状の小さな建物が、割り込んでいる感じだ。

今日は、梅田先生の他に飯島先生も練習に来ていた。2人の先生は、何やら相談していたが、1年生全員が呼ばれた。

梅田先生
『お前らは、今日から違う所で練習をする。
俺に着いて来い。』

先生は竹刀を置いて、歩いて行く。

着いた先は、第二体育館だった。

この学校には、２つの体育館があり、第一体育館は普段体育に使われ、ほとんどの部活もそこで行われている。

第二体育館は、第一体育館の半分位の大きさで、授業ではほとんど使われず、放課後だけ女子バスケ部専用の練習場所になっていた。
その中は、バスケをするには狭く、ボクシングをするには広すぎるという、中途半端な空きスペースがあった。

場所も、ボクシング練習場から２０メートル位しか離れていない。

梅田先生
『お前らは、ここで交代で練習に来る。』

続けて
『まず、有馬と白鳥はここに残れ。
片桐と高田は、練習場で練習していろ。
有馬はミットが終わったら、片桐を呼びに行け。
判ったな！』

『ハイ！』

康平と健太は、練習場に戻っていった。

戻った2人は練習を再開したが、4人の時より、場所に余裕ができて、動き易くなった。

4ラウンドを過ぎたら、有馬が戻ってきた。

有馬

『健太、次はお前だ。頑張れよ!』

意味深な一言を発して、有馬は健太と交代した。

健太は、ミット打ちがある為、一組のグローブを抱えて走って行った。

更に4ラウンドが経つと、白鳥が康平と交代しに来た。

白鳥は何も言わないが、元々赤い顔が、更に赤くなって息を切らしている為、大変そうなのが康平にも判った。

逃げる訳にもいかず、腹を括ってグローブを手にし、第二体育館へ向かった。

そこに着くと、すぐにストップウォッチを渡される。

体育館には、ボクシング用のブザーが無いので、康平が、シャドウをしながらタイムキーパーも兼用するとう事だった。

休憩時間の1分が過ぎたので、康平はブザーの変わりに声を出す。

『はじめ！』

康平は、シャドウをしながら健太の様子を見る。

昨日と同じようなミットだが、パンチを打つテンポが早い。
昨日の倍位、パンチの数を出している

そして、ブロックさせる為に打つ先生のパンチが速くなっている。

昨日と全く同じ所もあった。
それは、雑なブロックだったり、先生が構えても、反応が鈍い時は、
先生のミット攻撃が、容赦なく頭に襲ってくる事だ。

スパーン！

『教わった通りにブロックしろ？』

『ぼ～っとしてんじゃねぇ（怒）』

ミットの快音と先生の罵声が体育館中に響き渡る。

健太のミット打ちが終わり、康平の番になったが、彼もまた、先生
のミット攻撃と罵声にまみれた4ラウンドになった。

今日、ボクシング部の1年生達は、女子と同じ空間で、練習出来る

悦びを味わうどころか、ミットで散々頭を叩かれ、罵声を浴び続ける恥ずかしい練習となった。

居眠り

ジョギングを始めた康平だったが、まだ毎日やるとは決心していない。

但し、ルールは2つ決めていた。

目覚ましも2つセットし、1回目のアラーム（5時）で起きれば走る。

雨の日は、走らない。

他人より、これといって秀でたものがない康平だったが、体だけは丈夫で、5時には目を覚ました。

昔から康平は、天気運が悪かった。願う方の逆の天気になってしまう。

残念ながら、連日晴れが続いていた。

仕方なく康平は、連日走ることになる。

梅雨全線も、今年は横着しているのか、なかなかやって来ない。

10日程ジョギングが続いたが、さすがに康平も疲れを感じてきた。

金曜日の6時間目、担当の先生が休みの為、代わりに梅田先生が教室に入ってきた。

いつも以上に、真剣に授業を聴いていた康平だったが

先生が普通の格好で部活の時より優しく教える事。
苦手な数学である事。
ジョギングの疲れが溜まっている事。
など、色んな要素が絡み合い、ついウトウト眠ってしまった。

康平は、ふと、頬にザラザラした感触に目が覚めた。
梅田先生が、康平の頬に数学の教科書を当てていたのだ。
ハッと我に返った康平は、体を硬直させて下を向く。

梅田先生
『俺の授業で寝るたぁ、いい度胸だなぁ……おい』

そして、ミットで叩かれるように、教科書で頭を叩かれる。
バーン！
凄い音が、教室中に鳴り響く。
しかしその後、何事もなかったように、授業は進められた。

放課後、亜樹が康平に話し掛ける。

『悲惨だよねぇ！部活でも叩かれて、授業でも叩かれて（笑）』

康平
『え、何で知ってんの？』

亜樹
『あたしの友達、部活でバスケやってるから、たまにバスケの練習を見に行ってるんだ。』

康平
『ゲッ！亜樹には恥ずかしいトコばっか見せてんジャン。』

亜樹
『そんな事はないよ（笑）』

亜樹は話を続ける。

『私、中学2年でバスケ辞めたけど、部活自体は楽しかったのよねぇ。
今は、自分で決めた事だけど、勉強漬けでしょ！
気が滅入った時は、バスケ部の練習を見て、頭の中で青春を謳歌させてるって訳。』

更に亜樹は話す。

『それでも、少し寂しい気持ちにはなるのよね。
そんな時、君達が梅田先生にシゴかれている所を見たんだ。』

康平

『俺達、情けなかったろ。』

亜樹
『そんな事ないよ。逆に凄い勇気を貰ったんだ！』

康平
『ウッソでぇ。』

亜樹
『ホントだよ！
テスト休みも貰えず、毎日あんなに怒られながら、頭を叩かれて、
私より灰色な青春をおくっている人もいるんだなぁ…て思ったらまた、勉強を頑張る気になったのよね（笑）』

康平
『それは、よぉござんしたねぇ（苦笑）』

亜樹
『テスト休みが無いっていえば、君、今回の期末ヤバくない？
この1週間、授業中眠っている時多いよ』

『それはまずいかも…』

さすがに康平も、その点は素直に認めた。

亜樹
『だったら土日は、こっちの図書館へ来なよ。
康平が寝てた時ノートも貸してあげるからさぁ。』

康平
『何か悪いなぁ。亜樹には助けて貰ってばかりで…』

亜樹
『いやいや、そんな事は無いですわよ（笑）
君達のお陰で、勉強がハカドっていますからね。』

康平
『俺達の、身を削ったパフォーマンスでか？』

亜樹
『……明日、友達も図書館に来るんだけど……いいかな？』

康平
『別にいいよ。こっちが世話になる方だしさ（笑）
俺の方も、友達呼びたいんだけど……いい？』

亜樹
『多分、この前いた健太君ね。
あたし、テンション高いコって得意じゃないんだけど……ま、いっかぁ。
彼にも勇気を貰っている事になるんだろうし。』

康平
『ワリィな。明日、灰色の青春をおくっている者どうしで来るから、
ヨロシク頼むよ。』

亜樹
『ちょっと～！あたしの言った事を根に持ってない～（笑）』

土曜日の練習

土曜日、今日も早朝に康平は、ジョギングをする。

ボクサーが朝走る事を、ロードワークと呼んでいるが、康平の場合は、まだジョギングのレベルだった。

それでも、康平には辛いトレーニングだ。

しかし、今日は学校が休みで、部活は9時からだ。

時間的に余裕があるので、片道の距離をもう1キロ増やしてみた。

往復5キロになり、かなり疲れたが、自分は頑張っているという満足感が少し沸いた。

部活へ向かう為、駅に着いた康平は、健太を待っていた。

昨日電話で、部活の帰りに、永山高校の近くの図書館で勉強しようと約束した。

電話越しでは、乗り気でなかったようだったので、康平は心配になり、もう一度朝に電話して、駅で待ち合わせる事にしたのだ。

健太が少し遅れてやって来た。

部活用のバッグがヤケに膨らんでいるので、勉強する道具は持ってきたようだ。

電車の中で2人は話す。

健太
『あまり、気が乗らねぇんだけど……』

康平
『まぁそう言うなって！』

健太
『一緒に勉強するのは、あの山口亜樹って奴だろ。
美人だけど、高飛車そうで苦手なんだよな。』

健太と亜樹は、テレパシーの能力があるのかは解らないが、お互いを苦手としているようだ。

康平
『大丈夫だって！あいつ見た目よりいい奴だよ。それに、もう1人来るって言ってたしさ。』

健太
『そもそもお前が何で、山口…って奴と仲いいんだ?あの入学早々ビンタした奴だろう。
もしかして、お前ら付き合ってる?』

康平
『あんまり亜樹の悪口は言わないでくれ。
結構あいつに助けられてんだ。

あんな美人と付き合ってみたい気持ちもあるが、正直自分でも解らない。
けど、大事な友達の1人だよ。』

自分では、亜樹に言いたい事を言っている康平だが、他人に対しては庇うようだ。

健太
『まあ、お前の友達は俺の友達みたいなもんだからな。』

幼稚園から親友の2人は、恥ずかしい事も、歯が浮くような本音も共に言える貴重な間柄だった。

部活が始まった。

康平は、体に違和感を覚えた。
体に力感がない。いつもより、パンチが遅い。そして何より体がダルい。

1年のシャドウを見ていた梅田先生は、わざとらしい独り言をいった。

『俺が選手だったら、午前中に練習がある土曜日の朝に、走ることはしないなぁ。
毎日走れと言われても、週に1日は休むなぁ。』

走っている事を、誰にも言うなと言った手前、先生なりの助け船を出しているようだ。

この日、1年生全員は、ゆっくりシャドウをメインに軽めの練習をする事になった。

こうして、いつになく平和な練習が終わり、康平と健太は、永山高校の近くの図書館へ向かった。

切ない想い

図書館に着いた2人は、4人で勉強出来そうな席を探していた。

すると、背の高い女がこっちに向かって歩いて来た。

『康平、こっちだよ。安心して、いい場所とってるから。』

山口亜樹である。

今日は、この前と違って学校の制服でいる。

案内された場所へ行くと、ずっと日陰になりそうな場所で、勉強が進みそうだ。

健太
『こんちは。初めまして…かな?』

亜樹
『確か、うちの教室に2人で来てたよね。』

健太
『じゃあ、あの時康平の前の席にいた人だ。』

亜樹
『そうそう、あたしは山口亜樹。これからは亜樹って呼んでいいよ。』

健太

『俺は片桐健太。俺の事も健太でいいよ。
そう言えば、康平が世話になっているって聞いたけど?』

亜樹
『そう本人から聞いてるんだったら、康平も自覚があるってことね
(笑)』

2人は、それぞれが苦手と、康平には言っておきながら、最初の会
話はうまくいったようだ。

康平には不本意だったが……

康平
『オイオイお前ら、俺をダシにして場を和ますんじゃねぇよ!
あと、もう1人のコは?』

亜樹
『ゴメンね!
まだ彼女は部活で来れないみたいだから、3人で始めようか!』

長方形の机に4つの椅子があり、康平と健太が並んで座り、康平の
正面に亜樹が座った。

康平が苦手な数学から始めようとした時、亜樹が口をだす。

『君、今数学やるのは、やめた方がいいよ。』

康平

『何でだよ?』

亜樹

『最初から苦手な数学に手を出すと、またマンガに逃避するよ……たぶん。』

亜樹が、からかっている様子でもなく、神妙な顔で話すので、康平は、不思議と納得した。

そして、素直に別の科目から始めた。

４０分程、勉強したであろうか。

健太

『ゴメン。ちょっとトイレ行ってくる。』

健太は、大して尿意もないのに席を外し、トイレに向かった。

そして、ズボンも脱がずに洋式トイレに座り、想いに耽っていた。

康平と幼稚園から友達だった健太から見て、亜樹は、康平にできた初めての本当の女友達である。

健太は、頭では祝福しているが、気持ちは切なくなっていた。

しばらく葛藤していたが、自分が部外者にならないように、気を遣ってくれる2人にむくいる為、今日は最後まで勉強しようと腹を決めた健太だった。

そして、涙が出た訳でもないが、よく顔を洗ってトイレを出た。

なにくわぬ表情をしながら席に戻った健太だったが、そこに、知った顔の女の子がいた。

健太の欠点

健太が戻った席の向かい側には、内海綾香が座っていた。

健太
『…よう…』

綾香
『部活、長引いちゃってね。』

亜樹
『知りあい？』

綾香
『同じクラスなんだ。』

健太
『……』

綾香
『あれ、私の人違いだっけ（笑）』

健太
『い、いや…そんな事ないよ。同じクラスだよ。』

康平
『そうなんだ。』

康平は、健太がトイレに行っている間、亜樹から綾香を紹介されていた。

名前を聞いた時、健太が気になっているコだとすぐに気付いたが、康平は素知らぬ顔を演じていた。

綾香は、茶色が目立つ瞳で、ワイシャツと変わらない位肌の色が白い。
ハーフだと言われれば、納得してしまいそうな感じだ。

亜樹
『綾香には悪いけど、私達、1時間近く勉強したからロビーで休憩したいけど、いい？』

綾香
『私も賛成だよ！部活終わって御飯食べたから、少し休みたい気分なんだ（笑）』

康平
『俺達も、勉強の休憩だったら大賛成だよ。
なぁ健太！』

健太
『…あぁ、そうだな。』

亜樹
『健太君はともかく、君は頑張ってもいいよ（笑）』

康平

『あいかわらず、口が悪いな。まあ、言うと思ってたから、ショックはねえけどな。』

ロビーへ向かいながら、康平は、健太の欠点が出ている事に気付いていた。

健太は、大事な話をする時や、好きなコが近くにいる時は、テンパってしまい、極端に口数が減る。

根っからの明るさと、周りを和ませる健太の良さが、すべて封印されてしまう。

今も、その泥沼に堕ちそうな感じだ。

健太自身も、自分を歯痒く感じているのは、康平にはよく解った。

ロビーに着いて、４人は、ちょっと柔らか過ぎるソファーに腰掛けた。

綾香

『健太君と康平君は、部活休みだったの?』

康平

『え、何で?』

綾香

『だって、今日体育館に来なかったよね。』

健太と康平
『……！』

亜樹
『綾香はバスケ部なの。』

綾香
『気が付かなかった？』

亜樹
『先生が恐くて、そんな余裕なんてないよね（笑）』

康平
『アノ～、勝手にフォローしないでくれる？
否定はしないけど（苦笑）』

綾香
『こんな事言っちゃっていいのかな？
うちの部に、４人の内、誰が一番頭を叩かれたか、数えてる人がいるのよ。』

康平
『え？まじで。』

綾香
『趣味悪いでしょ（笑）。
で、１番叩かれているのは、ほら誰だっけ、テスト１番だったコ…
……』

健太
『白鳥だよ。』

綾香
『そう、その白鳥君ね。
彼、あまり器用じゃなさそうで、気の毒な位、叩かれてたのよね。』

健太
『でも、あいつなりに頑張ってるからな。』

康平
『そうそう。』

綾香
『2人共、庇っている余裕あんのかなぁ（笑）
この中に、惜しくも2位の人がいるんだけど……』

康平
『多分、俺だな。
器用な方じゃないからな』

綾香
『残念でした。健太君なのよね。
でも、白鳥君とは、叩かれる場面が違うみたい。』

康平
『指摘される欠点が違うって事？』

綾香
『そうじゃなくて。その～何て言うのかなぁ、質問するタイミング

が悪くて叩かれてんのよねぇ（笑）。
でも、本人が納得できなくて、叩かれながらも質問すると、その内容でまた叩かれてる感じだったよ。』

康平
『てめえ、今そんな事聞いてる場合じゃねぇだろ……って感じで怒られてんのかな？』

綾香
『そんな感じ（笑）』

康平
『お前、納得できないと、前に進めない所があっからね。』

健太
『自分じゃワカンねぇけどな。』

綾香
『でも、健太君をとっても気に入ってる先輩がいるのよね。
いくら叩かれても、腐らないで、真面目な顔で質問してる所が面白いって。』

『マジで！健太やるジャン。』

康平は、健太は複雑な気持ちだろうと思いながらも、そう言った。

綾香
『残念でした。その先輩は彼氏がいるって言ってた。あと、白鳥君は、部を辞めるんじゃないかって。

私から見ても、暗い感じだしね。』

健太
『でもあいつ、前よりヤル気出てるよな。』

康平
『そうそう、それに健太の冗談で、微妙に笑うんだぜ。』

綾香
『それって、見てみたいかも。』

『私抜きで盛り上がっている所を邪魔して悪いんだけど、そろそろ戻らないと、怒られるよ。』

亜樹が不機嫌なフリをして言った。

綾香
『ゴメン！亜樹さんには、ホント感謝してるから。
亜樹は中学の時も、トップクラスの成績だったのよね。』

亜樹
『おだてても無駄よ。ここの図書館のオバサン、怒ると怖いんだから。
さ、戻ろ！』

他の3人は、柔らか過ぎるソファーから重い腰をあげ、亜樹の後ろ

についていった。

亜樹のやさしさ

図書館での勉強は、思いの外進んでいた。

健太には気を遣いながら、綾香にはフレンドリーに、そして、康平には上から目線で教える亜樹の存在が大きいようだ。

これは、結果論かも知れないが、健太がテンパっているので、いつもの高いテンションがブラインドされているお陰かも知れない。

そのブラインドも、時間が経つにつれて、少し消えているようだ。

夕方になり、図書館の閉館間際、４人はロビーで話し込んでいた。

綾香
『どう、亜樹って教え方上手くない？
あたし、テスト前にはいつも助けられてんのよね。』

康平
『確かに上手いかも知れないけど、俺はその度に屈折しそうだよ（苦笑）』

亜樹
『なんか聞こえるわね。』

健太
『２人とも、俺達みたいな幼なじみ？』

綾香

『あたしと亜樹は、中学の時からね。
でも、亜樹が男子と一緒に勉強なんて、初めてなんじゃない？』

亜樹
『あれ、健太君が最初だっけ？』

綾香
『あたしは、康平君も含めて言ってるんだけどね（笑）
あ、もう閉館ね。
今日は、楽しかったよ。』

健太
『先生のおかげで、勉強も進んだしな（笑）』

帰りの電車で、康平が口を開く。

『まさか、お前の気になってるコが来るなんてな。』

健太
『それもビックリしたけど、亜樹って外見と違って結構いい奴なんだな。』

康平
『そうか？俺にはキツイけどな（苦笑）』

健太
『それは、お前に心を開いてる……
だったら、それはそれで大変そうだな（笑）』

康平が故意に話題を変える。
『それはそうと、明日１０時であの図書館に行くけど、お前も来るんだろ？』

健太
『明日は辞めとくよ。
またお前らに、気を遣わせそうだしな。』

康平
『あの内海も来るかもしんねーぜ。』

健太
『また、テンパるだろうから、いいよ。
でも、お前がフォローしてくれるのは嬉しかったけど、康平に続けて借りを作りたくねぇしな。』

康平
『何の事だかワカンねぇけど、まぁ明日、図書館に着いたら、健太は用事で来れないって伝えとくよ。』

健太
『亜樹も、俺が部外者にならないように気を遣ってたからな。
あっ、この事は言うなよ。』

康平
『言わねぇよ。
誰と誰の部外者か！
って、俺が攻撃されそうだしな（笑）』

次の日、図書館へ行った康平だったが、いたのは亜樹だけだった。

亜樹
『そっか、健太君も来れなかったのね。
綾香も、今日は用事があるって。
午後1時までは、ハイペースでいくわよ。』

康平は、ここの図書館へ着た当初の目的である、眠ってしまった授業のノートの書き写し作業を始めた。

前日は、健太達がいるので、亜樹もノートを貸しにくかったようだ。

亜樹のノートは、字が綺麗で読みやすく、覚えたい所を簡潔に書いている為、早いペースで書き写しが進む。
10時間分の空白になっていたノートは、午後1時頃には、全て埋まっていた。

ロビーで、遅めの昼食をとり、2人は休憩していた。

康平
『ワリィな。ホント助かったよ。』

亜樹

『いいよ、私が言い出した事だし。』

康平

『でも、俺がノートを書いていない所に付箋が付いていたけど、俺の前の席なのに、何でわかってるんだ?』

亜樹

『後ろに目があるなんて、お決まりの文句は言わないけど、君が眠るパターンは、分かっちゃうのよね（笑）』

亜樹は続けて、

『後で君が慌てるのを見たい気持ちもあったけど、日頃イジらせて貰ってるから、やっぱり助けてあげようって付箋を貼ってたんだ（笑）』

康平

『いや、ホント助かったよ。ありがとな。』

亜樹

『…何言ってんの、今日の勉強はまだ続くんだから、これから君の大好きな数学をやるからね。』

亜樹は照れを隠すように、急いで学習机に戻っていった。

ついに実戦練習？

期末テスト、康平は、亜樹のおかげで中間テストよりも成績が上がったようだ。

今回も、白鳥が断トツの成績だったが、元々存在感の薄い彼は、前より騒がれなかったらしい。

その少し後に、今年の国体県予選があった。

清水先輩は、前の大会で右拳を骨折したので出場できず、今回は、５人の先輩が出場する。

清水先輩が抜けた分、相沢先輩がライト級へ、そして、大崎先輩は何と２階級上のバンタム級に出場した。

この２人は、本来がこの階級らしく、決勝戦まで勝ち残ったが、共に青葉台高校の３年生に敗れていた。

森谷先輩は準決勝で終わったが、石山、兵藤の２人の先輩は、圧倒的な強さで優勝していた。

ライトフライ級の黒木琢磨も、優勝だった。

裕也は、今の大会には何故か出ていない。

大会当日、裕也と話す機会があった。

詳しい事は、聞けなかったが、フォーム改造の為らしい。

大会前の梅田先生は、上級生の指導に忙しく、あまり見て貰えなかった康平達は、ある意味平和な日々を送っていた。

国体予選が終わって5日後、平和な日々に、暗雲が立ちこめる。

梅田先生
『お前ら1年全員、12オンスのグローブ持って第二体育館に来い。それと、練習用ヘッドギアとマッピ（マウスピースの事）も忘れるな！』

ヘッドギアとは、頭部を保護する為の道具である。また、ここの部は、練習用として薄い試合用ではなく、少し厚いヘッドギアを使っていた。

そしてマウスピースは、10日前から各自用意するように、先生から言われていた。

1年生達に、緊張が走る。

先輩達が、スパーリング（実戦練習）で使っていたアイテムを、自分達も使うとなると、やはり……

ただ、１つ足りない物があった。
ノーファウルカップである。局部を守る道具だが、スパーリングには欠かせない道具の１つだ。

有馬が質問する。

『先生、カップはいらないんですか？』

梅田先生
『今日は、使わんから不要だ。』

全員、ノーファウルカップを、カップと略して言っている。

先生は、竹刀を持って第二体育館へ向かう。

康平達は、それぞれ道具を持って、第二体育館へ着いた。

梅田先生
『全員、ヘッドギアとマッピとグローブを付けろ。』

４人は、慣れない手つきで用意する。

康平と有馬は、緊張していたのか、グローブから先に付けてしまっていた。

梅田先生は、苦笑しながら『アホ！
それじゃぁ、ヘッドギア付けらんねぇだろ。』
と、言いつつ２人にヘッドギアを付けていた。

こうして、全員用意が出来ていった。

形式練習

梅田先生が、口を開く。

『これから、形式練習を始める。
それは、打つパンチを決めて防御する練習だ。
細かい事は面倒だから、やりながら教える！』

有馬と白鳥、康平と健太がコンビを組まされた。

梅田先生
『高田、ジャブを1発片桐に打ってみろ。
顔だったらどこでもいいぞ。
それを片桐が防御する。今はブロックして守れ。』

康平と健太の長い付き合いの中で、口ゲンカこそ3ケタを超えるキャリアだが、殴りあったケンカは1度もない。

記念すべき（？）初の暴力行為が健太の顔面に飛んでいく。

健太は、力みながらだが、康平の左ジャブをブロックした。

梅田先生
『今度は、片桐が打て。』

2人は、戸惑いながら、お互い前と逆の行為をする。

梅田先生
『それを交互に繰り返す。但し、相手が打ったら、3秒以上間を空けてから打て。わかったな?』

『ハイ!』

4人は、それぞれジャブを打ち、それをブロックする動作を、ぎこちない感じではあるが、それぞれ始めていった。

梅田先生からの、指導の声が飛ぶ。

『白鳥、もう少し離れた場所から打て!』

そして、竹刀を使って白鳥を後ろに下げさせる。

『片桐、ブロックする時も6・4のバランスを崩すんじゃねぇ。』

また竹刀を使って、引き気味だった健太の腰を前に出させる。

『高田、ジャブを打ったらすぐに構えに戻せ!』

パンチを打った後、その拳が下に落ちていた康平は、梅田先生から、胸の高さに竹刀を出され、それにぶつからないように、左ジャブを打たされる。

今まで、ただ似合っているだけで、あまり使われなかった梅田先生の竹刀は、今回、部員の技術向上の為に、機能的な働きをしていた。

たまに別の分野で活躍する時もあるが……

『有馬、てめぇ、要領よくすんじゃねぇ（怒）』

有馬は、自分が防御の番の時、白鳥が打つ前からブロックの形になっていたようだ。

梅田先生は、それを見逃さず有馬の頭を竹刀で軽く叩く。

この日、1年生達はジャブだけの形式練習をずっと続けていた。

リラックス

第二体育館での形式練習は次の日も続けて行われた。

形式練習の初日こそ、ジャブだけだったが、次の日からは、後ろの手で打つストレートが加わった。

ストレートは、後ろの手で打つ分、体の捻りを使い易く、しかもその手は、利き手だ。

当然、ジャブより威力がある。

顔にもらったら……。

４人の顔に緊張の色が増していく。

だが、いざ始めてみると、最初から相手が打ってを知っているので、クリーンヒットの場面はなかった。

しかし、ブロックした時の衝撃が大きい為、腰が引け易い。

『おめぇら、６・４の重心を崩すな。』

梅田先生は、全員の腰を竹刀で軽く叩く。

１年生達は、相手のパンチ以上に先生が恐いのであろう。

全身を力ませながら、無理矢理腰を前に出してブロックする。

梅田先生
『そんなに力んだら、パンチが打てねぇ。
もっと力を抜け！』

恐怖の中でリラックスするのは、本能に反逆するようなもので、なかなか出来る事ではない。

何度言っても治らない康平達に、先生は顔を真っ赤にし、ぶちギレモードに入ろうとした時、女子バスケ部の方から、ボールが転がってきた。

先生は怒りに集中していて気が付いていない。

バスケ部の1年生達は、梅田先生が恐くて、誰もボールを取りに来ようとしないようだ。

見かねた、バスケ部顧問の女の先生が、

『梅田先生！ボールを取りに行っていいですかぁ～』

と、やんわりと声をかける。

梅田先生は、
『あ、どうぞいいですよ』
と、真っ赤な顔のまま笑顔で答えていた。

さすがに梅田先生も、先生同士だと気を遣うようだ。

1年生のバスケ部員は、必要以上にオジギをして、ボールを持って行った。

4人のボクシング部員は、怒りの赤い顔のままで、愛想良く話す梅田先生を、吹き出しそうになる程可笑しくなったが、笑える状態ではなかった。

但し、ほんの少しだがリラックス出来たようだ。

その後、康平達は、ワンツーも含めた形式練習を続けていった。

この日の練習後、梅田先生が1年生達に話す。

『恐怖の中でのリラックスは、難しく、慣れるまで根気強くやるしかないな。』

まるで、自分に言い聞かせているようだった。

保健室で

第二体育館での出張練習。

これは、康平達1年生にとって、精神的な重圧のある場だ。

異性への興味が急上昇中の康平達が、多くの女子（バスケ部）の前で、名指しで怒られ、そして叩かれるのだ。

その恥ずかしさは、当人達にとって、どの位であろうか？

梅田先生が、計画的に仕組んだかは分からないが、1年生達は、

（自分だけは怒られないようにしよう）

と、必死に取り組んだ結果、目に見えて上達しているようだ。

最初の形式練習の時は、魔法のステッキのように、縦横無尽に活躍した先生の竹刀も、夏休み間近になると、先生の体を支える位しか役に立っていない。

梅田先生が、ウザイ程言っていた6・4のバランスも安定し、4人の1年生にも余裕が生まれ始めていた。

余裕が生まれると、油断してしまうのは、人間の救われ難い性であろう。

休憩中、康平がバスケ部の方に目をやると、内海綾香が目に入った。
健太からは、あの図書館以来何も聞いていないが、気になりだした。
そのうちに、
『はじめ！』
と、梅田先生のゴング代わりの号令が出ていた。
健太のパンチを、作業でもするかのように、ブロックした康平は、
顔面に衝撃が走った。
鼻がツーンとして、なみだ目になる。
健太の左ストレートを鼻にもらったようだ。
打った健太も驚いていたが
『バカヤロー！形式練習でボーッとしてる高田がワリィんだ（怒）』
何日か振りに、先生の罵声を浴びた康平だったが、鼻血が止まらない。
健太
『康平、大丈夫か？』
梅田先生
『構うな！高田、オメェ、保健室寄ってもう帰れ。』
康平は、上を向きながら鼻を摘まむという情けない格好で保健室へ

向かった。

保健室に着いたが、先生はいないようで、鍵がかかっている。

『あれ、康平……君？』

声の方に、視線を向けると、内海綾香が立っていた。

綾香
『あたしも突き指しちゃったのよね。
あっ、ちょっと待って、今鍵開けるから。』

綾香は保健委員らしい。

彼女は、自分の突き指の処置を簡単に済ませると、急いで引出しから綿棒をだして持ってきた。

『ワリィな。後は自分でやるからいいよ。』

綾香が、献身的な雰囲気を持っていた為か、康平は、先手を打って遠慮した。

『ホントに大丈夫？
私、鼻の掃除やってもいいけど…』

康平の予感は的中していた。彼女は、鼻の掃除までするつもりだったのだ。

綾香の透き通るような白い肌を、自分の鼻血で汚す事は躊躇われるし、何より親友の想い人である。

康平は丁重に、断った。

康平は鼻血が完全に止まるまで、ベッドに仰向けになったが、綾香は椅子に座っていた。

康平が尋ねる。

『部活に戻んなくていいの？』

綾香
『あたしの部活は、これでおしまい。
突き指したから、もう帰りなさいって（笑）
康平君は？』

康平
『俺の方も、もう帰れってさ。
言い方は乱暴だけど（笑）』

綾香
『梅ッチ、部活になると鬼だもんね（笑）
あ、そうだ。康平君、駅まで歩くんだよね！
あたしンチ、駅の向こう側だから、途中まで一緒に歩かない？』

『え…あ…うん。いいよ』

思わず返事をしてしまった康平だった。

綾香と亜樹

康平は、困惑していた。

図書館で1度会っただけの綾香と、駅までとはいえ、一緒に帰る事になろうとは……

待ち合わせの校門へ、ほぼ同時に着いた2人は、ゆっくりと駅へ向かう。

綾香
『ショックよね。
今までずっとバスケやってて、突き指なんてなかったのに…初心者みたい（笑）』

康平
『どの位やってんの？』

綾香
『そうね、小学校3年から始めているから、今年で8年目ね。』

康平
『へえ、随分続いてるね』

綾香
『そんなに熱血でも無いけど（笑）。
あたし、ここの高校選んだのも、亜樹が入るからなのよね。
進路を決める理由としては、結構いい加減かも（笑）』

康平
『亜樹は、バスケを途中で辞めたらしいけど、何でそんなに仲いいんだ？』

綾香
『何処まで話していいのかなぁ……
康平君は、亜樹がバスケ部を辞めた理由って、知ってるの？』

康平
『レギュラー争いしてた先輩の嫌がらせだろ？』

綾香
『そこまでは聞いてたんだ……
康平君を信用して話すけどそれだけじゃないのよね。
実は、亜樹とレギュラー争いしてた先輩とは、そんなに仲が悪くなかったの。』

康平
『え！』

綾香
『その先輩と付き合ってた彼がいて、その人が私にしつこく電話してきたりしてたんだ。』

康平
『マジで』

綾香
『私、どうしたらいいか分かんなくて、思い切って先輩に相談した

のよ。』

康平
『どうなったの？』

綾香
『逆に私が先輩の嫌がらせを受けるようになってしまったのよ。』

康平
『……』

綾香
『でも、亜樹がどんな経緯で知ったかしらないけど、私の味方をしてくれて、先輩には正面から文句言って、その彼氏をビンタまでしちゃったのよね。』

康平
『…凄いね…』

綾香
『亜樹は、その時退部届けを出したんだけど、同じ学年では一番上手かったんだけどね。』

康平
『へえ～』

綾香
『私と亜樹は、それ以来親友になっちゃったのよ。
亜樹がバスケ部にいた時はそうでもなかったのに（笑）』

綾香が続けて話す。

『亜樹って、外見がお高い雰囲気だから、結構誤解され易いのよね。中学の時も、独りでいる時が多かったの。』

康平

『……』

綾香

『でも、高校に入って亜樹は康平君と楽しそうに話してるから、私もホッとしているんだ。』

康平

『楽しそうかは分からないけど、言葉の暴力は振るわれてるよ（苦笑）』

綾香

『それは亜樹が心を開いてるからよ。あんなに、男の人に話し掛ける彼女は、見たことないもの。そういえば、期末テストはどうだった?』

康平

『亜樹のノートのおかげで少し成績が上がったよ。』

綾香

『早く亜樹に言った方がいいよ。亜樹なりに心配してたよ。表現は屈折してたけど（笑）』

翌日康平は、亜樹に期末テストのお礼を言おうとするが、何かキッカケが無いと、面と向かってお礼が言えそうにない。

中間テストの時のように、亜樹が勝手に見るのを期待して、机の上に成績表を置いていた。

亜樹
『何わざとらしく成績表を置いてんの？』

康平
『ん！…あ…亜樹が見たいかと思ってさ。』

亜樹
『結局、どうだったの？
成績は上がったの？』

康平
『…中間テストの時より上がったよ。』

亜樹
『私のノートまで見せてあげたんだから、当たり前でしょ！』

ずっと康平が、成績を教えないので、亜樹はご機嫌斜めのようだ。

本当に亜樹が心を開いているか、疑いたくなる康平だった。

絶望的な夏休み

終業式が終わり、高校生になって初の夏休みを迎えた1年生達。
康平のクラスでも、半分は開放的な顔をしている。

残りの半分は、運動部の奴等だ。
部活がある為、いつも学校に来なければならないので、中途半端な表情だ。

その中に、絶望的な顔をしている人間がいた。
康平である。

前日、梅田先生から夏休みの練習予定を聞かされた。

『朝、ロードワークをする者もいると思うから、うちの部は、毎日午後1時に練習開始だ。
但し1年生は、上級生と時間をズラシたいから、午後3時に来い。
念のため言っておくが、休みは日曜日だ。』

ほとんどの運動部は、夏休みの期間、午前中に練習する。

そして、残りの半日で青春を謳歌する。

ボクシング部だけが、午後からの練習のようだ。
しかも、1年生は中途半端な15時からだ。

その時間までは、体力温存の為に、羽目を外せそうにない。

何とも規則正しい夏休みになりそうだった。

ボクシング部の午後からの練習時間は、クラスメートだけでなく、担任も知っているようで、

『お決まりのセリフだが、夏休みは羽目を外し過ぎるなよ。まあ、高田は別だがな（笑）』

珍しく、クラスの奴等から笑いをとっていた。

康平は、……勝手にしろ……とでも言いたげな顔で、頬杖をついていた。

ホームルームが終わり、解散になった。普通なら、これから部活なのだが、何故か休みだった。

梅田先生達に仏心が芽生えたのであろうか？

康平は一瞬思ったが、すぐに否定した。

否定する理由が有り過ぎるので、ここでは書かない。

事実、梅田先生は、期末テストで赤点取った奴等の補修の準備に忙しいらしく、飯島先生は、午後からある友人の結婚式に出る為、急いで帰ったようだ。

永山高校のボクシング部は、先生がいなければ、部活が休みのルールになっていた。

明日から始まる規則正しい生活に、希望を見出だせない康平は、健太や他の友達と遊んで気分転換でもしようと思っていた。

健太の教室へ行こうとしていた康平に、

『康平、ちょっと待って』

亜樹が呼び止めた。

『どうせ、今から遊びに行こうか考えてんでしょ？
それだったら、少し付き合ってくれないかな？』

康平は、決め付けられたのが悔しかったのか、

『どうしようかなぁ』

悩むフリをした。

『悩むんだったら別にいいよ。
困らせるつもりないし。』

亜樹が、あまりに素っ気なく言うので、

『あ、お…俺は大丈夫だよ。』

康平は、慌てて付け加えた。

亜樹

『有難う。じゃあ駅前のデパートに行くからね。』

亜樹は、二つ年下の従弟の誕生日プレゼントで悩んでいるようだった。

康平は、即座に新しいゲームソフトを提案したが、亜樹に却下された。

従弟はゲームをしないらしく、バスケをやっていたので、無難にTシャツを買う事にした。

ゲームとマンガが趣味の康平は、真剣に考えたがあまり役に立たず、結局亜樹が1人で決めて買った。

康平

『ゴメンな。全然役に立たなくて……』

『そんな事ないよ。
君も真剣に悩んでくれてたしね。』

亜樹は、本当に嬉しそうだ。

別れ際、康平が口を開く。

『夏休みも、あの図書館にいんの？』

亜樹
『まだ決めてないけど』

康平
『…もし…図書館で会ったら、べ、勉強教えてくれるかな？』

亜樹は、口元を綻ばせながら言った。

『毎日、あそこにいるかは分かんないけど、月曜から土曜日の朝から午後3時あたりには、いるかも知れないよ（笑）』

楽しい未来図？

夏休み初日の部活、今この瞬間、学校の敷地の中で活気があるのは、ボクシング場だけである。

まあ午前中に、他の部はとっくに練習を終わらせているから、当然と言えば当然なのだが……

今日のキャストは、初の組み合わせだ。

今まで1年生だけが練習する時は、2人の先生の内、片方だけだったのだが、今日は梅田・飯島の両先生が揃っている。

1年生達は、今日の練習がキツくなるだろうと思っていたから、練習前の更衣室では、4人とも少々暗い顔つきだ。

更衣室は、練習が終わった先輩達と、これから練習を始める1年生達が、それぞれ着替えているので、大混雑だ。

兵藤先輩が、口を開く。

『お前ら、クレェ顔してんなぁ（笑）』

健太

『はい。今日は中身の濃い、有意義な練習になりそうなんで……』

兵藤先輩

『ハハハ。確かにそうかもな。

けど、俺がお前らと同じ1年の時、この時期から部活が面白くなってきたな。』

石山先輩
『そうそう、俺も夏休み前までは、ここを辞めてやろうかって、毎日思ってたけどな（笑）』

兵藤先輩は2年生に訊く。

『お前らも、そうだっけ?』

相沢先輩
『はい。うちらも、夏休み前までは辛かったッス。』

大崎先輩
『こいつなんか、毎日退部届けを持ってたんスよ（笑）』

こいつと言われた森谷先輩は、苦笑いしながら話す。

『ルッセーよ。でも夏休みの練習が始まったら、退部届けは何処にあるか分からなくなったんですけどね』

石山先輩
『そろそろ梅ッチが沸騰してくるから、お前ら早く着替えろよ（笑）』

先輩達は、1年生が着替え易いように、全員壁際に位置を移してくれた。

ボクシング部の先輩達は、みんな優しいし面白い。
その点は、1年生全員が思っていた。

先輩達の半分、否3分の1の優しさが梅田先生にあれば、もう少し民主主義的な部活になっていたであろう。

それで、選手が強くなるかは別問題だが……

康平達が、着替えを終えて練習場に入ると、民主主義の心を忘れた梅田先生が、竹刀を片手にウロウロしていた。

沸騰（怒り）の一歩手前だったようだ。
流石は石山先輩だ。梅田先生に怒られたキャリアはダテではない。

梅田先生
『お前ら、今日から新しいパンチの習得に入るから、覚悟しておけ！』

新しいパンチ

梅田先生が話を続ける。

『夏休み期間中は、ロープ（縄跳び）は無しだ。
まず、シャドー４ラウンドをやれ。』

４人は１週間程前から、練習メニューが変わっている。

変わったのはシャドーボクシングなのだが、最初から自由に動いていい事になっている。

足の動きやパンチ、ブロッキングを組み合わせてそれぞれ動く。

あまりスピードはうるさく言われないが、腰を反る事と、パンチを打つ際に肩を回す事は強調して言われている。

１年生がシャドーをしている間、梅田・飯島の両先生は、先輩達の指導の後なので、一息入れる感じで談笑している。

４ラウンドのシャドーが終わった時、再び梅田先生が口を開く。

『お前らは、まだまだ完全ではないが、６・４のバランスとパンチを打つ軸は、少し固まってきた感じだ。
そこで、今日から前の手で打つフックを教える。
片桐は右フック、他の３人は左フックだ。

全員鏡の前に並べ。』

４人は、全員が映る大きな鏡の前に並ぶ。

梅田先生
『そこで、ストレートを打った時のポーズを作れ。』

サウスポーの健太は左ストレート、康平達は右ストレートを伸ばす。

梅田先生
『お前ら、その体制のままで腕だけ戻せ。』

４人は上半身を捻った形になっている。

飯島先生
『大雑把だが、これがフックを打つ前の溜めだ。』

梅田先生
『そこから前の手でフックを打つんだが、まだ打つなよ！
手はそのままで、曲がっている前足の膝を、少し伸ばしてみろ。』

言われた通りに全員が膝を伸ばすと、捻った上半身が元に戻っていく。

飯島先生
『フックの溜めを作った時、もっと腰を反って、もう少し後ろ足を伸ばしてみろ。』

指摘された事を意識して、もう一度繰り返すと、４人の上半身は更に勝手に戻っていく。

梅田先生が話す。

『前の手で打つフック……面倒臭ぇから、今後前の手で打つフックは、単にフックと呼ぶからな。』

更に話を続ける。

『うちの学校のフックは、捻りじゃなく、前の膝を使って打つ。分かったな。』

健太が質問する。

『先生、捻りで打つ方が、強く打てそうな気がするするんですけど……』

梅田先生は、怒る様子でもなく、説明を拒否する。

『今説明すると長くなるから、説明はしない。
追々教えていくから、今は黙って従え。』

健太
『はい、分かりました。』

梅田先生
『何処を使って打つかは、理解できたようだから、次は実際打ってみるぞ。』

フック

梅田先生の話は続く。

『溜めを作った時、フックを打つ方の手は、鏡で自分を見た時、肩の内側にあるのを確認しろ。』

全員鏡を見ながら、手の位置を修正する。

梅田先生

『拳は縦のまま、前の膝を伸ばしながら、少し下から上へ斜め前に突き出せ』

全員、個人差はあるが言われたようにする。

更に梅田先生の話は続く。

『打った後だが、これが結構重要だ。
パンチを打った方の肩で、自分の顎を隠せ。
顔は顎を引いて真っ直ぐ前を向く。
パンチを打たない方の腕は体から離さずしっかりガードする。』

４人は、鏡を見ながら形を作っていく。

梅田先生

『大まかな打ち方はこんな感じだ。打たせながら細かい所を教えるから、フックだけのシャドー５ラウンドやれ。』

ブザーがなり、シャドーが始まる。

飯島先生
『パンチのスピードは、意識するな。この時間は、とにかく形を意識しろ。』

梅田先生
『ゆっくりでいいから、前足の太ももで、持ち上げるような感覚で打て。』

『有馬、拳は縦だぞ。そして、下から上に突き上げるように打て。』

『高田、打つ時のガードをもっとしぼれ。溜めを作った時のバランスは6・4ではなく、前7後ろ3だ。』

『白鳥、お前に左足を曲げるように言ってたのは、このパンチの為だ。もっと意識しろ。』

『片桐、溜めを作った時、前足の向きはもっと左側だぞ。お前のずっとクセだった所だ。この機会に直せ』

2人の先生は、1年生のフォームを細かくチェックしていく。

5ラウンドが過ぎ、サンドバッグ打ちかと思っていた1年生達だっ

たが、練習はここで、一時中断した。

梅田先生
『さっき片桐が、質問したが、今その説明をする。体の捻りで打つのが悪いとは言わないが、捻りで打つ場合、どうしても足が踏ん張ってしまう。相手が動くと打ちにくい。その点、今教えた打ち方はすぐに打ち易い。分かったか？』

健太も納得したようで、

『分かりました。』

大きな声で答える。

飯島先生
『他に質問したい奴は、今の内に、ドンドン吐き出せよ！』

康平
『フックを打つ時、ガードをしぼると凄く窮屈なんですが……』

この質問に飯島先生が答える。

『結論から言うと、窮屈でも我慢しろ。
理由はこうだ。
オーソドックス同士の場合に、左フックは相討ちになり易い。口で言ってもイメージが湧かないと思うから、チョット実演する。

高田、こっちに来い。』

康平が前に出る。

飯島先生
『お前、右ストレートをゆっくり打ってみろ。』

康平が言われた通りに、右ストレートを打つ。

すると飯島先生は、康平の右側に、頭をずらしてよけた。

飯島先生
『お前、そこで左フックをゆっくり打て。』

康平が左フックを打つと、右ストレートをよけた飯島先生が、同時に左フックを打ってきた。

打ちながら康平は理解したようだ。

飯島先生
『これは1つの例だが、他にも相討ちのケースはあるから、打ちにくくても、相手のパンチをもらわない為だ。我慢してガードをしぼれ。』

有馬と白鳥も質問したが、先生達は、熱心に答えていた。

梅田先生

『次は、サンドバッグ打ちだ。ミットもあるから準備しろ！』

強く打て！

サンドバッグを打つ前、梅田先生が話し出す。

『最初のラウンドは、触る感じでいいから、前の膝を使って打つ意識を持て。』

1年生達は、フォームをチェックしながら軽く打つ。

次のラウンド開始前、梅田先生が再び口を開く。

『このラウンドからは、思い切り打つんだ。
但し、2つの点に注意しろ。
顎を引いて、顔は真っ直ぐだ。
そして、ガードはしぼれ』

ラウンド開始のブザーがなり、康平達はサンドバッグにフックを叩き込む。

梅田先生が怒鳴る。

『お前ら、力んでもいいから強く打て。』

飯島先生は、挑発する。

『オメェラのパンチはそんなもんかぁ！』

このラウンドから、2人の先生は、強く打たせる為に色々言ってくる。

時には、困った一言も……

梅田先生
『バッグを俺の顔だと思って、打つんだよ！』

これには、1年生達もどう反応していいか分からなくなったが、申し訳無い振りをして全力で打っていた。

強く打ち始めてから2ラウンドが終わった所で、康平と健太はリングに呼ばれた。

サンドバッグではフックを振り切れないので、打ち終わりのフォームを確認するようだ。

ガードが甘かったり、顔の向きが悪かったりすると、すかさずミットで攻撃される。

おまけに予告なしで空振りさせる時まであった。

サンドバッグとミット打ちが終わったが、その後ストレートだけの形式練習を4ラウンドをした。

梅田先生の話では、フックだけのバランスに偏らないようにする為だそうだ。

こうして、練習が進んでいったが、筋トレの時に新たなメニューが追加された。
首の補強である。

1年生達は、まだ慣れないので、簡単な補強から始まった。
仰向けに寝た姿勢で、頭を起こしながら動かすという簡単なものだったが、繰り返してるうちに、結構辛くなった。

今日の全ての練習が終わった後、再び白鳥が質問する。

『先生、うちの学校のフックは、他の学校のフックと違って下から上に突き上げる軌道なんですが、それは何故ですか？』

最近の白鳥は、本当に積極的だ。
他の奴らが言ってたように、白鳥がもうすぐ辞めるなんて、あり得ない話だ。

梅田先生
『今日教えたフックは、体のどこを使って打つのか言ってみろ。』

白鳥
『前足の太ももです。』

梅田先生
『その通りだが、太ももでパンチを持ち上げた時の、体全体のパワーはどう働いている』

白鳥
『下から上に……！』

梅田先生

『分かったようだな。アッパー気味に打つパンチの軌道は、体全体が生み出す力を効率よく利用する為だ』

飯島先生
『他のスポーツはどうだか知らないが、ボクシングの基本は、あって無いようなものもあるからな（笑）』

梅田先生
『下から上に突き上げるフックの打ち方は、他にもメリットがある』

有馬
『それは何ですか？』

梅田先生は、口を歪め、悪人のように笑いながら、

『いや、今回は説明するのをやめておく。
勿体ぶった方が、お前らの上達が早そうだからな。』

言い出しておきながら、説明を拒否した。

最後に、梅田先生が再び口を開く。

『前の手のフックで、倒す確率はかなり高い。
飯島先生と俺も、フックは倒すパンチとして教えるつもりだ。
今日はもう終わりだ。トットと帰れ！』

1年生達は、今日の少ない余暇時間を惜しむかのように、急いで更衣室に向かっていった。

小さな悪魔達

夏休み2日目、康平は早朝4時に目を覚ます。
暑さで勝手に起きたのではない。
前の日にセットした目覚ましで、意図的に起きたのだ。

これには、海より深く、九×九より簡単な（？）理由があった。
これは、敢えて後で教える事にする。

ジョギングを始めて1ヶ月たったが、康平は奇跡的に、土曜日意外の晴れの日は、毎日走っていた。

これは、強くなりたい気持ちだけで走っているのではない事を断言しておこう。

ジョギングを始めて1週間を過ぎたあたりから、擦れ違う人達から挨拶されるようになったのだ。

新聞配達のアンチャン。

メタボな身体を駆使してジョギングする中年オジサンの小池さん。

毎日散歩する、高校教師を定年退職したオジイサンの山田（元）先生。

この3人は、走る度に毎日逢うので自然に挨拶するようになってい

た。

『お、今日も走っんな！』
〔アンチャン〕

『君もよく続いてるなぁ』
〔小池さん〕

『若いんだから、後悔しないように頑張れよ。』
〔山田（元）先生〕

身体の成長と共に、照れ臭さも増す康平の年頃だが、同級生がいない場合は、時として素直になれる。

康平は大きな声で、挨拶をする。
『おはようございます』

それが毎日続くと、康平も走るのを、辞めにくくなっていた。

本題に戻そう。
なぜ康平は、朝４時から走るようになったのか？

話は前日に遡る。
いつものように、康平はジョギングの為に、朝の５時に起きた。

５時に起きても、準備があるので走り始めるのは、５時２０分頃だ。
最近は、５キロを走るのが定番になっているが、ゆっくりペースなので、家に戻るのが６時頃になる。
家の近くの公園を横切った時、康平に挨拶する奴がいた。
『康平君おはよう！』
近所の小学生達だ。
夏休み恒例のラジオ体操に出ているらしい。
６時半からのハズだが、元気が有り余っているらしく、３０分前から遊んでいるようだ。
そそくさと、通り過ぎた康平だったが、後ろから声が聞こえてうる。
『あの人、走るのオッセ』
『シュンの方が絶対ハエーよな！』
『康平君て、ボクシングやってるんだって！』
『うちの母ちゃん、もうすぐ辞めるだろうって言ってたぜ。』

いつの時代でも、陰口が下手な小学生はいる。

言ってる事は、全て康平に聞こえていた。

子供のホンネは、心に堪えるものだ。

康平は、二度とこんな想いを味わいたくないので、時間をズラして走る事にした。

ラジオ体操が終わってから走るのは、どう考えても困難だ。
奴等がいつ帰るか保証がない。

そこで、朝４時からのジョギングをする羽目になったのだ。

小さな悪魔達によって、康平は、より規則正しい夏休みをおくることになる。

心配する亜樹

夏休みも3日目になるが、康平は今、高校の近くの図書館に向かっていた。

康平の気持ちは、かなり重い。

何故なら、昨日図書館で亜樹と待ち合わせていたのを、康平がすっぽかしたからだ。

理由は、寝坊である。

昨日は、ある事情で朝４時に起きてジョギングをした。

ある事情の説明は、前述したので、ここでは説明しない。

幸い、家の近くの公園を、誰にもあわずに横切る事ができたのだが、安堵のせいか、昼１２時まで眠ってしまった。

亜樹との待ち合わせは１０時、それも、約束したのは康平だ。

慌てて、クラスの連絡網を見ながら亜樹の家に電話したが、誰も出なかった。

せめて誠意だけは見せようと、１３時に待ち合わせの図書館に着いたが、亜樹らしい姿はどこにもいない。

夜に電話しようとしたが、妹と母親に独占されていたので、仕方なく待っているうちに、康平は眠ってしまったのだ。

康平は、沈んだ気持ちで図書館に着いたが、不思議と亜樹は、怒った様子でもなく入口近くのロビーにいた。

亜樹
『おはよう！昨日は寝坊でもしたのかな？』

康平
『…ホント、ゴメン…』

亜樹
『まあ、いいよ。
家に電話来てたみたいだし、図書館にも昼過ぎには来て私を探したようだしね』

康平
『え、何で知ってんの？』

亜樹
『お姉様は、全てお見通しなの。』

康平
『……』

亜樹
『……ぷっ（笑）、嘘よ。
ここの図書館のオバサンが話してくれたの。
あのオバサンを甘く見ない方がいいよ。
1度見た顔は絶対忘れないし、君が昨日私を探した後に、歴史のマンガばっかり見てた事まで教えてくれたんだからね（笑）』

康平
『げっ……マジかよ！』

亜樹

『謝罪会見は、これで終わりね。
今日から夏休みの宿題、1週間で片付けるからね。』

すっぽかしを許してもらったばかりの康平に、反論する権利はなく、
腹を括って勉強机に歩いていった。

宿題を始めてから30分余り、康平は眠りの世界へ足を突っ込んでいた。

亜樹が優しく足を引っ張ってあげる。

『まだ寝るのは早いよ』

更に30分後、今度は字を書きながら眠っていた。
書いている字は、得体が知れない文字になっている。

亜樹

『ちょっとロビーで休憩しない?コーヒーおごるからさ。』

康平

『ん?…あ…悪いな。』

ロビーに着いた亜樹は、缶コーヒーを康平に渡すと、心配そうな顔をして話す。

『康平、何処か具合でも悪いの？』

康平
『いや、そんな事はないよ。』

亜樹
『そうかな？期末テストの少し前から疲れているようなんだけど……』

康平
『気のせいじゃないかな』

亜樹
『それはないわね！
自分で言うのも何だけど、私、結構勘がいいのよ。』

康平
『……』

亜樹は、本気で心配してくれている。

彼女自身が言ってるように、亜樹は勘が鋭い。

下手なゴマカシが通じない事は、康平がよく知っている。

本当の事を言おうか康平は迷っていた。
ジョギング

亜樹の携帯電話

康平
『あの…さぁ』

亜樹
『ん?』

康平
『まだ誰にも言ってないんだけどな。
亜樹には期末テストで世話になったし、本当の事を言うよ。』

康平は、ジョギングに至る経緯を亜樹に全部話した。

亜樹
『なるほどね。健太君達も走ってるのかな?』

康平
『多分…走ってると思う』

亜樹
『多分って、友達同士の会話が少ないじゃないの（笑）』

康平は即座に否定する。
『いや、それはないよ。
ただ、走る事については、皆、何も話さないかもな』

亜樹

『梅ッチが誰にも言うなって言ったから？』

康平
『ンー…うまく言えねぇけど、その後のセリフが気になってると思う…』

亜樹
『何て言ってたの？』

康平
『自分やった事を話す奴で強かったのはいないって事だったな。』

亜樹
『あたしに言っちゃって大丈夫？
話を聞かなかった事にしてあげるよ（笑）』

康平
『いいよ（苦笑）。梅ッチも1人位ならいいって言ってたし……』

亜樹
『あたしも梅ッチの考え方は賛成だな！
自慢したり、二股かける男って虫酸が走るもんね！』

康平
『よく分かるよ（笑）』

亜樹
『それどういう意味（笑）
話は変わるけど、今日も康平は朝5時に起きたの？』

康平
『……いや…4時だよ。』

亜樹
『夏休みなのに、何でそんなに早く起きてんの?』

康平は、朝のラジオ体操に来る小学生達の事を話す。

亜樹は、少し吹き出した後心配するフリをした。

『大丈夫?
小学生より弱いのに、ボクシングなんてやっていけるの（笑）』

康平
『余計なお世話だよ!
町内会のガキって、父兄に筒抜けだから怖ぇーんだよ』

亜樹
『あはは!それは言えてるかも。
でも、そんな生活だったら、また君にすっぽかされそうだしなぁ…
…』

亜樹は少し考えていたが、再び口を開く。

『私、最近携帯持ち始めたのよね。
来れなくなった時、ここに連絡頂戴。
綾香にもまだ教えてないんだから、光栄に思いなさい（笑）』

亜樹はメモ帳に携帯電話の番号を書くと、康平に渡した。

康平
『え、いいのかよ?』

亜樹
『すっぽかされるより、マシだと思うけど。』

康平
『いや…だから反省してるって…』

ロビーに小肥りのオバサンが、ヨタヨタ歩いて来る。

オバサン
『亜樹ちゃん!そろそろ戻んないと、空いてる席を探している人が多くなってきたよ。』

亜樹
『ゴッメーン!すぐ戻るからね。』

オバサンは康平を見て、

『頼り無さそうだけど、性格は良さそうだね（笑）
亜樹ちゃんは、男を寄せ付けないオーラがあって心配してたんだけどね…』

意味深な事をいう。

亜樹
『オバサン何言ってんの！康平、さっさと戻るわよ』

オバサン
『亜樹ちゃんは、誤解され易いけど、いいコだよ！
あと、図書館でマンガばかり見ちゃダメだよ（笑）』

康平も、１度頭を下げてから、急いで勉強机に歩いていった。

反省する梅田先生

図書館での勉強を終えた康平は、少し休んでから部活に向かう。

図書館から学校まで歩いている間、勉強と部活だけの自分の夏休みを振り返ると、一瞬悲しくなったがすぐに取り消した。

去年までの、グータラな夏休みを懐かしむ気持ちが無いでもないが、やはり女の子の存在は大きい。

しかも、亜樹はカッコイイ系の美人である。

第三者がいる時は、毒舌がマックスになるが、２人の時は結構優しい。

康平を弟扱いしているようにも感じるが、康平も美人に弱い典型的な男だったので、今は問題ないようだ。

ボクシング場に着いて、梅田先生の顔を見た途端、康平の浮かれた気持ちは、すぐに現実へ引き戻された。

その時康平は、あの恐い顔を、一種の才能のように感じていた。

今日も、左フックを中心に練習するのだろうと思っていたが、梅田先生から意外な言葉が発せられた。

『今日は、前の手のアッパーとボディーブローを教えるぞ！

全員鏡の前に並べ。』

アッパーとは、下から突き上げるパンチで、ボディーブローは、相手の腹部を狙うパンチだ。

並んだ1年生達に、梅田先生が言う。

『フックの溜めを作ってみろ。』

2日間重点的にフックを練習したせいか、4人はスムーズに形を作る。

梅田先生

『ボディーブローとアッパーも、前の膝を使うのは、フックとほぼ同じだ。まずボディーブローだが、パンチを打つ方の肘を前に突き出すように打つ。

その時は、パンチを打つの方の腰骨を、少し前にスライドさせろ。』

康平達は、言葉だけでは出来るハズもなく、ボディーブローの素振りを5ラウンド程やって、何とかコツだけは掴んだ。

梅田先生

『次にアッパーだが、ナックルを返しながら、パンチを打つ方の肘を、ヘソの辺りに横滑りさせるように打ってみろ。』

ナックルを返すとは、拳を捻って、手の甲を相手に向ける事のようだ。

全員、ボディーブローの時より、覚え易かったようで、3ラウンドの素振りで終わった。

飯島先生
『これからサンドバッグ打ちだが、アッパーは打つなよ。手首を痛めるからな。』

梅田先生
『ボディーブローは強く打てよ。
意識するだけでいいが、顔面を狙うフックとボディーブローは同じ体勢から打て！』

『意識するだけでいい』

と、自分から言っておきながら、3ラウンドを過ぎた辺りから、同じ体勢から打たないと罵声が飛んでくる。

気の短い人から教わる人間は、本当に気の毒である。

梅田先生
『同じ姿勢から打てと言っただろうが（怒）』

おまけに、言ってる意味まで変わってしまっていた。

理不尽大王に反抗できる1年生は、誰もいるハズがない。
同じ体勢から打つのは意識どころではなく、いつしか死守すべき命令になっていた。

練習が終わった後、梅田先生も少し反省したようだった。

『まぁ…その…なんだ、俺も少し（？）気が短い所もあるから、今日のところは許せ。
…お前ら、怒られ易い顔をしているから、ボクシングは強くなるぞ。』

最後のフォローは、何だか解らなかったが、一応謝罪して職員室に向かって行った。

飯島先生が1年生達に語りかける。

『梅田先生は、早く同じ体勢から打たせたいんだよ。
同じ体勢から3種類のパンチが打てれば、相手にとっては脅威だからな。』

2人の見学者

8月に入り、石山先輩と兵藤先輩は、インターハイ全国大会に向けて、調整に入っているようだ。

練習も早く切り上げているようで、更衣室でも1年生達と逢う事はなかった。

康平と健太には、期待している事があった。

2人の先輩の試合には、梅田・飯島の両先生がついてゆくので、部活が休みになるかも知れないのだ。

今日の練習には、なぜか見学者が2人いた。

1人は、色が白く鋭い目付きの男でガッシリした体型である。

もう1人は、かなり色が黒く目が大きいのが印象的だった。

梅田先生が、2人を紹介する。

『今日、見学に来ている2人は、お前らの先輩だ。
色の白い方が山本賢治。
黒い方が内海俊也だ。
この2人は、今も大学でボクシングをやっていて、大学のリーグ戦にも出ているベテランだ。』

色の白い山本が、先に先生へ口を開く。

『色々忙しくて、石山と兵藤のスパーの相手をしてやれなくて残念ですね。』

色の黒い内海が、次に話す

『先生！
俺達を色が白い黒いで紹介しないで下さいよ（笑）』

梅田先生は、苦笑いをしながら言った。

『お前達にお世辞を言っても、しょうがねぇだろ。
まあ、許せ。』

先生も、卒業生には多少甘いようだ。

2人の見学者の前で練習する1年生達は、緊張しながら練習を始める。

飯島先生
『2人とも、お前らが下手なのは知ってっから、そんなに硬くなんなよ（笑）』

４人は、少し緊張が解れたようで、練習メニューを進めていった。

練習が終わり、梅田先生が、見学していた2人に話し掛ける。

『まあ、こんな感じだが、来週からやれそうか?』

山本
『まぁ、大丈夫だとは思います。』

内海
『何とかなると思います。
でも俺達1年の時より、上手いんじゃないッスか?』

2人の話を聞いた梅田先生は、1年生達に言う。

『この2人は、大学のリーグ戦も終わって今は落ち着いているから、来週から練習に参加してくれる。
楽しみにしとけ。』

康平達は、少し複雑な表情になった。

飯島先生
『おいおい、お前らの練習に付き合ってくれるんだから、挨拶位しとけ（笑）』

『よ…よろしくお願いします！』

日曜日の予定

帰り道、４人の１年生は駅に向かっている。

有馬が康平と健太に聞く。

『明日は、やっと休みだけどよ。お前ら何か予定あんの？』

健太

『特にねぇけど……康平、お前は？』

康平

『…俺もないかな？』

有馬

『康平は、山口亜樹と図書館デート…ってか（笑）』

康平

『え？』

有馬

『お前らは、チョットとした噂だぜ。

学校の近くの図書館だったら、誰かしらいるからな』

康平

『…デート…ってわけじゃねぇけどよ……』

有馬

『カラカウつもりねぇから安心しろって（笑）

山口は、見た目よりいい奴だって、健太から聞いてるからな。』

有馬が話を続ける。

『学年2位から教わると、やっぱ勉強もはかどるんか?』

康平

『学年2位?』

有馬

『あれ!

康平は、何も知らねぇんだな。

あいつ、中間と期末も2番だぜ。』

健太

『康平は、噂とか流行りには、昔っから鈍感だったからな(笑)』

康平

『亜樹とは、…その…何だろ……』

有馬

『別に答えなくてイイって(笑)

山口は美人だけど、俺のタイプじゃねぇしな!

それに、俺は2番よりも上の1番から教わってるからよ。テスト前だけだけどな(笑)』

白鳥

『よ…よせよ。』

有馬
『別にいいじゃねぇか。
俺は中間テストん時、赤点とらなきゃイイって、勉強しなかったんだけど、そしたら点数がマジヤバくてな、期末ん時、白鳥から教えてもらったんだよな。
まぁ、おかげで追試は免れたってわけさ。
教える奴が、男ってのが残念だけどな（笑）』

更に有馬が話す。

『お前ら明日、予定がねえんだったら、うちの方へ遊び来いよ。
オンボロなゲーセンがあってさ、ゲームも古いけど、１０円や３０円で遊べるんだぜ。』

健太が飛びつく。
『安いな。古いのって、最近あまり見ないからな。
康平も行くだろ？』

康平
『行くけど、白鳥は？』

白鳥
『…ん…ちょっと…』

有馬
『俺がさっき白鳥に聞いたら、用事があるってさ。
白鳥、お前そろそろモジモジ君は卒業した方がいいぞ（笑）』

駅に付いて、４人は２組に別れていった。

家に着いた康平は、メモ用紙を取り出す。

亜樹の携帯電話の番号だ。
明日、図書館に行く約束はしてない。
連絡した方がいいのか散々迷ったが、思い切って電話をすることにした。

直接話すのと違って、電話だと緊張する奴がいる。
康平もその１人だった。

メモを見ながら電話をかける。

亜樹
【はい！】

康平が緊張のあまり、思わずいつもの電話のセリフを言ってしまった。

【山口さんのお宅でしょうか？】

亜樹
【ぷっ。もしかして康平？
携帯にお宅でしょうかは無いんじゃないの（笑）】

康平
【携帯に電話すんの慣れてねぇんだよ（苦笑）
明日、用事が……いや、ボクシング部の奴らと遊びに行くからさ…
図書館は行かないって、一応連絡しといた方がいいと思って……】

亜樹
【ワザワザ理由まで言わなくてもいいよ（笑）
あたしも、夏休みの日曜日は勉強休む事にしてるのよね。
ちなみに明日、図書館は休みだよ（笑）】

翌日の日曜日。

電車に乗った康平と健太は、有馬との待ち合わせの駅に向かっている。

康平
『有馬の家って、確か学校の駅から7駅目だったよな。
何で3駅目で待ち合わせなんだ？』

健太
『まぁいいんじゃねぇか！
金も安くなるんだしさ。』

康平
『そうだな。』

有馬の家は、学校から下りで7駅目である。
7駅分の往復の出費を覚悟していたが、3駅分に減ったのだから、康平も深く考える気はないようだ。
康平達は、学校から上りで3駅目だ。学校までの分は、定期券があるのでタダである。

待ち合わせの駅に着いた2人は、有馬を探そうとしたが、本人が改札口のそばにいた為、その必要はなかった。

有馬

『よう。
これから行くのは、やっぱゲーセンて言えねぇかもよ（笑）。
俺とダチだけが知ってる場所なんだから、誰にも言うなよ。』

康平と健太は、駅からすぐ小道に入って有馬についていくが、右に曲がった後左へ曲がり、突き当たりを更に左に行き……
有馬がいなければ、２度と行けないような、入り組んだ道だ。

有馬
『やっと着いたぜ。』

見ると、ゲーセンらしきものは見当たらない。

有馬
『お前らどこ見てんだよ。あそこだ。』

有馬の指差した方向を見ると、小さい看板に〈ゲーム〉とマジックで書かれている古い木造の家があった。

中に入ってみると、昔の機械的な音のするゲームが、１０台ある。
１０円ゲームが３台で、後の７台は３０円だ。

奥にファミコンルームと紙にマジックで書かれた部屋があった。
２畳のタタミの部屋にファミコンがあり、傍に、
「楽しんだ方は、お気持ちを入れて下さい」
と、書かれたお賽銭箱があった。

『ファミコンは、畳の上でやらなきゃいかん。』

というのが、オーナーのポリシーらしかった。

また貼り紙で、
「ランチメニュー」
と書いてあり、醤油・味噌・塩ラーメンの3種類があって、どれも１７０円だ。

健太
『安いな。』

有馬
『インスタントラーメンを作っただけなんだけどな。
ただ、今日は日曜日だから１２時２０分過ぎには注文するなよ（笑）』

康平が有馬に聞くと、その時間からテレビで「のど自慢」が始まるので、その時に注文すると、オーナーの機嫌が悪くなるようだ。

平日は１２時４５分からは注文出来ないらしい。

有馬がその時間に注文した時、テレビで見逃せないシーンだったらしく、オーナーから台所に呼ばれて自分でラーメンを作らされたそうだ。

昼時に注文できないランチメニュー……何ともフザケタ感じだが、オーナーは年金で暮らせるので、ゲーセンは趣味でやってる感じである。

オーナーの婆ちゃんが出て来た。

『おや、お前にしてはマトモな連れだねぇ。』

有馬

『何言ってんだよ。俺の連れはみんなマトモだぜ（笑）』

婆ちゃん

『まぁそういう事にしといてやるが、私から見るとマトモじゃない連れも来たようだけどねぇ。』

有馬の友達

婆ちゃんにつられて外を見ると、１００m先からもヤンキーと分かるような、柄の悪い連中が5人こっちに向かってくる。

康平と健太にとって、あまり関わりたくない連中だ。

有馬
『心配すんな。顔と柄は悪いが、根はいい連中だからよ（笑）』

『おいタケ！みんな聞こえてるぞ！』

『タケにしてはマトモな連れだな（笑）』

有馬は名前を猛（タケル）というが、友達からはタケと呼ばれてるらしい。

有馬
『ッセーよ。それ婆ちゃんにも言われたんだよ（笑）
コイツら、ボクシング部の同期だから、ヨロシクな』

柄の悪い5人の中に、金髪でサングラスしてたり、タトゥーの入っている奴もいるが、この2人は高校に行ってないらしい。

金髪でサングラスをかけた奴が、康平に話し掛ける。

『タケは、真面目にボクシングやってんのか？』

康平
『あ…あぁ、有馬も頑張ってるよ。』

次に、腕にタトゥーの入った奴が話す。

『ヘタレのコイツが、どこまで続くか、賭けをしてたんだが、9月まで持ちそうなんだな?』

健太
『今、やっと練習が面白くなってきたから、俺達ずっと続けると思うけど…』

タトゥーの奴
『あ～ぁ!タケ、お前の1人勝ちだな（苦笑）』

別の奴が、康平達に説明する。

『俺達、賭けをしてたんだよ。
タケがいつ部活を辞めるかってな（笑）
タケ以外は、9月まで辞める方に賭けてたんだけどな（笑）』

康平と健太
『……』

有馬

『あんまり余計な事言うなよな。
それに、コイツらゲームしに来たんだからよ。』

皆、好きなテーブルについてゲームを始めた。

何故か全員、３０円のゲーム台にしか座っていない。

健太
『有馬。１０円ゲームも楽しめそうだけど……？』

有馬
『言ってなかったけど、１０円ゲームには地雷があるからな。』

康平
『地雷？』

金髪サングラスの奴
『やってしまうと、逆にイラつくぜ（笑）
まぁ、１０円を捨てるつもりで１回位はやっていいかもな。』

好奇心旺盛な健太が、１０円をゲーム機に入れる。

昔流行ったシューティングで、つまらなくもないゲームだ。

３面目までクリアし、健太もエンジンがかかったらしく、気合いを入れ直した途端、画面がプツッと消えてしまった。

不思議な顔をした康平と健太に、タトゥーの奴が話し掛ける。

『それなぁ、ある程度やると、電源が落ちるんだよ。
こんなゲーム機おいてるなんて、ヒデェ店だろ（笑）』

婆ちゃん
『うるさい！
これでも１０円以上は楽しませてやってるんだからね』

有馬
『他の１０円ゲームも同じだから気をつけろよ（笑）
それに、ファミコンルームは、もっと勧められねぇけどな。』

康平
『え、何で？』

有馬
『あそこには、ロープレしかねぇんだよ。
ロープレって、始めたら最低２時間はやるだろ？
終わった時、お賽銭箱に入れないと婆ちゃんのイヤミがあっからよ。
相場は、１時間１００円だな（笑）』

婆ちゃん
『お前ら、営業妨害甚だしいね！』

午後１時近くまで、ゲームもそれなりに楽しんだが、有馬が康平達

に口を開く。

『俺からゲームに誘ってなんだが、今から俺に付き合わないか？』

康平
『どうしたんだ？』

有馬
『理由は後で話すからさ』

健太
『まぁいいか。ゲームはここにくれば出来るからな』

康平
『わかった！有馬に付き合うよ。』

金髪サングラス
『なんだお前ら帰るのか？
もうすぐ「のど自慢」も終わっから、ラーメン頼めるのによ。』

有馬
『ワリィな！
今日はチョット用事があっからよ。』

タトゥー
『そういえば、タケは最近夜１０時には寝てるんだよな？
お前らもそうなん？』

健太

『まぁ、俺らも疲れて同じ位の時間に寝てるけどね』

康平
『そうそう、俺もだよ。』

金髪サングラス
『そんなもんなんか？
まぁ俺達、部活ってもんに程遠い人種だからよ（笑）』

タトゥー
『まぁ、タケのダチは俺達のダチってわけだから、試合の時は応援行くから頑張れよ。』

他の奴らも、３人を応援してくれるようだ。

有馬の友達は、外見は凄いが、話してみると結構いい奴らだ。

そいつらと別れて、康平と健太は、有馬に付いてゲーセンを後にした。

ゲーセンを出て、有馬の後を康平達はついていく。

健太
『有馬、どんな用事なのか少しでもいいから教えてくんねぇか？』

有馬
『まぁ、深刻な事じゃねぇのは確かだよ。
行きゃ分かるからさ。』

言われるまま、しばらく複雑な道を歩いたが、有馬の足が止まった。
どうやら目的地に着いたようだ。

有馬
『ここで昼メシ買おうぜ』

康平と健太が見ると、
「スーパーまるちゃん」
と、大きな看板のあるスーパーだった。

そこへ入っていく有馬に、そのままついてゆく2人だったが、何やら惣菜コーナーから、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

『今日は揚げたてのクリームコロッケですよ～！
お昼がまだだったら、今お買い得ですよ～！』

白鳥の声だ。

彼は、高いテンションで、赤い顔を更に真っ赤に染めながら、学校でも聞いた事のない大声で働いていた。

康平が小声で有馬に訊く。

『あいつ、バイトでもしてんの？』

有馬

『事情は後から話すからさ、コロッケ買いに行こうぜ（笑）』

有馬は、

『1人1個ずつな。』

と、勝手に決めつけた後、少し大きめの声で、

『店員さん、コロッケ3つ欲しいな。』

と、後ろから白鳥に話し掛ける。

振り向きながら、白鳥は、

『はい、どうもアリガ……とうございました。』

動揺しながらも、3つのコロッケを慣れた手つきで、パックに詰めていた。

有馬の注文のおかげで、２８０円の大きなクリームコロッケを買う事になった3人は、それに小さなお握りを1つ加えたアンバランスな昼食になってしまった。

スーパーの隣にある小さな公園のベンチに座って、3人は、主食（？）のクリームコロッケを食べていた。

健太
『有馬、今度クリームコロッケを買う時は、値段を見てから買おうぜ（苦笑）』

有馬は素直に謝る。

『ワリィ、ワリィ。
あんなに高いとは思わなくてさ。』

康平
『ところで、白鳥は何であそこで働いてんの?』

有馬
『白鳥は、隣の県からこっちに来て、叔父さんちから学校に通ってるのは、知ってるよな?』

健太
『あぁ。』

有馬
『あのスーパーは、その叔父さんが経営してるんだ』
有馬が大きく深呼吸した後、続けて話す。
『いいか！今からイッキに話すからな（笑）。
日曜日の白鳥は、午後2時まで、あのスーパーでタダで働いているんだ。
自分から勧んでだぜ。
いつもお世話になってる叔父さんに、少しでもお礼がしたいんだってさ。
それに……！』

有馬の視線と表情が変わったので、康平と健太はそれに釣られて後ろを振り向くと、スーパーの服を着た５０代位の男がいた。

『俺が、その叔父さんだよ（笑）』
叔父さん
『俺は、手伝わなくていいって、翔（白鳥）に何度も言ったんだけどな（苦笑）
確か、君は同じボクシング部の有馬君だっけ？』

有馬
『あ、はい。前にお店でお会いしました。』

叔父さん
『そして、どっちが高田君と片桐君かな?』

康平
『!!!!!』

健太
『何で俺達の事を知ってるですか?
あ…、俺が片桐ですけど』

叔父さん
『じゃあ、そっちが高田君だね。
翔は、俺の家でも大人しいコでな。
まぁ遠慮してるのもあると思うが、ボクシング部の事だけは楽しそうに話すんだよ。
それで、会った事がない君達の名前を知ってしまったわけだ(笑)』

白鳥の事情

叔父さんの話は更に続く。

『有馬君は、翔から聞いているみたいだし、片桐君と高田君も翔が信用してるみたいだから教えるが、翔は小さい頃、お父さんを亡くしているんだ。

その上、お母さんは体が弱い。

その為、経済的に苦しくてな、3年位前までは、本当に大変そうだった。

俺は婿養子だから、あの家族に何もしてやれなかったから、俺も辛かったんだがな……

ただ、翔には2人の兄貴がいて、中卒だが働き始めたら、少しは楽になったようだが。

2人の兄さんは、翔だけでも高校に行かせたいって、頑張って働いてお金を貯めていたんだよ。』

康平と健太

『……』

叔父さん

『それに、翔には学校の先生になりたいっていう気持ちがあってね。

それには、大学を卒業しなければならないから、翔も諦めていたんだが、翔の中学の担任……確か加納先生と言ったな。

その加納先生の薦めで、永山高校に入学したんだ。』

健太
『けど、白鳥は他の県から来ましたよね。
地元の高校だと、何か不都合でもあったんですか?』

叔父さん
『翔の地元だと進学校は、近くにもあったが私立だったんだ。
少し離れた所にも、公立の進学校はあったが、ここにはいつも全国
レベルが出てる、強いボクシング部がある。』

康平
『ボクシング部って、何か大学と関係あるんですか?』

叔父さん
『ハハハ。君は何にも知らないんだな。
ボクシングの全国大会で、いい成績を残すと、大学推薦の道がある
んだよ。
それも、いい条件でな。

説明している俺も、最近知ったんだけどね（笑）

去年の夏に、翔の兄貴2人と加納先生が、翔が高校に入ったら、こ
こに下宿させて下さいってワザワザお願いしにきたんだ。

俺が知ったのはその時だな。』

康平
『俺はてっきり、イジメか何かだと思ってたんですよ。』

有馬
『俺も最初は思ったけど、アイツ、金がネェからカツアゲされる心配もねぇしな（笑）』

叔父さん
『そういえば、有馬君と翔が店で話しているのを見たうちの店員が、

「翔君が、目付きの悪いコに絡まれてる」

って、血相変えて報告しにきた時は、俺もビックリして駆け付けたんだよ（笑）』

有馬
『その時ヒデェんだぜ。

「翔にカツアゲしても何もないから帰ってくれ」

だってさ（苦笑）』

叔父さん
『ごめんな！あの時は初対面だったからな（笑）

君達も頑張っていると思うが、翔も頑張ってるよ。
学校から帰ってからは、すぐに勉強するし、休みの日にはお店を手伝ってくれるしさ。

うちの女房も、翔の事は気に入ってるみたいだしな。

それに最近は、朝5時に起きて……』

健太
『叔父さん！』

叔父さん
『ん？』

健太
『糸屑があると思ったら、俺の見間違いでした。』

叔父さん
『……！
ああそうか。誰にも言わない事だったんだな（笑）』

スーパーの入口から、声が聞こえる。

『あんた、レジが混んで大変だよ。
翔君も終われないじゃないか（怒）』

叔父さん
『こりゃまずいな。
お、そうだ！
俺のオゴリで、お前らにジュースとおにぎり1つずつだ。
さっき翔が、２８０円のクリームコロッケを3つも買ったって、心配していたようだからな（笑）』

3人
『有難うございます。』

叔父さんは、入口の奥さんらしい人に急かされ、急いでレジに向かっていった。

有馬
『俺がお前らをここに誘ったのは、白鳥の事情を知って欲しくてさ。アイツ、モジモジ君だろ。このままだと、お前らも知らないで3年間終わりそうだったからさ（笑）
迷惑だったか？』

康平
『いや、そんな事ないよ』

健太
『そうそう、迷惑なのはクリームコロッケくれぇなもんだよな（笑）』

有馬
『しつけぇぞ（苦笑）
白鳥は、自分の事が話題になるのを嫌がるから、トットとゲーセンに戻ろうぜ』

康平
『白鳥を待たなくていいのかよ？』

有馬
『構わねぇよ。明日白鳥に聞かれたら、ここのクリームコロッケが食べたかったって言えばいいしさ（笑）』

健太
『どっちがしつけぇんだよ、まったく！』

贅沢な練習相手

月曜日、２人の大学生を交えての練習が始まった。

色の白い山本（賢治）さんは、背は低いが鋭い目付きとガッシリした体型で、いかにも格闘技をしているイメージがある。
ノースリーブのＴシャツから出ている、筋肉の隆起した太い腕を見ると、対戦相手を、憂鬱な気分にさせそうだ。

色が黒い内海（俊也）さんは、大きな目をしていて、格闘技よりも、サマースポーツが似合いそうな感じの人だ。
山本さんより背が高くてスリムだが、肩甲骨あたりから肩にかけて盛り上がっている筋肉は、Ｔシャツ越しからでもよく分かる。

シャドーボクシングからこの日の練習は始まった。

２人のシャドーは、ゆっくりだがスムーズな動きで、一つ一つの動作は、何度も実戦で使ってきたような感じがする。

時折みせる普通に打つパンチは、肩や腰のキレで打つようで、楽な感じで出しているのだが、これがまた速い。

そして、その打つパンチが全くブレないので、パンチのパワーは、全て拳に集中してるようだ。

レベルが段違いに上の人間を見ると、ごく僅かの人を除き、大抵はブルーになるものだ。

４人の１年生達は、残念ながら大抵の人間であり、まして、今日から練習の相手をしてもらう予定だから、より不安な気持ちでシャドーをしていた。

４人の気持ちなどはお構い無しに、無情にもラウンドは進んでいく。

梅田先生
『有馬、ヘッドギアとカップ、マッピを付けて、お前からリングに上がれ！』

山本さんは、既にリングに上がっていて、肩を動かしながら中を歩いている。

有馬は、急いで準備をしてリングに入ろうとしたが、その際にロープに２段目に足を引っ掛けて、転びそうになっていた。

ビビっている有馬の心情を察して……、というより、笑う余裕のない１年生達は黙って見ている。

ラウンド開始のブザーが鳴ったが、お互いパンチがないまま２０秒が経つ。

梅田先生
『どうした有馬、ビビってんじゃねぇぞ！

パンチ出してみろ（怒）』

堪らず有馬はジャブを打った。

しかし、顎が上がり、反対の手はガードもせず下がりっぱなしだ。
おまけにバランスも崩れている。

梅田先生の怒号が響く。

『テメェ、今まで何やってきたんだよ（怒）
空振りミットを思い出すんだよ（怒）』

怒号が効いたのか、有馬は、離れ過ぎて届かなかったが、ミットで打つ時と同じようなジャブを1発打った。

すると、梅田先生が別人のように褒めた。

『ようし、有馬その感じだ。もう少し近くから、習ったパンチをもっと出せ。』

褒められると調子が出るのは、有馬だけではないと思うが、彼はこの一言をキッカケに多くのパンチを出していった。

打ったパンチは、空振りだけだったが、梅田先生はご機嫌だ。

『いいぞ！
次のラウンドは、山本が打ってくるかも知れんが、同じように打てよ』

有馬は開き直ったようで、山本さん相手に空振りを繰り返していった。

時折、ブロックの上からだが、山本さんのパンチを打たれて固まってしまうシーンがあったが、すぐに持ち直してパンチを打っていた。

山本さんは、かなり手加減してるようだが、結局有馬は、3ラウンド相手をしてもらった。

次は白鳥の番だが、その前に梅田先生が話す。

『山本と内海は、アマチュアの日本ランカーだ。
お前らみたいな下手くそには、贅沢な練習相手だが、お前らは、遠慮しないでドンドン打っていけ。
但し、練習通りのパンチだぞ。』

戦意喪失？

梅田先生の話の後、すぐに白鳥がリングに入った。

相手は、有馬と同じく山本さんだ。
山本さんも小柄だが、白鳥はもっと背が低く１６０？位の身長である。

白鳥は、ガードは固いが踏み込みは悪く、相手に近づくまでパンチを出さないので、梅田先生の罵声を浴びていたが、時折打つ左フックは、結構強そうだ。

次は健太の番だが、相手は内海さんだ。

健太は、意外と開き直っているようで、内海さんに対して積極的にパンチを出す。

サウスポーからの左ストレートは、特に思い切りがいい。
ただ、右足が外側に開く癖はまだ直っていない為か、よくバランスを崩していた。

最後は康平だったが、相手は健太と同様に内海さんだ。

ラウンド開始早々、ブロックの上からだが、内海さんの右ストレートを浴びた。

重いというより、シビれるような衝撃がある。

この一発で、康平はビビってしまった。

体が萎縮し、怯える目で内海さんを見る。

内海さんは手加減してくれているので、あまりパンチは出さないが、いつでもパンチを打てる体勢で構えている。

（相手が次に何を打ってくるか？）

それぱかり考えている康平は、全くパンチを出さない。

『パ・ン・チ・を・だ・す・ん・だ・よ』

珍しく、飯島先生からも罵声が飛ぶ。

今の康平にとって、周りの声は、遥か遠くの方から聞こえてくるような気がしていた。

内海さんが、軽い左ジャブを打つ。

当てるつもりもなく、ただ距離を測る為に打ったのだが、その時康平は、下を向いてしまった。

『ストーップ！』

梅田先生が叫ぶ。
そして、ありったけの声で怒鳴った。

『バカヤロー！
ボクシングは、下を向いたら終わりなんだよ（怒）
今度下向いたら承知しねぇぞ。』

その後再開したが、一度怯えてしまった心をを立て直すのは容易ではない。

康平は、無理矢理パンチを3発程出したが、手と足がバラバラで、おまけに力みまくっていた。

……そして、内海さんの軽い左ジャブで、再び下を向いてしまった……

『やめだヤメ！
高田は戦意喪失で失格負けだ。
内海、もうリングから出ていいぞ！』

梅田先生は、康平を怒るわけでもなく、諦めたような感じで内海さ

んに話している。

その後のサンドバッグ打ちで、康平以外の3人は、梅田・飯島の両先生からアドバイスを受けていた。

康平は、やりきれない思いをサンドバッグにぶつけ、インターバルの間も全力で打っていた。

この日の練習が終わり、梅田先生が全員を呼ぶ。

『石山と兵藤の試合の為、明日から俺と飯島先生は部活に来ない。だが学校から許可をもらって、部活はやっていいことになった。俺達が帰ってくるまで、内海と山本が特別コーチだ。練習時間は、今日と同じだからな』

『高田、チョット来い』

梅田先生が、着替えようとする康平を呼び止めた。

『ボクシングはな、確かに怖いが怯えたら終わりなんだよ。リングじゃ誰も助けてくんねぇからな。悔しかったら、次は、ションベンちびってもいいからパンチを打て！分かったな？』

康平は、大きな声ではないが、腹の底から返事をした。

映画の誘い

帰り道、1年生達は一緒に駅まで歩いていた。

健太
『明日から休みだと思ってたんだけどな……』

有馬
『なんだよ、お前、本気で期待してたんか？
俺は、内海さんと山本さんが見学に来た時から怪しいと思ってたけどな（笑）』

健太
『俺も薄々感じてたけどさ、せめて1日や2日は、休みをくれてもバチは当たらねぇと思うんだけどよ。』

有馬
『ムリムリ、梅ッチは俺達に嫌がらせする為だったら、骨身を惜しまないからよ。』

健太
『ワーってるってそんなこと（苦笑）
話は変わっけど、俺、風呂場の鏡の前で、自分の体をマジマジ見ちゃうんだよなぁ（笑）』

康平も、落ち込んでいるのがバレないように、会話に参加する。

『俺もよく見るよ（笑）
肩や腕に筋肉ついてきたんだよな。』

有馬
『そうそう。それに、腹筋もハッキリ割れてきたしよ。
白鳥、オメェもゼッテェみてるよな。』

白鳥
『お、俺は……』

健太
『皆、自分の体を見てんだからさ、恥ずかしがらずに正直に言っていいんだぜ』

白鳥
『け、結構見てるかも…』

有馬
『ハハハ！
白鳥の顔が真っ赤だぜ。
男に対して、恥ずかしがると、誤解されっぞ（笑）』

康平
『実際、白鳥の体つきが一番変わったよ。
前は、プヨプヨだったけど、今は少しゴツいもんな』

健太
『男の同性愛者って、ゴツいのが多いから……
まぁ、白鳥も気をつけろよ（笑）』

白鳥
『そ、そんなんじゃねぇよ。』

今日は妙に白鳥がいじられていた。

家に着いた康平は、早速夕飯を食べて、風呂に入った後、鏡の前で上半身裸になる。

前から見ると、腹筋が割れて……というより、筋肉が6つにわかれて小さく盛り上がっている感じだ。
そして、肩の部分が意外と大きい。

体の向きを変えて横から見ると、体の割に、腕が太く見える。

康平は、体の向きを変えながら、何度も自分の体を見ていた。

『兄貴、頼むから、サッサと部屋に戻ってくんない。
こっちが恥ずかしいからさぁ（苦笑）』

2つ年下の妹の真緒が、呆れた顔をして立っていた。

『ウルセーよ！』

康平は、風呂場の鍵を掛けていなかった事を後悔しながら、上着を持って、急いで2階の部屋に戻っていった。

1人になった康平は、練習の時を思い出して、少し暗い気持ちになる。

ゲームをして、気分転換しようとしたが、やり慣れている物ばかりだったせいか、セットしただけで始めるまでには至らなかった。

明日の午前中は、勉強する気分になれそうにないので、亜樹の携帯に電話した。

亜樹
【もしもし、あっ、康平ね！
チョット待って！
家の電話、今、誰も使っていないみたいだから、家に直接かけてみて。】

康平は、亜樹の家に電話を掛け直した。

亜樹
【あたしも、康平に用があったんだ。話長くなりそうだから、家に掛け直してもらったのよ。ゴメンね。
でも、普通の電話から携帯に掛けると、料金がかかるからね（笑）】

亜樹は、お高い外見と矛盾して、しっかりしている……というより、妙にオバサン臭い所がある。

康平は、口には出さないが内心可笑しくなった。

康平
【俺の用件は短いから、先でいいかな？
明日用事があって、図書館には行けそうにねぇんだよな。出来の悪い生徒がいなくて、ホッとすると思うけど（笑）】

亜樹
【そんな事ないよ。ケチつける生徒がいないと、結構寂しくなるんだよね（笑）】

康平
【かなわねぇよ（苦笑）
ところで、亜樹の用件て何？】

亜樹
【そうそう、日曜日って、ボクシング部は休みだよね？】

康平
【そうだけど。】

亜樹
【綾香が映画のチケットを４枚、兄貴からもらったらしくてさ、日曜日に康平と健太君を誘ってみようって、綾香が言い出したのよね。でも、綾香って結構内気なんだ。】

康平
【へぇ～】

亜樹
【ニッブいわねぇ！
あたしと康平経由で、健太君を誘うのよ。】

康平
【あぁ、じゃあ後から健太に電話してみるよ。
それと、俺の事は訊かないのか？】

亜樹
【あ、すっかり忘れてたけど行くんでしょ？】

康平
【ま、まぁな。……そういえば夏休み前に、内海と駅まで帰る時があってさ……】

亜樹
【随分前の話ねぇ……！
あぁ、綾香から聞いてるわよ。
何で今話そうとしたの？】

康平
【あ…いや…何となくだよ…】

亜樹
【ぷっ！
君って、秘密を持てないタイプなんだね（笑）
ホント詐欺には気を付けてね。】

軽い罵り合いをした後、最後に亜樹が言った。

【康平は、少し落ち込んでいるようだけど、先は長いんだから、気にしないで頑張んなよ。】

亜樹の勘の鋭さに、改めて舌を巻く康平だった。

亜樹との電話の後、すぐに健太に連絡をとったが、彼は2つ返事で了解した。

次の日の朝、康平はいつも通りに4時に起きる。

普段なら5?位のジョギングなのだが、昨日の悔しさを思い出して、もう少し距離を延ばす事にした。

どちらかというと、オットリしている康平だが、怯える・ビビる等の罵声を浴びると、さすがに男としてのプライドを傷つけられるようだ。

今日は、7?程走って朝のランニングを終えた。

今日の部活までの時間は、まだたっぷりあるので、どうしようか康平は迷う。

夏休みになってから、部活と図書館での勉強が、主な日課になってしまった康平は、何もやる事が思い付かず、結局いつもの図書館へ行く事にした。

『康平、チョット待ちなさい。
今日は、用事があって図書館には行かないんじゃないの？』

康平
『え、何で知ってんの？』

母さん
『それは置いといて、これから図書館へ行くんだったら、今おにぎり作ってあげるからね。』

康平の母さんが台所に走っていく。

ボクシング部に入った頃は、あまり賛成していなかったが、休みの日に図書館へ勉強しに行く康平を見て、最近は何気に協力的だ。

母さん
『昨日の電話は女の子でしょ？
一緒に勉強してるようね。
何なら、家に遊びに連れて来なさいよ（笑）』

康平は、慌てて言い返す。
『そ、そんなんじゃねぇよ』

母さん
『家の電話、居間の傍だから結構筒抜けなのよね。
会話を聞かれたくなかったら、次のテストの成績を、２０番以上あげなさい。そうしたら、携帯買ってあげるから（笑）』

康平
『ホントだな？

必ず買ってよね！』

母さん
『お父さんにも言っておくからね。
但し、成績が上がったらの話よ（笑）』

康平にも、物欲はある……というより、家の電話は居間に近いので、話が聞こえ易い。また、最近妹の真緒の電話する頻度が増している。

今の康平にとって、携帯電話は流行りのゲームよりも欲しいアイテムだった。

急に勉強意欲が湧いた康平は、急いで図書館へ向かう。

図書館に着くと、亜樹と綾香が2人で勉強していた。

亜樹
『あれ、康平は用事があったんじゃないの？』

康平
『あ…いや…急に用事がなくなったんだよ…』

亜樹
『ふーん……
ま、そういう事にしてあげるか。

今日は安心して。綾香もいるし、スパルタ式じゃないから（笑）』

康平
『それは残念だな。今日は、勉強しようと燃えてきたのによ。』

綾香が、苦笑いしながら言う。

『あたし抜きで、２人の世界を創らないでくれる?』

康平
『そ、そんな事ないよ。』

亜樹
『そうよ、綾香の気のせいよ。』

綾香は降参したように言う

『ハイハイ!分かったわよ（笑）
ところで、映画の件は４人とも行けるの?』

康平
『それは大丈夫さ。
健太も即座にオッケーだったよ』

『よかった。
兄貴からもらった映画の券が、何故か４枚もあったのよね!
この前４人で図書館にいた時、結構楽しかったから、あのメンバーで行ければ……って思ってたんだ。』

綾香は本当に嬉しそうだ。

康平
『内海の兄さんって、どんな人？』

綾香
『康平君達と、最近会ってるよ（笑）』

康平
『げっ…！やっぱそうだったんだ。同じ名字だから、もしや……って思ったんだだよな。』

綾香
『兄貴は、ボクシングの事は分からないけど、普段の生活は結構デタラメだよ。この映画のチケットだって、合コンでベロンベロンに酔っ払って、何も覚えていないのにポケットに入ってるからって、私にあげるっていうんだから（笑）』

康平
『す、凄いね。
でもボクシングは、本当の意味で凄かったよ。』

綾香
『あ、確かにそれはあるかもね。
試合の１ヶ月半前からは、必ず夜の１０時までに寝るもんね。まるで、兄貴じゃないみたい（笑）』

亜樹

『ハイハイ！
此処はどこで何をする所かな？』

綾香
『ゴメンね。亜樹さん抜きで会話しちゃって～（笑）』

康平
『亜樹先生のご機嫌が、これ以上悪化しないように勉強する事にしますか（笑）』

亜樹
『チョットどういう意味よ（苦笑）』

怖い2人の大学生

午後3時、康平は少し早めに部活に行く。

昨日、1人だけ戦意喪失という理由で止められた事が悔しいようだ。

3人の2年生達は、最後の柔軟体操をしていたが、いつもより、バテ気味のようだ。

着替えた後、更衣室を出ようとした時、タオルを取りに来た大崎先輩とスレ違った。

大崎先輩が小声で話す。

『内海さん達の練習はシンドイぞ。
お前らも覚悟しといた方がいいかもよ。』

康平も先輩達の様子を見て納得した。

さっきまでいた図書館は、クーラーが効いている為か、体が硬くなっているようなので、康平は入念に準備体操を始めた。

そこへ内海さん達が、話し掛ける。

『お前、高田だよな？
1人だけ止められたのが、悔しいんか？』

康平は、素直に答える。

『悔しいというか、恥ずかしいです！』

山本さん
『最初のうちは、よくある事さ（笑）』

内海さん
『そうそう。
男は見栄を張る生き物だからな。恥ずかしい気持ちがあれば、強くなれっからよ（笑）』

2人の大学生は、気さくに話し掛けてくる。

2時50分頃、白鳥が練習場に入ってきたが、健太と有馬はまだ来ない。

3時5分過ぎ、ようやく2人が練習場に来た。

『練習、お願いします』

と、大声で挨拶した2人に、内海さんが歩み寄る。

『お前ら、遅くなった理由でもあるんか？』

有馬
『いいえ……特にありません。』

健太
『僕も……ないです』

その瞬間、内海さんのビンタが飛んだ。

『バカヤロー！ふぬけた気持ちで練習に来るんじゃねぇ（怒）』

有馬と健太
『す、すいませんでした』

内海さん
『いいか、試合の前になるとな、手を抜いた練習をみんな思い出してくるんだよ。
そして、後悔しながら相手が怖くなる……』

山本さん
『梅ッチが居ようが居まいが、自分の練習は関係ねぇんだよ。』

内海さん
『お前ら、反省したならトットと着替えろや。』

『はい！』

有馬と健太は、急いで更衣室に駆け込んだ。

1年生全員の準備体操が終わり、シャドーボクシングを始めようとした時に、山本さんが口を開いた。

『お前ら昨日の練習で、何をアドバイスされたか覚えてっか？
1人ずつ言ってみぃ。』

健太
『左ストレートを打ったらすぐに右フックを返す事です。』

内海さん
『その為に、何を意識するんだ？』

健太
『左ストレートを打った時、右足が外向きにならないように意識します。』

山本さん
『次！』

白鳥
『もっと離れた距離からパンチを出す事です。
今回は、2発の左ジャブを打って距離を詰めるように教わりました。』

山本さん
『次！』

有馬

『左ジャブをもっと出すようにアドバイスを受けました。
その時、肩をもっと入れる事と、…狙わないで打て?…と教わりました』

山本さん
『お前、有馬だっけ?
まだ理解しきれていないようだが、練習が終わった後に説明するよ。
とにかく今は、アドバイス通りにする事を意識して、真剣にやれ。』

内海さんが、康平に近づいて来る。

『高田は何もアドバイス受けてねぇよな。
心配すんな。俺が梅ッチから聞いてるからよ(笑)』

こうして、いつも以上に緊張する練習が始まった。

覗き見ガード

内海さんの話は続く。

『お前は、今から覗き見ガードをしろ。』

康平

『覗き見……ですか？』

内海さんが、少し笑いながら説明する。

『あまりいい呼び方じゃねぇが、結構ポピュラーな構えだ。
要は、左右のガードの間から、相手を見る感じだ。』

康平は、内海さんの話を聞いて、自分なりに構えてみる。

内海さん

『そりゃ、ガードを上げ過ぎだ。
両拳は、頬骨位の高さでいいんだよ（笑）
脇を締めて、両肘が1番下のアバラに軽く触れている感覚だぞ。』

康平言われる通りに修正すると、内海さんは、言葉で説明しきれない所を、自身の手で直す。

内海さん

『まぁ、こんな感じだ。

この形を崩さないで、3ラウンド休まず、構えだけを続けていろ。』

康平
『は…はい！』

山本さんが、他の3人に話す。

『お前ら、他人の事を見ている余裕はねぇぞ。
3人とも、まず鏡をみながらのシャドーを3ラウンドだ。
フォームのチェックは、この3ラウンド中に徹底してやれ。』

『はい！』

1ラウンド目が終わり、内海さんが健太に話し掛ける。

『片桐、オメェの下の名前は健太だったな?』

健太
『はい。』

内海さん
『健太、右足だけ内側に向いてもダメなんだよ。
右膝を、もう少し左側に入れろ。そして、その角度を変えないで左ストレートを打ってみろ。』

健太はぎこちない感じで、左ストレートを打つ。

『！！！！！』

内海さん
『何か感じたか？』

健太
『はい！
左ストレートを打った時、体が流れないのと、返しの右フックが打ち易い感じがしました。』

内海さん
『お前、飲み込みいいな。調子もよさそうだがな（笑）
後の2ラウンドで体に憶えさせろ。』

山本さんも、有馬と白鳥に意識するポイントを教えていた。

3ラウンド目も終わり、山本さんが次の練習内容を話す。

『高田以外の3人は、リングに上がって、シャドー10ラウンドだ。
いいか、鏡や俺達は一切見るなよ。
言われたポイントだけ気を付ければいいから、今まで習った事を反復しろ。
繰り返すが、周りは一切見んなよ。』

今まで、鏡でフォームを見ながらのシャドーが多かった為か、3人とも集中しきれていないようだ。

山本さん
『お前ら、ぎこちねぇなぁ（笑）
パンチが当たりそうな所に、目の焦点を合わせてみろ。
そしたら集中できっかもしんねぇからよ（笑）』

3人は、さっきより集中しているようだ。

内海さんが、康平の頭を軽く叩く。

『お前、見物してる余裕はねぇぞ（笑）』

康平
『す…すいません！』

内海さん
『オメェは康平だったな。
康平は、今日から覗き見スタイルに変えたばかりだから、今から俺の個人レッスンだ。
まぁ、俺は優し過ぎるのが欠点だからよ、リラックスして覚えればいいさ（笑）』

康平は、顔にこそ出さなかったが、微妙に不安な気持ちになった。

ひたすらボクシングダンス

内海さんが康平に指示を出す。

『オメェは、鏡を見ながらシャドーだ。
さっきあの3人がやってた事をするんだ。
とにかくフォームだけを意識して、シャドーをしろ』

康平は、手足の位置を確認しながら構える。

内海さん
『構えた時は、2つの点を意識するんだ。
1つは、正面から自分を見た時、両腕が胴体と同じラインにある事。
もう1つは、下っ腹に少し力を入れていろ。』

内海さんが、話を続ける。

『パンチは、打ち始めの時に、自分の腕をアバラで押し出すのを意識してから出すんだ。』

康平は、言われた通りにやってみたが、内海さんのイメージと違うようだ。

『康平……ちょっと肩の感じが違うぞ。
肩はなぁ、
……
アァ、面倒臭え!』

言葉に窮した内海さんは、突然手を使って、強制的に康平の肩を修正する。
肩関節を、前に入れた状態にしたかったようだ。

内海さん
『感覚を、言葉にすんのは難しいんだよ。
俺を困らせたくなかったら、今のフォームを崩すなよ（笑）
それと、康平はパンチを打つ時、顎が上がり気味だからそれも直せ。』

『ハイ！』

康平は、慎重にパンチを打つ。
構えを変えてパンチを打つと、違う筋肉を使うようで、康平は力みまくっていた。

内海さん
『ハハハ！
養成ギブスでもしてるような、力みっぷりだな。フォームを変えた時は、そんなもんだ（笑）
俺ぁ、梅ッチと違って優しいからよ。
リラックスは注文しねぇから、とにかくフォームを意識して１０ラウンド、シャドーを続けろや。』

康平
『ハ……ハイ！』

山本さんと内海さんは、４人が見える所にイスを持ってきて、座りながら見ている。

山本さん
『健太とタケ（有馬）は、左右の動きをもっと使ってみろ。打った後、すぐに動け！』

内海さんは、康平だけを見ているのが退屈なようで、白鳥にアドバイスをする。

『翔！オメェはパンチを打つ時、踏み込みをもっと大きくしろ。』

白鳥は、自分なりに大きく踏み込む。

内海さん
『まだ踏み込みが足んねぇぞ。
オーバーな位大きく踏み込め。』

山本さん
『そうそう、実戦になるとどうしても体が萎縮すっからよ、シャドーの足の動きは大きくしろや。
健太とタケもだぞ！』

内海さんと山本さんは、談笑しながらも、時折４人のチェックする。

山本さん
『健太、左のガードの位置は口の前に置け。
右効きと戦う場合だったら、ガードはその位置だ。

それと、今は左ストレートを打ったら、全部右フックまで返せ。前足の悪い癖を直してぇからよ。』

内海さん
『康平、ちょっと腰の位置がおかしくなってきたぞ。左の腹筋をもう少し前に押し付けろ。』

山本さん
『ん？　翔は手と足のタイミングがズレてっぞ。踏み込む時、ジャブが当たるタイミングで前足を着地させろ。すっと2発打てっからよ。タケ（有馬）もズレてるみてぇだから、2人とも前足の着地のタイミングを意識しろ。』

シャドーボクシングは、仮想の相手をイメージしながら、ひたすら1人で動くトレーニングだ。

実戦経験のない1年生達は、相手のイメージなど仮想できるハズもなく、シャドーボクシングというよりも、ボクシングダンスと言った方がよさそうだ。

何かを打つわけでもなく、ずっと1人で動くのだから、長いラウンドを続けるには、忍耐力が必要だ。

ようやく、10ラウンド……いや、最初から数えれば13ラウンドのボクシングダンスを終えた1年生達は、次の練習の指示を仰ぐ。

山本さん
『オメェら3人は、最後いい感じだったから、他のトレーニングはしない方がよさそうだな。
もう少し、この感じを体に覚えさせてぇから、もう3ラウンド、シャドーをやって終わりだ。』

内海さんも、軽い口調で康平に指示を出す。

『康平、オメェも3人に付き合って、もう3ラウンド鏡の前でやって終わるぞ』

こうして1年生達は、ず～とボクシングダンスだった練習を、更にボクシングダンスで締めくくる事になった。

ファミレスで講義

この日の練習が終わって着替えた1年生達に、内海さんが話し掛ける。

『オメェら、質問したい奴はいるか？』

康平以外の3人は、すぐにでも質問しそうな感じだ。

『おいおい、こりゃ長くなりそうだぜ』

山本さんが苦笑いする。

内海さん
『このクソ暑いのに、ここにいるのもイヤだしな。
……
しゃぁねぇ、駅前のファミレスに行くぞ！』

山本さん
『心配すんなって。金は俺達が出すからよ。ただ、少しは遠慮しろよ（笑）』

駅前のファミレスに入ったが、エアコンがかなり効いている為か、少し肌寒い程だ。

1番奥の席に座って、それぞれ注文をする。

内海さん
『オメェら、今は練習中じゃねぇんだからよ、もっとくつろげや。』

有馬
『あの質問いいですか?』

山本さん
『おう、何でも言ってみろ。』

有馬
『左ジャブの事ですが、狙わないで打つ意味を、あまりよく分かってないんスけど……』

山本さん
『じゃあ、逆にオメェらに質問するが、ボクシングのパンチの中で1番弱いのは何だ?』

健太
『ジャブだと思います。』

内海さん
『そうだ。ジャブは弱いからカウンターを狙われ易いんだよ。』

康平
『カウンター…ですか?』

山本さん
『カウンターってのは、簡単に言えば、相手のパンチに合わせて打

つパンチの事だ』

内海さん
『カウンターは、当たればそれで試合が終わってしまう位のダメージがある。
だが、失敗したら逆に相手のパンチをもらってしまうリスクもあるんだ。』

山本さん
『ジャブに合わせてのカウンターだったら、失敗しても、もらうのはジャブだからリスクは少ないって訳だ。』

健太
『あのう、だったらジャブは打たない方がいいって気がするんですけど……』

内海さん
『ハハハ！
そんな単純に考えんなよ。
ジャブは、試合を作っていく上で重要なパンチだ。
距離を図ったり、相手の体勢を崩したりするのに、結構使えっぞ。
それにジャブが当たった後に、強いパンチを追撃すれば、カウンターに負けない位のダメージを与えられるからな。』

山本さん
『ところで、本題に戻すがよ、ジャブを狙わねぇで打つってのは、そのカウンターをもらわねぇ為に打つんだよ。』

有馬

『でも、狙わないで打つパンチって当たるんですか?』

山本さん
『お、メシがきたから食いながら話すぞ。
タケ!俺のウィンナーを箸でとってみろ。』

『え!いいんスか?』

有馬は、箸でウィンナーを1つ摘んで口にする。

山本さん
『今、ウィンナーを摘むとき、箸を持って狙っていたか?』

有馬
『いや、何となく取りましたけど……』

山本さん
『そうだろ!
パンチだって、練習していれば、何となく打っても当たるように打てるんだよ』

内海さんが笑いながら話に割り込む。

『俺にも喋らせろよ(笑)

「狙わないで打て!」

ていう表現に語弊があったかもな。

俺達が言いたいのは、当てようと思わねぇで、打てって事だ。
要するに、カウンターに気をつけてジャブを打てって言いたいんだよ。』

山本さん
『そうそう、当てる事に集中すると、ディフェンスが疎かになるからな！』

内海さん
『他の奴にも、意識させたいがな。
ただ、タケは体重が軽いのに、身長は１７０位あんだろ？』

有馬
『はい、体重５０キロで、身長は１７１センチです』

山本さん
『オメェは、その階級にしては身長タケェからよ、特にジャブを武器にさせてえんだよ。』

有馬
『はい、頑張ります。』

内海さん
『おっと、メシが冷めちまうからよ、トットと食っちまおうぜ。
質問はその後だ。』

ファミレスでの講義はまだ続きそうである。

食事が終わった6人は、一息ついた。

内海さん
『オメェら、帰りは大丈夫か？
電話したい奴がいれば、俺の携帯貸すからよ。』

白鳥
『ス、スイマセン。では少しお借りします。』

内海さん
『……ああ、いいぜ』

白鳥は、丁寧にオジギすると、電話をする為に席を外した。

山本さん
『まだ6時半だぜ……
あいつ、過保護な家の坊っちゃんか？』

有馬
『いや、そんな事はないッスけど……』

内海さん
『何か事情がありそうだな……
まぁいい、他に質問したい奴はいるか？』

健太

『今日の練習で、左のガードを口の前に置くように言われましたけど、何か理由があるんですか？
それと、当たらなくても左ストレートの後は右フックを返すようにも言われました。それも一緒に教えて頂きたいです。』

内海さんが、少し悩んだ後質問に応える。

『これは、実演した方がよさそうだから、明日練習の時に教えるからよ。
ここで、実演する勇気は俺にもネェからな（笑）』

白鳥が戻ってきて、内海さんに携帯電話を返す。

内海さん
『翔、オメェは訊きてぇ事はネェのかよ？』

白鳥
『…あの…相手に近づく時に、ジャ、ジャブを2発以上打つように言われたんですけど、り…理由があれば教えて頂きたいです。』

内海さん
『ぷっ（笑）
そんな緊張すんなよ。』

山本さん
『さっき、ジャブについて話したよな？』

白鳥

『はい。ジャブはカウンターを狙われ易いって聞きました。』

山本さん
『たがな、2発続けて打つと、カウンターはもらいにくいんだよ。
あくまで、確率的な話だがな。
オメェは、背が低いだろ?だから遠めの距離から、ジャブを2発以
上打って、相手との距離を詰めたいんだよ。』

白鳥
『わかりました。
…あ…あと、うちの学校ではパリーイングを教えないんですけど、
何か理由があるんでしょうか?』

内海さん
『おいおい、緊張している割に、遠慮がない奴だなぁ（笑）
パリー（イング）はどんな防御か知ってるのか?』

白鳥
『本屋で立ち読みして、相手のパンチを手で払う防御だって知りま
した。』

内海さん
『まぁ、大まかに言えばそんなところだ。
主に相手のストレート系に対する防御だがな。
ちょっとパリーを多用すると危険な所がある。』

康平
『それは、どんな所ですか?』

内海さん
『レベルが上がってくると、パンチの軌道を変えて打つ奴も出てくるんだよ。
具体的には、打ち始めがストレートなのに、途中からフックになるのが多いけどな。
ストレートだと思ってパリーしたら、外側からガラ空きの顎にフックが直撃するっていう寸法だ。』

山本さん
『多分梅ッチも、それを避ける為に教えてネェと思うぜ。』

内海さん
『康平は、何か質問はネェのかよ?』

康平
『……あの…今、左フックを習っているんですが、パンチが届かない気がするんですけど……』

山本さん
『お前ら、梅ッチから左フック……あぁ健太は右フックだったな。
そのパンチの踏み込み方は習ってんのか?』

有馬
『いいえ、まだです。』

山本さん
『これも実演が必要だから明日の練習の時だな。』

康平

『わかりました。
……それと、もう1つ2人に訊きたいのですが……』

内海さん
『何だ、遠慮しねぇで言ってみろよ。』

康平
『内海さんと山本さんは、戦っている時、怖くないんですか?』

内海さんと山本さんは、顔を見合わせる。

内海さん
『怖くねぇわけねぇだろ。
相手も必死だからな。』

山本さん
『そうそう、試合の時なんかは特にそうさ。
開場にいる奴等が、全員自分より強そうに見えるしな（笑）』

内海さん
『試合直前なんか緊張してよぉ、簡単なパンチでも、もらいそうな気がするんだぜ（笑）』

健太
『あまり信じられないッスね（笑）』

山本さん
『アホ！

コレは戦った事のある奴しか分かんねぇ心境だ。』

康平
『でも、どうやって克服するんですか?』

内海さん
『克服なんかまだ出来ねぇよ（笑）
ただ、試合までに、真剣にやってきた練習だけが頼りだな。』

山本さん
『それも、無意識に出来るようになるまで、反復して覚えた技は、
試合でも裏切らねぇで出るからよ。』

内海さん
『そうさ、俺もこの前の試合、1ラウンド目に左フックをもらって
意識が飛んだんだが、気が付いたら判定勝ちだったんだよ（笑）
多分体が無意識に動いてたんだろうな。』

山本さん
『他の事はわからねぇが、ボクシングは、正直者が馬鹿を見ない世
界だと思うがな。
効率のいい練習を、真面目に頑張ってる奴が1番強いと思うぜ。』

内海さん
『そうだよ。なぁ～んにもしねぇで、強い天才なんか、いてたまる
かって信じねぇと、やってられねぇよな（笑）』

亜樹の誕生日

次の日の午前中、康平は健太からの誘いかあって、学校の近くの図書館へ向かって歩いていた。

康平
『まさか、お前から図書館へ誘うとはな。』

健太
『俺が勉学に目覚めた……ってわけじゃねぇのは判るよな?』

康平
『まぁ、今週の日曜日に綾香達と映画を見に行くから、テンパらないように、少し馴らしておきたい……ってとこか?』

健太は苦笑いして返す。

『まぁ、俺と長い付き合いだっただけの事はあるな。
でも、昨日の帰りにお前から、綾香の兄貴があの内海さん……て聞いた時は、まさかと思っていたけどビックリしたな（笑）』

康平
『まぁ、練習中はそんな事考えてる余裕はねぇけどよ（笑）
それと、亜樹に連絡してねぇから、綾香がいるかは分かんねぇぞ。』

健太
『いなければいいねぇで、仕方ねぇよ。どうせ、夏休みの宿題に手を付けなきゃならねぇんだからさ（笑）』

そうしているうちに、図書館についた。
2人は、空いている席を探す……というよりも、勉強している2人組の女の子を探していた。

康平
『残念だな。今日はいねぇようだぞ。』

突然後ろから声がする。

『君が探している子達は、真後ろにいるんじゃないかな?』

康平達が振り向くと、亜樹と綾香が笑いをこらえて立っていた。

康平
『ヒデェな。ビックリさせんなよ（苦笑）』

亜樹
『そんなに、ビックリするなんて、何かヤマシイ事でもあるのかな（笑）』

康平
『あ……あるわけねぇじゃん。
そうだよなぁ、健太。』

『俺達2人の時は、ヤマシイ事ばっかりだけど……
今回は無いという事にしときますか（笑）』

健太は、わざと意味深な言い方をした。

亜樹
『まぁ、いいわ。
康平は、監視役がいないと勉強しないタイプだから、今日も一緒に勉強してあげるよ。』

綾香
『あたしも、監視してもらわないと、勉強しないタイプなんだけど（笑）』

亜樹
『綾香はいいのよ。親友だからね』

健太
『じゃあ、康平は何なのさ?』

亜樹
『ん～…難しい質問ね。
要領が悪くてほっとけない人…って感じかしら（笑）』

健太
『それは言えてる（笑）
ホントぶきっちょだから』

綾香
『チョット2人共ヒドいんじゃない?』

康平

『いいんだよ！2人には、毒舌以上に世話んなってっから（苦笑）』

健太は、康平をネタにすると綾香の前でもテンパらないでいられるようだ。

９０分程勉強したであろうか。誰が言い出したわけでもないが、４人はロビーへ休憩に行く。

健太
『あぁ、久々勉強したって感じだな』

綾香
『健太君は、宿題全然やってなかったの？』

健太
『同い年なんだから、呼び捨てでいいよ（笑）
今までだったら、夏休み終わり間際まで、一緒に宿題をしないでいてくれる友達がいたんだけどね。』

康平
『悪かったな、裏切り者でよ。
でも、いいもんだぜ。夏休み前半で、宿題がほとんど終わってっとな。』

亜樹
『康平！
自分の力で宿題をやってたような、誤解を招く言動は、控えた方がよろしくてよ（笑）』

健太
『そうそう、亜樹がいなかったら、数学の課題はまだ白紙だったかもな。』

康平
『お前ら、俺を攻撃する時だけ、妙に連携とれてんだよな。
まぁ、宿題がここまで進んだのは、亜樹さんのお蔭なんだけどよ』

健太
『そういえば康平は、亜樹にお礼がしたいから……って、誕生日を知りたがってたけど……』

康平
『え？』

綾香
『亜樹の誕生日は、９月９日よ。』

亜樹
『ちょっと綾香……』

健太
『まぁ、プレゼントするかどうかは、康平の問題だしさぁ、亜樹はもらったら素直に喜べばいいんじゃねぇの？
あっ…、でも康平は女の子にプレゼントなんて初めてだから、あんまり期待しない方がいいと思うけど（笑）』

綾香
『健太は、プレゼントしたことあるの？』

健太
『…ん…まぁ…俺の事はまず置いといてだな……』

康平
『オメェだってねぇくせにさ、自分の事は棚に上げまくってるよ全く。』

亜樹
『康平は、部活と勉強漬けで貧乏人なんだから、財布と相談して。それと、君にセンスは無いんだから、プレゼントに自信がなかったら、無理して買わなくていいんだからね。』

健太が笑いながら話す。

『自分がもらうプレゼントについてアドバイスする人って、なかなかいねぇよなぁ。』

綾香
『そうね。それに、ケナしながら励ます人も珍しいわね（笑）』

康平
『オ…オメェら宿題進んでねぇんだから、早く机に戻ろうぜ。』

亜樹
『そうよ、綾香は今日部活が休みだけど、君達はこれから部活なんだから、少しペースを上げるからね！』

午後2時過ぎ、康平と健太は部活に向かう為、早めに勉強を切り上げた。

亜樹
『あれ、2人とも部活は3時からじゃないの？
ずいぶん早いのね。』

康平
『まあ…遅刻すっと怒られっからよ。』

綾香
『うちの兄貴かなぁ……
あの人私には優しいけど、気が短いからすぐに手が出るんだよね……
大丈夫だった？』

健太
『俺はビンタを食らったけどな（苦笑）……
あ…でも、悪いのは俺だったから気にすんなよ。』

康平
『そうそう、ワリィのは健太だぜ。
それに、練習が終わると気さくな感じだしさ。』

綾香
『…そう…2人が納得してるんだったら気にしないよ（笑）
それと、日曜日は午前10時に駅で待ち合わせでもいいかな？』

康平
『あぁ俺達は大丈夫だぜ』

日曜日に何を着て行こうかと、会話をしながらボクシング場に着いた2人だったが、有馬と白鳥は、まだ４０分前なのに、既に着替えまで終わっていた。

2年生達は、まだ練習を続けている。

森谷先輩は、まだミット打ちの最中だ。

ミットを受けている内海さんが怒鳴る。

『テメェは先手で打たねぇから、いつも凡戦なんだよ。
もっとミットに反応しろ』

サンドバッグを打っている相沢先輩にも、

『勘が悪いんだったら、もっと動けや！』

と山本さんの檄が飛ぶ。

大崎先輩は、何か覚えたい技があるようで、１年生達には見向きもせず、インターバルの休み時間も、ずっとシャドーで反復している。

自分達以上に罵声を浴びながら練習している先輩達を見て、康平と

健太は、日曜日の事など頭から消えていった。

会話をしながら準備をできる空気ではなかったので、1年生達は、先輩達の練習を見ながら黙ってバンテージを巻き、柔軟体操を始める。

ようやく先輩達の練習は終わったが、康平達は、昨日より緊張していた。

山本さん
『オメェら、気合いは入っているようだが、硬くなんなよ（笑）』

内海さん
『そう、今、1年達がしなければならねぇのは、フォームを固める事だからな』

山本さん
『そして、梅ッチが戻ってきたら、俺達とスパーすんだが、その時にキチンと打てるかが、当面の目標だからよ。』

内海さん
『いいか！
練習始める前に、何に気を付けて練習をするか、頭に叩き込んどけよ。
じゃあ、ブザーが鳴ったらシャドー開始だ。』

山本さん
『昨日と同じで、最初は鏡の前で3ラウンドのシャドーだ。

康平、今日はオメェも他の奴らと一緒だ。』

こうして、鏡の前でフォームを意識しながら3ラウンド。
鏡を見ないでリングの中で4ラウンドのシャドーを行った。

山本さん
『今日は、リングの中でのシャドーは4ラウンドで終わりだ。
次は、サンドバッグ打ちを4ラウンドするが、その前に踏み込んで
のフックを教えるからな。』

内海さん
『全員サンドバッグから少し離れて構えてみろ。

前の手のフックで踏み込む時はだな、タメを作りながら前足の踵か
ら着地させるんだ。
そして、つま先を着地させながらフックを振る。

意外と簡単だから、オメェらもやってみろ。』

4人共、スムーズに出来そうだ。

山本さん
『ようし。フックは力いっぱい打てよ。サンドバッグをぶっ壊して
も構わね～からな（笑）』

内海さん
『2ラウンドはフックだけ思いっきり打てよ。
残りの2ラウンドは、ストレートも入れて打つんだ』

こうして練習が進んでいったが、筋トレの前に、内海さんが口を開く。

『昨日健太が質問してた左ガードの位置の事だが、他の3人もサウスポーと戦う時もあるから、みんな聞いておけ。
健太は俺と戦うつもりで構えてみろ。』

健太は言われた通り、内海さんと対峙する。

内海さん
『健太、お前習ってねぇかも知んねぇけど、俺に左のフックが打てるか?』

健太
『……いいえ、怖くて打てないです。』

内海さん
『何で怖いんだ?』

健太
『…内側から…右ストレートを打たれそうな気がして……』

内海さん
『不安な顔すんなって。
俺だって怖くて、オメェに右フックは打てねぇんだからよ（笑）
オメェら分かったか?
相手は、怖くて利き腕のフックは打てねぇんだよ。』

山本さん
『サウスポーの左パンチで打つ確率が高いのはストレートだ。
まぁ、ボディーブローもあっけどな。』

内海さん
『だから、右ガードを口の前においておけば、左ストレートをもらう確率は減るわけだ。』

山本さん
『あくまで、一般論に近いが知って損のない知識だからな。結構ボクシングは理詰めだからよ。』

健太
『あの……、俺は左ガードを口の前において、右ストレートを警戒すればいいんですね。』

内海さん
『当たり前だろ。オメェはサウスポーなんだからよ。
……！
そうか、オメェに説明する為の、実演だったんだよな（笑）
まぁ許せや。
あと、返しの右フックは明日説明すっからよ。
オメェらも、こう暑いんじゃ頭も働かねぇだろ！』

内海さんは、返しの右フックの説明を放棄してしまったが、逆らう者は、誰もいなかった。

苦労した3年生達

内海さんと山本さんが指導する練習は連日続く。

というのも、石山先輩と兵藤先輩が、インターハイ全国大会で勝ち進んでいるので、梅田・飯島の両先生が部活に来れないからだ。

今日の準々決勝も2人は勝ち残ったようで、ボクシング部員達もその話題で盛り上がっている。

練習が終わった1年生達に、内海さんが話し掛ける。

『これで石山と兵藤は、3位以上が確定か……。
あいつらは、俺達が高校3年の時に入学してきたんだよ。』

健太
『2人とも……、いや清水先輩も含めて全員強くなりそうな感じだったんですか?』

山本さん
『いや、兵藤はセンスありそうな感じだったが、清水と石山はオメェらより酷かったぜ。』

内海さん
『そうだよな。あの2人は毎日梅ッチに悲惨な程、怒鳴られてたんだよ。』

山本さん
『俺も、兵藤以外は部活を辞めてしまうって思ってたよ。

2人が初めてスパーリングしたのを見た時は、爆笑だったぜ（笑）』

有馬
『どんなスパーリングだったんですか？』

内海さんが、吹き出しながら説明する。

『石山は背が低いだろ！
パンチが届かねぇもんだから、何を思ったか、両手を伸ばしたまま、相手に突っ込んで行ったんだよ。それも下を向いたままな。』

山本さん
『俺も、アイツは何のスポーツをやってんだろう……って、一瞬思ったぜ（笑）』

内海さん
『梅ッチも、怒鳴るのを忘れて唖然としてたんだよな（笑）』

山本さん
『清水も傑作だったんだぜ（笑）
ビビって目を瞑ったままパンチを出してんだよ。』

内海さん
『そうそう、そして相手が右側に逃げてんのに、目を瞑ったまま5発位そのままパンチを出してたんだよな（笑）』

山本さん
『それも、力が入ってガチガチだったから、壊れたオモチャみたい

だったぜ。』

康平
『信じられないですね。
清水先輩も、右手の骨折がなければ、県大会は優勝しそうだったんですけどね』

山本さん
『清水にも、いい思いをさせたかったよな。
アイツは、ミテクレはああだけどよ。
ボクシングだけは真面目だったんだけどな。』

内海さんは、笑いながら、

『そうそう、清水の歩き方って、こんな感じだったんだよな。』

清水先輩を真似て、がに股で肩で風を切るような歩き方をする。
清水先輩にそっくりな歩き方だ。

1年生達は、笑うに笑えず困っていた。

山本さん
『俊也（内海さん）やめとけ、1年達困ってんぞ（笑）』

内海さん
『そうだな。オメェらは心の中で笑っとけ。』

山本さん
『あと、お前ら勘違いすんなよ。
兵藤がセンスいいって言ったけどよ、アイツも苦労してんだからな。
アイツは前に剣道やっててよ。右利きなんだが、足の位置が同じだからって、サウスポーになったんだよ』

有馬
『2年の相沢先輩に聞きました。』

山本さん
『だったら話は速いな。
左手のリストは強かったけど、左ストレートがある程度強く打てるまで、結構かかったんじゃねぇか?』

内海さん
『俺らが国体で引退する秋までは、ペラッペラな左だったぜ（笑）
ただ剣道やってたせいか、足捌きは良かったけどな』

山本さん
『この前、兵藤の練習見てたら、オッカねぇ左を打ってたよな。
それも、ノーモーションからよぉ。』

内海さん
『あの左があるから、得意の右フックがよく当たるんだろうな。』

『……あ!』

健太は何かを思い出したようだ。

内海さん
『どうした健太?』

健太
『2日前に、返しの右フックを質問したんですけど……、今教えて頂けますか?』

内海さん
『バカヤロ!
変な時に思い出すんじゃねえよ。』

健太
『す…すいません。』

山本さん
『たぶん俊也は、言葉で表現するのがメンドクセ~んだぜ(笑)
感覚で覚えているのを言葉にするって、結構難しいからよ。
まだ、俺達は明日も来るんだから、宿題にしろよ。
但し、この件を説明すんのは俊也だからな(笑)』

内海さん
『あっ…ズリ~ぞてめぇ。
そもそも言い出しっぺは賢治(山本さん)の方じゃねぇか?
まぁいいや。明日……じゃなくて、ここにいる間に説明すっから、
覚悟しとけよ(笑)』

カウンター

2日後の土曜日、昨日も勝ち残っていた石山先輩と兵藤先輩の試合結果が、練習前に教えられた。

2人とも、判定で惜しくも準優勝で終わったようだ。

内海さん

『残念な結果だが、国体もあっからな。
まぁ、オメェらに言ってもしょうがネェんだけどよ。
……
健太、チョット来い。』

呼ばれた健太は内海さんの前にいく。

内海さん

『健太、俺にユックリ左ストレートを打ってみろ。
オメェらも見てろよ。』

内海さんは、健太が左ストレート打った時、後ろ足（右足）だけ半歩右側にズラす。
後ろ足が右にズレた分だけ、顔も右側にスライドし、パンチをかわした形になっている。

ズラした後ろ足を、すぐに前に蹴りながら右ストレートを打つ。
健太の左ストレートをかわして打つ、右ストレートのカウンターである。

内海さん

『これは1つの例だが、オーソドックス（右構え）対サウスポーの対戦は、こんな感じのパンチのやり取りが多いんだよ。
健太、もう1回左ストレートを打て！
その後、右フックをすぐに返してみろ。
あ…右フックは寸止めだぞ（笑）』

健太は、言われたように左ストレートを打った後、すぐに右フックを返す。

すると、さっきのように左ストレートをかわして右ストレートを打とうとした内海さんに、健太の右フックが当たりそうになった。

内海さん
『これで分かったか？
オーソドックス対サウスポーの戦いで、健太みてぇにフックを返すと、これがあるんだよ。』

健太
『内海さんのカウンターも怖かったです。』

内海さん
『バカヤロ！
俺が言いてぇのは、オメェの返しのフックがあっと、カウンターを狙う方はもっと怖ぇんだよ。
下手したら、それで倒されて終わりになるからよ。』

有馬
『返しのフックの効果は理解出来たんですが……
今、内海さんが打ったカウンターも習いたいです。』

内海さん
『今の段階でカウンターを教えると、ロクなことになんねぇから駄目だな。
今のオメェらに必要なのは、先手で攻める感覚と技を覚える事なんだよ。』

健太と有馬は、少し納得しない表情だ。

山本さんも、話に加わる。

『先手で攻撃出来ないカウンターパンチャーなんて、全然怖くネェんだよ。
2年の森谷がいるだろ、アイツは2年の中じゃ1番勘がいいし、パンチも見えている方だ。
アイツはカウンターを狙い過ぎるところがあって、なかなか自分から攻めねぇ。
全体的に待ちのボクシングなんだよな。
だから、下手な相手にもペースを合わせてしまって、凡戦が多いんだよ。
まぁ、この話は梅ッチから聞いた事なんだけどな。』

内海さん
『森谷の奴もそれを自覚してっから、今は先手で打つ技のバリエーションを増やしているところさ。アイツが先手で攻めながらカウンターを打てるようになると、レベルが数段上がるだろうよ』

山本さん

『そうそう、待ってれば攻められるし、逆に攻撃すればカウンターが飛んでくる。
相手にしたらタマッタもんじゃねぇんだよ。
ただ、レベルが上がってくると、そういう戦いをする奴が、ゴロゴロいるから嫌んなるけどな（苦笑）』

内海さん
『今日、オメェらは何を目標に練習してんだ。』

健太
『次のスパーリングまで、習ったパンチを打てるようになる事です。』

山本さん
『だったら、それに集中する事だな。
今後、イヤって程技を習うんだからよ（笑）』

応援する兄貴

内海さん
『よし、俺の説明も終わったし、今から練習開始だ。
明後日から、梅ッチ達が練習に来るから、俺達が教える練習は今日が最後だ。』

健太
『残念ですね。』

山本さん
『まぁ、直接教えるのが最後なだけで、明後日迄は来るからな。
今日は、シャドーとミットメインの練習だからよ。
まず、最初にシャドーを7ラウンドだ。
鏡の前でのフォームチェックが3ラウンドと、リングの中で4ラウンドだ。』

練習開始のブザーが鳴り、1年生達は、鏡の前でシャドーを始めた。

シャドーが終わりって、山本さんが次の指示を出す。

『これからミットと形式練習をやるからな。狭いから、サンドバッグを全部外して脇に寄せるぞ』

6人全員でサンドバッグを脇に寄せると、狭い練習場も、かなり広くなった。

内海さん

『最初は、翔は俺がミットを受ける。
タケは賢治とミットだ。』

山本さん
『康平と健太は形式練習だから、保護具とマッピはつけておけ。』

内海さん
『康平は、覗き見スタイルを崩すなよ。
感覚的には、両方のグローブの間から、常に相手を見る感じだぞ。』

練習は再開された。
康平と健太は、形式練習に集中しているので、ミットの様子は見えないが、内海さん達の声を聞く限り、それぞれの課題を反復してるようだ。

インターバルの最中、山本さんが康平達にアドバイスする。

『ブロックした時は、前の手でフックを打ち返すイメージだぞ。
すると、いいバランスでブロックできるからよ。』

次のラウンド、康平は左フックを打ち返すイメージで、ブロックをしてみた。

腰が引けずに、勝手に6・4のバランスが保たれているようだった。
何気無い言葉の1つで、案外コツを掴んだりするものだ。

健太もハマったらしく、フットワークを使わずにブロックだけを使

って康平のパンチを防ぐ。

次のインターバルでは、内海さんが笑いながら話す。

『おいおい、少しはフットワークで避けろよ（笑）

……

まぁ、今日はブロックのコツを掴んだようだから、大目に見てやるがな。』

形式練習が5ラウンド終わった時、康平は内海さん、健太は山本さんとミット打ちをする事になった。

有馬と白鳥は形式練習だ。

内海さん

『康平。さっき俺が言った事、忘れんなよ。

常にグローブの間から相手を見ろ。』

康平は、覗き見ガードで初めてのミットである。

内海さんが右手を上げた。

片手を上げた時は、ジャブを打つサインなのは、梅田先生と同じである。

康平は、左ジャブをすかさず出す。

今までのように、左手を前に出す構えではなく、左肘を体に付けているスタイルである。

左腕の遊びが使えない分だけ、ジャブにスピードが乗らない感じだ。

康平は、サンドバッグ打ちや形式練習でも少し違和感を感じていたが、ミットを打った時、ハッキリと打ちにくさを実感する。

内海さん
『このガードだと、ジャブは打ちにくいだろ?』

康平
『はい。』

内海さん
『左肘を、体に付けてるからな。仕方ねぇんだよ（笑）
左ジャブは、押すパンチでもいいから、しっかり肩を回して打てよ。
そして、左腕の裏側の筋肉を使う事を意識してパンチを出してみろ。』

康平は、もう一度ジャブを打ったが、前より重みが増したような感触が、左拳に残った。

何度か左ジャブを繰り返した後、内海さんが両手を添えて構える。

右ストレートを打つサインなので、康平はそれを打つ。
左ジャブよりは、スムーズに打てるようだ。

ワンツーストレートも何度か打った後、内海さんが康平に、指示を出す。

『次は、ワンツーを打ったら体の捻りを戻さないで、腕だけ戻せよ

……
要は左フックを打つ準備をしていろ。』

内海さんの指示通り、康平は、ワンツーを打った後、右腕だけ戻して左フック打てる体勢を作る。

内海さんの左手が、横向きに上がる。

康平はそこに左フックを打つ。
アッパー気味のフックなので、突き上げると言った方が適切かも知れない。

内海さん
『次は、ワンツーからの左フックをそのまま続けて打つぞ。』

康平は、指示通りに打ったつもりだが、最後の左フックが上手く打てない。
何度か続けたが、左フックを打つのが遅く、パンチも弱い。

内海さんも首をかしげていたが、そのうちラウンド終了のブザーが鳴った。

内海さんはインターバル中考えていたが、ラウンド開始のブザーが鳴った後、康平に話し掛ける。

『康平、お前ストレート系のパンチを少し上向きに打ってみろ。』

康平は、ワンツーストレートを少し上向きに打つ。
不思議にも左フックがスムーズに打てる。
ワンツーを打った直後でも、足が安定しているので、すぐに左フックが打てる感じだ。

内海さん
『いい感じじゃねぇか。
ただ左フックを打つ時に、胸を開くなよ……
いや、背中を広げる感じで打ってみろ。』

ズバーン！

ボクシング場にいい音が響く。

内海さん
『まぁこんな感じだろ。
左フックは、打てば打つ程強く打てっからドンドン打てよ。』

その後、左アッパーや左ボディーブローを交えたコンビネーションを繰り返す。

5ラウンドのミット打ちが終わった。

内海さん
『コンビネーションを打つ時、康平は左のパンチを強く打つのを意識した方がいいな。
その方が連打しても、バランスが安定しそうだからな』

今日の練習が終わり、帰ろうとした康平と健太に、内海さんが呼び止める。

『お前ら、綾香と亜樹ちゃんの４人で映画を見に行くんだってな？』

健太
『はい……知ってたんですか？』

内海さん
『まぁな。綾香の奴は、結構俺に喋るからな（笑）
でも、アイツが俺に男の事を話すのは初めてだったんだぜ。
名前を聞けば、お前らじゃねえか（笑）』

康平
『…すいません。』

内海さん
『ハハハ、謝る事ねぇさ。
オメェらなら、女に縁がなさそうだし、逆に応援してやる気になってるから心配すんな。』

山本さん
『だが気を付けろよ。
男女の関係は、ボクシングなんかより難しいぞ（笑）』

お揃いのサンダル達

日曜日の朝４時、康平は、望んでもいない時間に目を覚ます。

夏休み期間中は、土曜日の練習も午後からなので、朝のジョギングは日曜日を休みと決めていた。

単に目覚ましのアラームの設定を、昨日から変えていなかっただけなのだが、今日は亜樹達と映画を観る約束がある為か、再び眠れそうにはなかった。

トイレに行って、鏡に映った自分の顔を見ると、かなりムクんでいる。

昨日の夕飯でジュースを飲み過ぎたようだ。

康平は、最近ジョギングを始めて、発見した事が１つある。

ジョギングをして汗をかくと、顔のムクミがとれるという事だ。

顔のムクミを除く為だけに、７キロもの距離を走った康平だった。

最近は、朝走るのが苦痛にならないようだ。

家に戻ってからも、待ち合わせの午前１０時までは、タップリ時間があるので、気が乗らないゲームなどをしながら時間を潰していった。

９時５０分頃、待ち合わせの場所に、康平と健太は落ち着かない感じで立っている。

２人共、半ズボンにタンクトップを着ているが、色はそれぞれ違っていた。
健太は、緑色のタンクトップに迷彩色の半ズボン、康平は黒のタンクトップに白っぽい半ズボンである。

今日着る服を、半ズボンとタンクトップしか思い付かなかった２人は、せめて色だけでも違ったものにしようと、前日の夜に軽い打ち合わせをしていたのだ。

待ち合わせの１０時を過ぎても、亜樹と綾香は姿を現さない。

１０分程遅れて、２人は駅に来た。

デニムのショートパンツと淡いピンクのＴシャツ姿の亜樹は、スラッと長い足のせいか大人っぽく、一見大学生のようだ。

クリームイエローのワンピースを着た綾香は、可愛らしさを強調した感じである。

亜樹
『ゴッメーン。色々あって遅れちゃったけど……』

康平

『いいよ１０分位（笑）』

綾香

『私が服に迷ってて、亜樹に付き合ってもらったんだ……ゴメンね。』

健太

『１０分なんか遅れたうちに入んねぇからさ（笑）

……

それより、け…結構似合ってんじゃん。』

綾香

『…あ…ありがとう。

……！

２人とも、サンダルはお揃いなんだね（笑）』

『！！！！！！』

『昨日の夜、タンクトップと半ズボンは同じ物にならないように打ち合わせしたんだけどな。』

康平が苦笑いする。

『このサンダルって、この間、俺と康平の母ちゃん達が一緒にバーゲンで買ってたんだぜ……

あの人達も、せめて違う色のヤツを買ってくれりゃよかったんだよな。』

健太が、ため息をつきながらサンダルの解説をした。

亜樹
『バーゲンって戦場だから、お母さん達も余裕がなかったのよ（笑）』

康平
『バーゲンって、行った事あんの？』

亜樹
『お母さんに付き合って何度か行ったけど、その時はみんな女を捨ててるわね（笑）』

康平は、この前の電話でのオバサンっぽい亜樹を思い出して、少し笑ってしまった。

『何がオカシイのよ。』

気付いた亜樹は、康平を問い詰める。

康平
『いや、…しっかりしてるなぁ…って思ってさ（笑）』

綾香
『ぷっ（笑）。

亜樹って、こんな綺麗でカッコいいのに、たまにオバサン臭いところがあんのよね。』

健太
『完璧な美人よりも、少しオバサンっぽい方が、なんか親しみ易くていいと思うけどな（笑）』

亜樹が苦笑する。

『他の事は分からないけど、オバサン臭いのは否定できないわね。それはそうと、映画は１１時から始まるんだっけ？』

綾香
『そうそう、１４時からも観れるけど、１１時から観る方が、よりお金を使わないで遊べそうだしね。
結構、あたしもオバサン臭いのかもね（笑）』

見知らぬ3人の男

長身でモデルのようにカッコいい亜樹と、ハーフっぽくて可愛い系の綾香は、街を歩いていても、かなり目立つようである。

映画館へ行く途中でも、何人か、こっちを見ている。

一緒に歩いている康平と健太は、どこか勝ち誇った気持ちになりそうになるが、当の本人達は、全く気にしてない感じだ。

映画館は、大ヒット中のアニメの上映だったので、非常に混雑している。

康平と健太も、観たかった映画だったので、他の2人と同様にご満悦だったようだ。

ファーストフードの店で、遅めの昼食をとった4人だったが、綾香が口を開く。

『これから、ゲーセンに行く前に、買い物を先にしようか迷ってんだけど……』

亜樹

『あたしは、どっちでもいいけど……君達は？』

健太
『俺達だって、どっちでもいいよなぁ。』

康平
『あぁ。』

綾香
『じゃあ、買い物を先に済ませるよ。
でも、女の買い物って長いからね（笑）』

近くの百均で、買い物を始めた４人……だったが、康平が脱落しかけている。

今日の朝、４時に起きて走ったのが、今になって響いてきたようだ。
会話に合わせながら、２回程堕ちそうになる。

健太は、ワリと器用に買い物に付き合っていた。

亜樹
『康平、携帯のストラップを買いたいんだけど、君も探す義務があるんだから、チョット付き合って！』

康平
『え？』

亜樹

『君も、私の携帯にお世話になってるんだからさ。』

康平

『…まぁ……それはそうだけどさぁ…』

亜樹

『チョット康平を借りるわね（笑）』

健太

『いいけど、康平のセンスに過剰な期待はしない方がいいぜ（笑）』

康平は、苦笑しながら健太に言い返す。

『ッセ～よ。オメェだって俺と似たようなレベルなんだからな。』

健太は綾香の小物入れを、一緒に探している。

不思議な面持ちで、亜樹について行く康平だったが、携帯ストラップのある場所で、亜樹が話し掛ける。

『康平、今日は朝走るの休みじゃなかったっけ?』

康平

『い…色々事情があったんだよ。』

康平は、目覚ましのアラームの設定し忘れから、ムクんだ顔を治す為に走った事まで、亜樹に説明した。

亜樹

『ぷっ（笑）
顔のムクミを除く為に走る人って、なかなかいないよね。』

康平
『今日は、恥ずかしい程ムクんでたんだよ（苦笑）』

勘のいい亜樹には、下手なゴマカシよりも、正直に話す方がうまくいくようだ。

亜樹
『今日は、早く帰った方がいいのかな？』

『とんでもねぇよ！
健太と綾香も楽しそうだし、俺も帰りたくねぇしさ』

康平は、即座に否定する。

亜樹
『だったら、２人に眠そうな素振りを見せないことね』

キツい口調のわりに、口許が弛んでいる亜樹を見て、康平は少しホッとした。

『誰かと思えば、亜樹じゃねぇかよ！
男連れで楽しそうだな？』

少しイカツイ感じの、３人の男が康平達に近付いてきた。

康平は初対面だが、どうやら亜樹を知っている男達のようだ。

だが、少し険しい表情になった亜樹を見て、康平も緊張する。

大事な親友

真ん中にいる男が、亜樹に話し掛ける。

『こんなところで、会えるなんてな。
男と一緒なんて、久し振りなんじゃねぇ？』

亜樹

『あなたには関係ないでしょ！
まだ中学の事、根に持ってんの？』

『藤枝、オメェ中学ん時、なんかあったのか？』

右側の男が、藤枝という真ん中の男に質問する。左側の男も、不思議そうな顔で藤枝を見ている。
どうやら、藤枝という真ん中の男以外は、亜樹も初対面らしい。

藤枝は、少し慌てて言い返す。

『…ルッセぇよ！
そんな事は、どうだっていいんだよ。
ただ、オメェが付き合う男のレベルが下がっ……！』

藤枝は、康平のタンクトップから出ている肩と腕をみて、話すのを躊躇したようだ。

藤枝

『……なんかやってそうな体だけど、もうすぐボクシングの県で2位だった人が来るからよ。
確かライト級だったな。』

県でライト級の2位といえば、清水先輩と相沢先輩しかいない。
別に会ったところで、戦うわけでもないから、康平は平然としていた。

藤枝
『自信満々な顔してられるのも、今だけだかんな。
なんせ、県で2位だからよ、2位。』

その時、後ろから誰かが藤枝の頭を叩いた。

『2位、2位ってウルセェんだよ（怒）
こっちは、優勝できなくて未だに悔しいんだからよ』

清水先輩である。

『おっ、高田に亜樹ちゃんじゃねぇか？』

康平が頭を下げる。

『こんちはッス！』

亜樹
『浩司さん（清水先輩）、こんにちは。』

康平
『清水先輩の事、知ってんの？』

清水先輩
『知ってるも何も、家が向かいだからな（笑）
でも亜樹ちゃん、高校生になったら一段と美人になっちゃたよなぁ。』

亜樹
『浩司さん！
今のオヤジ臭いよ（笑）』

清水先輩
『ところで、コイツらと何かあったんか？』

『俺達は何もないッスよ。
……俺達は……』

藤枝以外の男2人は、口を揃えて否定する。

亜樹
『藤枝さんに、携帯ストラップを売っている所を案内してもらったんだ。』

康平
『そ…そうですよね藤枝さん！』

藤枝
『あ…あぁ、ただ、ここのストラップって、あまりいいのは置いてねぇんだけどな。』

清水先輩
『ホントかよ……
まぁそういう事にしてやるか（笑）
ところで、高田と亜樹ちゃんは付き合ってんのか？』

康平
『いや……そういうわけじゃないですけど……大事な親友……です。』

その時、健太と綾香がこっちに歩いてきた。

綾香
『亜樹が遅いから心配したんだけど、何かあったの？』

清水先輩
『今度は片桐に綾香ちゃんじゃねぇか？』

健太も挨拶をする。
『こんちはッス！』

綾香
『浩司さん、お久しぶりです（笑）』

清水先輩

『もしかして、４人でツルんでたんか？』

綾香
『はい、兄貴から映画のチケットを４枚もらったんで、私が誘ったんです（笑）』

清水先輩
『俊也さんは、今こっちに帰って来てんの？』

綾香
『はい。梅ッチから頼まれて、ボクシング部の臨時コーチみたいな事してます』

清水先輩
『じゃあ、オメェら俊也さんからコーチを教わってんのか？』

健太
『はい。昨日まで教わってました。』

藤枝
『清水さん！こいつらボクシング部員ですか？』

清水先輩
『そうだけど……！
コイツらの体つきを見りゃあ、想像つくと思うぜ。
まだ鍛え方が足んねぇけどな（笑）』

藤枝の左側の男が、更に質問する。

『俊也さんて、あの内海俊也さんですよね？』

清水先輩
『まぁな。俊也さんは、昔、リング以外でも暴れてたから、有名なんだよな（笑）
…綾香ちゃん、何か言いたそうだけど、どうした？』

綾香
『……いえ、ただ兄貴の悪名は、まだ伝わってるんだって思うと、恥ずかしいです。』

清水先輩
『まぁそう言うなって。
俺もお世話になったんだからよ。
俺らは、これからナンパしに行くからさ。
この藤枝は、性格ワリィけど、女ウケのいい顔してっからな、コイツをダシにしてナンパするつもりさ（笑）
まぁ、亜樹ちゃん、綾香ちゃんクラスの高望みは出来ねぇけどな（笑）』

康平と健太は、
『頑張って下さい。』
と、神妙な顔付きで、清水先輩を送り出した。

親友だからこそ

清水先輩達と別れた康平達は、予定通りゲーセンに向かった。

亜樹と綾香、特に亜樹が浮かない顔をしている。
事情を聞ける雰囲気でもなかったので、康平が話題を変える。

『今日の映画は、前から見たかったんだよな。
俺達、映画館で見んのは、久し振りじゃねぇか？』

健太
『あぁ、2年位映画館に入ってねぇもんな（笑）
綾香達は、結構映画館に行くの？』

綾香
『……え……うん、兄貴がよく映画のチケットをくれるんだよね。
ほとんどアニメだけど。』

健太
『内海さ……俊也さんがアニメを見んのは想像出来ないね（笑）』

康平
『亜樹も、アニメは見ないイメージなんだよな（笑）』

亜樹
『失礼ねぇ（笑）
あたしだって見るわよ。ジャンルによるけどね。
康平が、ラブストーリーを見るより変じゃないよ。』

康平
『そりゃねぇよ（笑）
俺達だって、たまには見るよな？』

健太
『達をつけんな達を！
ただでさえ、一緒のサンダルなんだからよ（笑）』

康平
『オメェ、いつから亜樹の派閥になったんだ（笑）
健太が亜樹と一緒にいると、決まって俺が攻撃を受けるんだよな。』

健太
『俺は、いつだって強い方の味方だからさ。』

亜樹
『何か、褒められているような、いないような……ビミョーな感じだわね。』

綾香
『こういう時こそ、オバサン達を見習って、ポジティブに考えた方がいいかもよ（笑）
あ…ゲーセンに着いたし、プリクラ撮ろうよ。お気に入りのがあるんだ。』

康平と健太は、亜樹達に付き合って、プリクラやクレーンゲームをやっていたが、帰り際は亜樹と綾香の浮かない顔も、心なしか消えているようだった。

家に着き、玄関にいる康平に、妹の真緒が、パタパタとスリッパの音を立てて走って来る。

『兄貴、大変だよ！
今、山口さんて女の人から電話がきてるよ。
凄い落ち着いた感じの声だったけど、一体どうしちゃったの？』

康平
『わぁーったから、今行くからよ……！
アホ、今の声、マルギコエじゃねぇか？』

真緒は慌てて、受話器を外したままにしていた。

笑いながら謝るポーズをする妹を、手で追い払った康平が受話器を取る。

【賑やかそうな家ね（笑）……今、電話大丈夫？】

康平
【あぁ、今はダイジョウ……ブじゃないみたいだ。】

康平のお父さんが、風呂場から上半身裸で、電話のある居間へ向かって来る。

お父さん
『康平、トットと風呂入れよ。
ガス代もバカになんねぇからな。』

康平
【悪いな（苦笑）……、後で掛け直すけど……いいかな？】

亜樹
【いいけど……
ゴメンね、あたしからの電話なのに……】

康平
【いいって、気にすんなよ（笑）】

急いで風呂と夕飯を済ませた康平は、亜樹の家に電話する。

康平
【遅くなって悪いね。うちに電話なんて初めてなんじゃないの？】

亜樹
【……そうね……でも、結局康平が掛ける事になっちゃったけど……】

康平
【いいよ、うちの電話ってメインストリートみたいな場所にあっから、夜8時までは騒々しいんだよね（笑）
ところで何かあったの？】

亜樹
【……綾香から聞いたと思うけど、私が中学の時にビンタしたのは

……あの藤枝って奴なんだ。】

康平
【あぁ、何となくそんな気がしてたよ（笑）
たぶん、それで綾香も浮かない顔してたんだよね。】

亜樹
【……その時、私と付き合っていた1つ上の先輩がいたんだけど、
ビンタされた藤枝が、あることないこと噂を流し始めて、その先輩
も私を避けるようになっちゃったんだ。】

康平
【……そうなんだ……】

亜樹
【あ……でも、その先輩から付き合ってくれって言われて、2回程
デートしただけで別れたんだからね。】

康平
【それは分かったけど……どうして急に……】

亜樹
【えーっと……！！
大事な親友だからよ。今日、浩司さん……清水先輩に康平が言って
たでしょ。】

康平
【あれは…、咄嗟に出た言葉で、なんて答えたらいいか分かんなく
てさぁ…】

亜樹

【親友だからこそ、隠し事はしないようにって、今話してんの。咄嗟に出た言葉かも知れないけど、自分の言った事に責任を持ちなさいよね。

〔ガチャ〕】

最後は、一方的に言われて電話を切られた。

亜樹の照れ隠しのようにも思えたが、確信はない。

山本さんの忠告通り、男女の関係は、ボクシングよりも難しく思った康平だった。

先週の自分にリベンジ

月曜日の部活。
今日は、梅田・飯島、2人の先生がいる。

1年生達は、少し緊張しながら着替えをする。

先週に行った、内海さん達とのスパーリングを再びするかも知れないからだ。
勿論、手加減はしてもらっているのだが……

梅田先生
『お前ら、内海達とスパー（リング）できるか?』

『はい!』

4人は、大きな声ではないが、すぐに返事をする。

梅田先生
『だったら、今回は高田と内海からやるぞ。
シャドー4ラウンド後に始めるからな。』

開始のブザーが鳴り、康平もシャドーボクシングを始めた。

前回のスパーの時よりヒドクないが、両足がフワっとして、体全体に力が入らないような感じになる。

緊張している康平に、隣でシャドーしている内海さんが小声でアドバイスする。

『顎を引いて、ガードの間から相手を見ろよ。』

康平は、鏡で自分自身を、ガードの間から、上目遣いで見るように心掛けてシャドーを再開する。

シャドー3ラウンド目、再び内海さんが康平に囁く。

『ミットでやったパターンを反復しろ。
左は強く打てよ。』

内海さんと山本さんは、康平だけでなく、他の3人にも同様にアドバイスしているようだ。

梅田・飯島の両先生は、気付いているらしいが、何も言わずに見ている。

康平は、ミットで何度も打ったコンビネーションを何度も反復していた。

4ラウンドのシャドーが終わり、康平は急いでスパーの準備をする。

保護具を付けて、開始1分前にリングへ入った康平に、山本さんが

駆け寄る。

『オメェは、今から構えて、ガードの間から俊也を見てるんだ。
そして、頭の中でコンビネーションを反復してろ。
確か、左は強く打つんだよな。』

緊張している康平は、３つしかコンビネーションを思い出せないが、
何度も反復する。

開始のブザーが鳴った。

ガードの間から見える内海さんが、大きくなる。

山本さんが怒鳴る。
『パンチは全部ハズレてもいいんだからな。』

まず、左ジャブを出してみた。

力んでいるのか、自分でも驚く程遅い感じだ。内海さんは、そのまま何の反応もない。
パンチが届かないようだ。

今度は、空振りするつもりで、前に出ながら、ジャブを2発打つ。
内海さんは、康平の右側に位置をズラしながら、左ジャブを打ってきた。

顔に衝撃があったが、痛い程ではない。グローブのせいか、手加減

してくれているのか、たぶん両方であろう。

下を向かないと腹を決めていた康平は、すぐにジャブの後ワンツーを打つ。

ツーである右ストレートを打った後、少し体が泳いでしまった康平に、思わぬ人からアドバイスが……

『ストレートは、もう少し上向きに打つんだろ。』

スパー相手の内海さんである。

前回は、相手がほとんど見えなかったが、内海さんは全く瞬きをしないような感じでこっちを見ている。

集中しているのが、康平にも伝わってきた。

山本さん

『届かなくていいから、左フックまで打てよ。』

康平は、失笑されるのを覚悟してワンツーから左フックを打った。

左フックは、内海さんの遥か手前で空振りしたが、意外な声が聞こえてくる。

『いいぞ高田。その感じでドンドン打てよ。』

梅田先生の声だ。

他にもパンチを打ったが、全て虚しく空を切る。

1ラウンド終了のブザーが鳴り、山本さんの指示を受ける。

『ワンツーのワンをもっと伸ばせ。
それと、踏み込んで左ボディーも打ってみろ。
ワンを伸ばすのと踏み込んで左ボディーだぞ。
空振りしても、いいんだからな。』

2ラウンド目、康平は左を伸ばす事を意識してワンツーを打つ。
ツーの右ストレートを打った後、すぐに左ジャブが打てそうになる。
そのまま勢いで、左ジャブ……というより左ストレートを追撃する。

内海さんもこのパンチは、珍しく右手を使って防いだ。

山本さん
『ようし、そこで踏み込んで左ボディーだ。』

康平はテンパったが、ワンテンポ遅れて左のボディーブローを打つ。
この前習ったばかりなので、打ち出しは遅かった。

とっくに逃げたと思った内海さんの腕に、康平の左パンチが当たる。

わざと康平のパンチをブロックしたようだ。
左の拳に、強い衝撃が残った。
ブロックした内海さんも、少し驚いた表情になる。

山本さん
『ナイスボディーだ。
その調子でパンチを出すんだぞ。』

その後、幾度かパンチを繰り出したが、全て空振りになる。

3ラウンド、内海さんの右ストレートや左フックをブロックの上からもらった。
衝撃で腰砕けになるが、すぐに構え直す。

山本さん
『康平、気にすんな。
ただ、もう少し呼吸を深くするんだ。』

康平
『はい！』

山本さん
『バカヤロ、実戦の時は声を出すんじゃねぇ！
審判に注意されっぞ。』

康平
『はい……あっ！』

内海さんが吹き出す。

山本さん
『いいよ、これも場馴れが必要だからな（苦笑）』

呼吸を意識する康平を、距離をとって待機してくれていた内海さんだが、見るに見かねて口を開いた。

『下っ腹で呼吸する感じだよ。』

言われた通りに呼吸すると、落ち着く感じになる。

呼吸を変えた途端、前より動けるようになり、何度かパンチを出したが、3ラウンド目終了のブザーが鳴ってしまった。

ほっとしたような、物足りないような、不思議な感覚の康平だった。

康平の頭を、グローブで撫でた内海さんが話す。

『先週の試合放棄した自分には、少しリベンジ出来たようだな（笑）』

練習の成果

内海さんは、そのままリングに残って健太の相手をしている。
健太は先週と同様に、開き直って左ストレートを打っていた。
山本さんが、自分もスパーリングの用意をしながら、アドバイスする。

『健太、右フックの返しはどうした?』

健太も、思い出したように右フックまで返す。

山本さん
『ようし、そこで位置を変えるんだよ!』

健太はバランスを崩しながらも右へ位置を変える。

山本さん
『いいぞ健太、今みてぇに無理してでも動けよ。
あとは、右フックの返しを忘れんなよ。』

どうやら健太も、先週より良くなっているようだ。

続いて、山本さんと白鳥がリングに上がる。

開始のブザーが鳴り、白鳥が左のジャブを2発繰り出す。

最近、重点的に練習してきた技……とは、はるかに違っている。

左ジャブを、2発続けて打って1つの技なのだが、スムーズに打てないようだ。

1発目を打ってから、2発目を打つまでの時間が、明らかに間延びしている。

それも、1発打つ度に前にツンノメリそうになるので

（ヨッコラショ）

と、言ってあげたい感じだ。

内海さんも、しきりにアドバイスするが、うまくいかない。

1ラウンドが終わった時

『梅田先生、飯島先生、次のラウンド好きにさせて貰っていいですか？』

山本さんが、2人の先生にお願いした。

梅田先生

『いいよ、いいよ。

今日は、お前らの好きにやっていいぞ。』

飯島先生

『この1週間は、オメェラが顧問だったからな（笑）』

両先生は、最初からそのつもりだったようだ。

ラウンド開始のブザーが鳴る。

山本さんは構えないで白鳥に教える。

『ジャブを打つ時、後ろ足で思いっきり蹴ってみろ。翔の場合、ジャブ2発を打つ時は、肩の回転より後ろ足の蹴りだぞ。』

内海さん

『康平みたいに、少し上向きに打たせた方がいいんじゃねぇか？』

山本さん

『そうだな。

翔、このラウンド、俺は一切パンチをださねえから、ジャブ2発だけを、打ってみろ。

後ろ足の蹴りと、パンチは上向きだぞ。』

白鳥は、何度か山本さんに向かって打っているうちに、つんのめるような感じはなくなっていった。

3ラウンド目、最初のラウンドと同様にスパーリング形式に戻る。

白鳥は、いい感じで2発のジャブを打っているようだ。全て空を切ってはいたか……

ただ、距離が近くなると、白鳥も打ち易そうで、右ストレートと左フックを思いっきり打っていた。

次は有馬の番になるが、山本さんが手を抜いてくれるのを分かっているからか、積極的にパンチを出す。

ただ、さんざん練習した肝心の左ジャブが1発も出ず、大振りのパンチで前に突っ込んでいく。

有馬よりも背の低い山本さんが、足を使って距離をとる始末だ。『おい、ジャブはどうしたんだジャブは！』

内海さんが、有馬に呼び掛ける。

有馬は、無視して……というより、テンパっているようにも感じられる。

ラウンド開始から1分半を過ぎても、有馬が突っ込んでいく状態が続く。

『テメェ、いい加減に……』

業を煮やした内海さんが怒鳴ろうとした時、逃げ回っている山本さんが、右手で遮るゼスチャーをした。

そして、有馬の大振りの右パンチをかわして左のパンチを有馬のボディーに軽く打ち込む。

有馬は、ウッ…と声をあげて右膝を床についた。

山本さん

『オメェから近づき過ぎっと、こんな感じでパンチをもらうんだよ。』

煙でも吸ったかのように、少し咳き込んでいた有馬だが、ラウンド終了のブザーが鳴った時、少し落ち着いたようだ。

内海さん

『俺と賢治が見たいのは、そんなボクシングじゃねぇんだよ。この1週間やってきた練習の成果を見てぇんだ。』

失敗を忘れろ

ウナダレながら内海さんの話を聞いていた有馬に、山本さんが質問する。

『お前、テンカウント前に立ったよな。次のラウンドはやれるか？』

有馬
『え？』

山本さん
『「え」じゃねぇよ。
やれるのか……って、俺が訊いてんだ。』

有馬
『あの…でも、さっきはテンパってしまって……』

内海さん
『オメェ、賢治（山本さん）の質問の答えになってねぇよ（笑）
まぁやれそうだし、次のラウンドからいくぞ。』

内海さんの話は続く。

『タケ（有馬）、さっきのラウンドの事は忘れて、次のラウンドに集中しろ。先週からオメェが練習した事は何だ？』

有馬

『肩を入れた左ジャブを、狙わないで打つ事です。』

内海さん
『分かってるじゃねぇか。
前のラウンドがどうとか、倒そうとか、余計な事は考えんな。
とにかく、練習してきた技を、実行する事だけに集中しろ。』

2ラウンド目開始のブザーが鳴る。

内海さん
『オメェのやる事はなんだ?』

有馬
『肩を入れた左ジャブを、狙わないで打つ事です。』

内海さんが、有馬の尻を軽く叩いて送り出した。

『よ~し、いってこい。』

有馬が左ジャブを出す。
ミットで打つ時と、同じような打ち方である。

内海さん
『いいぞ、タケ!やれば出来んじゃねぇか。』

褒められた有馬は、次々と左ジャブを繰り出した。全て空振りではあったが……

内海さん
『空振りでもいいんだタケ、離れた距離でずっとジャブを打てたらお前のペースなんだからな。』

1度褒められた後の有馬は、ドンドン調子が上がっていく。

3ラウンド目になっても、有馬の動きはいい。
ただ1分過ぎになると、左腕が疲れたのか、ジャブの数が減ったようだった。

この2ラウンドの間、山本さんの左ボディーを2度と食らいたくないのか、右パンチを打つ時以外、有馬の右腕が胴体から離れる事はなかった。

この日の練習が全て終わり、梅田先生が1年生達に説明する。

『内海と山本が、お前達の練習に付き合うのは、今日で最後だ。かなり勉強になったと思うから、今ここで全員でお礼をしろ。』

『有難うございました。』

4人は、心の底からお礼をし、深すぎる程頭を下げる。

内海さんと山本さんは、照れているのか、1年生達から視線をそらしていた。

飯島先生
『お前達も照れてねぇで、なんか一言ずつ言って帰れよ。』

『え、マジっすか？』

と言いながら、山本さんが前に出る。

『お前達は、今日練習の成果を出してくれたんで、大変嬉しく思う。梅田先生と飯島先生……そして、自分が真剣に頑張った練習を信じていけば、おのずから結果もついてくる筈だ。頑張れよ！』

『こういうのは、得意じゃねぇんだよな』

内海さんは、苦笑いしながら1歩前に出た。

『あまり偉そうな事は言えないが、俺なりに思っていり試合の心構えを、オメェらに伝えておく。
試合中に失敗やミスをしても、すぐに忘れろ。
気持ちを切り替えて、とにかく、今時点での最善を尽くせ。
すると奇蹟が起きる……かも知んねぇからよ。』

飯島先生
『内海が言うと説得力があるな。』

内海さん
『なんですか急に？』

飯島先生
『だってそうだろ。お前が高校の時、よく問題を起こして梅田先生にぶん殴られていたが、失敗した事を忘れるから、何回も繰り返してたんだよな（笑）』

山本さんが1年生達に説明する。

『俊也は、昔、暴れてたからよ。ヒデェもんだったぜまったく（笑）』

内海さん
『テメェ共犯者のくせに、なに善人ぶってんだよ。』

梅田先生
『とにかくお前らは、暴れた後に最善を尽くさなかったから、奇蹟は起こらないで、俺にぶん殴られた訳だ（笑）』

康平達1年生は、普通に笑って話す梅田先生を、初めて見た為か、少し戸惑い気味だった。

ラリアット攻撃？

内海さん達とのスパーリングが終わった次の日からは、お盆の為、練習が５日間休みになった。

この５日間は、親戚廻りや町内会の行事等で、あっという間に終わり、再び練習を再開した。

練習を始めて、鏡の前でのシャドーボクシングを４ラウンド終えた時、梅田先生が１年生達を呼ぶ。

『今から俺が、ラリアットを食らわすから、お前達は横に動きながら避けろ。まずは有馬からだ。』

ラリアットは、腕を伸ばして、上腕で相手の顔を狙うプロレス技である。

ボクシングなのになんで……

４人は、意味不明な指示に戸惑いながらも、返事をしないと怒られるので、大きく返事をする。

有馬は梅田先生とリングに入る。

梅田先生
『俺が左のラリアットをしたら、体を沈ませながら右に動け。右のラリアットは逆に動いて避けろ。』

梅田先生が、ゆっくりではあるが、本当に左腕でラリアットをする。

有馬は、頭を下げながら右に動いてかわす。

梅田先生
『下を向くんじゃねぇ。膝を使って、上半身を立てたまま、体を沈めるんだよ』

飯島先生
『アマチュアボクシングは、ルールが厳しくてな、前足より前に頭があると、すぐに注意されるんだよ。』

もう1度、梅田先生が左のラリアットをする。
今度は上手く動けたようで、梅田先生は何も言わない。

次は、先生が右のラリアットを放ったが、これも上手く避けたようだ。
思ったよりも低い高さにラリアットがくるので、康平は膝を深く曲げながら大きく左へ動く。

左のラリアットは、逆の動きでかわす。

顔にラリアットがくるというより、肩を狙われているような感じだ。

早く体に憶えさせる為に、オーバーに動かさせるようだ。

何度かかわしていた康平だったが、次のラウンドに不意打ちを食らった。

飯島先生の右のラリアットを避けながら、左へ動いた康平だったが、避けたハズの右腕が、裏拳のような形で、突然康平の顔面に戻ってきたのだ。

裏拳は、バックハンドブローと言って、ボクシングでは反則である。

軽く顔を叩かれたので痛くはなかったが、予想外の事に康平は不思議そうな顔をした。

『アホ、ガードが下がってんだよ。』

飯島先生が、笑わずに言う。

頭の位置を変えると、ガードが疎かになるのは、結構犯しやすい。

口で言われるよりも、実際軽くても叩かれた方が、印象に残るし覚えが早い時がある。

康平も、それ以降はガードが下がらなくなった。

ラリアット攻撃をかわす練習が終わり、次は、サンドバッグ打ちとミット打ちへと移行する。

ミットを受けるのは、2人の先生しかいないので、余った2人はサンドバッグを叩く。

他の高校では、生徒同士でミット打ちをするところもあるが、永山高校では先生しかミットを持たないようだ。パンチを打つ筋肉と、ミットを受ける筋肉が違うという理由らしい。

最初は、有馬と白鳥がリングに入ってミット打ち、康平と健太がサンドバッグを打っていた。

4ラウンド後、康平達がリングに入りミット打ちを始める。

ミットでパンチを打ち始めた途端、何故か康平が飯島先生からミットで頭を叩かれた。
そして、先生は水道の蛇口で顔を洗っている。

次に、説明しながらミットを受けている梅田先生も、いきなり健太の頭をミットで叩き、水道の蛇口でウガイを始めた。

飯島先生は、康平の汗を顔全体に浴び、梅田先生は説明している最中に、健太の汗が口に入ったようだ。

康平と健太は、いつもは3着持ってきている替えのTシャツを、休みボケのせいか、忘れてしまったのだ。

夏の練習は、とにかく汗が出る。流れ出る汗の為に、康平と健太のTシャツはビショビショで、体にヘバリついていた。

梅田先生
『片桐と高田、お前らは形式練習を4ラウンドだ。』

康平と健太は、梅田先生の逆鱗に触れたようだ。

形式練習を始めた2人。
お互いのパンチは、完璧にディフェンスしていたが、後から襲い掛かってくる、ビショ濡れのTシャツから飛び散る汗は、まともに浴びていた。

明日からは、替えのTシャツを増やそうと思いながら、相手の第三のパンチ、＝　汗　を浴び続ける康平と健太だった。

金欠？

形式練習で散々な目にあった康平と健太だが、練習が終わり、駅で帰りの電車から降りコンビニの前にいた。

2人は、部活が終わる度に、駅前のコンビニでジュースを買って飲み、古本屋で立ち読みをするのが日課だった。

部活が終わった直後は、ワザと少ししか水を飲まず、電車の中でも、喉か乾くのをグッと我慢する。

そして、ここのコンビニで安くて大きいパックのジュースを買って、一気に飲み干す。

冷たいジュースが体に染みわたる快感は、堪えられないものだ。

あまり遊べない夏休みをおくる康平と健太が考えた、ささやかに幸福を感じるイベント（？）だ。

ただ今日は、康平がコンビニに入ろうとしない。

健太が、不思議そうな顔をして訊ねる。

『康平、どうした。ジュース買わねぇのか？』

康平が、歯切れが悪い口調で答えた。

『カネ…が、足りねぇんだよ。』

健太が更に不思議そうな顔をする。
『お前、ジュース代は毎日貰ってるんじゃなかったっけ？』

康平
『チゲェよ、…その……誕生日プレゼントのだよ！』

健太は、２週間程前に亜樹の誕生日を、自分が勝手に聞き出した事を思い出す。

『あぁ、あれね。でも亜樹は、無理しなくていいって言ってたんじゃねぇの？』

『そうはいってもな……日頃、助けられてんし……第一お前が本人の前で、誕生日の事を聞くからだぞ。』

康平は、シドロモドロだったが、最後は一気に捲し立てた。

『そういう康平の、生真面目なところは、僕も好きなんだよねぇ。……
今から、家に来いよ。姉ちゃんもいるからさ。ちょっと相談してみようぜ。』

反省したソブリこそないが、健太なりに責任を感じているようだ。

健太の家は、商店街の並びにある定食屋だ。

康平は、健太と一緒に居間に上がった。
午後６時を過ぎたばかりで、店は刈り入れ時の為か、誰もいない。

『ちょっと待ってろ。姉ちゃんを探してくっからよ。あ……冷蔵庫の麦茶、勝手に飲んでいいぞ。』と言い残して、健太は2階へ上がっていった。

健太の家の中は、雑然としていて、大雑把に片付けられている。忙しいのもあって、洗濯物も、タタマないで隅に寄せている。

逆に、気を遣わないのでいられるので、康平にとっては心地いい空間のようだ。

麦茶を飲んだ後、疲れが出たのか、アグラをかいたまま、丸いチャブ台に両肘をついて眠ってしまった。

5分程したであろうか、康平は背中に柔らかい重みを感じて目が覚める。

『康平、珍しいじゃん。うちに来るなんてさ。』

康平の背中に、健太の姉さんが座っていたのだ。

彼女の名前は、真由（まゆ）さんといい、康平の2つ歳上の高校3年生だ。

天真爛漫な人で、少しタレ目で愛嬌のある顔と、世話好きで、面倒見がいい性格から、男女を問わず友達が多い。

康平は、背中に感じる柔らかい感触が気になる。

『真由さん……頼むから降りてクンネェかな。』

『あたしは、座り心地いいんだけどな。』

と言って、康平の背中から立ち上がった真由さんは、マラソン選手のような、短パンとランニング姿だ。

康平は、グラマーな体型をしている真由さんを、直接見ることができずに下に視線を逸らしていた。

『姉ちゃん、探したんだぜ。』

2階に上がった筈の健太が、台所の勝手口から入ってきた。かなり探していたようだ。

『え……あんた達、あたしが目当てだったの。

真由さんは、ワザとらしい言い方で、恥ずかしそうにした。

『チゲぇよ、康平が誕生日に贈るプレゼントの事で、相談したかったんだよ。』

健太が、真由さんのオフザケを遮り、本題を切り出した。

『ん……プレゼント?』

健太の言葉に真由さんは、アグラをかきながら身をのり出した。
どうやら、彼女の世話好きな心を刺激したらしい。

康平は、照れながらも経緯を話す。
そして、金欠なことや、プレゼントは、何を買えばいいか分からない事も相談した。

『……大体話しは分かったけど、小遣い貰えるのは月ハジメじゃないの？』

康平の話を聞いて、真由さんが質問する。

康平が残念そうに言う。

『うちは１０日なんだよな。』

健太がすぐに切り返す。

『亜樹の誕生日は、９月９日だろ。だったら５日位早めに、前借りすりゃいいんじゃねぇの？』

『そうすっかな……それと、プレゼント買いに行くときは、真由さんから選んで欲しいんだけど……いいかな？』

康平も、健太に賛同したらしく、ついでに、もう１つの悩みも相談した。

真由さんは、しばらく思案していたが、何か思い付いたようだ。

『康平……今日、コンビニでジュースを買わなかったから、１００円は貯まったんだよな。』

アグラをかいているせいか、何故か男の口調である。

『え……まぁ、そうだけど…』

既に、小遣いを前借りするつもりでいた康平は、意表を突かれて曖昧な返事をした。

『今から毎日、１００円ずつ貯めていけば、誕生日の少し前までは、結構いい物が買えるかもよ。』

真由さんの言葉に、健太が反論する。

『そりゃねぇよ姉ちゃん！

俺達、今年の夏休みは、あんま遊べなくて、あのジュースだけが生き甲斐みてぇなもんなんだぜ。』

多少オーバーだが、あながち嘘ではない。

『モトはと言えば、健太が悪いんだから、アンタも康平に付き合うんだね。』

真由さんは、健太に対しては容赦がない。

康平は、さっき答えてもらえなかった相談を、もう１度真由さんに

する。

『仮にお金が貯まったとして、買い物する時は、真由さんも一緒に買ってくれるんだろ。何を買えばいいか、わかんねぇよ。』

『甘ったれんじゃないよ。』

急に語気が荒くなった真由さんに、康平と健太は茫然とする。

『苦労もしないで選んだプレゼントなんて、亜樹さんてコが可哀想だよ。』

アグラを組み直して、真由さんは2人を諭すが、その仕草がヤケに男らしい。

『……』

沈黙する2人に少し同情したのか、真由さんはヒントを与えた。

『まぁ、あげるとしたら、身に付けないものがいいかもよ。』

健太

『え……何で？』

『身に付ける物だと、プレゼントした人の前で付けていないと、気まずいんだよね。
その点、部屋に置く物だったり、飾っておく物だったら、気に入らなければ押し入れにしまっとけばいいからさ。』

悪びれもせずに話す真由さんを見て、

『何かズルいね。』

康平が、ぼそっと口にした。

『何言ってんのよ、迷惑なプレゼントあげるより、よっぽどマシだよ。
……でも、そのコの事好きなんだろ?』

真由さんに訊かれた康平は、顔を赤らめる。

『いや、まだ…ハッキリわかんねぇけど……、でも本気でお礼はしたいと思っているよ。』

『照れてんじゃねぇよ（笑）』

健太が茶々を入れるが、真由さんは笑わない。

『康平は、きっとジックリと、人を好きになるタイプなのかも知れないね。
まぁ、ここは男の見せ所だから、しっかりやんなよ』

彼女はそう言い残して、自分の部屋に戻っていったが、知らず知らずの間に、正座になっていた康平と健太だった。

水筒作戦

次の日、練習に行く途中で健太に出くわした。

康平
『昨日の真由さん、違ったよな、なんか男らしかったぜ。』

健太の話によると、真由さんは、古い時代劇の捕物帖をレンタルで借りて、ずっと見ていたらしい。
確かに、立派な親分だった。

健太が、不思議そうな顔をする。
『そもそも、お前は何で金欠なんだ……盆休みの時、ゲーセンでも行ったのか？』

バツが悪そうに康平が答える。
『……1回行ったよ。』

健太
『1回だけか……あんまり金は使わねぇよな。じゃあ、何に使ったんだ？』

康平は、恥ずかしそうに白状した。
『いや、そこで二千三百円を使ったんだよ……ただ勘違いすんな

よ。１５面クリアすると、好きな月の誕生石がついた、携帯ストラップが貰えるゲームにつぎ込んだんだからな。』

『あぁ、あのゲームね。あれは、１５面クリアした人は、ほとんどいないらしいぜ。

……

それに友達の話だと、あのストラップは、デパートで普通に千円位で普通に売っているらしいぞ。』

健太は珍しく、茶化したりしないで、同情している。

康平

『……』

健太

『亜樹へのプレゼント……の為だったのか？』

康平は、力無く答える。

『……あぁ……』

『元気出せよ。もうすぐ練習なんだからさ。

気持ちを切り換えねぇと、またミットで、頭を叩かれるぜ。』

わざとらしい程、大きな声で康平を励ます健太だった。

その日の練習は、昨日と同じように、ラリアット攻撃をかわす練習がメインだった。

練習が終わり、学校の生ぬるい水道水を、タラフク飲んだ康平と健太は、帰路についた。

帰りの電車の中で、健太が口を開いた。

『康平、携帯ストラップをプレゼントしたいんだったら、少し金を貯めれば買えんじゃねぇの？』

康平が、反省しながら答える。

『いや、携帯ストラップはやめとくよ……ゲームで二千三百円使った後に思ったんだが、景品でプレゼントするのは、チョット…な。

今は、何をプレゼントするかは、白紙の状態だよ。真由さんも、身に付けない物がいいって言ってたしな。』

健太

『俺も、姉ちゃんのシタタカな性格は、いつもながらスゲェと思ってんだけどさ。そういえば康平って、ジュース代はいくら貰ってるんだ？』

康平
『いつもは１００円だけど、図書館に行く時は２００円だよ。図書館へ行くと、母さん機嫌がいいんだよな。』

健太が、思案する。
『……明日から、図書館へ水筒を持って行けよ。但し、康平は家の人に見つかんなよ。ジュース代貰えなくなっからさ。
……康平１人だと、危なっかしいから、俺も水筒持って付き合うからよ。』

『オメェは、宿題半分も終わってねぇから、どっちみち行かなきゃなんねぇんだろうが』

突っ込みを入れながら、心の中で、水筒持参を付き合ってくれる健太に、康平は感謝した。

家に着いた康平は、麦茶のパックの位置を確認しようとしたが、どこにあるか分からない。

冷蔵庫にある麦茶は、結構な量だったが、無理して全部飲んだ後、母さんに訊く。
『麦茶無くなったけど、どこにパックがあんの？俺が作るからさ』

母さん
『え、結構あった筈なんだけど……パックは食器棚の左上の扉を開けるとあるわよ。』

パックは、水に入れたままでも麦茶が出来るものだったので、康平も安心した。
水筒の場所は、階段の下の物置に入っているのを分かっていたので、問題はない。

夜８時過ぎ、康平は亜樹へ電話をする。

【明日、亜樹は図書館へ行くの？】

亜樹
【行くけど、康平は宿題終わったんじゃないの？】

【いや、今後の為に勉強することは大事だから、明日も図書館へ行こうと思ってさ。】
康平は、明日２００円を確実に貰う為、居間にいる母さんに聞こえるように、少し声を大きくした。

亜樹
【何か怪しいけど……まぁいいわ。明日は、綾香も来るようだし、君が来なくても明日はいるよ】

次の日の朝４時、康平は静かに階段の下の物置から、水筒を持ってくる。

急いで麦茶を作ろうとして蓋を開けた瞬間、康平は唖然とした。

ずっと使っていなかった為か、中にカビが生えていたのだ。
急いで中の掃除をする。水筒の中のカビは簡単にとれたが、水筒の飲み口は、少し複雑な形をしていて中々とれそうにない。

『それは、ボールの中に水と漂白剤を入れて、1時間位漬けておけば、とれるわよ。』

困っている康平に、横から母さんの声が……、康平は、更に困った顔になる。

母さん
『昨日の様子が、不自然だったから、様子を見に来たのよ。
ジュース代をあげているのに、なんで水筒を使うの?』

『あ……それは……その……』
康平は観念して、正直にプレゼントの為、ジュース代を貯める事を話した。

『これは、母さんと康平の秘密ね。父さん達に見つかったら、ジュース代は出さないから、見付からないようにするのよ。』
母さんは、苦笑いしながら言った。

水筒の飲み口を、水と漂白剤の入ったボールに入れて、康平は走りに行った。

帰った後、ボールに入っている飲み口を見ると、カビは綺麗にとれ

ている。

早速、麦茶のパックを水筒に入れようとしたが、入りきらない。

仕方なく、冷蔵庫の中にある容器に入っている麦茶を水筒に移し替える。

トクトク　トクトク

麦茶の入っている容器は、口が小さい為、意外と大きな音がする。

その時、新聞を片手にトイレに行こうとしている父さんに見付かってしまった。

父さん
『お前、ジュース代を貰っているのに、何で水筒なんか用意してんだ？』

康平は、絶望した表情で正直に訳を話す。

父さん
『……
この話は、母さんには内緒だな。母さん達に見付かったら、ジュース代は無くなるからな。』

水筒を用意して、初日から父さんと母さんにバレた康平だったが、何とかジュース代を貯める事は出来そうである。

健太の動揺、そして康平も……

康平は、水筒を持って図書館へ向かう。

健太の大きなバッグにも、水筒の形が浮き出ている。

健太は素朴な疑問が沸く。

『俺は、宿題をやっつけるけど、康平は本当に勉強すんのかよ？お前、とっくに宿題終わってんだろ。』

『……』

康平自身も、迷ってしまった。

『大丈夫だって！俺が何とかするからよ。』

健太が、笑いながら話す。

健太がこのセリフを言う時は、大抵アテにならない事を、康平は過去の経験で、よく知っていた。

図書館に着くと、亜樹と綾香がいたが、亜樹が疑いの眼差しで康平を見る。

『健太が、宿題をしにきたのは分かるけど、康平は本当に勉強しに来たの？
昨日の電話から何か怪しいのよね。』

まさか、２００円を貰う為に、図書館へ来たとは言うわけにもいかず、少しだけ期待して健太をチラッと見る。

健太は、綾香の前だと、まだ緊張するようで、残念ながらアテにならないようだ。
今まで、康平に茶々を入れると、綾香の前でも自然体に戻れる感じなのだが、まだ今日は、口が滑らかな状態ではない。

康平が、何て言おうか迷っていると、綾香が口を出した。

『可哀想だよ。きっと健太に付き合って、ここに来たのよね。』

『そ……そうだよな、健太
』

咄嗟に、相槌をしてしまった康平だったが、
心の中で健太に謝罪した。

康平に付き合ったのは、健太の方である。綾香にとっては、健太が情けない立場になってしまったのだ。

『まぁ、そういう事にしときますか。
……
時間が勿体ねぇし、トットと始めようぜ。』

健太は、妙に早い動作で、勉強机に向かって歩いていった。

４人が一緒に勉強できる机を探して、健太は黙々と宿題に取り組んでいる。

健太が気になり、ノートを開いてシャーペンを持ってはいるが、３０分以上たってもノートは白紙のままだ。

『康平は、歴史のマンガで勉強した方がいいんじゃない？』

亜樹は、少し呆れ顔で言う。

ここの図書館には、歴史のマンガ本を置いてある棚があり、康平は、亜樹がいない時によく立ち読みしていた。

更に３０分程経つが、康平はその間トイレに行ったり、勉強する科目を変える為に、２回程、バッグから本の出し入れをするが、勉強そのものは全く行っていない。

『同じ机に、やる気のない人がいると、少し迷惑なのよね。
いくら健太に付き合ってるっていっても、ヒドイんじゃない？』

今度の亜樹は、少し怒っている。

『それは違うよ。』

康平は、即座に否定した。
少し声が大きかったようで、周りの人が一斉に康平を見る。
図書館のオバサンも、右手の中指で眼鏡を軽く持ち上げ、こっちを見ている。
康平は、四方にペコペコ頭を下げているが、康平以外の3人は、頭を低くして康平だけが目立つようにしていた。

『何やってんのよ、もう』

亜樹が声を殺して、康平を叱る。

『……ゴメン……』

康平は謝った後、健太の名誉を回復する為に、２００円を貰う為に図書館へ来た事だけでも、話すつもりになっていた。
勿論プレゼントの事は、内緒にするつもりだったが……

『ぷ……怒られてやんの』

健太が、笑いながら康平をからかった。

『康平は、笑われてんのにナンカ嬉しそうね。』

綾香もクスっと笑う。

健太が口を開いて、ホッとした康平は、顔に出てしまったようだ。

健太

『ちょっと休憩しようぜ』

『そうね。今日、健太は宿題頑張ってたから、休憩を希望する権利があるわね……康平にはないけど…』

亜樹も同意した。

康平と健太は水筒を持ち、亜樹と綾香は小さなペットボトルを持ってロビーへ向かった。

綾香

『2人共どうしたの？水筒なんか持っちゃって……』

『あ…その……実はさ…』

康平は、さっきのように、２００円の事をバラすつもりでいたので、そのまま白状しようとした。

『俺達盆休みの時に、無駄金遣ったんだよな。』

『ん？……あぁ…』

健太の横槍に、康平は思わず頷く。

健太

『話は変わっけど、図書館に誘ったのは、俺じゃなくて康平の方なんだぜ！

亜樹達と、勉強するのが楽しいんだってさ。』

『！！！！！』

康平は、言ったようで記憶が無い健太の言葉に、動揺した。

『そうなんだ。今日の康平を見ると、全くもって信用出来ないんだけどね。』

亜樹は、人が悪いような笑い方で話す。

健太は、平然としている。

『でも、コイツがこの時期に宿題終わるって、ありえねぇ事だしさ。それに、俺と康平が家で勉強すると、３０分が限度だしね。あとの何時間かは気分転換……ていうか、現実逃避しまくりなんだよな。……』

康平も、ここでの勉強は楽しかったんだろ？』

『……勉強自体は、まだ好きになれねぇけど……ここは楽しかった……と思うかも……』

康平が、自信なさげに言った。

綾香が笑う。

『亜樹といるのが、そんなに楽しかったんだ。』

『……康平、数学の教科書持ってる？君が本当に勉強が好きで、ここに来れるようになるまで、今から苦手な数学をミッチリやるわよ。明日からもよ……分かったわね』

亜樹は、持ってきたペットボトルをほとんど飲まずに机に戻って行った。

その日、亜樹に散々しごかれた康平は、いつもより勉強が辛く感じてしまっていた。

図書館での勉強が終わり、部活へ向かう途中に健太が口を開く。

『……最初は悪かったな。綾香に、お前が俺に付き合って図書館へ来ているって言われて、動揺しちまったんだよな。
自分から、同じ事を言うつもりだったのによ。』

康平

『いいよ、俺も咄嗟に相槌打っちまったしさ。
でも、最初はテンパっていて、途中からいつもの健太に戻ったけど、何か吹っ切れたのか？』

健太

『お前が、亜樹に怒られた時から調子が戻ったんだよ。やっぱ康平というイジラレキャラがいねぇと駄目だな。
それはそうとお前、２００円の事を白状しそうだったな。』

『え、何で分かったんだよ？』

驚く康平に、健太が笑って話す。

『康平って、ホントに分かり易いんだよな。
でも、ジュース代２００円の事は話さなくてよかったよ。
セコいお金で買ったプレゼントは、貰った亜樹も複雑な気持ちにな

っちまうからさ。』

右ストレートボディー打ち

夏休みも残り１０日となったが、図書館での苦手な数学の勉強、学校ではボクシング部の練習と、ハードな毎日が続く康平である。

彼は、いっそ、学校が始まってくれれば……と思ったが、鬼のような言葉と裏腹に、髪を掻き上げながら熱心に教えてくれる亜樹の横顔を見て、ドキリとする康平だった。

この時の自分の顔が、どの位だらしなくなっているか、想像すると恥ずかしい気持ちになっていた。

ソフト面（頭脳）のトレーニングが終わり、午後3時からは、ハード面（体）のトレーニングに移る。

『練習お願いします！』

と、大声を出して練習場に入る康平に、鬼のような言葉そのままに、鬼のような顔の梅田先生が椅子に座っている。

今日は、いつもより涼しいからか、少し機嫌がいいようだ。

梅田先生が冗談のような感じで、康平に話し掛けた。

『高田、今日は涼しいから、その分練習は厳しい方がいいだろ？』

この人が、悪い方の冗談を言う時は、大抵事実になってしまう。

現に練習を終えた3人の2年生達は、精魂尽き果てたような感じで、柔軟体操をしている。

『あ…いや……今日もお願いします！』

康平は、言葉を濁し、顔を見られないように、深々と頭を下げて更衣室に小走りで駆け込んだ。

この時の自分の顔が、どの位絶望的になっているかは、想像すらしたくない気持ちの康平だった。

練習が始まり、いつものように、シャドウボクシングを始める。

ブロッキングや、ラリアットを避ける動きを混ぜながら、習ったパンチを繰り出す。

習ったパンチといえば、1年生達は2日前から、新しくパンチを習っていた。

右ストレートのボディー打ちである。

このパンチは、右ストレートと撃ち方は同じだが、先生は、ラリアットを避ける時と同じような低い姿勢で打つ事を、しきりに強調していた。

尚、健太の場合は左ストレートである。

シャドウ6ラウンドを終わったが、今日は、連日のようにラリアット攻撃を避けるラウンドがない。

梅田先生

『高田と片桐は、リングへ上がれ！

高田は飯島先生、片桐は俺とミット打ちをするから、急いで準備しろ。有馬と白鳥は、サンドバッグを打っていろ！』

リングに上がった康平達は、早速ミット打ちを始める。

先生が、片手を顔の近くに上げた。

左ジャブを打つ。

両手を重ねて喉の前で構える先生に、右ストレート！

両手で構える先生に、ワンツーストレートを打つのは、今までと変わらない。

今度は先生が、左手を前に伸ばし、右の脇腹辺りに、右手で構えている。

戸惑う康平に、飯島先生が説明した。

『この構えをした時は、右ストレートボディーだ。俺の左手をくぐりながら打てよ。』

右ストレートボディーを打とうとする康平は、飯島先生の左手が邪魔で、打ちにくそうである。

脚に負担を感じながらも、何とかパンチを打った康平だが、体を起こした途端、後頭部に衝撃があった。

前に出している飯島先生の左腕にブツカったのだ。

『アホ！打ち終わったら、戻る時も、俺の左腕をかいくぐるんだよ。』

ラウンド終了のブザーが鳴り、康平は、飯島先生に質問する。

『右のストレートボディーは、強いパンチが打ちにくいんですけど……』

『そのパンチを打つと、顔面がガラ空きになって、打たれ易くなる

から、我慢しろ。当てる事よりも、まずは打たれねぇ事なんだよ。
……
優秀な泥棒はなぁ、盗む事よりも、まずは逃げる事を第一に考えるんだよ。』

飯島先生は、分かり易いように喩え話を使ったらしいが、康平は逆に悩んでしまった。

（先生は、泥棒の経験があるのだろうか……）

喩え話はともかく、打ちにくい姿勢から打たなければいけない理由が分かったので、あえて突っ込まないで返事をした。

次のラウンド、ミット打ちを再開した。

また飯島先生が、左手を前にして構える。
打ちにくい姿勢を我慢しながら、先生の右の脇腹にあるミットに、右ストレートボディーを打ち込む。

パスッ！

シケたミットの音。

そして、飯島先生の左手にぶつからないように体を構えに戻す。

『いいぞぉ。ミットの音なんか気にするな！』

悲しい位に威力がないパンチなのだが、とりあえずはこれでいいようだ。

ホッとする康平に、いきなり右のラリアットが飛んできた。ユックリ打ってきたので、習った通りに避けられたが、先生は右の耳辺りに左手を添えている。

『ここに左フックを打つんだよ』

先生に言われたように、左フックを放つ。

安心する間も無く、先生の左ラリアットが襲ってきた。それを右側にかわした康平たが、今度は先生が左の頬の前に右手で構えている。

『これは右ストレートだ』

こうして、ラリアットを避けるだけでなく、反撃するトレーニングが始まった。

パンチではなくラリアットだが、避けて反撃する。

続けていくうちに、まるでボクシングをしているような感覚に浸った康平であった。

その後、梅田先生の冗談に嘘偽りはなく（？）、サンザンしごかれてノビている康平達に、先生から一言。

『これからは、今日みたいな返し技も教えていくから楽しみにするんだな。』

迷える贈り物

夏休みも残り1日となったが、康平は3日前に宿題が終わった健太と、彼の部屋でゲームとマンガ三昧の1日を送っていた。

今日は日曜日なので、部活も休みなのである。

マンガを読みながら、健太が康平に話し掛けた。

『そういえば康平、お前イクラお金貯まったんだ。』

『ん？3千円近くは貯まったんじゃねぇか。』

ゲームをしている康平は、中ボスを相手に苦戦していて、他人事のように答える。

『亜樹の誕生日が9月9日で、今日は8月31日で日曜日だろ……！』

……

おい康平、ゲームやってる場合じゃねぇぞ。』

ドォォ～ン！

『一体どうしたんだよ。』

突然テンションが上がった健太の声でびっくりしたのか、康平は中ボスにやられて迷惑顔だ。

健太

『康平、今日プレゼント買わねぇとヤベェんじゃねぇの？』

『まだ誕生日まで、１０日近くあんだろ。』

『チゲェよ。次の土日でプレゼント渡さねぇと、チャンスがねぇんだよ。お前、学校の中でプレゼント渡す勇気あっか？』

ノンビリしている康平を健太が真剣に諭す。まるで、健太がプレゼントを渡すような感じだ。

だが、さすがに康平も気付いたらしく、慌ててゲームの電源を消す。

健太

『……康平は、部屋に飾る物を買うつもりだよな？』

康平

『ん……まぁな。』

健太

『だったら、姉ちゃんの部屋に相談しに行こうぜ。』

康平

『え……でも真由さん自分で考えろって……』

『相談するフリして、姉ちゃんの部屋に飾っている物を見とくんだよ。』

健太も、真由さんに似て相当シタタカである。

康平
『ところで真由さんはいるの？』

健太
『それは大丈夫だ。今日レンタルでラブストーリー物を借りてたからよ。今ころ煎餅でも食いながら見てるぜ。』

『テレビを見ている姉ちゃんは、こっち見ねぇからよ、しっかり部屋を観察しとけよ。

……

姉ちゃん入るぞ！』

健太が隣部屋の扉を、ノックしながら入っていく。

彼の予想通り、真由さんは煎餅をバリバリ食べながらテレビに夢中のようだ。

『ん……あんははひ、はんは用？』

真由さんは煎餅を頬張り、テレビから視線を外さずに後ろにいる2人に問いかける。

健太

『実はさ、プレゼントの相場を聞きてぇんだよ。』

健太に目で合図されて、康平は部屋を見渡す。

窓の上には、「御用」と書かれた提灯が5つ並べてあり、テレビの横には人気のゲームキャラの大きなぬいぐるみが置いてある。

『ほんはほ、ひふんへはんはへははひほ。』

『そんな事言わずに、ヒントだけでも教えたっていいじゃんか。』

真由さんは、煎餅を食べ終わる前にもう1つ口に入れた為、康平には何を言ってるかサッパリわからなかったが、健太には通じているようで不思議と会話が成り立っていた。

康平がもう一度見ると、後ろの壁際には「愛美須」と刺繍された紫の特攻服、本棚の上に戦車のプラモデルがあり、その横に「私の力作、タイガー?型」と書かれた手製の立て札まで付いている。

『今いいシーンなんだからさ、あたしに聞くより綾香ちゃんて女の子に聞きなよ。亜樹ちゃんの友達なんじゃないの？』

コーラと一緒に煎餅を飲み干した真由さんは、漸く日本語を口にした。

これ以上いると真由さんの機嫌が悪くなりそうだったので、部屋から出た2人。

健太
『部屋に入るのは久しぶりだったから忘れてたけど、姉ちゃんの趣味の範囲は、昔から滅茶苦茶広かったんだよな。……ワリィな、ありゃ参考になんねぇわ。』

康平
『そんな事より、真由さんが言ったように綾香に電話してみんのもいいかもな。
健太……ワリィけど電話してくんね。』

『……俺……綾香に電話した事ねぇんだよな。』

尻込みする健太に、康平は無理強いしない。

『そうだな、お前綾香に電話すっとテンパりそうだからな……俺が片桐って事で電話してやるよ。親が出てきたら、明日の連絡って事で誤魔化すからよ。』

健太からクラスの連絡網を借りた康平は、綾香の家に電話をした。

トゥルルルル――ガチャ！

【ウィース、内海ですけど。】

野太い声にビクっとした康平は、過剰なまでに丁寧な言葉で話す。

【モシモシ、片桐と申しますが、綾香さんは御在宅でいらっしゃいますでしょうか？】

【片桐……あぁ健太か。お前、やけに御丁寧な言葉遣いだなぁ、おい。】

声の主は、内海俊也さんである。

【し、失礼しました。僕は康平です。お久しぶりです。】

電話越しにペコペコ頭を下げながら、康平は慌てて訂正する。

【片桐……康平？……今俺ァ寝起きだからよぉ。
ちょっと待ってろ。
オーイ綾香ぁ、お前のお気に入りの……から……】

内海さんは、受話器を外したまま綾香を呼びに行ったようだ。

健太
『康平どうした？口をアングリ開けてさぁ。』

『い……いや、何でもねぇよ。』

呆然としていた康平は我に返る。

綾香
【あっれぇー、兄貴ったら受話器外したままじゃんか。
……モシモシ康平、何であたしの電話番号知ってるの？】

康平は、たどたどしい口調で事情を説明した。

綾香
【……そう……亜樹の好きな物は、……口で説明するより一緒に買いに行く方がよさそうね。
今午後3時だから、6時に買いに行かない？私がそっちに行ってもいいけど。】

康平
【それは、綾香に悪いからこっちから行くよ。
でも買い物に付き合ってくれるのは、ホント助かるよ。アリガトな。

】

綾香
【あ……チョット待って、うちの兄貴は変な事言ってなかった?】

康平
【……いや、何も言ってなかったぜ。じゃぁ、俺と健太で6時に駅前へ行くからさ、いいかな?】

綾香
【え……、ウン私もその時間に行くからね。】

電話を終えた康平に、健太が済まなそうに謝った。

『ワリィ、6時から店の手伝いなんだよな。母ちゃんが町内会の会合に出るらしくてさぁ、出前しなきゃなんねぇんだよ。』

康平
『いいよ。お前も行くって綾香に言っちゃったけど、後で事情をを言っとくからさ。
もともと俺の問題だからな。今日は助かったよ。』

6時、ジャージの姿で待ち合わせの場所についた康平だったが、綾香は可愛い服を着て待っていた。

康平
『ホント助かるよ。明日から学校なのにワリィな。
それと、健太は今から家の手伝いで来れないってさ。あいつも残念がってたよ。』

綾香
『そう……、それじゃあ仕方ないわね。
……
それと、兄貴は本当に変な事言ってなかった？私を呼ぶ時なんだけど……』

康平
『あ……あぁ、何言ってるか分かんなかったしね。』

綾香
『まぁいいわ。明日から学校だし、早く店に行こ！』

デパートのエレベーターに2人きりで乗っている最中、綾香が口を開いた。

『誕生日プレゼントを、部屋へ飾る物にするのは正解かも。亜樹って猫が好きだから、猫のデザインが入った物がいいわね。』

康平
『有難う、そうするよ。話は変わっけど、綾香の誕生日っていつ？』

綾香
『１２月２５日だよ。』

『えっ、俺と同じ日じゃん。』

驚く康平を見て、綾香がクスクス笑う。

『だから康平だと話し易かったのかもね。
……
あ……勘違いしないで、変な意味じゃないから。』

エレベーターの扉が開き、２人は雑貨売り場へ歩いて行った。

雑貨売り場では、２人……特に綾香が楽しそうに探している。
時には脱線することも――

『これなんかは、康平にピッタリなんだよね。』

綾香が笑いながら手にしたものは、グローブを付けて泣いている可愛いキャラクターの小さな人形だった。

『否定はしないけどさぁ、この人形をデザインした人はチョット酷いよね。』

苦笑いしながら答える康平に、綾香は更に笑顔になる。

『アハハ、それは言えてるかも。あ、いっけない。亜樹の誕生日プレゼントを選らばなきゃね。』

1時間程して、2匹の仔猫がじゃれあっている置時計を見付け、2人はそれをプレゼントに決めた。

康平

『今日は本当にアリガトな。綾香がいなければ、マジでプレゼント買えなかったよ。』

『いいよ別に、私だって楽しかったしね。
でもよかったね。好きなコのプレゼントが買えて。』

綾香の言葉に、康平は顔を赤くしながら慌てた。

『い、いや好きとかはハッキリ分かんねぇけど、図書館でのお礼はしたいんだよ。』

『康平って女の子に対しては、からっきしだね。

それに私だったからいいけど、他の女の子と買い物に行く時は、ジャージ以外の方がいいわよ。』

綾香に言われて一瞬下を向いた康平は、小さくなって謝る。

『ご……ごめん……』

『ぷっ、私に言いくるめられる男の人って、康平が初めてだよ。亜樹に言わせれば、光栄に思いなさい……ってトコかしらね。』

笑いながら話す綾香を見て、康平もホッとする。

最後に綾香が一言。

『私は本気で、康平と亜樹の事を応援してるんだから……頑張ってね。』

迷惑な祝福

次の日、学校は長～い全校集会から始まる。みんなダルそうに整列しながら校長の話を聞いていたが、その後に、インターハイ準優勝の石山先輩と兵藤先輩が表彰された。

康平は、自分が表彰されたわけでもないのだが、どこか誇らしい気持ちになって拍手をしていた。

『おい康平、昨日見たぜ。』

拍手をしている康平に、後ろからコッソリ声を掛けてくる男がいる。川田というクラスメートで、あまり康平と親しくはないが、クラスの中では賑やかなタイプの男だ。

『お前、昨日駅前のデパートで内海と一緒にいたよな。俺も偶然いたんだけどよぉ。いい感じだったじゃねぇか。羨ましいぜ全く。』

『あ……いや、それは……』

川田はカラカウ様子でもなく、素直に祝福しているようなので、康平は逆に返答に困ってしまっていた。

チラっと亜樹を見たが、ずっと後ろに立っていたので少し安心する。

全校集会とＨＲが終わり、ボクシング部も休みだったので、康平は

帰り支度をしていた。

その時、川田が康平の席に歩いて来て口を開いた。

『康平、さっき内海を見たんだがハーフっぽくて、スッゲェ可愛いよな。あんなコとデートしてたなんて、ホント羨ましいよ。』

『い……いや、そんなんじゃねぇんだよ。』

康平は、声を殺して否定する。そして、前の席にいる亜樹に視線を向けた。

亜樹はこっちを向かず、帰り支度をしている。

『照れんなよっ！内海だって楽しそうに買い物してたし、いい雰囲気だったぜ。』

川田は気を遣って、クラス奴等に聞こえないように話すが、１番聞かれたくない前の席の人が聞くには、充分過ぎるボリュームだ。

『同じイケメンじゃない男として、応援してっからな。頑張れよ。』

川田は、一言付け加えて帰っていった。

康平は、何も悪い事はしていないのに、後ろめたさを感じながら帰

り支度をする。

亜樹
『康平……今日は部活が休みだよね。時間ある?』

康平
『あ、今日は何も予定がないからな。』

『だったら図書館へ来て。
……誤解されると悪いし、私が先に行くから後から来なよ。』

亜樹は、そう言って教室から出ていった。

康平が図書館へ行くと、亜樹と綾香の兄である内海俊也さんが、ロビーにいて何やら談笑しているようだ。

俊也さんは康平に気付いたらしく、右手で手招きをしている。

康平がペコペコ頭を下げながら、2人に近付いていく。

俊也さん
『なんだぁ、オメェも学校終わったばかりなのに図書館かよ。亜樹ちゃんといい、お前ら勉強好きなんだな。』

康平
『いや、今日は勉強じゃなくて、……』

俊也さん
『勉強じゃねぇ……するってぇと、亜樹ちゃんと待ち合わせか？』

康平
『いや……その……なんてゆうか……』

亜樹がすかさずフォローする。
『康平は、よくここに歴史のマンガを見に来るんですよ。今日もそうなんでしょ？』

康平
『そ、そうなんですよ。』

俊也さん
『うちの綾香もそうだけど、よく図書館なんかにしょっちゅう通えるよな。』

『そういう俊也さんこそ、なんで図書館なんかにいるんですか？』

『講義のレポートを提出しなきゃなんねぇんだよ。今回出さないとマジヤバくてな。』

笑いながら突っ込みを入れた亜樹に対して、俊也さんは真顔で答える。

康平

『レポートは、進んでいるんですか?』

『進んでるわけねぇだろ。図書館はなぁ、雑談する所で勉強する場所じゃねぇんだよ!』

俊也さんの声が大きかったので、2人は肩をすぼめた。

俊也さん

『やっぱ帰るわ。大学でレポートを書いた方が良さそうだしな。それと康平に聞きたいんだが、昨日オメェが電話をよこした時、俺なんか変な事言ったか?』

康平

『……いえ、何も言ってないと思います。』

『そうだよな。なぜかあの後、綾香の機嫌が悪くなったんだよ。一旦出掛けて帰ったらご機嫌だったけどな。

話は変わるが明日大学に戻るから、お前らとも暫く会えないからな。
ボクシング部の奴等にも、宜しく言っといてくれ。』

俊也さんは、一言残して帰っていった。

しばらく沈黙していた亜樹が口を開いた。

『……綾香は、すっごく優しいのよ。友達の為に、いつも自分を犠牲にしてしまうのよね。
もし、綾香が康平と……』

その時、綾香が2人の元へ走ってきた。

『やっぱりここにいたんだ。』

亜樹
『綾香どうしたの？　慌てちゃって。』

綾香
『クラスで昨日の買い物を見た人がいて、チョット冷やかされたのよね。
康平は大丈夫だった？』

康平
『冷やかしはないけど、妙に祝福されたよ。』

亜樹
『2人とも、昨日は楽しかったそうじゃない？』

綾香
『やっぱり、亜樹も誤解してんのかなぁ。……
康平、亜樹にバラしちゃうけどいいかな？』

康平
『いいよバラしちゃって。綾香も迷惑だったろうし。』

綾香
『迷惑なんかじゃないけど言っちゃうよ。
昨日康平に頼まれて、2人で亜樹の誕生日プレゼントを買いに行ったんだ。本当は健太も来る予定だったんだけど、用事で来れなくなったんだよね。』

『無理しなくていいって言ったのに……でも有難う。』

恥ずかしそうにお礼をした亜樹だが、嬉しそうな表情である。

康平
『いや、どうしても図書館のお礼がしたくてさ。』

『ホントにそれだけなの？
照れ隠しは損しちゃうよ！』

突っ込みを入れる綾香に亜樹が笑う。

『綾香に突っ込まれる男の子って、康平が初めてなんじゃない？』

綾香
『昨日、似たような事を私に言われてんだよね。
それはいいけど、２人とも今日から図書館で勉強？』

亜樹
『え、勉強じゃないけど偶然よねぇ。そうでしょ康平！』

康平
『あ……あぁそうだけど。
プレゼントの話になってしまったから言うけど、今週の日曜日は此処に来れるかな？
学校でプレゼントを渡すのは大変なんだよ。』

亜樹
『その日は、図書館休みだよ。確か土曜日もだったわね。』

康平
『マジで？』

亜樹
『だったら康平ンチの近くの図書館でもいいよ。休みかどうか調べてみてよ。』

綾香笑って突っ込む。
『あくまで図書館なのね。私も、行っていい？』

亜樹
『当然でしょ！
康平君の苦手な数学は、まだ克服出来ていないんだからビシビシいかなくっちゃね。
それと、綾香が来るのは大歓迎だよ。』

家に帰る途中、康平は自宅近くの図書館に行った。
どうやら日曜日は、やっているようである。

早速亜樹の携帯に電話する。

【こっちの図書館は、日曜日もやっているから大丈夫だよ。】

亜樹
【じゃあ、綾香と１０時に下田駅に行くけどいいかな?】

康平
【こっちは構わないけど、ワリィな。
ところで、今日の話って何だったのさ?】

亜樹
【……もう済んだからいいわ。
話は変わるけど、綾香が日曜日はジャージでもいいって言ってたよ。
】

焦らずに覚えろ！

次の日、夕方から部活が始まるが、夏休みと違い、１年生は先輩達と一緒の練習である。

この日から、ずっと練習を休んでいた３年の石山先輩と兵藤先輩が練習に加わった。２人は既に大学推薦の話がきていて、今から１０月の国体に向けて練習を再開する。

ただ、それに３人の２年生と４人の１年生を加えると、どうしても練習場が狭くなってしまう。

『１年生全員、スパーの道具を持って第二体育館に来い。』

梅田先生は康平達に指示した後、自身もミットとストップウォッチを持って第二体育館へ向かった。

１年生達も、保護具とグローブを持ちながら先生の後を追う。

全員が第二体育館へ着いて準備が終わった時、梅田先生が口を開いた。

『今日から形式練習に返し技を加えるが、最初はワンツーストレートをブロックした後に、前の手でフックを返せ。
但し、フックは振り切らないで寸止めしろ。１ラウンド終わったら相手を替えていけ。はじめ！』

最初のラウンドは康平が健太と、有馬は白鳥とコンビを組んで形式練習を始めた。

夏休みの期間、フックを打つつもりでブロックするように、山本さんからアドバイスを受けていたからかも知れないが、意外にも４人の動きはスムーズである。

１ラウンドが終わって梅田先生がアドバイスをする。

『お前らいい感じだが、反撃のタイミングが遅い。ブロックする時は、相手のパンチに自分からブツカリにいくような感覚でフックの溜めを作ってみろ。それと高田と片桐は、体重の軽い者と練習する時、パンチを少し軽めに打て。』

次のラウンド康平は白鳥と、健太は有馬と組んで形式練習を始めた。

すぐに左フックを打ち返そうとした康平だったが、ブロックした瞬間、顔に衝撃があった。

白鳥のパンチを顔から離してブロックした為、自分のグローブを顔にぶつけたのだ。

『高田、素早く左フックを返すのはずっと後でいいから、今は溜めを作りながら丁寧にブロックしろ。』

先生が、珍しく怒らないでアドバイスをする。

その後康平は、今まで習ったように拳を額に付けて手首を少し曲げるブロッキングをしたので、顔に衝撃を受ける事はなくなった。

ラウンド終了の合図をした梅田先生は、全員に言い聞かせる。

『今のような返し技は、来年の春位までに実戦で使えればいいから、焦る必要はねぇんだぞ。』

ワンツー

この日の形式練習はまだ続く。

次のラウンド、康平は有馬とコンビを組む。

有馬のパンチは、強くないが非常に速い。彼は身長こそ１７０?を超えているが、体重は５０?程度だ。

白鳥も同じ位の体重だが、有馬よりパンチが遅い。ただ彼のパンチは、体の芯に響くような重みがある。

有馬が、左ジャブから右ストレートを続けて打つワンツーも、

パパーン！

と一気にくる感じだ。

『ちょっとお前ら、練習を中断しろ！』

しばらく見ていた梅田先生が４人を集めた。

梅田先生

『有馬、高田にワンツーを打ってみろ。』

パパーン！

有馬の速いワンツーが、康平のガードに当たる。

梅田先生
『有馬、今度は空振りで打ってみろ。』

有馬は不思議な面持ちでワンツーを打った。

梅田先生
『お前ら、有馬のワンツーを見てどう思う？』

健太
『速いと思いますけど……』

梅田先生
『他に思うところは無いか？』

有馬以外の３人は、お互いを見ながら沈黙する。

『高田、グローブを貸せ！』

梅田先生は、サングラスを外しながらグローブをはめて有馬の前に立った。

『有馬、俺にワンツーを打ってみろ！』

有馬は、戸惑いながらも速いワンツーを打つ。
だが、ワンからツーを打とうとした有馬に、梅田先生の右が軽く当たった。

軽く当たったのでダメージこそ無かったが、有馬は驚いた表情でいる。

『お前のワンツーには、欠点があるんだよ。』

有馬
『えっ、それはどこですか？』

梅田先生
『いいか？　これは有馬だけの欠点ではないから、全員よく聞け。
ワンツーのワンが伸びてねぇんだよ。』

1年生達は、ピンとこない感じで黙っている。

梅田先生は、頭を掻きながらしばらく考えていたが、再び有馬を前に立たせた。

『もう1度俺にワンツーを打ってみろ。但し、今度はユックリだぞ。』

有馬がワンからツーを打とうとした時、先生が彼の動きを止めさせる。

『ここが有馬だけじゃなく、お前ら全員の悪いところだ。』

先生は、有馬の伸びていない左腕を差して説明を始めた。

『伸びていない左ジャブから打つ右ストレートは、非常に危険だ！』

実際に、先生からパンチを当てられた有馬は納得し始めたようだが、他の3人はまだ分かっていない様子である。

先生は更に続ける。

『有馬、そのままの姿勢でいろ。
いいか？　相手がこの瞬間にパンチを出したら、遮るものが何もないんだよ。』

先生は、説明しながら有馬にパンチを当てるフリを繰り返す。

『左ジャブの後、右ストレートを打とうとして体重を前に乗せた時に、このパンチを喰らったらダメージは最悪だ。……これで試合が終わるケースが多い！』

ゾッとしている1年生達の様子を見た後、有馬に左を伸ばさせる。

『有馬、もう少し顎を引け……！
この状態だったら、有馬の左腕が邪魔で、相手はパンチを打ちにくくなるから、被弾する確率はグッと減ってくる。』

白鳥が質問をする。

『テンプル（コメカミ）は無防備ですけど、大丈夫なんでしょうか？』

テンプルも、顔の急所の1つである。

梅田先生
『あまり根性論は言いたくないが、顔だけで言えば顎と耳の後ろ以外は、気合いで何とかなる。』

萎縮いている1年生達を見た梅田先生は、珍しく困った表情で頭を掻いていた。

魔法のワンツー

『この技は、もう少し後に教えたかったんだがな。』

梅田先生は、ボヤキながら1年生達に話し掛ける。

『これからお前らに、新しいワンツーを教える。形式練習のように、ペアを組んで向き合って構えろ。』

先生からグローブを返してもらった康平は、再び有馬と向かい合う。

梅田先生
『どっちでもいいが、ジャブを伸ばした状態で止めていろ。』

健太・白鳥のペアは健太の方が、康平達は有馬が先にジャブを伸ばす。

先生は、健太と有馬の立ち位置と、ジャブを伸ばす場所を直していった。

『これからワンツーを打つ時、ワンはここに打て！』

有馬は、康平の右側に位置を変えている。そして、左の拳は康平の

頭上に延びていた。

頭上というよりも、康平から見てやや左上と言った方が正しいかも知れない。
ただ、康平には全く当たらない場所である。

ただ、有馬の左前腕が康平の目の前にあって、視界を遮っている。

梅田先生
『有馬は少し体を左側に傾けろ！そして、左の背中を相手に見せるようにするんだ。片桐は逆の方だぞ。』

有馬が先生のアドバイス通りにフォームを直した時、康平は有馬の右パンチに恐怖を感じた。

有馬の右グローブが、康平からは全く見えないのだ。

今度は、康平と白鳥が先生のアドバイスを受けてポーズを作るが、有馬と健太も驚いているようだ。

梅田先生
『今日は、ミットで返し技を増やそうと思っていたが、予定を変更する。
今のフォームを意識して、形式練習で相手に打ってみろ。

今からラウンド再開だ、始め！』

有馬がパンチを打ち、康平がそれをブロックする。

今までのように、パパーンとくる早いワンツーと違い、パッパーンと少し遅い感じなのだが、右ストレートの威力が全く違っていた。

パンチが重くなり、衝撃も倍増している。

今度は康平が有馬に打つ。

左ジャブを相手に当てないので少し違和感を感じたが、左を伸ばした後の右ストレートが思い切り打ち易くなっている。

軽めに右ストレートを打ったつもりだったが、それが有馬の左ガードに当たった時、有馬が少しバランスを崩していた。

白鳥も同様に、健太の打った左ストレートでバランスを崩す。

梅田先生

『バカヤロー！　高田と片桐は軽く打てと言っただろうが。白鳥と有馬は、お前らより１０キロ軽いんだぞ！』

『いや、軽く打ったつもりなんですけど……このワンツーは魔法のようです。強く打てるし、目隠しにもなるんですね。』

健太が怒られながらも素直な感想を言った時、先生は右手にミットをハメている。

他の3人は、先生が何か新しい事をするかも知れないという期待をしていた。

スパーン！

『バカヤロー！　ラウンド中は喋るんじゃねぇ！』

梅田先生は、どうやら健太の頭を叩く為にミットをハメたようである。

ただ、先生は一旦練習を中断して全員に説明を始める。

『このワンツーにはタネがあるから、魔法ではなくてマジックと言った方がいいな。

俺と飯島先生が目隠しワンツーと呼んでいる技だ。

有馬、お前、目隠しワンツーのワンを伸ばしたまま、そこで動きを止めていろ。』

有馬が言われたようにポーズを作る。

『もう少し体を左側に傾けろ。』

覚えたてで、まだ馴れない有馬は先生に修正された。

梅田先生
『このポーズだと、右側に大きく肩が回って、右パンチの溜めが出来ている状態だ。しかも、自然と後ろ足に重心が残っているから、体重の乗った右ストレートが打ち易い。分かったか?』

1年生達は、明るい表情で返事をした。

その日1年生達は、目隠しワンツーをメインに形式練習を繰り返し、練習を進めていった。

練習後、有馬が先生に質問する。

『このワンツーを覚えたら、県でも勝ち抜けるんですか?』

梅田先生
『そんな甘いもんじゃねぇんだよ! ただワンツーが強力になっただけだ。
……
お前らに言っておくが、ボクシングで、これを出せば絶対に勝てる技なんてないんだからな!
有馬、一度目隠しワンツーを俺にゆっくり打ってみろ。』

有馬がゆっくりそれを打った時、梅田先生は有馬の右下に屈んでいる。そして、無防備な右脇腹に左ボディーを打つフリをした。

梅田先生

『お前らに教えたいのは、今のような返し技だ。まだ覚えなければいけない技があるから、明日からは覚悟しておけ。』

有馬の誘い

駅までの帰り道、有馬が独り言のように呟く。

『俺、ボクシング部に入って良かったよ。』

健太

『いきなり何だよ、最近の有馬は俺の次に怒られてんのによ。』

康平も笑いながら話す。

『そうそう、最近白鳥が怒られなくなってきたからな。怒られランキングは現在2位だぜ多分。』

『……怒られんのも、嬉しいんだよな……』

ボソっと言った有馬に、3人とも驚いた表情になる。

『あ……勘違いすんな。変な趣味じゃねぇからよ。』

有馬は、弁解するように話を続ける。

『俺だって怒られんのより、褒められる方がいいに決まってんじゃん。

……
中学ん時は、先公達があまり相手にしてくれなかったんだよ。』

康平
『シカトでもされてたりとか？』

有馬
『いや、そこまで露骨じゃねぇけど、何かヨソヨソしい感じだったんだよな。
俺とダチのガラが悪いのもあったかも知れねぇけどさ。』

健太
『ダチって、ゲーセンで会った5人だろ？　確かに怖ぇ感じはしたけど、話すと面白かったぜ。』

『だろ！　俺もそうだけど、アイツらだってカッコだけでワリィ奴じゃねぇんだよ。』

有馬は友達を良く言われて嬉しいのか、顔が少しニヤけていた。

『ふつう……自分の事を悪い奴じゃねぇって言うかな？』

康平と健太は、声の主に視線を向けてビックリしている。

白鳥である。彼は、笑いながら有馬にツッコミを入れていた。

『ウッセェよ。言葉のアヤってやつなんだよ。』

有馬は驚いた様子もなく、顔を赤くしながら言い返す。

康平

『俺、白鳥がツッコミ入れんの初めて見たよ。』

有馬が真顔で答える。

『いや、週に1度位はあるんだよ。他人の話を聞いてないようで、たまぁ～にツッコんでくるからタチがワリィんだよ。』

健太

『残念だなぁ。じゃあ今週は白鳥のツッコミがもう聞けないじゃん……来週の分もここでツッコんじゃえよ。』

『い、いや……そんな事言われても……』

白鳥は、注目されるのが苦手なのか、いつものようにモジモジし始めた。

康平

『有馬と白鳥って、最初あんまり仲は良くなさそうだったよな！

4月頃だと電車も離れて座ってたしさ。』

『しょうがねぇだろ。一方は学年トップの真面目君だし、もう一方は……』

健太はもう一方を見て、話を躊躇してしまった。

『もう一方が何だってぇ～？』

有馬は一瞬健太を睨んでいたが、すぐに表情を戻して話し出した。

『怒ってねぇから心配すんなよ。俺も、気を遣われない方が嬉しいしさ。
正直白鳥みてぇなのは、俺と別の人種って感じで、今でも苦手なんだけどよ……ただ、コイツは散々ミットで叩かれてんのに弱音を吐かねぇから、少しは認めてやろうって思ったんだよ。』

康平

『俺もそう思うよ。白鳥の愚痴って聞いた事ねぇもんな』

健太

『あんまり白鳥を褒めてイジメんなよ！　照れてあんなに赤くなっちゃったじゃねぇか？』

白鳥は黙っているが、どことなく嬉しそうである。

有馬
『白鳥！　黙ってねぇで、俺以外にもツッコミ入れてやれよ。……ところで今週の日曜は、お前ら予定あっか？』

康平と健太は顔を見合わせ、康平が口を開く。

『ワリィ！　俺達、日曜日は用事があって行けねぇんだよ。』

有馬
『そっかぁ……残念だなぁ。ちょっとした収入があって、あのゲーセンでオゴろうと思っていたんだけどな。』

健太
『オゴりと聞いて、見過ごす訳にはいかねえんだが、なんで羽振りがいいんだ？』

有馬
『前にゲーセン行った時、覚えてっか？　アイツらと賭けをしていた話。』

康平
『９月まで部活が続いたらってやつだろ。あれ本気でやってたんかよ？』

『まぁな、奴らは皆、俺が辞めるのに賭けていたからな。どっちみち、アイツらにも俺がオゴるんだけとよ。』

有馬は、満面の笑みを浮かべて答えた。

健太が控え目に質問する。

『その次の週ってわけにはいかねぇよな?』

有馬

『それは無理だな。アイツらも、バイトとか都合つけてきてっからよ。

……じゃあ、来るのは白鳥だけだな。』

康平

『えっ、マジで白鳥も行くのかよ。』

白鳥

『え……まぁ』

有馬

『俺が白鳥に……いや、スーパーの奥さんの方に頼んだんだよ。あそこは奥さんがボスだからさ。そしたら喜んでくれてたぜ。』

駅についた時、別れ際に有馬が、再び独り言のような口調で話し出した。

『今日はよぅ、欠点を指摘されて嬉しかったんだよ。
ちゃんと、俺の事を見てくれてるって思ってさ。
まぁ、俺だけの欠点じゃなかったんだけどな。
……
日曜日の話になっけど、もし急に行けるようになったら、いつでも来いよ。アイツらも、お前らの事は気に入ってるみたいだからな。』

プレゼント騒動！

連日、第二体育館での出張練習は続いている。

木曜日になると、習った返し技の種類も増え、１年生達の形式練習にも更に熱が入っていった。

康平も、いつになく充実した感じで練習をしていたが、好事魔多し……金曜日に風邪を引いてしまった。

前日の夜が肌寒かったからであろうか、熱こそ出ていないが、咳は止まらないので、マスクをして登校する。

校門を通った時、そこに梅田先生が立っていた。

永山高校では、遅刻した生徒を叱る為に、必ず恐い先生が１人校門に立っているのだが、今日は梅田先生の番らしい。

康平が、挨拶をして通り過ぎようとしたところ、先生に呼び止められた。

『高田、お前風邪か？』

康平

『あ……はい』

梅田先生

『だったら、今日と明日は練習を休め！』

『え、でも軽くだったら練習出来るので、心配いらないですよ。』

ここ数日間、いつになく早いペースで返し技を習っているので、康平は練習を休みたくないようだ。

他の３人に、遅れをとりたくない気持ちがあったかも知れない。

『お前の心配なんかじゃねぇんだよ！　他の選手に風邪が移るか心配なんだ。』

康平は、まるで遅刻した生徒のように下を向いている。

梅田先生は話を続ける。

『お前、選手としてやる気があるんだったら、せめて朝晩のウガイ位しとけ！

試合前に風邪を引いたら、シャレにならんからな。』

朝から怒られた康平は、咳込みながら教室へ歩いていった。

『康平どうしたの、風邪？』

教室に入った康平は、早速亜紀に訊かれた。

康平
『心配ねぇよ、日曜日までには治すからさ！』

亜樹
『康平の心配はしていないんだけど、私や綾香に移さないでよね！
それと風邪予防に、朝晩のウガイは大切だよ。
もし受験生だったら、試験の直前に風邪を引くとシャレにならないからね。』

続けて2度も同じ話を聞かされた康平は、少し咳が激しくなったようである。

ところで始業式の日には、迷惑な祝福をしてくれた川田だが、幸い彼は、他人の幸福をず～っと祝ってくれる程の善人ではなかったので、康平に絡んでくる様子もなく、ある意味平和な1日になった。

次の日の土曜日は、どこにも行かず横になっていたおかげで、日曜日の朝には、康平の風邪も完全に治ったようである。

康平と健太は、亜樹達と待ち合わせている自宅近くの駅（下田駅）に立っていた。

健太は、待っているのが退屈なようで、康平に話し掛ける。

『昨日さぁ～、姉ちゃんに言われて亜樹のプレゼントを買いに行ったんだよ。』

康平
『え、健太は買う必要ねぇんじゃねぇの？』

『そう思うだろ……だが姉ちゃんに言わせっと違うんだよなぁ。』

健太は、少し誇らしげである。そして話を続ける。

『考えてもみろよ。今日４人集まって、その内２人が亜樹にプレゼントを渡すんだぜ。
そうすっと、何も渡さない俺が薄情じゃねぇか？』

康平も納得した。

健太
『だから、昨日姉ちゃんにプレゼントを選んで貰ったんだよ。ホントは康平と行くつもりだったけど、お前休みだったしさ。
でも、こういう時の姉ちゃんの勘て凄まじいんだよな。
これで綾香への印象もアップするわけだ。２３００円は痛ぇけど、仕方ねぇよな。』

『ん……２３００円……それって置き時計か？』

康平は嫌な予感がして、健太に質問した。

『あぁ、猫がジャレあっている可愛い置き時計だぜ。』

健太は何食わぬ顔をして答える。

康平

『時計はアナログだろ?』

さすがに健太も気付いたようで、ダメ押しの確認をする。

『それで、全体がグレーで白い仔猫が2匹ってわけだ……姉ちゃんの勘もここまでくっと、弟の俺でもオッカネェぜ全く!』

同じプレゼントを買ってしまった2人は、苦笑いした後無言になった。

亜樹達の乗った電車が来るまで、あと5分というところで健太が口を開いた。

『俺さぁ、急に有馬達とゲームしたくなったんだよなぁ……』

康平

『いきなり何言い出すんだよ! お前だって、高い金だしてプレゼ

ント買ったんじゃねぇか？』

『お前と綾香は、亜樹の為に買ったんだろ！　俺は、綾香の気を引く為に買ったんだから、亜樹に渡すわけにはいかねぇんだよ。あ……それと、今日はマジでゲームしたくなったんだぜ。』

健太は、話し終わると同時に改札を抜け、来たばかりの上り電車に乗ってしまった。

その2分後、亜樹と綾香が乗った下り電車が駅に停まった。

電車から降りて改札を抜けてきた2人だが、辺りを見回しながら綾香が言った。

『あれ、康平だけなの？　健太もいるんじゃなかったっけ。』

『……健太は……う、うちの仕事が忙しくて、今日来れねぇってさ。アイツも楽しみにしてたみてぇだけどな。』

康平は、苦し紛れに嘘をつく。

亜樹

『……そう……とりあえず図書館に行こうよ。』

3人が、図書館で空いている席を探している時、康平達を見る2人組がいた。

坂田裕也と鳴海那奈だった。那奈は、小さく手を振っている。

幸い彼らの座っているテーブルは、6人用の大きなものだったので、3人は、そこに向かって歩いていった。

裕也

『康平、久し振りだよな。図書館行く度に、お前と健太がいるか楽しみにしてんだけどよ、4ヶ月ぶりじゃねぇか？』

那奈が裕也の袖を引っ張る。

『その前に自己紹介じゃない？私は鳴海那奈。名字から発音すると言いにくいでしょ！　那奈でいいからね。

隣は、一応彼氏の坂田裕也。私達、康平とは同じ中学だったんだ。康平、そちらの綺麗な2人を紹介してよ！　あんたのドモリ口調を、久し振りに聞きたくなったからさ。

あ……康平は口下手だから、間違っていたら訂正して下さいね！』

康平

『ウ、ウルセェよ。俺の右にいる背の高い人が山口亜樹さんで、その向こう側にいる色の白い人が内海綾香さんだ。
2人とも、俺と健太の友達……でいいんだよね。
ド、ドモッてはいねぇからな。』

裕也
『おいおい、女の子を背が高いとか、色が白いとかで表現しちゃ失礼だろ！　少し訂正しろよ。』

『いいえ～！　訂正するのは友達って部分だけかしら。たった今、友達辞めようと思ったから……
冗談はその位にして、私の事は亜樹って呼んでね。』

『私、康平の口下手なところは割と嫌いじゃないんだけど……
私も、綾香って呼んでいいからね。』

那奈
『それはそうと、健太はどうしたのよ？
いつも一緒なのに珍しいわね。』

康平
『け、健太は今日都合が悪くなって来れなくなったんだよ。』

那奈

『そう……それにしても、あんた達に、こんな美人な友達ができるなんて、私にとっては凄くショッキングな事件だわ。』

裕也
『いや、そんな事はねぇよ。康平と健太の良さは、誰かきっと分かってくれると思ってたぜ。那奈はまだ、2人の事を分かってないんだよ。』

亜樹
『あのう……私、康平達のいいところは、那奈さんよりも分かっていないと思うんですけど……』

裕也
『そうか！　コイツらとの付き合いだったら、俺や那奈の方が長いからね。
でも保証するよ。2人は、最高にいい奴だからさ。
話は変わるけど、那奈はヒドイよなぁ。彼氏を紹介すんのに「一応」なんて付けないぜ。』

那奈が肩をすくめて話す。

『今その話？　……さては根に持ってんのねぇ。
裕也はご覧の通りイケメンなんだけど、真っ直ぐ過ぎて融通効かない所があるのよ。
皆さん疲れないようにね！
ところで康平はともかく、亜樹さんと綾香さんは、何でここに来た

のかしら？』

康平
『……俺が勉強を教わる為に、来てくれたんだよ。』

『何か変な日本語だな。』
裕也は、怪訝な顔をした。

亜樹
『康平は、余計な事を言わない方がいいわ！　私達の語学力も疑われそうだからね。』

綾香
『不器用なんだから、正直に話した方がいいんじゃない？』

『よかったわね康平！　今日は3人の美女からツッコまれて。
綾香さんと亜樹さんとは、何だか気が合いそうだわ。』

那奈は冗談のように話すが、彼女もかなりの美女である。
綾香程ではないが色は白く、和風美人といった感じだ。
今は、裕也のいるボクシング部のマネージャーが大変なのか、長かった髪をバッサリ切ったようだが、不思議とボーイッシュなイメージはない。

その那奈が、再び口を開く。

『ところで、綾香さんが「正直に」って言ってたけど、本当のところはどうなのよ?』

康平は、亜樹と綾香を一瞬見た後に口を開いた。

『……実は、亜樹の誕生日プレゼントを渡したくて、ここに来て貰ったんだ。いつも行ってる図書館が、休みなのもあったんだよな。なんだかんだで、世話になってるからよ。』

裕也

『プレゼントは分かるけど、何でここなんだよ?』

康平は、不意を突かれたような顔をしながら答える。

『あ……だから、いつも行ってる図書館が……』

『イヤそうじゃなくて、俺が言いたいのは、何で学校で渡さねぇのかって訊いてんの!』

裕也は、康平の説明を遮りながら、もう1度質問をした。

康平

『……それは……学校だと、何て言うか……』

『はい、ストーップ！』

今度は、那奈が康平の話を遮断する。

『康平は、裕也の3倍シャイなんだから、少しは理解してあげようよ。

ところで、あんたが女の子にプレゼントなんて、凄い進歩だよね！

私は今、チョット感動してるんだよ。』

裕也

『俺は、康平がシャイなのを知っててハッパかけてんの！　ところでお前、亜樹さんと付き合ってんのか？』

『い……いや、そういうんじゃなくて、夏休みに勉強を教えて貰ったお礼だよ。』

少し赤い顔の康平に、那奈が質問をする。

『ま、そう言う事にしてあげてもいいんだけど、勉強教えて貰ったのは康平だけなの？』

綾香が笑って話す。

『健太も、夏休みの後半から来たのよね！　それまで宿題を全然やってなくて、大変そうだったけど。』

那奈
『健太は相変わらず進歩がないなぁ。
でも、お礼のプレゼントだったら、健太もする筈だよね。中学の時は、もっと義理堅い感じだったのよ。
高校生になって、薄情になったのかな？』

『健太は、そんな奴じゃねぇよ！』

珍しく康平が強い口調だったので、４人が注目する。

『ゴメン……別に怒ったわけじゃないからさ。』

小さくなって謝る康平を見て、亜樹が口を開いた。

『確か、健太は家の仕事で来れなかったのよね。』

那奈
『健太んちって、定食屋なんだ。お昼になったら皆で行こっか？』

裕也
『フツウ、高校生だけで定食屋は行かねぇんじゃねぇの？』

『分かってないなぁ。健太んちのお店は、隠れた逸品があるのよ。
フルーツアンミツが結構な量で、しかも２００円！　美味しいから、

行ってみようよ。』

那奈の誘いに、亜樹と綾香は乗り気のようだ。

健太は今頃、有馬達のいるゲーセンに向かっている途中である。

定食屋に行けば、咄嗟についた嘘がバレるので、康平は憂鬱な気持ちになってしまった。

勉強を始めて2時間半位経ったであろうか？

『お腹空いたね！』

那奈が午後1時を指している時計を見ながら、ポツリと言った。

『健太んちで、フルーツアンミツ食べようぜ！　久々に健太にも会いたいからな。』

さすがに裕也も空腹だったのか、誰かが言い出すのを待っていたようである。

亜樹と綾香も、勉強道具をしまい始めている。

康平は、嘘の言い訳をどうしようか迷ってしまった。

『あ、いたいた！　もういないかと思って諦めていたんだけどね。』

1人の女性が、5人の方へ歩いて来た。

真由さんである。

『康平、健太のバカが、約束スッポカシちゃってゴメンね。アラアラ、裕也に那奈ちゃんまで一緒なの？』

那奈

『真由さん、お久しぶりです！』

裕也も那奈と一緒に頭を下げた。

真由さんは、亜樹と綾香を見て笑顔でオジギをする。

『はじめまして！　私、健太の姉で真由って言います。こんな綺麗なコ達と友達なんて、スンゴイ奇蹟だね。
康平、紹介してよ。
……
あ、駄目だわ……健太もそうだけど、康平に紹介させると、ロクな事にならないから私が当ててみせるよ。』

康平を除く４人は、顔を見合わせて笑った。

『え～と……背の高いコが亜樹さんで、色の白いコが綾香さんでしょ？　あ……２人の名前は、健太達から聞いているんだから、不思議に思わないでね！』

５人とも沈黙している。

真由さん
『ん、どうしたの？　さては、ビンゴだったから驚いてんのかな。』

康平
『ビンゴだけど、多分違うと思うぜ……ところで今、フルーツアンミツ食べに行くんだけど……』

真由さん
『ワォ、うちに来てくれるんだ！健太もいるからユックリしていきなよ。』

康平
『……』

裕也

『康平、なに不思議そうな顔してんだよ。健太は店の手伝いなんだろ？』

『あ……あぁ、そうだけど……と、とりあえず行こうぜ。俺も、あそこのアンミツ好きだからさ。』

康平は、言葉を濁しながら図書館の入り口へ歩いていった。

健太の家である定食屋「片やん」に着いた5人は、一緒に座れる場所を探す。
時計は1時20分を回っていた為か、客もマバラになっていたので、5分程待って無事に座ることができた。

早速、フルーツアンミツ5人分を頼んだ時、健太のお母さんが康平に話し掛ける。

『健太なら、もうすぐ出前から帰ってくるからね！　今日はユックリしていくんだよ。』

『いらっしゃい！　おっ、那奈と裕也もいるんじゃん。』

フルーツアンミツを食べている5人に、出前から帰った健太が声をかけてきた。

『……康平、チョット来いよ。』

その後、小声で康平に言った健太だったが、康平自身も彼に訊きたい事があったので、黙ってついていく。

4人から見えない居間に入った時、健太が口を開いた。

『お前、俺がゲーセンに向かった事は、アイツらに言ってねぇよなぁ？』

康平

『まだ言ってねぇけど……なんで健太がここにいんのさ？』

『あのゲーセンさぁ、駅からかなり入り組んでいて、結局行けなかったんだよ。

……

ホントにゲーセンの事は言ってねぇんだな？』

再び念を押す健太に、康平は半ば呆れ顔で答える。

『何度も言わせんなよ。お前は、店の手伝いで来れないって話になっちまってるんだよ。』

『よぉ～し康平、今からプレゼントを渡すぞ！』

健太の一言に、康平は意外な顔をした。

康平
『お前、俺と同じプレゼントなんだろ？　いいのかよ。』

健太
『ゲーセンに行けなくて家に帰ったらさぁ、姉ちゃんが事情を聞いて、プレゼントを取り替えに行ってくれたんだよ。俺は見てねぇけど猫の貯金箱みてぇだぜ。
……心配すんなよ、康平君のより安い物らしいからさ。』

康平
『誰が心配するかよ！　ところで、プレゼントはあるのに何で店の手伝いしてんだ？』

健太
『姉ちゃんの替わりにアルバイトなんだよ。今日の埋め合わせで、俺が働いた分は、みぃ～んな姉ちゃんの財布に入っちゃうんだよなぁ……
それはそうと、康平がゲーセンの事を話さなくてホント良かったよ。それを言ったら、話がややこしくなってたからな。
おっと、早くプレゼントを渡しに行こうぜ！』

４人の所へ戻った康平と健太は、周りの客が減ったのを見て、亜樹にプレゼントを渡した。

綾香も、待ってましたとばかりに、バッグからプレゼントを取り出す。

『チョット早いけど、誕生日おめでとう！』

『有難う！　大事にするね。』

亜樹は素直に喜んでいた。

４人の様子を見ていた那奈が、席を立ちながらポツリと言った。

『康平と健太が、高校でも楽しくやってそうで安心したよ。私達、今から図書館に戻るからさ。』

裕也も那奈に合わせて立ち上がりながら、健太と康平に尋ねる。

『お前ら、いま体重何キロあんの？』

康平が６２キロ、健太が６１キロとそれぞれ答えたのを聞いて、裕也は残念な顔をしながら話す。

『やっぱ俺と、あんま変わんねぇんだな……新人戦はライトウェルター級（６４ｋｇ以下）で出っからさ。今回、先輩の為に絶対優勝するつもりだからな！』

不思議と最後の言葉には、力が込もっていた。

この日の夜、康平の家に亜樹から電話がきた。

亜樹
【プレゼント、アリガトね！　この時計、前から欲しかったんだ。】

康平
【いいよ……亜樹には世話になったからさ。】

亜樹
【そう言えば試合するかもしれない友達って、裕也君だったの？】

康平
【あぁ、アイツはいい奴だし、試合なんてしたくねぇんだよな。】

亜樹
【彼はカッコイイいいから、女の子にモテるんだろうね。】

【何が言いたいんだよ、何が？】

亜樹は、康平のツッコミに構わず話を続ける。

【でも、同性からは妬まれるタイプかもね。
……
私が康平をイジるようになった理由を、教えてあげようか？】

康平は不意を突かれて、曖昧に返事をした。

亜樹
【入学したての頃さぁ、康平と同じ中学だった男友達が、君の席に集まったのを憶えてる？】

康平
【ワリィ、あの頃ってアイツらよく俺の席に来てたから、どの時の事か憶えてねぇんだよ。】

亜樹
【私はハッキリ憶えてるんだけど、その時、裕也君の悪口で盛り上がっていたのよね。
本人が別の高校なのもあって、言いたい放題だったみたい。】

康平
【……】

亜樹
【でも君は、ひたすら裕也君をカバっていたんだ。】

康平
【何となく思い出したけど、何で今話す気になったんだよ?】

亜樹
【今日康平が、健太をカバってたのを見たからかな?】

康平
【あの時は、亜樹の一言で助かったよ。
ところで、俺をイジる……じゃなくて、俺にチョッカイかける理由って何なんだよ?】

亜樹
【やっぱり教えてあげない!
……ってゆうか、私もあまりよく分かっていないみたい。】

康平
【ヒッデェなぁ~! 理由も無しに俺をイジってたんかよ。】

亜樹
【アハハ、康平はツッコミどころ満載なんだから、私よりも君に原因があるのよきっと!
重ねて言うけど、今日はアリガトね。】

笑いに耐えろ！

月曜日の夕方、２日間風邪で休んでいた康平も、練習を再開した。
この日も第二体育館での練習になった。

連日のように形式練習になると思い、健太達と同じく保護具を付けようとした康平に、梅田先生が一言！

『高田、お前は俺とミット打ちをするから、グローブだけ用意して第二体育館に来い。』

第二体育館に着いた４人は、ここで梅田先生の説明を受けた。

『さっきも言ったが、高田は俺とミット打ちだ！
残りの３人は形式練習だが、２ラウンド毎にメンバーチェンジだ。
あぶれた者は、シャドーをしながらタイムキーパーをする。分かったな。』

４人は大きな声で返事をしたが、先生はミットをハメながら一言付け加えた。

『形式練習は返し技メインだが、今は種類が多くなっている。
技を返す者は、相手に何を打ってもらって何を返すか、１度言ってから始めろ。』

形式練習は、有馬と白鳥が最初にコンビを組み、健太はグローブを外してストップウォッチを持つ。

『始め！』

彼の声でラウンドが始まった。

梅田先生

『まず、先週教えた返し技の復習から始めるが、このラウンドはリターンジャブと、ブロッキングストレートだ。いくぞ！』

先生が、ミットで左ジャブを康平に打ってきた。

康平は、右のグローブでブロックし、空いている左手でジャブを放つ。

先生が顔の前に構えている右のミットへ、それが命中した。

リターンジャブと教えられた技である。

今度は先生が打った右ストレートを、小さく右に捻りながら左腕でブロックする。

左グローブを左耳の上に持っていき、肘をグッと前に出す。
顔は左前腕で防御するような形になっている。

左腕に衝撃を感じた康平は、すぐに右ストレートを放つ。

スパァーン！

先生が、顔の前に構えていた左のミットから快音が響く。

ブロッキングストレートと教えられた技である。
先生が言うには正式な名前ではなく、技を表現する為に、便宜上自分で勝手につけた名前という事だった。

リターンジャブとブロッキングストレート。この2つの返し技を、交互に3回づつ繰り返した後、先生が口を開いた。

『今からは、不規則になるから覚悟しとけ！』

その途端、先生が右手で構えている。

返し技をしようと待ち構えていた康平は、意表を突かれて動きが止まった。

スパァーン！

快音が体育館中に響き渡るのだが、今回は康平の頭からだった。

『今まで何やってきたんだ？　俺がこの構えをした時は、ジャブを打つんだよジャブを！』

『ス……スイマセン』

久々にミットで頭を叩かれた康平は、思わず謝ってしまった。

『ラウンド中は、声を出すんじゃねぇ！』

梅田先生は、もう1度康平の頭を叩く。

スパァーン！

この日は珍しく、女子バスケの方でも顧問の先生から叱責を受けている。

『そこの2人！　笑ってないで練習に集中しなさい。』

2人が怒られた原因を作ったのが、十中八九自分だと思った康平は、羞恥心がマックスになった。

梅田先生は、動揺している康平を知ってか知らずか、構わずミットでポーズを作る。

……？

見た事がない構えに、康平は躊躇してしまった。

先生は、右手を顔の前に置き、左手を頭の左上に置いているのだ。

困惑している康平だったが、さすがに先生も怒らないで説明をした。

『言ってなかったが、この構えを見たら目隠しワンツーを打て！
あー、それと今までのように口の前で両手で構えたら、ワンツーじゃなくて右、左、右のストレートだ。』

説明を受けた康平は、すぐに目隠しワンツーを打つ。

打ち終わった後、間髪入れずに先生の右ストレートが康平を襲った。

康平は、ブロッキングストレートで打ち返す。

上手く打ち返せたので、ホッとした康平だったが、目の前で、構えている先生がいた。

左手を伸ばすように前へ置き、右手の位置は、口の前になっている。

風邪を引く前から、この構えを教えて貰っていた康平だったので、

踏み込みながらの左ジャブを2発打つ。

その直後に、先生の左ジャブが康平の顔面に向かってくる。

慌てた康平はリターンジャブではなく、左腕でブロックをして右ストレートを打ってしまった。

つまり、ブロッキングストレートを打ってしまったのだ。

幸い先生は、左ジャブを受ける為に口の前へ右のミットを置いていたので、康平のパンチはそれに当たった。

『バッカヤロー！　右と左も分からんのか？』

先生の罵声を浴びた康平は、またミットで叩かれると思い、肩をいからせて目を瞑った。

ところが、なかなか頭に衝撃がこない。

康平がそぉ～っと目を開けた時、梅田先生は右のミットを振り上げていた。

『アホ、ラウンド中に目を瞑るんじゃねぇ！』

スパァーン！

『ラウンド終了！』

康平が叩かれると同時に健太の声があり、1ラウンド目が終わった。

『ミンナ～！　笑わないで集中するのよぉ！』

バスケ部顧問、田嶋先生の声がした。
天然と噂される彼女だが、本人は至って真面目に叫んでいるようである。

梅田先生は苦笑いをした後、康平にアドバイスをする。

『お前は習い始めだから、仕方の無い事だが、笑われたくなかったら早く覚えるんだな。
次のラウンドも同じ事をやるから、今からイメージしておけ！』

康平と梅田先生は、次のラウンドも同じパターンでミット打ちをしていたが、最初のラウンドよりは、少しマトモにパンチを返せたようである。

頭を叩かれる回数も1回だけで終わったが、その直後に、

『集中よ集中！』

と叫ぶ田嶋先生の声が、第二体育館に響いていた。

ダッキング

次のラウンドから、形式練習をしていた2人の内、白鳥が抜けて健太が入った。

康平は変わらず、梅田先生とミット打ちである。

先生が、ラウンド前に説明を始めた。

『高田には、今からダッキングを教える。簡単に言えば、屈んで避ける防御だ。
俺が右パンチを打ったら、左側へ屈め！』

先生が右パンチをユックリ打つ。

康平は、避けるつもりで大きく左へ屈んだ。

梅田先生
『それは避けすぎだ！　俺の言い方が悪かったかも知れんが、頭はもう少し小さくズラせ。』

梅田先生の話は更に続く。

『右パンチをダッキングする時は、これから話す2つの点を意識しろ。

1つは、左ボディーを打てる体勢にする事だ。もう1つは、避けるよりも右手でブロックするつもりで屈め！　そして右ガードの位置はここだ。』

梅田先生は、康平の右グローブを彼のテンプル（コメカミ）の位置にズラした。

梅田先生
『避けるよりも、ガードしながら無理矢理左ボディーを打つイメージだ。もう1回パンチを打つからやってみろ！』

先生がユックリ打った右ストレートを、ブロックしながらダッキングした康平だったが、先生の右脇の下には左ミットがある。

梅田先生
『ここに左ボディーを打つんだよ！』

指示通り、そのパンチを打った康平に、先生から新たなアドバイスが……

『今のお前は左ボディーを打つ時に、強さより速さを意識しろ。音にするなら、タッターンではなくてタターンだぞ。』

理由を知りたい康平だが、ラウンド中に話すとまたミットで叩かれそうなので、質問するのを躊躇していた。

梅田先生は、康平の表情を見て気付いたようだ。

『なぜ速く打つか訊きたいようだな。』

康平が、好奇心旺盛な顔をしながら返事をした時、逆に先生が質問をしてきた。

『高田、お前は右ストレートを打つ時、呼吸はどうしている?』

『……呼吸……ですか?』

予想外の事を訊かれた康平は、困惑した。

梅田先生

『分からないようだったら、今素振りをしてみろ!』

康平が右ストレートを打った時、息を吐きながら打つ自分を初めて自覚する。

そして、その事を先生に伝えた。

梅田先生

『ほとんどの奴は、お前と同じように息を吐きながらパンチを打つんだよ。
特に、倒そうと思って強振した場合は、息を吐ききっている時が多い。』

興味深く聞いている康平に、先生は更に話を続ける。

『俺が速く打つように言ってる理由は、相手が息を吐ききった時や、その直後の息を吸い始めた時にボディーを打たせたいんだよ！　このタイミングは、腹に力が入らないから効果は倍増する。』

康平
『質問なんですけど、強く打たなくても相手に効くんですか?』

梅田先生
『最終的には、ある程度強く打たなければならんが、今のお前の段階は、まず速く打ち返すリズムを覚える事だ』

康平
『それは、右へダッキングした時も同じなんでしょうか?』

『右へダッキングしろなんて、一言も言ってねぇだろうが！』

パコ！

先生は、康平の頭をミットで軽く叩いた。

『右へのダッキングはなぁ、
……
高田、ちょっとシャドウをしていろ。』

康平に言い残した梅田先生は、しばらく健太と有馬の形式練習を見ていたが、突然2人に近付いて行った。

『お前ら2人は、その技をあまりしなくていいんだ！　もっと他の返し技を練習しろ！』

梅田先生に言われた2人は、康平が習ったばかりの技、ダッキングしながらのボディー打ちを反復しているようだった。

健太
『えっ、どうしてですか？』

梅田先生
『理由は後で説明するから、今は言われた通りに他の返し技を練習しろ！』

2人は少し納得しない表情だったが、ミットで叩かれて笑われるの

は、さすがに避けたいらしく、素直に別の返し技を練習し始める。

再びミット打ちを再開した康平だったが、右へのダッキングの事は不明なままラウンドが進んでいった。

この日の練習が終わり、梅田先生は1年生全員に話し始めた。

『飯島先生と話し合ったんだが、これから1ヶ月間、お前ら1年は水曜日が練習の休みになる。そして土曜と日曜は、午後1時から練習を開始する。』

少し驚いている4人の表情に気付いたのか、先生は理由を付け加える。

『2年は、11月の始めに新人戦があるんだが、お前ら4人は10月からスパーリングの相手をする。
休みと時間をズラす理由は、お前らがスパーリング出来るように、集中して教える為だ。分かったか?』

『はい!』

約1ヶ月後ではあるが、いよいよスパーリング（実戦練習）が始まる事を教えられた1年生は、少し緊張しながら返事をした。

凡人の練習方法

梅田先生の話は、ここで終わらない。

『今日有馬と片桐には、ダッキングしながらのボディー打ちを止めさせたが、それぞれ理由が違うから個別に説明する。
まずは有馬からだが、お前は体重の割に身長が高いだろ？』

『はい！』

身長が１７１センチで、体重が５０キロの有馬は即答した。

梅田先生
『ダッキングは、相手より低い体勢になって避けるディフェンスだ！　フライ級にしては背が高いお前が、相手より低い姿勢になるのは、お前にとって負担のかかる防御なんだよ。』

有馬
『先生に質問なんですけど、フライ級でも俺より背が高い奴がいるんじゃないですか？　だったら……』

『有馬の言いたい事は分かるが、まずは他の者へ説明が終わってからだ。４人とも、グローブを付けて来い！』

有馬の言い分を遮った梅田先生は、１年生に命令した後、自身もミットを両手にハメた。
そして、康平を呼んで前に出させてから口を開く。

『まず、俺に対して構えてみろ！そして、体の向き……否、足の位置を変えないで、俺の左右のミットへ右ストレートを交互に打つんだ！』

不可解な指示を受けた康平だったが、指示通り先生に対して構える。
すると、先生は左右のミットを肩幅以上に拡げて構えていた。

梅田先生
『足の位置を変えないで、まずは俺の左のミットへ右ストレートを打て！　その次は右のミットだ。』

康平は、先生の左ミット目掛けて右ストレートを放った。

梅田先生の左ミットは康平の右側にあり、あまり体の捻りを使えないので、スッポ抜けたような感じでパンチが当たった。

スパン！

逆に康平の左側にある先生の右ミットへは、充分な捻りと共に体重の乗った右ストレートが当たる。

バァーン！

大きな音が響くと同時に、康平の右拳へ強い感触が残った。

梅田先生の両手に、３発ずつ右ストレートを打った康平は、健太と交替する。

健太は、サウスポーなので左ストレートを打っていた。

他の２人も、康平と同じようにパンチを打った後、梅田先生が全員に質問した。

『お前ら俺の左右のミットで、どっちが強く打ち易かったか言ってみろ？』

健太は左のミットと言い、他の３人は右のミットと答えた。

梅田先生は、４人の答えを予想していたようで、その事に対しては何も言わない。

『片桐以外の者が打ち易いと言った場所は、相手が右へダッキングした時の頭の位置だ！　逆に、ここへ頭があると、相手の強いパンチを喰らい易い。
今の段階で、右へのダッキングは、やらせないつもりだから覚えておけ！』

健太は今の話を聞いて、すかさず質問……というより、少し反発するような口調で先生に訊く。

『俺……僕以外の2人、康平と白鳥には、左へのダッキングしてのボディー打ちを、反復させてますよね！　オーソドックス（右構え）が左へダッキングしたら、サウスポーの体重が乗った左ストレートを喰らい易いんじゃないんですか？』

梅田先生
『俺は今の段階で……と、最初に言った筈だぞ。』

健太
『だったら、これからどうしていくか教えて下さい！　頑張りますから。』

『俺も努力しますんで、色々教えて下さい！』

健太の話に、有馬も加わる。

『努力や頑張るなんて言葉は、簡単に使うんじゃねぇぞ！』

梅田先生の語気が、少し強くなった。

『俺達凡人はなぁ、簡単な1つの技でも、馬鹿みたいに反復練習す

るのが当たり前なんだよ！　それでも試合に、その技が出るかどうかも分からん！』

４人の暗い表情を見た梅田先生は、苦虫を咬んだような顔で話題を変えた。

『お前らが次の段階にいきたいんだったら、まずはラリアットを避ける動作をスムーズにしろ！　但し有馬だけは、次の段階になっても、当分ダッキングはしねぇから覚えておけ！』

有馬
『え、どうしてですか？』

梅田先生
『お前は、別に覚えなければならない技があるからな。』

健太
『有馬だけ、ズルいッスね！』

パコ！

健太の頭を、ミットで軽く叩いた先生は、時計を見ながら言った。

『お前ら全員に、個別の技があるんだよ！　今日は遅いからトットと帰れ。』

球技大会の誘い

翌日の昼休み、トイレから教室へ戻ろうとした康平に、1人の女の子が話し掛けてきた。

『康平、チョットいいかな?』

彼女は門田麗奈(かどたれな)といい、康平と同じ中学の出身でバスケ部員だ。ちなみにクラスメートでもある。

麗奈
『昨日は、笑わせてくれてアリガトね! あの時、田嶋先生に怒られた2人って、私と綾香なんだ。』

康平
『嫌な事を思い出させんなよ。』

麗奈
『アハハ! あの後ね、うちの先生も反省してたみたいだったよ。高田君に悪い事しちゃったってさ。』

康平
『気付くのオセェ〜ンだよ! あの先生、結構天然入ってるよな。』

麗奈
『まぁね。本人に自覚が無いから、純天然って感じなんだよね。ところで、康平に訊きたい事があんだけどさぁ？』

康平
『麗奈に教える事なんて、俺にはネェぞ。』

『大丈夫！　康平に教わるなんて愚かな事はしないから。訊きたかったのは、今月末にある球技大会の事なのよ。あんたは、何に出るつもり？』

中学時代から口が悪かった麗奈に、康平は苦笑しながら答えた。

『あぁ、バレーとバスケとソフトボールだっけ？　全部男女混合ってヤツだろ。どれも得意じゃねぇから、適当に選ぶつもりさ！』

麗奈
『だったらさぁ、バスケにしてくんないかなぁ……あっ、心配しなくてもいいよ！　康平はボールに触らないで、適当に動いてればいいからさ。』

『ここまで期待されてると、急にバスケ以外をやりたくなってくるんだよねぇ。』

わざとらしいシカメッ面をして答えた康平に、麗奈は少し慌てていた。

『メンゴメンゴ！　あんたはバスケに必要なのよ。
そして、1つ頼みがあんだよねぇ～。』

『なんだよ気持ち悪いなぁ……』

上目遣いで猫なで声の麗奈に、康平は少し警戒する。

麗奈
『綾香から聞いたんだけどさぁ、山口さんて元バスケ部なんでしょ！　それも、かなり上手いって話なんだよね。
康平から、バスケ出るように頼んで貰えないかなぁ。』

『そんなの自分で頼めばいいじゃんか！　図々しい性格は、麗奈のいいところだって思ってんだよね、ボクァさぁ……』

康平は、さっきのお返しとばかりに反撃したが、平然とした顔で麗奈は切り返す。

『ほら……私って少し口が悪いじゃん！　山口さんて気が強そうだしい、チョット苦手なのよ……
彼女は、何故かイケメンでもない康平と仲いいでしょ。お願い！』

困っている康平だったが、そこへ健太が通り掛かった。

『康平が困った顔してるって事は、麗奈の毒舌が炸裂してんだな。今回は康平に助太刀してやっからさぁ。で、何言われたんだ？』

ニヤニヤしながら話す健太に、麗奈は言い返す。

『失礼ねぇ、今は康平に相談中なの！　ところで、そっちも綾香達から球技大会の勧誘は来なかった？』

健太

『あぁ、俺も綾香に誘われてバスケをする事になったんだよ。でも康平がバスケに出たって、役には立たねぇかもよ。それと、他のクラスでも女バスのメンバーが勧誘してるらしいじゃん。』

『実はさぁ……』

麗奈は事情を説明し始めた。

『最近、駅前にケーキバイキングが出来たんだよねぇ。昨日部活が終わった後、来月になったら、皆で行こうって話になっちゃってさ

ぁ。』

意表を突かれた表情の康平と健太だが、麗奈はお構い無しに話を続ける。

『そんでさぁ、球技大会って月末にあるじゃん！　男バスはバスケに参加出来ないけど、女バスは参加できるのよ。』

健太

『麗奈さん！　オッシャる事が分かんねぇんッスけど……』

麗奈

『結論から話すのって、難しいのよ！　健太さんも、将来彼女が欲しいんだったら、聞き上手になんなさい。
今、1年は6組あるでしょ！　優勝したクラスのコは、皆のオゴリでケーキを食べれる約束をしちゃったんだよね。』

健太

『それでバスケ部が熱心に勧誘してるって訳だ。
でも、誘われた俺達にも見返りってモンが欲しいよなぁ。』

麗奈

『何よ見返りって？』

健太
『優勝したメンバー全員、オゴって貰う事にすんだよ！』

麗奈
『馬鹿言わないでよ！　ケーキバイキングは、幾らすると思ってんの？　１人１２００円なのよ。』

健太
『話は最後まで聞けってぇ。バスケに出る全員が、賭けに参加すりゃ～いいのさ。
確か１クラス１０人参加するんだから、１年全員で６０人だろ！
１人２００円ずつ出して参加すれば１万２０００円は集まるし、優勝したクラスのメンバーは、タダでバイキングに行ける訳さ！　みんな出すのが２００円だったら、ノってくると思うぜ。』

『凄いなぁ～。中学ん時から健太って、どうでもいい事には頭が働くんだよね。』

麗奈は素直に感心していた。

健太
『ウッセ～よ！　それはそうと、さっきも言ったけど、康平を誘っても期待は出来ないぜ。』

麗奈
『康平には期待してないの！　山口さんを誘いたいのよ。なぜか康

平と仲いいでしょ！』

健太
『ん、どうした康平？　さっきから黙ってっけど……』

康平
『亜樹は、自然に参加すると思うんだけどな。バスケは今も好きみたいだしさ。
……
それはともかく、お前ら口が悪過ぎ！』

麗奈は、意に介さず話を続けた。

『そう、明日のホームルームで球技大会の種目分けがあるけど、大丈夫なのね？　だったら康平を誘う必要はないって事かな。』

健太
『いや、康平は誘った方がいいと思うぜ。』

康平
『健太は、俺が球技を苦手な事知ってっから、からかってるんだぜ。麗奈、相手にすんなよ。』

健太

『いや、そういう訳じゃねぇんだよ。ただ康平と一緒に出れば、亜樹も……』

『ん、私がどうしたの？』

亜樹は売店から教室へ戻る途中のようで、新しいノートを左脇に抱えていた。

健太

『麗奈……あ、いや門田が球技大会に康平を誘っているところなんだよ。勿論、種目はバスケだぜ！』

亜樹

『綾香から聞いてるけど、門田さん、ケーキバイキングが懸かってるんでしょ？　ところで、康平はバスケ上手いの？』

康平は恥ずかしそうに答える。

『いや、苦手だよ。』

『その表現は控え目だよ康平！』

麗奈は、笑いながら話を続けた。

『康平とは、中学でクラスが一緒だったんだけど、そん時も球技大会はバスケで出たんだよね！　康平がパスを出せば半分は相手に渡すし、シュートを打てばボードを越えて場外ホームランだしね？』

健太

『俺は相手チームだったけど、よく憶えてるぜ！　康平にボールが渡った時は、結構期待してたよ……何をやらかしてくれるんだろうってな。』

『お前らは、ろくでもない事をよく憶えてるよ全く。

……

もし亜樹がバスケに出るんなら、俺は出なくていいだろ？　他の種目で適当にやってっからさ。』

康平は、苦笑いしながら話す。

『康平は、バスケに嫌な思い出があるんだね？』

『い、いや、そんな事ないよ。球技っていうか、バスケは特に苦手なんだ……でも楽しいことは楽しいんだけどね……』

寂しそうな亜樹の表情を見た康平は、慌てながら言った。

亜樹は少し考えていたようだが、再び口を開いた。

『門田さん、私はバスケに出ようと思うけど……康平も誘っていい？』

麗奈
『山口さんが入ってくれるのは大歓迎だよ！　康平は元々誘ってたわけだし……』

『麗奈が微妙な顔になってるぜ。さては、味方に害が出ない方法を考えてんだろ……勿論、康平に関してだけどな。』

『俺は、最低限の時間だけ試合に出ればいいよ。味方のヒンシュクは、買いたくねぇからさ。』

茶化すような健太だったが、康平も言い返す気持ちは無いようだ。

亜樹
『……そろそろ昼休みも終わるし、教室戻ろっか？』

麗奈
『そうね！　バスケ出来そうな人を、あと7人集めなくっちゃ！　ケーキが懸かってるからね。』

『なぁ麗奈、１人２００円の件は、他のバスケ部のメンバーにも訊

いておいてくれよ！　案外盛り上がる気がすんだよ……ヤベ！』

健太はトイレに行く前だったらしく、慌てて走っていった。

勇ましく逃げろ！

放課後、亜樹が康平に話し掛けた。

『今週の日曜日は、康平も練習が休みなんでしょ？』

康平

『いや、日曜日は午後イチで練習だぜ。明日だったら休みだよ。』

亜樹

『だったら明日、市民体育館に行かない？　少しはバスケを教えられるからさぁ……でも折角の休みなんだし、無理にとは言わないよ。』

康平

『こっちからお願いするよ。体育でも、バスケをする日があるからさ。』

2人が視線を変えると、麗奈が熱心にクラスメイトを勧誘していた。

康平が部活に行くと、飯嶋先生が1年生全員に話し掛けてきた。

『今日は、俺も第二体育館へ行くからな！』

（先輩達の練習は？）

４人の表情に気付いたのか、先生は話を付け加える。

『あいつらは、昨日スパーリングだったからな。今日は、マスボクシングとサンドバッグがメインの練習だから、俺がいなくても大丈夫なんだよ。』

マスボクシングは、スパーリングに近い実戦練習の事だが、寸止めで行うのでダメージの心配はない。

先輩達がマスボクシングをする様子を、度々見ていた１年生達だが、素朴な疑問が湧いていた。

（なぜ、自分達はしないのだろう？）

『先生、マスボクシングは実戦に近い練習なんですが、１年生はまだやらないんですか？　少しは実戦の感覚を身に付ける事ができると思うんですけど……』

健太が堪らず質問をした。

こういう時に、先頭きって質問するのは健太である。そのタイミングが悪くてミットで叩かれる時もあるが、他の３人の気持ちを代弁している時が多いので、康平達はかなり助かっていた。

『話せば長くなるから結論だけ言うが、うちはスパーリングに慣れてきてからやらせるつもりだ。
それより女バスの前では、俺からミットで頭を叩かれんなよ……今日、同じ体育の田嶋先生から苦情を言われたんだよ。あまり、うちの部員達を笑わせないでくれってな！』

『先生！　だったら頭を叩かなければいいんじゃないんですか？簡単な事ですよぉ』

飯島先生の話に、反応したのは有馬だ。

『それは難しい問題だな。なんたってお前らは叩き易い顔をしてるからなぁ。
……無駄に喋ってる時間はねぇから、急いで着替えろよ。』

先生は、笑いながら康平達を急かしていた。

飯島先生は梅田先生と対称的な性格で、練習中も冗談が多くテンションは非常に高い。

２人の先生から指導を受ける事は、それだけ練習がハードになる事を意味するのだが、ソフトな性格の飯島先生が練習に加わるので、１年生達は、昨日よりリラックスした気持ちで練習の準備を始めていた。

第二体育館に集まった１年生達だが、飯島先生がタイマーを持って

きていた。

『知り合いのボクシングジムの会長から貰ったんだよ！　これで全員練習に集中できるぞ』

各々が準備できた事を確認した梅田先生は、床に置かれたタイマーのボタンを押しながら言った。

『まずは、シャドウ6ラウンドから始めるぞ！』

ブザーの音と同時にシャドウボクシングを始めた4人だが、2人の先生は折り畳み式の椅子に座り、1年生の様子を見ながら時折話し合っていた。

6ラウンドのシャドウが終わり、康平と白鳥は飯島先生に呼ばれる。

『今日から暫くの間、白鳥と高田は俺が見るからな。まずはグローブを付けろ！』

『今日は、2ラウンド交替でミット打ちとシャドウをするんだが、まずはミット打ちのルールを教えるぞ！　高田、構えてろよ。』

指示通りに構えた康平だったが、ミットをハメた先生は、突然康平に左右の速い連打（ラッシュ）をしてきた。

先生が軽く打っているので痛くはなかったが、面を喰らった康平は、ブロックをしながら固まってしまった。

『ハハハ、その状態だとスタンディングダウンと言って、立ったままカウントを取られるぞ！　こういう時はなぁ、右後方へ一目散に逃げるんだよ。反復横飛びで、右側だけにず～っと行く感じだ。うちの高校ではカニ歩きと言っているがな。』

飯島先生は、話しながら見本を見せる。

『そして、充分な距離がとれたら構え直せ！　途中で反撃しようなんて考えるなよ。とにかく離れて体勢を整えるんだ！』

『次は白鳥だ、いくぞ！』

白鳥は、オボツカナイ足取りで右後方に逃げた。

『不恰好だっていいんだぞ！　目的は不利な状態から逃げる事なんだからな。

……

ただ、もう少し小刻みな感じでカニ歩きをしろ！　それから横に逃げる場合は、ガードの幅を広げるんだ。』

飯島先生の言葉に、康平が質問をする。

『先生、理由を教えて貰えませんか？』

『小刻みな足運びは、足が揃わないようにする為だ！　両足が「気を付け」の姿勢みたいに揃ってると、軽いパンチでも倒されるからな。
ガードを広げるのは、フックを防ぐ為なんだよ！　横に動いた時にオッカネェのは、横殴りのフックだからな。分かったか？
……
いや、これは分からなくても言われたようにしろ！』

2人にカニ歩きを数回繰り返させた後、更に飯島先生の話は続く。

『いいか、俺がさっきみたいにラッシュしてきた時は、カニ歩きで逃げるんだぞ！　まずは高田からミット打ちだ。』

次のラウンドからミット打ちが始まった。

連日と殆ど変わらないミット打ちだが、康平が打ち終わった直後を狙って、先生がラッシュを仕掛けてきた。
ただ、他の返し技を打たせる為のパンチとは明らかに違い、パタパタと上から頭を叩くような感じで打っていた。

『ホラホラどうした？　早く逃げないと試合を止められるぞぉ～。』

打たれたまま固まってしまう康平に、先生はお構い無しにパタパタ叩いていく。

ようやくカニ歩きをした康平だったが、先生は歩いて追っかけている。

『勢いよく逃げないと、ドンドン打たれるぞぉ～。』

康平が速いカニ歩きを意識し、2メートル半程離れて構え直したところで、先生の追っかけも終わっていた。

『この位離れるまで、急いで逃げろよ。
相手は今、ラッシュで疲れてんだからホラ反撃だぞ！』

飯島先生は、話しながらもミットで構えていた。

先生は優しい口調でミットを受けるのだが、彼がラッシュをした時だけは、声のトーンが高くなる。

『打たれたくなかったら、トットと逃げるんだよ！』

康平との2ラウンドのミット打ちが終わり、白鳥の番になった。
時折先生のラッシュが彼を襲う。

康平と同様に固まってしまった白鳥へ、先生は声を張り上げた。

『そこは勇ましく逃げるんだよ！』

変な日本語になっているが、先生はノリで話している為か、全く気にしていない様子だ。

一方の白鳥も、先生の言いたい事は分かっているようで、速いカニ歩きで距離をとった。

こうして康平と白鳥は、2ラウンドずつミット打ちを繰り返していったが、先生は、さっきの言い方が気に入ったらしく、ラッシュする度に大声を出していた。

『逃げる時は勇ましくだぞ！』

個人レッスン

翌日の1時限目、ロングホームルームで球技大会の種目分けがあった。

その前に担任が説明をした。

『3種目とも男女混合なんだから、男どもにはハンデ付きだ。バスケはリバウンド禁止、バレーはスパイク禁止、ソフトは利き手と逆でやる。』

不満そうな男子生徒達に気が付いたのか、担任は話を付け加える。

『お前ら、女子と一緒に出来るだけでも有り得ないんだから、そんな顔をすんな！　この時間でメンバーを決めるから、俺の配った用紙に名前と出る種目を書いておけよ。書いた者から俺の所に持って来い。』

担任の机に、クラス４０人分の用紙が集まっていく。

担任は貰った用紙を見ながら、バレー・バスケ・ソフトと書いてある黒板に、「正」の字を書いていった。

担任が「正」の字を書く時、白と赤のチョークを使い分けていた。

全員が用紙を出した後、４０本分の線を引いた担任は、驚いた表情

になっている。

『なんだよ！　もう直す必要ないじゃないか。』

黒板にあるバスケの所には、「正」が２つ完成し、白と赤の線が５本ずつ入っていた。

バレーは白と赤が６本ずつ、ソフトボールには９本ずつ入っている。

『言い忘れたが、バスケの定員は１０人、バレーは１２人、ソフトは１８人だ。
どれも男女半々にしなければならないんだが、こうもアッサリ決まるとはなぁ……』

担任は、困った顔をしながら全員に言った。

『今日のホームルームは、球技大会の種目分けでテコズル予定だったから、何にも考えてなかったんだよ。
……
お前ら、種目別に集まって適当に雑談してろ！』

『バスケはこっちだよ～！』

麗奈の声で、バスケに出る全員が、彼女の席に集まった。

麗奈が担任へ聞こえないように、声を低くして康平に話し掛ける。

『昨日健太が言ってた1人２００円の話をさぁ、女バス全員に話したら皆ノリ気みたい。』

『ん、なになに、一体何の話？』

麗奈は、康平を除いた8人のメンバーに、ケーキバイキングの事を説明した。

『何か面白そうだね。』

亜樹も含めた6人のメンバーは、好奇心旺盛な顔をしていた。

『２００円は出すけどさぁ……俺らバスケ上手くないけど、参加していいのかなぁ？』

『そうそう、あそこのケーキバイキングは行きたいんだけど、皆の足を引っ張ってヒンシュク買いたくないしぃ～……私達2人はズ～ッと控えでいいよ。』

小柄で仲の良さそうな男女2人が、全員の顔を見ながら麗奈に話した。

『球技大会なんて遊びなんだから、上手くなくたって大丈夫よ！……でもぉ、練習したいんだったら協力するわよ。土日の午後から

だったら私は大丈夫だけど……
あ、強制じゃないから……ネ！』

笑顔で話しながらも、目が笑っていない麗奈の表情を見た２人は、土曜日を練習日にした。

『康平も当然練習するんでしょ？』

『ワリィなぁ、土日の午後からは部活なんだよぉ。』

『何ノンキな事言ってんの！　康平は他人の３倍練習しなきゃいけないんだから、何とか都合つけなさいよ。皆の２００円を無駄にしたいの？』

麗奈と康平のやり取りを聞いた他のメンバーは、土日の練習に出たいと言い出した。

土曜日の練習だけ出る予定だった男女２人も、土日に参加すると言い直す。

『そう、皆悪いわねぇ～。ホント強制じゃないんだから。
康平は、部活サボッたら梅ッチに殺されそうだしね！　まぁ仕方無いか。
ところでさぁ……』

麗奈は、殆どのメンバーが自主的（？）に練習する事へ気を良くしたのか、バスケと関係無い話を始めていた。

放課後、亜樹に誘われていた康平は市民体育館にいた。

亜樹は、１０分程遅れて来た。走ってきたようで、息が弾んでいる。

『ゴメンね、待たせちゃって！　練習着を取りに、１度家に帰ったんだ。』

『学校に持ってくりゃいいんじゃねえの？』

『イヤよ！　バッシュとかカサ張るし、学校では目立ちたくないからね……チョット待ってて！』

亜樹は、急いで更衣室に入っていった。

白地で両脇に２本の赤いラインが入っているノースリーブのＴシャツにバスケットパンツ、そして白いバッシュの姿で亜樹は更衣室から出てきた。

『あまりジロジロ見ないでよ！　中２の時に着ていた練習着で、着れるかどうか心配だったんだから。』

『い、いや、カッコイイと思ってさ……』

『さ、さっさと始めるわよ！　まずは準備運動ね。』

2人が準備運動を終えた時、亜樹が口を開いた。

『ウォーミングアップついでにパスとドリブルの練習をするわよ。……私のマネをすればいいからね。』

亜樹は倉庫から持ってきたボールを、その場でドリブルしてから康平にチェストパス（胸から出すパス）を出す。

康平は、受け取ったボールを亜樹のマネをして彼女にパスをした。

何度か繰り返したが、亜樹は首を傾げている。

『パスに勢いがないのよねぇ。それとドリブルの時は、ボールを見ないで前を見てるといいんだけど……』

『そんなの無理だよぉ。』

堪らず言い返した康平だったが、亜樹も責めるつもりはないようで、むしろ康平以上に悩んでいる様子である。

『そうね……ドリブルは、根気強く練習しないと身に付かないから、球技大会までは厳しいかもね。

……

でも、パスは出来そうだからやってみようよ！　片足で踏み込みながら、体全体でボールを押し出すイメージでパスしてみて！』

何度パスを出しても上手くいかない康平だったが、

『何て言うのかなぁ……体の重心移動に遅れて腕を伸ばすって感じなのかな……それと腕の力は抜いた方がいいわね！　試しにやってみてよ。』

という亜樹のアドバイスに従って、何度目かのパスを出した時、康平の両腕にボールを押し出す感触が残った。

放たれたボールは、今までよりも勢いよく亜樹の胸元へ吸い込まれていく。

『いいじゃん康平！　忘れないように、ドンドン繰り返すよ！』

パシッ！

『ナイスパース！』

パシッ！

『いいよ康平！』

康平がパスを出す度、数人しかいない体育館に亜樹の声が響く。

普段の大人っぽい亜樹と違って、体育会系のノリになっている彼女を見た康平は、新鮮な気持ちでパスを繰り出していた。

チェストパスの他にバウンドパスも練習した後、亜樹が康平に尋ねる。

『康平、まだ時間ある？』

『……あぁ大丈夫だよ。』

『じゃあ、シュートも練習しちゃおうよ！』

『えっ、俺ドヘタなんだけど？』

康平は、両手を前に出して遮るような仕草をした。

『フォームなんて気にしなくていいから、1回打ってみてよ！』

『……笑うなよ。』

ボソっと言った康平は、フリースローの位置に立った。

右の鎖骨の辺りでボールを持ち、両手で押し出すようにシュートをする。

ボールは直接リングに当たり、右側へ大きく弾いた。

『自己流で打ってんだから、入らないのは当然なんだよ！』

康平は、言い訳をしながらボールを拾いにいく。

『ゴメン康平、もう1回シュートお願い！』

亜樹は笑いもせず、康平に言った。

次に打ったシュートは、ボードからリングに当たって、亜樹のいる左側へボールが転がっていく。

亜樹は、ボールを拾わないで頬に手を当てて考えている。

『門田さんの話を聞くと、康平はもっとヒドイと思ってたのよね……』

『いくら俺だって、誰も邪魔しなけりゃボードを越えたりしねぇよ。』

『そう……だったら康平は、試合でも笑われないで済みそうよ。』

『え……そうなの？』

亜樹は、足元にあるボールを拾って左脇に抱えた。

『多分だからね！　でも、結構練習が必要かも……』

その時社会人らしい人達が、バドミントンの道具を持って、体育館に１０人程入ってきた。

『６時半も過ぎたし……もう帰ろっか？』

『そうだなぁ、実はもっと練習してみたいけど……恥ずかしいしなぁ。』

２人は各々更衣室に向かっていった。

外に出た２人だったが、康平はハッと思い出すように口を開く。

『今日は９月９日だよね！　た、誕生日おめでとう。』

『ア、アリガト……そう言えば康平の誕生日って綾香と同じ日だったわね。』

『俺のなんか気にすんなよ。勉強教えて貰ったお礼……い、いや、親友として渡したかっただけだからさ。』

慌てて言い直した康平に、亜樹はクスっと笑う。

『親友だったら、尚更お返ししなくちゃね！　ところで、健太の誕生日って何日？』

『1月1日だよ！　アイツはチョット可哀想なんだ。その日は、皆忙しいしなぁ。』

『そう……あ、いっけない！　7時で家に帰んないと、両親が誕生日の用意をしてるのよぉ。』

亜樹は急いで帰ろうとしたが、1度康平の方へ振り返った。

『康平は、来週の水曜日も部活休みなんでしょ？　また練習出来る……かな？』

『頼むよ！　でもバスケって、ちゃんと教えて貰うと楽しいもんだな。』

『まぁね。……それと、この練習は皆には内緒だよ！　理由は今度話すからさ。じゃあね。』

少し口許が綻んだ亜樹は、時計をチラッと見ながら早足で歩いていった。

謝りながら前に進め！

康平と白鳥は、一週間の内四日間は飯島先生の指導を受けている。

曜日にすると、火・木・土・日の四日になる。

二・三年生は、月・水・金の三日間がスパーリングの日だ。

水曜日は康平達一年生が休みの日なので、梅田・飯島の両先生が指導に入るが、月・金曜日は梅田先生が第二体育館で一年生の指導に当たり、飯島先生が二・三年生のスパーリングについていた。

康平と白鳥が、飯島先生からカニ歩きを教わって一週間後の火曜日、飯島先生は第二体育館に来ている。

「カニ歩きは、ピンチから逃げたい場合に使うんだが、何か打ち返してから逃げろ！

……

出来れば姿勢を低くして、顔より下を打った方がいいな」

「顔じゃ駄目なんですか？」

康平が疑問をぶつけた。

「顔かぁ……顔を狙うのはやめた方がいいな。相手の連打に呑み込まれる危険があるんだよ！」

「呑み込まれるって、どうなるんですか？」

白鳥も質問に加わる。

「まぁ……その……なんだ、お前らが反撃しようとした時に、相手の連打が先に当たってしまうケースだな。……相手が連打してる時に顔面を狙うと、自分も高い姿勢になってるから被弾し易いんだよ」

苦労しながら説明する先生へ、康平がお構いなしに質問をする。

「顔より下……って事は、ボディー打ちでいいんですよね？」

「ボディーを打てればそれに越した事はないんだが……ピンチの時は、お前らもパニクっているからなぁ……ブロックの上でもいいから、とにかく打って逃げるんだよ！」

「ブロックの上……でもいいんですか？」

白鳥が戸惑いながら訊く。

「逆に質問するが、お前らブロックする時は、どんな感じになる？特に下半身だがな」

先生に問い掛けられた二人は、顔を見合せながらブロッキングのポーズをした。

「……踏ん張るような感じ……です」

自信無さげに白鳥が答える。

「正解だ！　パンチをブロックする時は、踏ん張る場合が多い。すると相手は、一瞬だがお前達を追っかける事が出来なくなる。その隙に一目散に逃げるんだよ」

「もし、間違ってボディーに当たった時はどうするんですか？」

康平の質問に、飯島先生は吹き出してしまった。

発言した本人も、失敗したような顔をしている。

「アホ、それだったら追撃だろう！　……いやチョット待て……そのまま逃げておけ。
まず一番大事なのは、打たれない事だからな」

康平と白鳥の質問責めに、さすがに飯島先生も辟易したのか、時計を見て二人に言った。

「お前らは今日、新しい練習をするんだから、そろそろ準備運動を始めろよ！　そして、シャドウをする前に俺の所へ来い」

新しい練習が気になる康平と白鳥は、急いで準備運動を終わらせて先生の所へ行った。

すると、先生が少し険しい表情になっている。

「お前ら準備運動は、ちゃんとやったのか？」

「いえ……かなり急いでやりました」

二人は、下を向きながら小声で答えた。

「だったら、もう一度やり直してこい！　スポーツ選手は、怪我や故障に人一倍気を遣わないと駄目なんだよ」

「ス、スイマセンでした」

康平と白鳥は頭を下げた後、入念に準備運動を再開する。

「オイオイ、俺に謝んなくていいから、自分の体に謝っておけよ」

飯島先生から険しい表情が消え、いつものように軽口を叩いた。

「準備運動は終わったようだな。お前ら二人は謙虚な方だが、謝り方はまだまだ未熟だなぁ……

これからは、謝罪の仕方を磨いていかないとな」

改めて準備運動を終えた康平達だが、飯島先生の意味不明な発言で戸惑い気味の表情を見せる。

「今迄は逃げる練習をしてきたが、今日から前に出る練習を始めるぞ！　白鳥、俺を相手にして前に出てみろ！」

白鳥が先生の前に出て構えると、左足を前に出した後に右足を引き付けた。

梅田先生から習った通りの足運びである。

健太以外の一年生はオーソドックス（右構え）で、左足が前で右足が後ろ足になっている。

「おっ、ダテに練習はしてないようだな。たが、これからはオマケを付けるぞ！　お前らは最近、梅田先生からダッキング（屈むような防御）を習ってたよな？」

「はい」

「左足を前に出した時に、小さくダッキングをするんだ。そして、右足を引き付けながら頭を戻す！　お前ら少しやってみろ」

康平と白鳥は、それぞれ言われたように前進していく。

「ん？　そんなに大きくダッキングしなくていいぞ。疲れるからな。頭一つ分左右にダッキングすればいいんだ！」

白鳥がここで質問をする。

「先生、右へダッキングしてもいいんですか？　まだ習っていないんですけど……」

「あぁそうだったな。その点は梅田先生と話し合っているから大丈夫だ！　特にお前らは、タイプ的にダッキングをする機会が多いんだよ。

……

ま、待て、今のは聞かなかった事にしろ！　お前らのタイプを説明してたら練習にならないからな。そのまま前進を続けてろよ」

二人が、今にも聞きたいような顔をしていたので、先生は慌てて遮った。

二ラウンド前進する練習をしていたが、インターバルの時に飯島先生がアドバイスをした。

「逃げる時は勇ましくなんだが、前に出る時は今みたいに頭を位置を変えるんだ。打たれる確率が高いからな」

そして、先生は少し得意げに付け加えた。

「まぁペコペコ謝りながら前に進む感じだ」

康平と白鳥は笑いもせずに、真面目に聞いている。

「何だよ！　この場面は笑って欲しかったんだがな。

……

それにしても、お前らの膝は硬いんだよなぁ。……次のラウンド、俺は用事があるから、お前らは有馬達の練習でも見てろ！　なんなら気付かれないように、女バスを見ててもいいぞ」

ブザーが鳴り、次のラウンドが始まった。

「バカヤロー！　そこはワンツーじゃなくて右、左、右だ！」

スパーン！

二人は、女バスを見たい気持ちを押さえて怒鳴り声の方に目をやると、有馬がミット打ちで梅田先生から頭を叩かれていた。

不思議な事に、有馬は叩かれる理由を納得しているようで、叩かれながらも集中して構えている。

その構えも、今までとどこか違っていた。

興味深く並んで見ていた康平達だが、突然白鳥の頭が低くなる。

何事かと思っていた康平も、膝の力が抜けてカクンとなった。

驚いた二人が後ろを振り返ると、飯島先生が両膝を突き出して笑っていた。

「ハハハ！　俺の膝カックンは見事に引っ掛かったようだな」

「せ、先生！　いきなり何をするんですか？」

康平の抗議にも構わず、先生は話し始める。

「これはお前らに教える為、ワザとやったんだよ」

意表を突かれた発言に目を丸くしていた二人に、先生は話を続けた。

「前に出ながら頭を動かす時はなぁ、自分で左の膝がカクンと抜ける感じにするんだよ。さぁ、ラウンドの途中だが練習再開だ！」

康平と白鳥は、膝カックンされた感覚を思い出しながら、ダッキングしていく。

今迄と違い、二人の頭の位置がクイッと勢いよく変わった。

「よーぉし、いいぞぉ！　この感覚を忘れないように、前進だけのシャドウを五ラウンドだ！」

全ての練習が終わり、康平は飯島先生に質問した。

「ボクシングに戦うタイプってあるんですか？」

離れていた所で柔軟体操を終えた白鳥も、康平の質問には興味があるようで、二人のいる場所へ駆け寄ってくる。

「あちゃ～、やっぱり質問してきたかぁ。

ボクシングの入門書には、ボクサータイプ・ファイタータイプ・ボクサーファイタータイプの三種類が書かれているんだがな。

大雑把に言えば、ボクサータイプは離れて戦うタイプで、ファイタータイプは接近して戦うタイプだ。それからボクサーファイタータイプが両方含めたタイプだな。

……

但し、あくまで入門書でのタイプ別なんだがな」

飯島先生は、少し困ったような顔で説明した。

「僕と康平は、どんなタイプなんですか？」

「今はハッキリ言えないなぁ……俺からタイプの事を口にしてなんだが、これはお前らが実戦を重ねないと分からない部分なんだよ。

ただお前らは、ダッキングを多く使いそうな気がするだけだ。

……

大体ボクシングなんて相対的なスポーツなんだよ。相手が接近戦を苦手だったらこっちは接近するし、逆だったら離れて戦うしな」

少しガッカリしたような表情の二人を見て、先生は話を付け加える。

「ただ一つ言えるのは、お前らが華麗にフットワークを使ってボクシングしそうなイメージが、俺にはどうしても沸かねぇんだよ。お前らの顔を見ると、あんまり器用そうじゃねぇからなぁ」

「ヒドイ言い方ッスね！　確かに僕と白鳥は、ボクサータイプになれない気がするんですけど……」

康平と白鳥は、お互いの顔を見て苦笑した。

「これから二、三年生の指導が残っているから、お前らはもう帰っていいぞ！　あぁ……チョット待て！」

二人を呼び止めた先生は、再び話を始めた。

「戦うタイプの事なんだが、多くの入門書でのタイプは三種類しかないが、ファイタータイプ一つをとっても、カウンターが上手いとか、強振してくる奴や、連打がしつこいタイプだったり様々だからさ。

……

但しそれも、一つ一つ使える技が積み重なってタイプ……否、スタイルが出来上がってゆくんだ！　……それはいいとして、俺と梅田先生は、お前らに目指して欲しいスタイルがある」

「それは、どんなスタイルですか？」

康平と白鳥は、口を揃えて質問する。

「それは、打たれないで打つボクシングだよ！　戦い方は選手によって違うがな」

「そんな事って出来るんですか？」

「難しい課題さ……せいぜい致命的なパンチを貰わないようにするのが現実なんだがな……ただ、目指すのと目指さないのとは、後になって大きな差が出てくると俺は思っている」

先生の言葉を、二人は黙って聞いていた。

「だからお前らは、打たれないスタイルの第一歩として、謝り方に磨きをかける事だ！　前に出る時は頭を振る癖をつけろ……どのみちお前達が嫌がっていてもやらせるんだがな！

……

風邪を引かないように、もう着替えて帰れよ」

飯島先生は、笑いながらも真面目な口調で言った。

下手だからシュート？

翌日の朝、康平が教室へ行くと、珍しく亜樹の席に数人が集まっていた。

亜樹は、プライドが高そうな容姿と入学早々にビンタを喰らわしたエピソードがあるせいか、亜樹の机には、せいぜい親友の綾香が来る程度だった。

どんな奴が集まっているかチラッと見ながら席に着いた康平だったが、向こうから話し掛けてきた。

「康平おはよ！　今日も湿気た顔してるわねぇ」

麗奈である。他は球技大会でバスケに出るメンバーだった。

「悪かったな！　ところで何かあったんかよ？」

「いやぁね、土日に練習した時さぁ、亜樹の教え方が上手くて好評だったのよ。
ここにいるメンバーは帰宅部で、平日も教えて貰えないかって彼女に相談しているところなんだ！
……
康平は今日、部活休みなんでしょ！　あんたも亜樹にお願いしなさいよ。一番練習しなきゃいけないんだからさぁ」

「それだったら……」

「あ～、ゴッメ～ン！　今日は用事があって駄目なんだ！」

思わず亜樹との練習の事を話そうとした康平だったが、亜樹の声で遮られた。

「残念ねぇ……亜樹にも都合があるんだし、練習は土日だけでいいんじゃない？」

麗奈は、他のメンバーをなだめるようにして自分の席に戻っていった。

三時限目が終わった時、亜樹は席を立ちながら、メモ用紙を康平の机にさりげなく置いた。

康平は、誰にも気付かれないようにそれを読む。

《朝は危なかったわね！　今日は2人で練習のハズでしょ？罰として今日の練習はキビシクするから、覚悟しなさいネ？》

四時限目の授業が始まったのだが、康平はいきなり先生に突っ込まれる。

「高田ぁ、俺の授業がそんなに楽しいのか？　さっきから顔がニヤついてるぞ！」

「あ……いえ、そんな事はないです」

「何も真顔で否定する事はないだろ！　妄想してもいいが、顔には出すなよ」

赤くなった康平は、半分以上のクラスメートに笑われていた。

学校が終わり、康平は市民体育館へ行った。

亜樹は急いで家に練習着を取りに行ったようで、康平より先に着いていた。

「康平はスポーツ選手だったら、ポーカーフェイスにならないとね……四時限目は、私まで恥ずかしくなったんだから」

「ご……ごめん」

「まぁ君なりに、私との練習を喜んでたって事で許してあげるけどね」

どことなく喜んでいる亜樹を見た康平は、ホッとしながら男子更衣室へ入っていく。

二人は、先週のように準備運動からパス練習へと進めていった。

「パスは大分慣れてきたみたいね。次は先週の続きをするわよ！」

「先週の続きって……まさかシュート？　無理無理、俺バスケ下手

だしシュートなんか入んねぇしさ」

康平は後退りしながら断ったが、亜樹は強引にボールを押し付ける。

「土日に練習して麗奈と作戦を考えたんだけど、バスケを本格的にやった事がない人には沢山シュートを打って欲しいのよ！」

亜樹と麗奈は、土日の練習の際に親しくなったようで、お互い下の名前を呼び捨てしていた。

「下手な奴にシュート打たしちゃ駄目なんじゃねぇの？」

「……経験者じゃない人にシュートを打たせるのは、ちゃんとした理由があるのよ。先週のホームルームで、担任が言った男子のルールって憶えてる？」

「ん～……確かリバウンド禁止だっけ？」

「そうそう、リバウンドって敵味方に関係なく、シュートしたコボレ球をジャンプしてとるプレイなんだけど、私と麗奈は女子だと背が高い方でしょ？」

「え、まぁ……そうだね」

亜樹は１７２センチの康平と同じ位の身長だが、麗奈も似たような長身である。

「だから私と麗奈は、シュートも狙うけどリバウンドを拾って得点

にしようって作戦を立てたのよね！」

「じゃあ、俺達が打ったシュートのコボレ球を得点にしようって作戦かぁ」

「そうね。出来ればシュートを狙う役目の人には、スリーポイントのラインから打って欲しいのよ」

「尚更入んねぇと思うけど……でも何で？」

「……練習終わってから説明していい？　また沢山の人達が来たら、練習しづらくなるでしょ！　さぁ、そこの半円のラインからシュートを打ってみて！」

スリーポイントのラインに立った康平は、先週と同じく、右の鎖骨辺りから両手で押し出すようにシュートを打つ。

放たれたボールは、ネットにカスって壁の方へ転がっていった。

（俺が打っても、ほとんど入んないんだけどな……）

口に出すと亜樹に怒られそうだったので、康平は心の中でボヤいた。

「惜しいわね！　じゃあ今度はパスを貰ったらすぐに打ってみて。……次はリングじゃなくて、バックボードの小さい四角の枠を狙ってみてよ」

ボールを拾いにいった亜樹からパスを貰った康平は、すぐにシュートを打った。

今度も入りはしなかったが、ボールはボードからリングに当たり、コートの中を転々としている。

「いい感じだよ！　あれだったら私と麗奈がリバウンドを取りにいけるからね。

……

でも少し気になる事があって、今から試してみるけどいいかな？」

「別にいいけど……」

康平は戸惑いながら返事をした。

「私が康平にパスを出したら、相手チームに変身してディフェンスするからね。じゃあ、今からいくよ！」

パスを受け取った康平がシュートをしようとした時、近付いてくる亜樹が視界に入り、慌ててシュートを打った。

ボールはボードを越えてしまっていた。

「……もう一回いくよ！」

亜樹は、笑いもしないでボールを拾いにいき、再び康平にパスを出す。

彼は、さっきと同じく慌ててシュート打ち、今度はリングの遥か手前にボールが落ちてしまっていた。

「今ので、康平の欠点が分かったような気がするんだ……まぁ誰にでもあるんだけどね！」

「……やっぱり相手がいると慌ててしまうんだよなぁ」

「康平に自覚があるんだったら、話し易いわね。
いきなり慌てないようにして打てと言っても難しいと思うから、シュートの打ち方を君に教えようと思うんだ。
私もこのシュートは得意じゃなくて、君に上手く教えられるか分からないけどやってみる？」

「あぁ、是非お願いしたいよ。今のシュートのフォームもカッコ悪いだろうしな。
でも、亜樹にも苦手な事ってあったんだ」

「得意じゃないって言ったの！　それより、フォームを教えるからね！　康平って右利きだよね、ボールは右手で持って左手は横に添える感じでぇ……」

笑って突っ込んだ康平に軽く言い返した亜樹だったが、自ら見本を見せながら教え始めた。

「いきなりロングシュートは厳しいから、手前からしよっか！　シュートは右手でするからね」

フリースローの場所に立ってシュートをした康平だったが、ボールがリングにも届かず手前で落下してしまった。

「最初から上手くいくわけないんだけど……何か違うのよねぇ……そうそう、右腕の位置はココなのよ！」

亜樹は説明しながら、康平のボールを持った右腕を直接修正する。

「リングに向かって、右膝と右腕が同じラインにあるような感じね。

……

チョット康平、何赤くなってんの？　シュ、シュートは腕じゃなくて、ひ、膝……特に右膝で打つ感覚だからね」

康平と同じ位に亜樹の顔が赤くなっていた。

「み、右膝で打つんだね？」

赤い顔をしたまま康平が次のシュートを打った時、ボールはボードからリングに当たって彼のもとに戻ってきた。

「いい感じじゃん、その調子でドンドン打ってみようよ！」

その後、何度もシュートを繰り出した康平だったが、六時半になった時、先週と同じように社会人のグループが十人程体育館に入ってきた。

「今日は終わりにしよっか。……着替えたらジュースでも飲まない？」

「そうだな、あんまり動いてないけど、シュートの時は集中するから喉が渇いたよ」

着替えが終わった二人は、入り口の椅子に座ってジュースを飲んでいた。

「先週も言ったけど、二人だけの練習は内緒だからね！」

「別に言ってもいいんじゃねぇの？　俺も試合で失敗してもいいように、麗奈へ練習したっていう誠意をみせたいからさぁ」

「元々いじられキャラの康平は何とも思ってないようだけど、私だったら耐えられないよ。

……

お節介かも知れないけど、康平が秘かに上手くなって皆の驚いた顔が見たいなぁ～って思ったんだけどね」

「別に、いじられキャラのつもりはないんだけどな……まぁ俺に教えているのがバレたら、他の奴等にも教えなきゃなんねぇだろうし……」

「そういう事にしておこうかな……ところで来週も練習大丈夫？」

「あぁ、いいよ。習ってみると、面白いんだねバスケって」

「先週と同じような事言ってるわね。素直に喜んでいるみたいだからいいんだけど……

じゃあ、また明日ね！」

ケンケンと空気椅子

二日後の金曜日、一年生達が練習する第二体育館には、梅田・飯島の二人の先生がいた。

「今度から二・三年生は土曜日にスパーリングだから、今日から金曜日もお前らに教えるぞ！　あいつらは今日、自由練習をやってるよ」

「自由練習って何ですか？」

説明した飯島先生へ、早速白鳥が質問をした。

「自由練習って、お前ら知らなかったっけ？　……最近始めた事なんだが、まぁその名の通り、自由に練習することさ。覚えたい技のシャドウだけでもいいし、休みなしにサンドバッグを打ってもいいし、とにかく好き勝手に練習していい日なんだ。自由練習は、一週間に一日だけだがな」

「石山先輩と兵藤先輩は、国体前ですよね。大丈夫なんですか？」

今度は康平が疑問をぶつける。

「梅田先生の考えた事なんだが、試合前だからこそ俺はいいと思っている。試合前は思考が狭くなり易いからな。案外遊び感覚でやった方が、身に付けられる技があるかも知れないんだよ。

……

ただ、これが正しいかどうか、俺にも分からねぇぞ」

「僕達に、そういう日は無いですよね」

康平の質問に、飯島先生は即答した。

「当たり前だろ！　お前らは、まだ習った技の種類が少ないんだからな。……まぁ二年になったらあると思うがな。早く自由練習出来るように、さっさと練習始めるぞ！」

飯島先生に急かされた康平と白鳥は、準備運動からシャドウボクシングへと練習を進めていく。

「頭の振り方はまだ慣れないようだが、まずは高田からミット打ちだ！」

ラウンド開始のブザーがなり、康平のミット打ちが始まった。

ミットを構える飯島先生を見た康平は、少し違和感を覚える。普段のミット打ちも、踏み込みを良くする為に遠めから構えていたのだが、今回は更に遠くで先生が構えていた。

「どうした？　この構えをしたらジャブを二発打つんだろ」

飯島先生は左ミットを前に出し、右ミットは口の前に構えている。ただ、康平から見たら手前にあるはずの左ミットも、彼の頭から一メートル半近く離れていた。

「届かなくてもいいから、右足で思い切り蹴って打ってみろ！」

先生に言われて無理矢理踏み込んだ康平だったが、パンチは届かず、左ミットに当てようとするあまり、上半身が前ノメリになってしまった。

ペチ！

空振りした康平の左頬へ、先生が右のミットで触っていた。

「オイオイ、そんな前ノメリになったら、ジャブを空振りした時カウンターを喰らうぞ！　さっきも言ったが、踏み込む時は右足で思い切り蹴るんだ！　届かなくてもフォームは崩すんじゃないぞ」

その後康平は、ひたすら右足を蹴ってジャブ二発を繰り返したが、結局一度もミットに届く事なく二ラウンドを終えた。

続く白鳥も、先生のミットに向けてジャブ二発を何度も放ったが、一度もミットから快音が出る事はなかった。ただ彼の場合は、夏休みに大学生の山本さんと練習していたので、フォーム自体は綺麗に打っていた。

白鳥のミット打ちが終わった後、飯島先生が口を開く。

「踏み込みというのは大事なポイントなんだが、一朝一夕で身に付くものじゃないからなぁ。
今日からミット打ちで最初の二ラウンドは、わざと遠くから打たせるからな！
……
ところで話は変わるんだが、右ストレートに対しての返し技は何を

習ってんだ？」

「ブロッキングストレートと、左へダッキングしての左ボディー打ちです」

先生の質問に、一瞬康平を見て白鳥が答えた。康平も頷く。

「そうか……今日は、俺が右ストレートを打ったら左ボディーを打つんだぞ！　また高田からミット打ちだ」

開始のブザーが鳴り、ミット打ちが始まった。

パンパァーン！

先生の構えに反応して二発の左ジャブを打ったが、このラウンドの先生は近くで構えていたので、二発ともミットに当たる。

ただ二発目のジャブが右のミットへ当たった時、飯島先生は一瞬眉をしかめたが、すぐに普段の顔に戻っていた。康平も気付いたようだが、先生がすぐに両手を重ねての構えていたので、質問する間もなく右ストレートを放つ。

間髪入れずに先生が、左ミットを横向きにして構えている。これは、左フックを打たせるポーズなのだが、右ストレートを打った後、最初の構えに戻してしまった康平は、一度溜めを作り直してから左フックを打った。

「……まだ言ってなかったと思うが、右パンチを打った後は、体は右に捻ったままで腕だけ戻すようにしておけよ！　右パンチを打っ

た時は、左パンチの溜めを作るチャンスなんだからな。……ほら、もう一回右ストレートからいくぞ！」

両手を重ねて構えた先生に右ストレートを放ち、すぐに左フックを打とうとした康平だったが、先生はまだ左ミットで構えていない状態だった。

打ち始めの動作に入った康平は、バランスを崩してしまった。

「オイオイ、ちゃんと見てから打てよ！　ボクシングは相手があるスポーツだからな。

……

もう一回いくぞ！」

先生のミットへ右ストレートを打った康平は、左フックの溜めを作ったまま、左ミットが上がるのを待っていた。勿論そこに左フックを打つ為である。

……

ところが五秒経っても、先生の左ミットは上がってこない。

「まだまだぁ～、我慢しろよ！」

先生は、今にも左ミットを上げそうな素振りで、康平のフォームをじっくり見ていた。

十数秒程経って左ミットが上がり、康平は左フックを打ったが快

音は出ずに空を切り、右へ泳いだようにバランスを崩していた。

「わざと空振りさせたんだが、まだ下半身が安定してないなぁ……、今のを繰り返すぞ！」

結局康平は、右ストレートから左フックのパターンをずっと繰り返しので、一度も返し技をする事なく二ラウンドを終えてしまっていた。

次は白鳥のミット打ちになったが、彼はシャドウボクシングをしながら康平のミット打ちを観察していたようで、右ストレートを打った後、左フックの溜めを作って待ち構えていた。

左ミットが上がった時に白鳥は左フックを打ったが、先生は左ミットをヒョイと下げて空振りさせる。

白鳥はお世辞にも綺麗なフォームとは言えないが、バランスを崩さずに振り抜いていた。

「おっ、いいぞ白鳥！　もう一度右ストレートを打ってみろ」

右ストレートを打った白鳥が、さっきのように左フックの溜めを作って待っていた時、

パコッ！

白鳥の額に先生の右ミットが当たっていた。

「左フックの溜めを作った時でも、俺が右ストレートを打ったら、ダッキングして左ボディーを打つんだよ！　白鳥もう一度右ストレートからだ」

右ストレートを打った白鳥が、もう一度左フックの溜めを作る。

先生の右ストレートを左へダッキングして避けた彼だが、前足の曲げが少ない為か、つんのめるような形になっていた。

そして、ボディーを打った時には後ろ足の踏ん張りが効かず、自分のパンチの衝撃で左側へバランスを崩していた。

先生は、何度かダッキングからの左ボディーを白鳥に打たせたが、バランスが良くならない。そして、そのままラウンド終了のブザーが鳴った。

「確か白鳥は、左足が伸び気味で梅田先生によく怒鳴られたんだよなぁ。

……

今日のミットは中止だ！　高田も俺の所に来い」

康平が二人の所へ行くと、再び先生が口を開く。

「お前らは、まだ下半身が弱い。これから補強の時に、二つのメニ

ューを追加するぞ！　ケンケンと空気椅子だ」

「ケンケンて何ですか？」

白鳥が質問をした。

「ケンケンパって遊びが昔あったんだが、パの部分を無くしてやるから、俺と梅田先生はケンケンと言っているんだがな……要は片足で前に進むんだ。二人共左足を上げろ！

……

立っている右足で、思い切り蹴って前に進んでみろ！」

先生は、手本を見せながら説明する。康平と白鳥も、それに続いて右足で蹴って前に進んだ。

「ケンケンは、こんな感じだが分かったな？」

二人が返事をすると、先生は更に説明を続ける。

「じゃあ今度は空気椅子だな。まぁ知ってると思うが、空気の椅子に座る感じで中腰になるんだ！」

先生は話しながら、両腕を前に延ばして自らポーズを作った。

「俺は用事があるから、お前らこの姿勢でいろ！　……女バスを見ててもいいぞ」

康平達のポーズを確認した飯島先生は、女バスの方へ歩いていった。

球技大会の事もあって康平は女バスを見ていたが、彼女達は交替で試合形式の練習をしていた。

綾香と麗奈はコートから出たばかりのようで、タオルで汗を拭きながらドリンクを飲んでいる。

麗奈が康平の視線に気付いたらしく、綾香の肩をトントンと指で叩き、康平の方を指差す。綾香は一瞬だが、右手を小刻みに振っていた。

身動きの取れない体勢で、どう反応しようが迷っていた康平だったが、

バーン！

と、体育館中にミットの音が響く。

この空間にいた殆んどの者が、音の出た方向に視線を向ける。

そこでは、梅田先生と健太がミット打ちをしていた。

「白鳥、今の音は？」

康平は、小声で隣にいる白鳥に訊く。

「見てなかったの？」

逆に白鳥から訊かれた康平は、女バスを見ていた事に少し罪悪感を感じていた。

「ストレートとアッパー（下から突き上げるパンチ）の中間ような左ボディーだったよ！　……有馬もそうだけど、健太のフォームが少し変わったよね」

白鳥は話を続けたが、健太のフォームが変わってきた事は、康平も気付いていた。

健太はサウスポー構えで右半身が前に出ているスタイルだが、右手の位置が以前より前に出ている。

シャドウをしているオーソドックス（右構え）の有馬は、前に出るハズの左肘を少し引き気味にし、逆に右手を左手と同じ位前へ出していた。シャドウを見た限りだが、彼の左ジャブは以前より力強い感じである。

健太と有馬の練習を見た康平は、弛くなりかけていた空気椅子の角度を、九十度近くに修正した。

白鳥の頭の位置も、心なしか少し下がったようだ。

二人共、空気椅子の角度を自らキツくしたせいか、健太達の練習を見る余裕はなくなり、冷や汗に近い汗が足元に滴り落ちていた。

ラウンド終了のブザーが鳴った時、飯島先生が康平達の所へ戻ってきた。

「よーし、もういいぞ！　二人共、足をほぐしながら聴けよ。今、バスケ部顧問の田嶋先生にお願いしたんだが、コートの隣でケンケンをしてもいいそうだ。
……ん、どうしたお前ら？　浮かない顔して」

二人は顔を見合わせたが康平が答える。

「……あのう、女バスの前でケンケンと空気椅子……ですよねぇ」

「ははぁ～ん。女子の前だと恥ずかしいってか！　……気持ちは分かるがな。練習場だと狭くて、特にケンケンは出来ないんだよ。まぁ我慢しろ」

健太達の練習を見た後だったせいか、二人は渋々返事をした。

「ところで先生、ケンケンと空気椅子は、どの位やるんでしょうか？」

「ん～……二日に一回だな。火・木・土でいいだろ。それで一日にやるのは、
……
それは今決めるんじゃなくて、その練習をしている時に自分で切り上げろ」

白鳥の質問に、先生は意外な返答をした。

「自分で……ですか？」

「そうだ！　べつに限界を超えてまでやらせようとは思ってないから勘違いするなよ。……極端な話、ケンケンは右足で蹴る感覚を感じられれば体育館一往復でもいいし、空気椅子は左膝の角度を固める感覚が分かれば三十秒でもいいんだからな」

康平と白鳥は、更に戸惑いの表情になった。

「ノルマを決めたくないんだよ！　例えばケンケンを体育館五十往復、空気椅子を時間で十分に決めたとすると、お前らだったらその日の練習はどうする？」

「ペース配分をすると思います」

先生の質問に康平が答える。

「だろ！　……俺だって、補強にそんな練習メニューがあったらペース配分をするしな。だが練習の時は、補強の為にペース配分をして欲しくないんだよ」

まだ理解していない康平達だが、先生は話を続ける。

「お前らは、部活で何の練習をしに来てる？　白鳥言ってみろ」

「ボクシング……です」

「そうだよな！　基本的に部活の時はなぁ、お前らのナケナシの体力は、ボクシングを身に付ける為だけに使い切らせたいんだよ。補強の為にシャドウやミットで手抜きをしたら本末転倒だからな」

康平と白鳥は、少し納得した表情になった。

「オット、肝心な事を忘れてた。ケンケンが終わったら、右足で思い切り蹴りながら二発の左ジャブを打て。空気椅子の後は、ダッキングして左ボディーの練習をしろ。どちらもシャドウでいいぞ。……さっきも言ったと思うが分かるな？　ケンケンは踏み込みを良くする為で、空気椅子は、特に左膝の曲げを安定させる為の補強だ。高田が左フックを空振りした時や、白鳥がダッキングした時にバランスが崩れるのは、左膝の曲げが安定しないせいなんだよ」

この日康平達は、女バスの側をケンケンで往復していたが、往復する度に彼らの顔が赤くなっていった。

シュート練習

次の週の水曜日、康平は亜樹と一緒に市民体育館で練習に励んでいた。もちろん球技大会の為、バスケの練習である。

この日はパスをもらった康平がすぐにシュートをするという練習をメインに行っていた。だが先週とは違って、パスを出した亜樹が康平のシュートをディフェンスする形式になっている。

相手がいると、どうしても慌ててしまう康平は、とてもシュートをしたとは言えない方向にボールが飛んでしまっていた。

「私を気にしない(ディフェンダー)で打って」

「シュートは入らなくてもいいんだからね」

シュートを失敗する度、亜樹は根気強くアドバイスをしたが、何度繰り返しても、シュートらしいシュートを打つ事ができない康平だった。

「上手くできなくてワリィな」

「康平に経験がないから、慌ててしまうのは仕方ないよ。……康平、今ディフェンスしないからシュートしてみてよ。ユックリでいいからね」

康平は、先週亜樹に習ったフォームを確認しながらユックリとシュートを打つ。

ボールはバックボードからリングに当たり、康平達の所へバウンドしながら戻ってきた。

「慌てなければ康平は、いいシュートを打てるのにね。……だけど、今の段階でもホンの少しはチームに貢献出来そうなんだよね」

「俺みたいな下手くそが？　ムリムリ、だってバスケは相手がいるスポーツだろ！　ディフェンスされたら変なシュートしか打てないぜ」

「ディフェンスされたら……だよね。もしノーマークだったら、康平はいいシュートを打つでしょ。

すると誰かが君をマークをしてくると思うの。

でもそのおかげで、他のメンバーの負担が少なくなるんだから、それだけでもチームに貢献してると思うよ」

「そんなもんかなぁ……でも、そう言ってくれると気が楽になるよ」

「康平を含めて、バスケが苦手だって思っている人には、スリーポイントのラインからシュートを打たせる作戦だって先週言ったよね？」

「ん？　……あぁ言ってたけど、理由は聞きそびれたんだよな」

「私の方こそ言いそびれちゃってゴメンね。

うちのクラスでスリーポイントを打つ役目の人は、メンバー十人のうち君も入れて四人いるんだけどね」

「すると、俺の他に下手な奴が三人いるってわけだ」

「……その四人からスリーポイントを打ってもらうんだけど、その役目の人にマークが付くと相手チームのディフェンスがバラけるでしょ？」

「俺達ゴールから遠い位置にいるからね」

「その時は、バスケをある程度出来るメンバーがゴールに切り込んでいくんだ」

「俺達に、マークが来なかったら？」

「その時は、康平達にシュートを打ってもらうよ」

「そっか、そのコボレ球を亜樹と麗奈が拾うんだね。

……

でも、上手くいくのかな？」

「分からないわ。でも、上手くいくかどうか別にして、私はこの作戦が好きよ」

亜樹の言葉に、康平は不思議そうな顔をした。

亜樹は話を続ける。

「話はズレるけど球技大会でのバスケって、バスケが出来る人だけ

が試合をしてるって感じなのよねぇ」

「あ、それ分かるよ。経験者とか運動神経がいい奴ばかりにボールが集まるんだよな」

「そうなのよ。だから勝ってもあまり喜んでいない人もいるんだよね」

「今の作戦だと、俺達みたいな下手なメンバーにもボールがくるからな」

「正直な話、勝ち負けはあまりこだわっていないんだ。メンバー全員が球技大会を楽しめればいいかなって思ってるんだけど、皆には内緒だよ！」

「アハハ、特に麗奈には内緒にしておくよ。一番勝負にこだわっていそうだからな」

「でもね、麗奈も、バスケに慣れないメンバーが楽しそうに練習しているのを見て、凄く喜んでたんだよね。

……

康平、何笑ってんのよ」

詰問する亜樹の前で、康平は何やらニヤついていた。

「あ……いや、亜樹は優しいなぁと思ってさ」

「何よイキナリ」

「だって俺達を下手って言わないだろ！　ここで練習始めた時から一度も言ってないよな」

怒ったフリをしていたような亜樹だったが、急に真顔になった。

「言わないように……っていうか、思わないようにしてるよ。球技大会と言っても、チームメイトだからね」

「団体競技って経験無いから分からないけど、そういうもんなの？」

「康平は中学の時、卓球部だったんだよね。これは私が勝手にやってる事だから、君は気にしなくていいからね。ミニバスの頃からだけど、メンバーを悪く思わないようにしてるんだ」

「それは、チームが勝つ為の秘訣？」

「そんな大層なものじゃないんだけど、一種の自己満に近いのかなぁ……でもそうやって試合に臨むと、試合中は、チームと一体になっているような気がするんだよね」

「何となく分かるような気はするけど……」

「別に康平が悩む必要ないよ。さっきも言ったけど、私が勝手にやってる事だからね。

……

それに康平が『下手』って言ったメンバーは、今までバスケの練習をした事がないだけで、最近結構上達してるんだよ。もちろん、君

も含めてね」

「そうなんだ。……でも俺、他の三人に悪い事言ってたんかなぁ……『下手』ってさぁ」

「別に本人の前で言った訳じゃないんでしょ！　でも悪いと思ったら、これから言わなければいいのよ……」

今度は、言い終わった亜樹がクスリと笑った。

「俺、変な事言ったか？」

「何も変な事は言ってないわ……ただ康平は、真面目なんだなって思っただけだよ」

「と、とりあえず練習の続きをしようぜ！　六時半になったら、また人が来るんだからさぁ」

「そうね！　真面目な康平君には、こっちもしっかり教えないとね。あ、悪いけどそこのボール頂戴！」

照れている康平を見て、もう一度小さく笑った亜樹だったが、ボールを貰った瞬間から彼女も真面目な顔になっていった。

「バスケの話に戻るけど、康平には、もう少し活躍して欲しいのよねぇ……専属コーチとしてはね」

「ディフェンスが来ても、慌てなければいいんだよな」

「でも、簡単にはいかないでしょ！」

「ま、まぁな」

「康平は、いいフォームでシュートを打てるようになったんだけど……

私がディフェンスすると、フォームが崩れてんのよね」

亜樹はしばらく思案していたが、再び口を開いた。

「康平、シュートを打つ時はフォームだけを意識してね！　ボールは変な方向にいってもいいからさ」

康平にパスを出そうとした亜樹だったが、動作を止めてもう一度念を押す。

「ボールはボードに当たんなくてもいいからね！　習ったフォームで打つ事だけに集中してみて」

小さく頷いた康平へ、亜樹がパスを出す。

ボールを貰った康平は、フォームを確認しながらシュートを打ったが、ボールはボードにも届かず、　亜樹のブロックに遮断されてしまっていた。

「簡単にブロックされちゃったな」

康平は、苦笑いしながらボールを拾いにいった。

「君がフォームに集中してた証拠だよ。次は、もう少し早く打ってみよっか。
パスを貰った瞬間に、膝を曲げる感じでシュート体勢に入ってみて！」

もう一度パスを受け取った康平がシュートを打つ。

ボールは亜樹の頭上を越えていった。だがバックボードには当たったものの、リングには当たらずにコートへ勢いよく跳ね返る。

リバウンド出来るシュートが打てなかったので、満足出来なかった康平だったが、亜樹は意外にも上機嫌になっていた。

「いい感じだよ！　繰り返し練習したら何とかなりそうね。
……ボールは私が取ってくるから、康平はシュートのイメージしててね！」

シュート練習は何度も繰り返されたが、ボードからリングに当たったのは半分程度だった。

康平は自嘲気味に呟く。

「上手くはいかないもんだな」

「そんな事ないよ。上出来上出来！　……またバドミントンの人達が来たみたいだから、もう終わりにしよ！」

笑顔の亜樹は、康平の肩をポーンと弾むように叩いた。

みんなの練習

三日後の土曜日の午後、ボクシング場は康平達一年生が独占していた。

本来、一年生も土曜日の午前中に練習をするのだが、今月は集中的にコーチを受ける為、先輩達と練習時間をずらして行っていた。理由は、来月から始まるスパーリング（実戦練習）の為である。

康平と白鳥は、いつものように飯島先生のコーチを受けながら、頭を振りながら前に出る練習とダッキング（屈むような防御）からの返し技をメインに練習を進めていった。

練習も終わりに近づき、補強運動（筋トレ）に差し掛かった頃、康平が飯島先生に質問した。

「先生！　ケンケンはボクシング場が狭いから、第二体育館でしなきゃいけないのは分かるんですけど、空気椅子は別にこっちでやってもいいんじゃないんですか？　場所も使わないですし……」

康平に合わせて白鳥も頷いている。

先生は腕を組んで考えていたが、ニヤリとしながら口を質問に答えた。

「いや、やっぱり第二体育館でやろう！　これはお前達の為なんだよ」

先生の話を聞いた二人は、不思議そうな顔をした。

「ボクシングの上達に、何か関係するとか……ですか？」

「まず無いな！」

白鳥の問いにキッパリと否定した飯島先生は、再びニヤリと笑って話し出す。

「俺は教師である前に人生の先輩なんだが、お前らに俺の持論を押し付けるつもりだ」

「どんな持論なんですか？」

気が乗らない表情で康平が訊いた。

「男はなぁ、女の子の前で恥ずかしい思いをする程成長できるんだよ。
お前らは、俺から見るとムッツリタイプだからな。まぁこれは強制だ！」

困った表情になった康平と白鳥だったが、

「康平、先に行ってるよ」

と言って、白鳥が一人第二体育館へ向かっていった。もちろん、ケ

ンケンと空気椅子をする為である。

「ん、珍しいな。いつもだと、ケンケンと空気椅子は二人一緒に始めるだろ？」

「女バスの前だと、一人であれをやるのは恥ずかしいんですよ。今日の女バスは、午前中で練習が終わってますからね」

先生の話に答えた康平だったが、第二体育館へ行ったはずの白鳥が練習場へ戻ってきた。

「どうした白鳥！　第二体育館は誰もいないはずだろ？」

「先生！　僕もそのつもりで行ったんですけど、女子バスケではない人達がいたんで戻ってきたんです」

「白鳥、俺も今からケンケンだから一緒に行こうぜ！」

康平は、白鳥と共に第二体育館へ向かった。

中では、康平のクラスメートがバスケの練習をしていた。球技大会でバスケに出るメンバーである。九人いるので、康平以外のメンバーが全員参加している事になる。

「おーい康平、お前も入ってこいよ」

クラスの男子に誘われた康平だったが、練習中だと断った。

「康平達は、またアレやるんでしょ？　皆、こっちで練習しよ！」

康平と白鳥がケンケンを始める事を知っている麗奈は、意外にも練習場所をズラして二人に協力していた。

「ボクシングの練習なんて、俺初めて見るよ」

「何か変わった練習よね」

注目されながら、壁に添ってケンケンをしていた康平と白鳥は、恥ずかしさのあまり普段よりも一層顔が赤くなっていた。

「あっちはまだ部活なんだからさ、こっちは邪魔しないように練習しよ！」

「麗奈の言う通りよ、シュート組は私と一緒に練習再開ね！」

康平達を見ていた七人だが、麗奈と亜樹に諭されて練習に取り掛かっていた。

十往復程ケンケンをした二人は、右足の蹴りを意識しながら左ジャブ二発のシャドウボクシングを繰り返す。

「もう、コートは思う存分使えるわね！　また試合形式で始めるわよ」

「麗奈は、あの二人の練習メニューを知ってるみたいね」

「まぁね！　ボクシング場が狭いから、一年生達はここで練習してる時が多いのよ」

女子メンバーから訊かれた麗奈は、二人のシャドウを見ながら答えていた。

「お、ボクシングらしい練習してんじゃん！　康平、スパーリングとかって叩き合うやつはヤンナイのかよ？」

男達に訊かれた康平は、苦笑いしながら手でやらないゼスチャーをした。

彼らはボクシングに興味があるらしく、康平達の練習を見ながら真似をしている。

だが、一向に左ジャブ二発のシャドウしかしない二人に見飽きたのか、バスケの練習を再開した。

康平達が空気椅子を始める頃には、試合形式の練習になっていた。

メンバーの練習が気になっている康平は、空気椅子をしながら彼らの様子をじっと見ていた。

試合形式と言っても、攻撃側と防御側に別れてコートの半分だけを使っているようである。全部で九人しかいないので、攻撃側は五人、防御側は四人の組み合わせだ。

コートのセンターライン辺りから、麗奈がドリブルをしながらユックリ進む。防御側はゾーンディフェンスで待ち構えている。

麗奈が小柄な男へ素早くパスを出した。リングから見て左側のスリーポイントのラインに立っていた彼は、即座にシュートを放つ。

ボールはバックボードからリングに当たって大きく跳ね上がった。

麗奈がリバウンドを取りにいく。亜樹は防御側に回っていて、麗奈と同時にジャンプした。二人は同じ位の身長の為か、ボールを掴む余裕がないようで、麗奈が辛うじてコートの右側へボールを弾く。

そこには小柄な女子がいた。彼女はシュートを打とうとしたが、目の前にディフェンダーが立っていたので、一度シュートを打つポーズをしてから、右側にいる長身の男へバウンドパスをする。

パスを貰った男は、バラけた相手のディフェンスをドリブルで切り込んでいき、リングから三メートル位離れた場所でジャンプシュートをした。

ボールはボードに当たってからリングの中へ綺麗に入った。

「さっすが長瀬、運動神経は抜群だね！」

麗奈が、シュートを決めた男へハイタッチをする。

彼は長瀬和也（ながせかずや）といい、サッカー部員である。今年の新人戦は、フォワードとして一年からレギュラーとして試合に出る期待の新人だ。

いかにもサッカー部員らしく、日焼けした濃い目の顔は精悍な印象なのだが、物静かで落ち着いた性格の男だ。百八十センチの長身なのもあってか、女子生徒には人気があった。

「いや、それより小谷のパスが良かったんだよ」

長瀬は、バウンドパスをした小柄な女の子へハイタッチをする。

「中澤君だって、いいシュートを打ってたよ」

今度は防御側の亜樹が、最初にシュートした小柄な男へハイタッチをした。

それぞれハイタッチをされた小柄な男女は、球技大会の種目分けの時に自信がない事を言っていた二人で、康平と同じく、スリーポイントシュートを打つ役割のようである。

他のメンバーも、攻撃側や防御側に関係なく、長瀬達へハイタッチをしていた。

「康平のクラス、何かいい雰囲気だね」

「え……そうかなぁ」

白鳥にトボけた返事をした康平だが、切ないような気持ちになっていた。顔に出ているかも知れないと思い、空気椅子の角度をワザとキツくさせ、苦悶の表情を自ら作りあげる。

空気椅子を終えてシャドウをしていた二人だったが、バスケをしているメンバーも、今度は康平達を見ることなく練習に集中していた。

ボクシング部の練習が終わって、急いで第二体育館へ向かった康平だったが、鍵が掛けられていた。どうやらバスケの練習も終わったようである。

「どうした康平、帰るんだろ？」

「……そうだな。折角の休みなんだし、急いで帰らないとな。今日は有意義に過ごそうぜ！」

無理にテンションを高くした康平だったが、健太と有馬は不思議そうな顔をしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2446u/

臆病者達のボクシング奮闘記

2011年12月24日03時35分発行